

# 總持寺遺跡Ⅱ

2007年3月

大阪府教育委員会

# 總持寺遺跡Ⅱ

2007年3月

大阪府教育委員会

## 序 文

総持寺遺跡は、安威川の左岸、阿武山の南に広がる広大な富田台地の西南辺部に位置し、同一台地上の北側には、古墳時代中期に築造されたとされる全長約226mを測る太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵古墳）が存在しています。

大阪府教育委員会では、茨木市三島丘2丁目に所在する府営茨木三島丘住宅の建替え工事に先立ち、平成6・7・8・10・11・12年度の6ヵ年度にわたり、面積約23,530m<sup>2</sup>にもおよぶ総持寺遺跡の発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代後期から中世に至る膨大な数の遺構を確認しました。

今回は、平成16年度に刊行した古墳時代中期の小規模古墳を中心に記述した総持寺遺跡の発掘調査報告書に引き続き、弥生時代後期、古墳時代後期、古代（飛鳥・奈良時代・平安時代）、中世を中心とした遺跡の報告です。

弥生時代後期では、大阪府内では検出されるのは極めて珍しい周溝墓と住居跡、古墳時代後期では遺構の数は少ないものの土坑、土器溜りを検出しました。

古代（飛鳥・奈良・平安時代）では、住居跡9棟と建物82棟とそれらに伴う溝、土坑、井戸などを検出しました。今回の調査を含め、総持寺遺跡周辺で実施した既往の調査結果から、東西約700m、南北約500mにも及ぶ大規模な古代の集落跡が存在することが明らかになりました。このことは同一丘陵に存在する太田庵寺跡に伴う集落跡の可能性が高いと考えられています。

また中世では、区画溝や道、柵列などによって区画された20ヵ所の屋敷跡を検出しました。屋敷跡内には、建物、井戸、土坑、屋敷跡と推定される土壇墓などが伴っています。20ヵ所もの屋敷跡が同一区域で検出されたことは極めて珍しく、中世の集落を研究する上で重要な遺構・遺物であります。その屋敷跡群の周囲には、同時期から若干下る集落跡が広がっていることを確認しています。

検出したこれらの遺構は、遺跡の規模は時代によって大小様々の違いがあるものの、約1000年間にわたって連續と統一していたことが明らかになりました。これらの調査成果は、今後それぞれの時代、また三島地域の地域史を研究する上で極めて重要な資料を提供しました。

最後になりましたが、発掘調査、整理作業、報告書作成にあたりご協力いただきました大阪府建築都市部住宅整備課（現・大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課）、茨木市教育委員会をはじめとする地元住民の皆様ほか関係者の方々に深く感謝するとともに、今後とも文化財行政について変わらぬご理解とご協力を願い申し上げます。

平成19年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 丹上 慶

## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府建築部住宅建設課（現・住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課）より依頼を受け、府営三島丘住宅代替工事に先立って実施した茨木市三島丘2丁目所在、総持寺遺跡の発掘調査報告書Ⅱである。
2. 本書は、総持寺遺跡で検出した、弥生時代後期から中世までの遺構の内、弥生時代後期、古墳時代後期、古墳時代末期から平安時代、中世を中心に報告する。
3. 現地調査は、平成6年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係技師奥和之、平成7年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係技師酒井泰子、平成8年度を大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係技師山上弘、平成10・11・12年度については大阪府教育委員会文化財保護課調査第二係、調査第一グループ技師阿部幸一を担当者として実施した。  
それに伴う遺物整理は、平成15年度から開始し、平成17年度に終了した。平成15年度は、調査管理グループ技師林日佐子、小浜成、平成16年度を調査管理グループ技師林日佐子、竹原伸次、藤田道子、平成17年度を調査管理グループ技師林日佐子、藤田道子、平成18年度を調査管理グループ主任三宅正浩、技師藤田道子を担当者として実施した。  
なお、各年度の調査概要については、『総持寺遺跡発掘調査概要』Ⅰ・Ⅱが、また、古墳時代中期の遺構の報告書として『総持寺遺跡』が刊行されている。
4. 本調査の写真測量は、平成6年度を株式会社ジェクト、平成7年度を東武計画株式会社、平成8年度を株式会社バスコ、平成10年度をアジア航測株式会社、平成11年度を三和航測株式会社、平成12年度を株式会社かんこうと富士測量株式会社に委託した。なお、写真撮影フィルムについては、各受託会社において保管している。
5. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房、出土した鉄製品の処理については、財團法人元興寺文化財研究所に委託した。
6. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書の編集は、奥が担当し、執筆は、各調査担当者である奥、山上、阿部の他に、第2章、第3章1節を富田卓見（大阪府教育委員会文化財保護課調査員）が行った。なお、執筆者名を文末ないしは文頭に記した。

8. 府営三島丘住宅建替え工事に伴う発掘調査・遺物整理および本書作成に要した経費は、全額を大阪府建築都市部（現・住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課）が負担した。
9. 現地での発掘調査、遺物整理および本書作成にあたっては、下記の方々、機関から助言および協力を得た。記して感謝いたします。

奥井哲秀、宮脇薰、濱野俊一（茨木市教育委員会）、森田克行、橋本久和（高槻市教育委員会）、  
茨木市教育委員会、高槻市教育委員会  
(敬称略・順不同)
10. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は3,476円である。

## 凡　例

1. 座標については、航空測量に用いた座標が、日本測地系平面直角座標（第VI系）であったため、全て世界測地系平面直角座標（第VI系）に変換し用いた。

例としては

X = -129,500、Y = -38,100 〈日本測地系平面直角座標（第VI系）〉  
→ X = -129,153.3463、Y = -38,360.9061 〈世界測地系平面直角座標（第VI系）〉となる。
2. 方位については、座標北で示し、標高については東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。
3. 土色については、基本的に小山正忠・竹原秀夫編 「新版標準土色帖」（財）日本色彩研究所 1992年版に準拠した。
4. 遺構番号については、基本的に年度毎ないしは調査区毎に通し番号を付け、数字の頭に調査区名、遺構番号、最後に遺構の種類名を付けた。また、周溝墓、建物、住居跡、屋敷跡のように複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、「周溝墓 1」のように、先に遺構の種類名、その後ろに通し番号を付けた。
5. 遺物については、挿図、図版の番号を一致させた。

# 目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査の方法	3
第2章 位置と環境	5
第3章 調査の成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 古墳時代後期の遺構と遺物	11
1. 概要	11
2. 遺構	11
第3節 古代の遺構と遺物	13
1. 概要	13
2. B・C・D・E・F 地区の調査	13
3. A・G・I 地区の調査	41
4. J 地区の調査	62
5. H・K 地区の調査	68
第4節 中世の遺構と遺物	72
1. 概要	73
2. 屋敷跡群の調査	73
3. A・G・I 地区の調査	152
4. J 地区の調査	164
5. H・K 地区の調査	174
第5節 弥生時代後期の遺構と遺物	237
1. 概要	237
2. 周溝墓	237
3. 住居跡	248
第4章 考察	250
第1節 総持寺遺跡で検出した古代掘立柱建物に関する一考察	250
第2節 「訓」刻字土器とその意味	253
第3節 総持寺遺跡の中世屋敷跡群について	256
第5章 まとめ	259
抄録	

# 挿 図 目 次

第1図	大阪府と調査地点	1	第51図	建物40平面・断面図	33
第2図	調査区位置図	2	第52図	建物41平面・断面図	33
第3図	調査区地区割概念図	4	第53図	建物42平面・断面図	34
第4図	周辺の遺跡	6	第54図	建物43出土遺物	34
第5図	基本層序図	10	第55図	建物43平面・断面図	34
第6図	A4438土器溢り遺物出土状況図	11	第56図	B723柱穴出土遺物	35
第7図	A4438土器溢り出土遺物	11	第57図	B881柱穴出土状況図	35
第8図	D2649土坑遺物出土状況図	12	第58図	B485土坑遺物出土状況図	35
第9図	D2649土坑出土遺物	12	第59図	B881柱穴出土遺物	35
第10図	C454土坑出土遺物	12	第60図	D2674土坑出土遺物	35
第11図	C469溝出土遺物	12	第61図	B485土坑出土遺物	36
第12図	B・C・D・E・F地区古代遺構配置図	14	第62図	B604落ち込み遺物出土状況図	36
第13図	B・C・D地区包含層出土遺物	15	第63図	B604落ち込み出土遺物	36
第14図	住居8・9平面・断面図	16	第64図	D2630土坑遺物出土状況図	37
第15図	住居9出土遺物	16	第65図	奈良時代遺構出土遺物	37
第16図	住居10平面・断面図	17	第66図	D2477土坑出土遺物	38
第17図	住居11平面・断面図	17	第67図	D2675土坑出土遺物	38
第18図	建物7平面・断面図	18	第68図	E280土坑出土遺物	38
第19図	建物10平面・断面図	18	第69図	E3戸口平面・断面図	39
第20図	建物11平面・断面図	19	第70図	E3戸口出土遺物	39
第21図	建物12平面・断面図	19	第71図	E250溝出土遺物	40
第22図	建物13平面・断面図	20	第72図	E 8号墳削溝最上層出土遺物	40
第23図	建物14平面・断面図	21	第73図	溝1出土遺物	40
第24図	建物15平面・断面図	21	第74図	A・G・I地区古代遺構配置図	41
第25図	建物15平面・断面図	22	第75図	住居4平面・断面図	42
第26図	建物19平面・断面図	22	第76図	住居5平面・断面図	42
第27図	建物17平面・断面図	22	第77図	住居6平面・断面図	42
第28図	建物20平面・断面図	23	第78図	住居7平面・断面図	43
第29図	建物18平面・断面図	23	第79図	建物1平面・断面図	44
第30図	建物22平面・断面図	23	第80図	建物2平面・断面図	44
第31図	建物21平面・断面図	24	第81図	建物3平面・断面図	45
第32図	建物23平面・断面図	24	第82図	建物5平面・断面図	45
第33図	建物24平面・断面図	25	第83図	建物4平面・断面図	45
第34図	建物25平面・断面図	25	第84図	建物6平面・断面図	45
第35図	建物26平面・断面図	25	第85図	建物9平面・断面図	46
第36図	建物28平面・断面図	26	第86図	建物8平面・断面図	46
第37図	建物27平面・断面図	26	第87図	建物45平面・断面図	47
第38図	建物29平面・断面図	27	第88図	建物44平面・断面図	47
第39図	建物30平面・断面図	27	第89図	建物46平面・断面図	47
第40図	建物31平面・断面図	28	第90図	建物47平面・断面図	48
第41図	建物32平面・断面図	28	第91図	建物48平面・断面図	48
第42図	建物34平面・断面図	29	第92図	建物49平面・断面図	49
第43図	建物33平面・断面図	29	第93図	建物50平面・断面図	49
第44図	建物35平面・断面図	29	第94図	建物51平面・断面図	49
第45図	建物36平面・断面図	30	第95図	建物52平面・断面図	50
第46図	建物37平面・断面図	30	第96図	建物53平面・断面図	50
第47図	建物38出土遺物	31	第97図	建物54平面・断面図	51
第48図	建物38平面・断面図	31	第98図	建物55平面・断面図	51
第49図	建物39出土遺物	32	第99図	建物56平面・断面図	52
第50図	建物39平面・断面図	32	第100図	建物57平面・断面図	52

第101図	建物58平面・断面図	52	第153図	B1377上坑出土遺物	81
第102図	建物61平面・断面図	53	第154図	B1385土壤蓋平面・断面図	82
第103図	建物59・60・62平面・断面図	54	第155図	B1385土壤蓋出土遺物	82
第104図	建物63平面・断面図	55	第156図	屋敷B平面図	83
第105図	建物64平面・断面図	55	第157図	屋敷B溝出土遺物	84
第106図	建物66平面・断面図	56	第158図	建物67出土遺物	84
第107図	建物65平面・断面図	56	第159図	建物87周辺柱穴出土遺物	84
第108図	建物67平面・断面図	56	第160図	建物87平面・断面図	84
第109図	樋列1平面・断面図	57	第161図	建物88及び周辺柱穴出土遺物	85
第110図	樋列2平面・断面図	57	第162図	建物88平面・断面図	85
第111図	G360柱穴出土遺物	58	第163図	建物89平面・断面図	86
第112図	A321土坑出土遺物	58	第164図	建物90平面・断面図	86
第113図	A4497土坑出土遺物	59	第165図	建物91平面・断面図	87
第114図	A225溝出土遺物	59	第166図	建物92平面・断面図	87
第115図	G121井戸平面・断面図	60	第167図	屋敷B柱穴出土遺物	87
第116図	G121井戸出土遺物	60	第168図	B3435埋納穴平面図	88
第117図	G地区包含層出土遺物	61	第169図	B3434埋納穴平面図	88
第118図	J地区古代遺構配置図	62	第170図	B1827埋納穴平面図	88
第119図	建物68平面・断面図	63	第171図	B3435埋納穴出土遺物	88
第120図	建物72平面・断面図	63	第172図	B3434埋納穴出土遺物	88
第121図	建物69平面・断面図	64	第173図	B1827埋納穴出土遺物	88
第122図	建物70平面・断面図	64	第174図	B1482土坑平面・断面図	89
第123図	建物71平面・断面図	64	第175図	B1822土坑平面・断面図	89
第124図	建物73・75平面・断面図	65	第176図	B1482土坑尚土遺物	89
第125図	建物74平面・断面図	66	第177図	D243上坑出土遺物	89
第126図	建物76平面・断面図	66	第178図	B1822下坑出土遺物	89
第127図	J地区出土鉄製品	67	第179図	B1825土坑出土遺物	90
第128図	K地区古代遺構配置図	68	第180図	D293井戸平面・断面図	90
第129図	作12平面・断面図	69	第181図	D293井戸出土遺物	90
第130図	住142出土遺物	69	第182図	屋敷C平面図	91
第131図	建物78平面・断面図	70	第183図	建物93平面・断面図	92
第132図	建物79平面・断面図	70	第184図	建物94及び周辺柱穴出土遺物	93
第133図	建物77平面・断面図	70	第185図	建物94平面・断面図	93
第134図	建物80平面・断面図	70	第186図	建物95及び周辺柱穴出土遺物	93
第135図	建物81平面・断面図	71	第187図	建物95平面・断面図	94
第136図	建物82平面・断面図	71	第188図	屋敷C柱穴出土遺物	94
第137図	中世屏風跡群配置図	72	第189図	建物96平面・断面図	95
第138図	屋敷A区西溝出土遺物	73	第190図	B1943落ち込み出土遺物	95
第139図	包含層出土遺物	74	第191図	B3035土坑出土遺物	96
第140図	屋敷A平面図	75	第192図	厚敷C土坑出土遺物	97
第141図	B1386菟池平面・断面図	76	第193図	B3035土坑平面・断面図	97
第142図	B1386菟池出土遺物	76	第194図	B3017土坑出土遺物	97
第143図	建物83平面・断面図	77	第195図	屋敷D平面図	98
第144図	建物83及び周辺柱穴出土遺物	78	第196図	建物97平面・断面図	99
第145図	建物84平面・断面図	78	第197図	建物97及び周辺柱穴出土遺物	99
第146図	建物85平面・断面図	79	第198図	建物98平面・断面図	100
第147図	建物86及び周辺柱穴出土遺物	80	第199図	建物99平面・断面図	100
第148図	建物86平面・断面図	80	第200図	建物100平面・断面図	101
第149図	屋敷A柱穴出土遺物	80	第201図	建物100出土遺物	101
第150図	B2630柱穴平面・断面図	81	第202図	屋敷D柱穴出土遺物	101
第151図	B1341井戸平面・断面図	81	第203図	B2277土坑出土遺物	102
第152図	B1341井戸出土遺物	81	第204図	B2281土坑遺物出土状況図	102

第205図	B2081上坑遺物出土状況図	102
第206図	B2006埋納穴出土遺物	102
第207図	B2469井戸平面・断面図	102
第208図	R2081上坑出土遺物	102
第209図	B2469井戸出土遺物	103
第210図	星敷E平面図	104
第211図	建物101及び周辺柱穴出土遺物	105
第212図	建物101平面・断面図	105
第213図	C579土壤墓平面・断面図	106
第214図	C579土壤墓出土遺物	106
第215図	星敷F平面図	107
第216図	建物102平面・断面図	108
第217図	建物102出土遺物	108
第218図	星敷F柱穴出土遺物	108
第219図	C1042上坑平面・断面図	109
第220図	C1013土坑出土遺物	109
第221図	B6004土壤墓出土状況図	109
第222図	B6004土壤墓出土遺物	109
第223図	建物103平面・断面図	110
第224図	星敷G通槽内出土遺物	110
第225図	星敷G平面図	111
第226図	建物104平面・断面図	112
第227図	建物105平面・断面図	112
第228図	建物106出土遺物	113
第229図	建物106平面・断面図	113
第230図	星敷K平面図	114
第231図	建物107平面・断面図	115
第232図	建物108平面・断面図	115
第233図	建物109出土遺物	116
第234図	D957柱穴出土状況図	116
第235図	建物109平面・断面図	116
第236図	星敷K柱穴出土遺物	116
第237図	D287井戸平面・断面図	117
第238図	D287井戸出土遺物1	117
第239図	D287井戸出土遺物2	118
第240図	星敷L平面図	119
第241図	建物110平面・断面図	120
第242図	建物110及び周辺柱穴出土遺物	120
第243図	建物111平面・断面図	121
第244図	星敷I柱穴出土遺物	121
第245図	D728上坑出土遺物	121
第246図	D18十坑平面・断面図	122
第247図	D602土坑平面・断面図	122
第248図	D18土坑出土遺物	122
第249図	D602上坑出土遺物	122
第250図	D487土坑出土遺物	122
第251図	D570井戸平面・断面図	123
第252図	D570井戸出土遺物	123
第253図	星敷M平面図	124
第254図	建物112平面・断面図	125
第255図	建物113周辺柱穴出土遺物	126
第256図	建物114及び周辺柱穴出土遺物	126
第257図	建物114平面・断面図	126
第258図	建物113平面・断面図	126
第259図	星敷N・O平面図	127
第260図	建物115平面・断面図	128
第261図	星敷N・O溝出土遺物	128
第262図	建物116平面・断面図	129
第263図	建物116及び周辺柱穴出土遺物	129
第264図	建物117平面・断面図	130
第265図	建物117平面・断面図	130
第266図	建物118平面・断面図	131
第267図	建物119平面・断面図	131
第268図	建物120平面・断面図	132
第269図	星敷N・O柱穴出土遺物	132
第270図	D1853井戸出土遺物	133
第271図	星敷N・O土坑出土遺物	133
第272図	D1853井戸平面・断面図	134
第273図	D2803土坑出土遺物	134
第274図	D1853井戸出土遺物	135
第275図	星敷P平面図	136
第276図	建物121平面・断面図	137
第277図	建物122平面・断面図	137
第278図	星敷Q平面図	138
第279図	建物123平面・断面図	139
第280図	建物124平面・断面図	139
第281図	建物125平面・断面図	140
第282図	建物126平面・断面図	140
第283図	建物127平面・断面図	141
第284図	星敷R平面図	142
第285図	建物128平面・断面図	143
第286図	建物128及び周辺柱穴出土遺物	143
第287図	建物129平面・断面図	144
第288図	星敷R土坑出土遺物	144
第289図	E471十坑出土遺物	144
第290図	E398土壤墓平面・断面図	145
第291図	E398土壤墓出土遺物	145
第292図	E460土壤墓平面・断面図	145
第293図	E460土壤墓出土遺物	145
第294図	星敷S平面図	146
第295図	建物130平面・断面図	147
第296図	E848井戸平面・断面図	147
第297図	星敷S柱穴出土遺物	147
第298図	E848井戸出土遺物	148
第299図	星敷T平面図	149
第300図	建物131平面・断面図	150
第301図	C626上坑出土遺物	151
第302図	C514土坑出土遺物	151
第303図	C954埋納穴出土遺物	151
第304図	C954埋納穴出土遺物	151
第305図	A・G・I地区中世遺構配置図	152
第306図	建物132平面・断面図	153
第307図	建物133平面・断面図	153
第308図	建物134平面・断面図	154

第309図	建物135平面・断面図	154
第310図	建物136平面・断面図	154
第311図	建物137平面・断面図	154
第312図	建物138平面・断面図	155
第313図	建物139平面・断面図	155
第314図	建物140平面・断面図	156
第315図	建物144平面・断面図	156
第316図	建物141平面・断面図	156
第317図	建物142平面・断面図	157
第318図	建物143平面・断面図	157
第319図	建物145平面・断面図	158
第320図	A304上坑平面・断面図	159
第321図	A304下坑出土遺物	159
第322図	G761井戸出土遺物	160
第323図	G地区遺構出土遺物	161
第324図	G1007溝出土遺物	161
第325図	I地区遺構出土遺物	162
第326図	I地区包含層出土遺物	163
第327図	I地区鉄器及び石製品	163
第328図	J地区中世遺構配置図	164
第329図	建物146平面・断面図	164
第330図	建物147平面・断面図	165
第331図	建物148平面・断面図	165
第332図	建物149平面・断面図	166
第333図	建物150平面・断面図	166
第334図	建物151平面・断面図	166
第335図	建物152平面・断面図	167
第336図	建物154平面・断面図	168
第337図	建物153平面・断面図	168
第338図	J4650土坑及びJ4295溝平面図	169
第339図	J4650上坑平面・断面図	169
第340図	J4295溝東南部平面・断面図	170
第341図	J4448柱穴遺物出土状況図	171
第342図	J4869柱穴遺物出土状況図	171
第343図	J4239下坑遺物出土状況図	171
第344図	J4055土坑遺物出土状況図	171
第345図	J地区遺構出土遺物1	172
第346図	J地区遺構出土遺物2	173
第347図	H・K地区中世遺構配置図	174
第348図	K地区包含層出土遺物	175
第349図	H地区包含層出土遺物1	176
第350図	H地区包含層出土遺物2	176
第351図	建物155平面・断面図	177
第352図	建物156平面・断面図	177
第353図	建物157平面・断面図	177
第354図	建物158平面・断面図	177
第355図	建物159平面・断面図	178
第356図	建物160平面・断面図	178
第357図	建物161平面・断面図	179
第358図	建物162平面・断面図	179
第359図	建物163平面・断面図	180
第360図	建物164平面・断面図	181
第361図	建物165平面・断面図	181
第362図	建物166平面・断面図	181
第363図	建物167平面・断面図	182
第364図	建物168平面・断面図	182
第365図	建物169平面・断面図	183
第366図	建物170平面・断面図	184
第367図	建物171平面・断面図	184
第368図	建物172平面・断面図	184
第369図	建物173平面・断面図	184
第370図	建物174平面・断面図	185
第371図	建物176平面・断面図	185
第372図	建物175平面・断面図	185
第373図	建物178平面・断面図	185
第374図	建物177平面・断面図	186
第375図	建物179平面・断面図	186
第376図	建物180平面・断面図	187
第377図	建物181平面・断面図	187
第378図	建物182平面・断面図	187
第379図	建物184平面・断面図	188
第380図	建物185平面・断面図	188
第381図	建物183平面・断面図	188
第382図	建物186平面・断面図	188
第383図	建物187平面・断面図	189
第384図	建物188平面・断面図	189
第385図	建物189平面・断面図	190
第386図	建物190平面・断面図	190
第387図	建物191平面・断面図	190
第388図	建物192平面・断面図	191
第389図	建物193平面・断面図	191
第390図	建物194平面・断面図	192
第391図	建物195平面・断面図	192
第392図	建物196平面・断面図	192
第393図	建物197平面・断面図	193
第394図	建物198平面・断面図	193
第395図	建物199平面・断面図	195
第396図	建物200平面・断面図	196
第397図	建物201平面・断面図	196
第398図	建物203平面・断面図	196
第399図	建物202平面・断面図	197
第400図	建物204平面・断面図	198
第401図	建物205平面・断面図	198
第402図	建物206平面・断面図	199
第403図	建物207平面・断面図	199
第404図	建物208平面・断面図	200
第405図	建物209平面・断面図	200
第406図	建物210平面・断面図	201
第407図	柵列14平面・断面図	202
第408図	柵列16平面・断面図	202
第409図	柵列17平面・断面図	202
第410図	柵列19平面・断面図	203
第411図	柵列20平面・断面図	203
第412図	柵列18平面・断面図	203

第413図	柵列21平面・断面図	203
第414図	柵列22平面・断面図	203
第415図	H地区柱穴出土遺物1	204
第416図	H・K地区柱穴群平面図	205・206
第417図	H地区柱穴出土遺物2	207
第418図	H1834柱穴出土遺物	208
第419図	K391柱穴出土遺物出土状況図	209
第420図	K305柱穴出土遺物出土状況図	209
第421図	K地区柱穴出土遺物1	210
第422図	K地区柱穴出土遺物2	211
第423図	K703柱穴出土遺物出土状況図	212
第424図	K1440柱穴出土遺物出土状況図	212
第425図	K地区柱穴出土遺物3	213
第426図	K1584柱穴出土遺物	214
第427図	K384土坑平面・断面図	215
第428図	K382上坑平面・断面図	215
第429図	K1627下坑平面・断面図	215
第430図	K地区土坑出土遺物1	216
第431図	K400土坑平面図	217
第432図	K435上坑平面・断面図	217
第433図	H地区土坑出土遺物	218
第434図	K435土坑出土遺物	219
第435図	K441土坑平面・断面図	220
第436図	K441上坑出土遺物1	221
第437図	K441下坑出土遺物2	222
第438図	K504土坑平面・断面図	223
第439図	K地区土坑出土遺物2	223
第440図	K1469上坑平面・断面図	224
第441図	G761上坑平面・断面図	224
第442図	K1469土坑出土遺物	224
第443図	J4478土坑平面図	225
第444図	K1672上坑平面・断面図	225
第445図	K1400下坑出土遺物	225
第446図	K地区土坑出土遺物3	225
第447図	H・I・K地区造構平面・断面図	226
第448図	K621・K1332井戸出土遺物	227
第449図	K370井戸出土遺物	228
第450図	H1000井戸出土遺物1	229
第451図	H1000井戸出土遺物2	230
第452図	H1000井戸出土遺物3	231
第453図	H地区溝出土遺物	232
第454図	K地区溝出土遺物1	233
第455図	K424溝遺物出土状況図	234
第456図	K424溝出土遺物	234
第457図	K511溝遺物出土状況図	235
第458図	K地区溝出土遺物2	235
第459図	K地区溝出土遺物3	236
第460図	周溝墓配置図	237
第461図	1号周溝墓平面・断面図	238
第462図	1号周溝墓溝出土遺物	239
第463図	2号周溝墓平面・断面図	239
第464図	土器棺墓1平面・断面図	240
第465図	土器棺墓1上部実測図	240
第466図	土器棺墓2平面・断面図	241
第467図	土器棺墓2土器実測図	241
第468図	3号周溝墓平面・断面図	242
第469図	3号周溝墓出土遺物	242
第470図	4号周溝墓主体部1平面・断面図	243
第471図	4号周溝墓平面・断面図	243
第472図	4号周溝墓主体部2土器実測図	244
第473図	4号周溝墓主体部2土器棺出土状況図	245
第474図	土器棺墓3出土状況図	245
第475図	4号周溝墓供獻遺物出土状況図	245
第476図	4号周溝墓供獻土層・土器棺墓3土器実測図	245
第477図	土器棺墓4出土七状況図	246
第478図	土器棺墓4土器実測図	246
第479図	住居2平面・断面図	247
第480図	住居2出土遺物	247
第481図	住居2遺物出土状況図	247
第482図	住居3平面・断面図	248
第483図	住居1平面・断面図	248
第484図	弥生時代後期出土遺物	249
第485図	古代建物分類図	251
第486図	刻字文字詳細図	253
第487図	中世埋蔵跡平面図	257

## 表 目 次

表1	A・B・F地区古代建物計測値表	20
表2	B・C・D地区古代建物計測値表	25
表3	B・D・E・F地区古代建物計測値表	31
表4	A地区古代建物計測値表	46
表5	G地区古代建物計測値表	53
表6	I地区古代建物計測値表	57
表7	I地区古代柵列計測値表	57
表8	J地区古代建物計測値表	65
表9	K地区古代建物計測値表	71
表10	屋敷A建物計測値表	79
表11	屋敷B建物計測値表	86
表12	屋敷C建物計測値表	92
表13	屋敷D建物計測値表	101
表14	屋敷E建物計測値表	105
表15	屋敷F建物計測値表	108
表16	屋敷G建物計測値表	113
表17	屋敷K建物計測値表	115
表18	屋敷L建物計測値表	121
表19	屋敷M建物計測値表	125
表20	屋敷N・O建物計測値表	130
表21	屋敷P建物計測値表	137
表22	屋敷Q建物計測値表	141

表23	屋敷R建物計測値表	143
表24	屋敷S建物計測値表	147
表25	屋敷T建物計測値表	150
表26	G・I地区中世建物計測値表	158
表27	J地区中世建物計測値表	167
表28	H・K地区中世建物計測値表1	180
表29	H・K地区中世建物計測値表2	186
表30	H・K地区中世建物計測値表3	194
表31	H・K地区中世建物計測値表4	201
表32	H・K地区中世柵列計測値表	203
表33	屋敷地別遺構集計表	257

## 付 図 目 次

- 付図1 古代遺構平面図  
 付図2 中世遺構平面図  
 付図3 G・I地区遺構平面図

- 付図4 J地区遺構平面図  
 付図5 H・I・K地区遺構平面図  
 付図6 弓生時代遺構平面図

## 図 版 目 次

図版表紙 調査地区周辺空中写真

図版1 古代 B・C・D・E・F地区

1. B地区西北部近景 (東より)
2. 建物12 (南より)
3. 建物14 (東より)
4. 建物15 (北より)
5. 建物17 (南より)
6. 建物18 (西より)
7. 建物21 (東より)

図版2 古代 B・C・D・E・F地区

1. C地区全景 (西より)
2. 建物22 (西より)
3. 建物23 (北より)
4. 建物26・27 (西より)
5. 建物28 (西より)
6. 建物30 (西より)
7. 建物31 (北より)

図版3 古代 B・C・D・E・F地区

1. 住居10 (東より)
2. 住居8・9 (北より)
3. 建物36・37周辺 (西より)
4. 建物38 (西より)
5. 建物39 (東より)
6. 建物41 (東より)
7. 建物42 (東より)
8. 建物11 (南より)

図版4 古代 A・G・I地区

1. A地区南西部全景 (北より)
2. 住居5 (南より)
3. 住居4 (西より)
4. 住居6 (西より)
5. 住居7 (西より)

図版5 古代 A・G・I地区

1. 建物2 (東より)
2. 建物5 (北より)
3. 建物6 (東より)
4. 建物7 (北より)
5. 建物8 (北より)
6. 建物9 (西より)
7. 建物44 (西より)
8. 建物45 (南より)

図版6 古代 A・G・I地区

1. G地区全景 (西より)
2. 建物48 (南北より)
3. 建物49 (南北より)
4. 建物50 (西より)
5. 建物54 (南より)

図版7 古代 A・G・I地区

1. 建物55 (北より)
2. G121井戸断面
3. 建物59 (西より)
4. 建物60 (東より)
5. 建物61 (北より)
6. 建物62 (北より)
7. 建物63 (南より)
8. 建物65 (北より)

図版8 中世 屋敷A

1. 全景 (空中写真)
2. 建物83 (西より)
3. B1386池 (北より)

付図4 J地区遺構平面図

- 付図5 H・I・K地区遺構平面図  
 付図6 弓生時代遺構平面図

4. B1385上塙墓遺物出土状況(西より)

図版9 中世 屋敷B

1. 全景 (空中写真)
2. 建物87 (東より)
3. 建物88 (東より)
4. 建物92 (西より)
5. B3435埋納穴遺物出土状況 (南より)
6. B3434埋納穴遺物出土状況 (南より)
7. B1827埋納穴遺物出土状況 (西より)

図版10 中世 屋敷C

1. 全景 (空中写真)
2. 建物93・94 (北より)
3. B3035土坑遺物出土状況 (西より)
4. B3017土坑遺物出土状況 (南より)

図版11 中世 屋敷D

1. 全景 (空中写真)
2. 建物97 (北より)
3. B2469井戸曲物出土状況 (北より)
4. B2081土坑遺物出土状況 (東より)

図版12 中世 屋敷E

1. 全景 (空中写真)
2. C579土塙墓 (南より)
3. C579土塙墓遺物出土状況 (北より)

図版13 中世 屋敷F・G

1. 屋敷F全景 (西より)
2. 屋敷F B6004土塙墓遺物出土状況 (東より)
3. 屋敷G全景 (東より)

図版14 中世 屋敷G・K・L

1. 屋敷G全景 (北より)
2. 屋敷K・L (空中写真)

図版15 中世 屋敷M・N・O

1. 屋敷M全景 (空中写真)
2. 屋敷N・O全景 (空中写真)
3. 屋敷N D1853井戸遺物出土状況 (南より)

図版16 中世 屋敷P・Q・R

1. 屋敷P全景 (空中写真)
2. 屋敷Q全景 (東より)
3. 屋敷R E460上塙墓 (西より)

図版17 中世 屋敷R

1. 全景 (空中写真)
2. E398上塙墓 (西より)
3. E393上塙墓遺物出土状況 (東より)

図版18 中世 A・G・I地区

1. A6050上坑 (東より)
2. G地区全景 (空中写真)
3. I地区全景 (西より)

- 図版19 中世 K地区  
 1. 全景 (空中写真) 2. 南西部 (空中写真)
- 図版20 中世 H・K地区  
 1. H地区全景 (西より)  
 2. K382・K384土坑 (北より)  
 3. K400土坑 (東より)  
 4. K1000川上遺物出土状況  
 5. K573土坑銭出土状況 (東より)  
 6. K424溝遺物出土状況 (東より)
- 図版21 中世 J地区  
 1. 全景 (西より)  
 2. J4650上坑・J4250溝 (東より)  
 3. J4650上坑 (西より)
- 図版22 弥生  
 1. E地区周溝墓群 (東より)  
 2. 1号・2号周溝墓 (東より)  
 3. 土器棺墓1検出状況 (東より)  
 4. 土器棺墓1棺身 (東より)  
 5. 土器棺墓2検出状況 (北より)  
 6. 土器棺墓2棺身 (北より)
- 図版23 弥生 4号周溝墓  
 1. 全景 (東より) 2. 主体部 (東より)  
 3. 土器棺墓3 (東より) 4. 主体部2出土状況 (東より)  
 5. 主体部2棺身 (北より) 6. 土器棺墓4 (北より)  
 7. 供獻土器 (南より)
- 図版24 弥生  
 1. 住居2 (南より)  
 2. 住居2遺物出土状況 (南より)  
 3. 住居1 (北より)
- 図版25 出土遺物 弥生・古墳  
 1. 土器棺1 (蓋) 2. 土器棺1 (身) 3. 上器棺2  
 4. 4号周溝墓周溝内出土豪棺 (主体部2)  
 5. 4号周溝墓主体部出土豪棺 (主体部1)  
 6. 土器棺4 7. 土器棺3 8. D2649 (1)  
 9. D2649 (2)
- 図版26 出土遺物 古墳・古代  
 1. M4438 2. J4055 3. K1700 4. K1650  
 5. D2689 6. B485 7. G360  
 8. B604 建物28 住居9 D2688 D2790  
 9. B839 10. K1160
- 図版27 出土遺物 古代  
 1. D2674 2. A321 A4497 F958 3. E887  
 4. 溝1 D2630 5. 溝1 6. 溝1 7. 溝1  
 8. RS81 B440 C600 C464 C13 C595 C424 D291 D1589  
 9. 溝1
- 図版28 出土遺物 古代  
 1. A225 2. B547 E958 B1874 D254 3. G121  
 4. E3 5. E3 6. B881 7. J2957 4239 J4869  
 8. B723 D2803 9. D2477 E280 10. 包含層
- 図版29 出土遺物 中世  
 屋敷A  
 1. B1386 2. B1386 3. 建物86及び周辺柱穴  
 4. 建物83及び周辺柱穴 B1386 B1377 B1341  
 5. B1385 6. B1385 7. B1385 8. B1385 9. B1385  
 10. 建物86及び周辺柱穴 柱穴内 B1386 B877  
 11. B1377
- 図版30 出土遺物 中世  
 屋敷B  
 1. 区画溝 建物 上坑 2. 柱穴内 3. B3434  
 4. B1827
- 図版31 出土遺物 中世  
 屋敷B・C・D・E  
 1. B3097  
 2. 建物45 屋敷C柱穴 B2828 B3499 B2988 B3020  
 3. 屋敷B・C・D・E 4. B3035 5. B3035
- 図版32 出土遺物 中世  
 屋敷C・D・E  
 1. 建物96及び周辺柱穴 2. B2081 3. 建物101他  
 4. 建物100 屋敷D柱穴内 B2297 5. B2649  
 6. B1943 7. B2006 8. C579
- 図版33 出土遺物 中世  
 屋敷F・L・G・K  
 1. 建物102 屋敷F柱穴内 C1013 C1069  
 2. B6004 3. B6004 4. B6004 5. D570  
 6. 屋敷K柱穴内 7. 屋敷G 建物106・遺構内  
 8. 屋敷K柱穴内 9. D287
- 図版34 出土遺物 中世  
 屋敷L・M  
 1. 屋敷L 柱穴内 2. 屋敷L 建物110及び周辺柱穴  
 3. D570 4. D487 D602 建物114及び周辺柱穴
- 図版35 出土遺物 中世  
 屋敷L・N  
 1. D728 2. 建物116 建物117及び周辺柱穴  
 3. 屋敷N (区画溝 土坑)  
 4. 屋敷N (柱穴内 建物116 建物117 上坑 D2803)
- 図版36 出土遺物 中世  
 屋敷N・R・S  
 1. 屋敷N柱穴内  
 2. 屋敷R (建物128及び周辺柱穴上坑) 屋敷S柱穴内  
 3. E398 4. E848 5. E460 6. D1853
- 図版37 出土遺物 中世  
 屋敷H・A・H・K地区  
 1. A340 C435 C514 C626 2. H地区包含層  
 3. B340 4. H地区遺構内 5. H400 6. C954  
 7. H1000 8. H761 9. K441
- 図版38 出土遺物 中世  
 J・K・H地区  
 1. H1403 2. H1105 3. K418  
 4. J422 5. K570 6. H2107 7. H地区遺構内  
 8. K305 9. J4210 10. K377
- 図版39 出土遺物 中世  
 K地区  
 1. K1627 K1469 K1691 2. K424 3. K435 K426  
 4. K1632 5. K511 K525

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯と経過

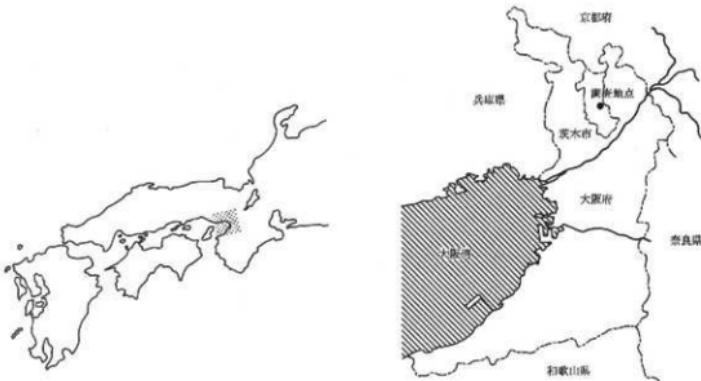
大阪府建築部では、現在老朽化の著しい木造平屋建ての府営住宅を土地の有効利用と住宅環境の改善のため、中・高層住宅に建て替える計画を推進している。昭和26年に建設された茨木市三島丘に所在する府営茨木三島丘住宅も古くから建て替え計画の候補に挙がっていた。

そのため昭和49年に大阪府教育委員会が、大阪府建築部の依頼を受け、本住宅敷地内において遺跡の有無を確認する試掘調査を実施した。その結果、埴輪、須恵器、土師器、瓦器等が出土し、その周辺が、遺跡であることが確認され、遺跡名を總持寺遺跡と名付けた。

平成2年に本住宅の建て替え計画が具体化したとの通知を、本府建築部から受けた本府教育委員会は、本府建築部との協議を重ね、平成4年度に本府教育委員会文化財保護課技師阿部幸一を担当者として住宅敷地内全域の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、住宅敷地内の全域にわたって、地表下0.2mから0.6m付近において古墳時代から中世にかけての遺構が多數存在する可能性が高いという結果を得た。

この試掘結果に基づいて本府教育委員会は、本住宅の敷地全域を建て替えるのに際して、発掘調査を実施する必要があり、また、表土から遺構面までの深度が浅いことから、住宅建築工事や埋管、付属施設などで、遺跡が破壊される可能性が十分に予測された。そのため、発掘調査区域は、敷地全域に及ぶとの判断を示した。

この結果を本府建築部に伝え、本府教育委員会と本府建築部は、府営三島丘住宅建て替えの建築実施計画の見直しと発掘調査の時期と期間について協議を行った。その結果、発掘調査を本府

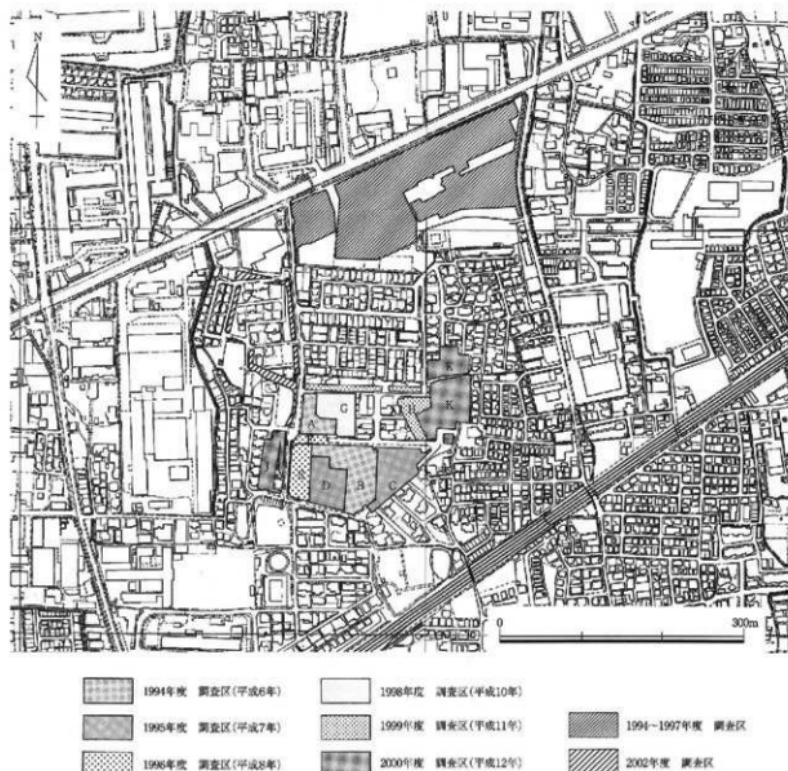


第1図 大阪府と調査地点

教育委員会によって平成6年度から開始することとなった。また、発掘調査によって検出された遺構を保護し後世に残していくために、住棟建築部分、埋管などによって破壊される区域を除き、約0.2mの真砂土で養生して埋め戻すこととなった。

発掘調査は、平成6年度は、本府教育委員会技師奥和之によってA、B地区（面積約4,980m<sup>2</sup>）、平成7年度は技師酒井泰子によってC、D地区（面積約5,400m<sup>2</sup>）、平成8年度は、技師山上弘によってE、F地区（面積約2,200m<sup>2</sup>）、平成10年度から平成12年度については、技師阿部幸一が担当し、平成10年度はG地区（面積約1,850m<sup>2</sup>）、平成11年度はH、I地区（面積約3,700m<sup>2</sup>）、平成12年度はJ、K地区（面積約5,400m<sup>2</sup>）の調査を実施し、総調査面積は、23,530m<sup>2</sup>にもおよぶ。

平成7年2月21日には、1回目の総持寺遺跡発掘調査現地説明会を開催し、地元住民および府民の方々に発掘調査の成果を公開した。阪神大震災の直後にも拘わらず、500人を越える多数の



第2図 調査区位置図

参加を得た。また2回目の現地説明会を平成8年10月19日に開催し、多数の参加を得た。

報告書作成に伴う遺物整理事業については、本府教育委員会と本府建築都市部と協議の上、平成15年度から開始することとした。

総持寺遺跡で検出された遺構の時期は、弥生時代後期から中世を中心に多時期にわたり、遺構、遺物の量も膨大な数におよぶ。そのため、報告書を2分冊に分けて刊行することになった。

平成16年度に第1冊目として、古墳時代中期の小規模古墳と遺物を中心に刊行した。第2冊目として、平成18度に弥生時代後期、古墳時代後期、古墳時代末期・飛鳥・奈良・平安、中世の遺構、遺物を中心に刊行することになった。

## 第2節 調査の方法

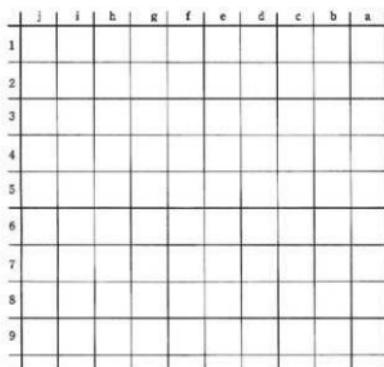
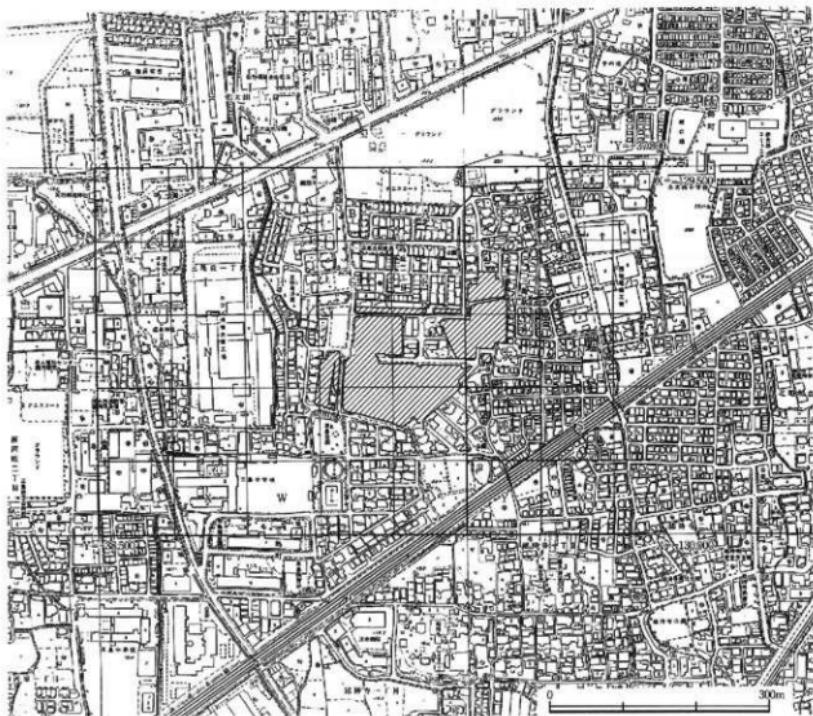
三島丘住宅の建替えに伴う発掘調査は多年度にわたって行われたため、各年度との調査の混乱を防ぎ、また調査を円滑に進めるため、発掘調査地域全域を網羅する地区割（第3図）を行った。地区割の方法は、旧国土地標VI系を基準とし、X = -129,500、Y = -37,800（世界測地系平面直角座標「第VI系」X = -129,153.35、Y = -38,060.91）を北東端、X = -129,500、Y = -38,500を北西端（同X = -129,153.35、Y = -38,760.91）、X = -130,000、Y = -37,500を南東端（同X = -129,653.34、Y = -37,760.92）、X = -130,000、Y = -38,500を南西端（同X = -129,653.34、Y = -38,760.92）とする東西500m、南北500mの区画を作り、Iとした。また、その区画の東側は、IIの呼称を与えることとした。それを更に100m四方の区画に分割し、25区画を作り、この区画にAからYまでの呼称を与えた。この区画を更に10m四方の区画に分割し、100区画を作った。この区画の東西をaからj、南北を1から10で表した。そして、これらの区画に従って出土遺物を取り上げた。

また、検出した遺構については、1個の遺構に対して、調査区ないしは年度毎に番号を与えた。また、建物、住居跡、屋敷跡のように集まってひとつの遺構となすものについては、建物1のように、まず最初に遺構名を記し、別の呼称を与えた。

調査区の名称については、発掘調査を行った11調査区に、調査順にAからKまでの呼称を与えた。

発掘調査の方法は盛土および表土層を機械掘削によって除去した後、遺物包含層および検出した遺構を人力により掘削した。また、調査の迅速化と省力化をはかるため、基本的にヘリコプターによる写真測量を実施した。なお、遺物の出土状況、土壠断面については、適宜図面を作成した。

(奥)



第3図 調査区地区割概念図

## 第2章 位置と環境

総持寺遺跡の位置については、既に刊行されている『総持寺遺跡—古墳時代中期の小規模古墳群の調査—』（大阪府埋蔵文化財報告2004－2大阪府教育委員会2005）を参考されたい。

当節では総持寺遺跡が所在する茨木市三島丘（旧三島郡）周辺で、女瀬川から安威川地域の歴史的環境について述べていく。特に今回報告する弥生時代後期、古墳時代後期、古墳時代末期から中世かけての遺跡を中心に述べていく。

### 1. 弥生時代の遺跡

弥生時代前期では、東奈良遺跡で環濠と方形周溝墓が検出された。また流水文銅鐸や銅戈・勾玉の鑄型・輪の羽口が出土したことでも知られており、近年の調査では内部に舌を伴った小銅鐸も発見された<sup>①</sup>。また東奈良遺跡の北側に位置する郡遺跡や耳原遺跡もこの時期に集落を形成し始める。

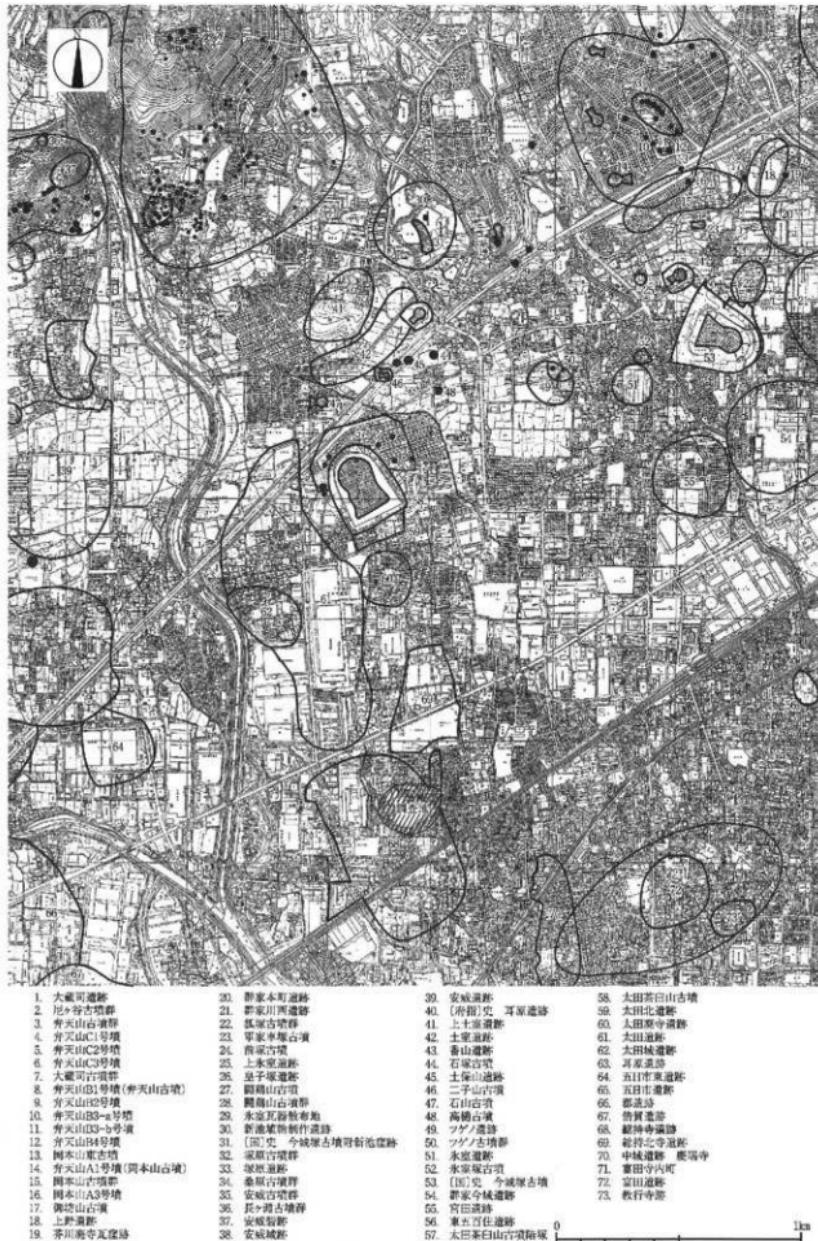
弥生時代中期には、下流域の集落が拡充・北上する。倍賀遺跡は郡遺跡の分村とされ、方形周溝墓群や竪穴住居・銅鐸土製品や多量の土器が発見された<sup>②</sup>。耳原遺跡からは中期前半の大型の竪穴住居・広口壺・甕や、後半の壺棺墓が検出され<sup>③</sup>、安威川中流東岸の太田遺跡では集落が出現する<sup>④</sup>。

弥生時代後期になっても拡充・北上は続き、耳原遺跡からさらに北、安威城・安威両遺跡や塚原遺跡が位置する山の麓まで広がりを見せる。郡遺跡はこの頃が最盛期となる。太田遺跡からは竪穴住居が検出されている<sup>⑤</sup>。総持寺遺跡ではこの時期に集落が出現し、今回報告する当調査地において、周溝墓や住居群が検出されている。

### 2. 古墳時代から飛鳥時代の遺跡

古墳時代中期については、既に刊行されている『総持寺遺跡—古墳時代中期の小規模古墳群の調査—』（大阪府埋蔵文化財調査報告2004－2大阪府教育委員会2005）にて記述しているので、ここでは割愛する。

古墳時代後期には、山際から少し南の緩平部に今城塚古墳が造営される。近年の調査で造り出し部分から豪華な形象埴輪群が見つかり、「日本書紀」などに見られる繼体天皇陵である可能性が非常に高いとされる。山間入口部では、安威川中上流域に横穴石室を持つ小型円墳からなる群集墳が造営される。塚原古墳群は、群内の谷筋・尾根を利用していくつかのグループに分けられ、塚原古墳群からは金環や鉄製品、三神三獣鏡や單竜透影環状把頭などの刀装具、土器などの副葬品が多く出土している<sup>⑥</sup>。塚原古墳群は7世紀初頭に衰退はじめめる。少し時代が下り、塚原古墳群のすぐ近くに桑原古墳群が造営された。最近実施された2005年度の桑原遺跡の調査では、阿武山古墳西側の安威川が大きくS字に蛇行する微高地で、小型円墳を中心とした24基以上の群集



第4図 周辺の遺跡

墳が検出されている。その種類は陶棺を伴うものや磚敷の小石室を持つものなどがあるが、中でも段ノ塚古墳（伝 舒明陵）や野口王墓古墳（伝 天武・持統合葬陵）と同じ八角形墳が確認されており、王族との関係が推測される。当地域の古墳は、7世紀後半に当地で最も標高が高い場所に造営された阿武山古墳（伝 藤原鎌足墓）を最後に姿を消す<sup>45</sup>。阿武山古墳は塙原古墳群・桑原古墳群を眼下に見下ろす位置にあり、それぞれ何らかの関係があったであろうことが推測される。そして文献などから、この時期以降も当地域は藤原氏の強い勢力下に置かれていたものと考えられる。

### 3. 飛鳥時代から平安時代の遺跡

古代律令期、三嶋郡は嶋上郡（現 高槻市）・嶋下郡（現 茨木市）・豊島郡（現 吹田市・豊中市）に編成され、それぞれに郡衙が置かれた。当遺跡は、嶋上郡と嶋下郡の境付近に位置しており、どちらに属していたかは不明である。

嶋上郡衙は、高槻市郡家から奈良時代の掘立柱建物群などの遺構や、井戸底から「上郡」と墨書きされた土師器甕が出土したことから<sup>46</sup>、この付近に嶋上郡衙跡（郡家本町遺跡・郡家川西遺跡・郡家今城遺跡）の存在する可能性が高い。これによって、1971年5月27日に「嶋上郡衙跡・寺院」として国の史跡に指定されている。一方の嶋下郡の郡衙は、現在にも残っている地名から茨木市の郡遺跡周辺と考えられているが、過去の調査で掘立柱建物も検出されてはいるものの、郡衙としての確証を得るには至っていない。

またこの時期には寺院の建立が活発となり、有力氏族の氏寺とされる太田廃寺・穂積廃寺・芥川廃寺が創建された。しかし寺院周辺から出土した瓦などから寺院跡を推定できるにとどまり、どれも正確な寺跡位置・伽藍配置などは不明である。太田廃寺は中臣太田連の氏寺とされ、塔心礎・舍利容器一式・飛鳥から奈良時代の忍冬唐草文軒瓦が出土している<sup>47</sup>。穂積廃寺は穂積臣の氏寺とされ、7世紀後半の蓮華文端丸瓦・重弧文端平瓦などが出土した<sup>48</sup>。芥川廃寺は、現 素盞鳴命神社境内付近にあったとされ、周辺から奈良時代前期の瓦や塑像片・相輪片が出土している。また芥川廃寺は嶋上郡衙に近い位置にあり、三嶋県主の氏寺と推測される<sup>49</sup>。

当遺跡は嶋上郡と嶋下郡の中間に位置し、この時期に成立したと思われる古代山陽道から南へ約1kmの距離、そしてごく近辺に安威川の水利があることから、古代交通の要所にあったと言えよう。実際、今回の調査地からは、7世紀から8世紀代の建物が80棟ほど検出されている。

奈良時代では、大蔵司遺跡において溝内から祭祀に用いられたと思われる人形や畜串・木簡、掘立柱建物や倉庫を伴う集落跡が検出されている<sup>50</sup>。太田茶臼山古墳の造営に伴い、太田廃寺とともに太田茶臼山古墳南部に集落を展開した太田遺跡は、その範囲をさらに南東側の總持寺北遺跡までその範囲を広げ三島丘台地上に広く展開したが、8世紀中頃に姿を消す。

平安時代になると、当地域一帯は藤原摶闇家の莊園となる。嶋上郡衙西隣の宮田遺跡では、平安初期の群集上横墓が154基検出され<sup>51</sup>、郡衙との関係が推測される。この時期になると先に挙げた古代寺院は衰退し、それに代わり、清和天皇に仕えていた藏人頭・藤原山陰が879年に安威川

東側において總持寺を創建し、のち西国三十三箇所巡礼靈場の第22番目の札所となる。最近の調査では、總持寺北遺跡で8世紀から10世紀代の建物が約100棟検出されている<sup>11)</sup>。今回の調査結果も含め、集落は太田遺跡・總持寺北遺跡・總持寺遺跡を含めた三島丘陵上に広範囲で展開し、大規模な集落を形成していったことが明らかとなった。三島地域における藤原氏の勢力は10世紀まで続いたものと推定され、嶋上郡衙も10世紀中頃に廃絶することから、藤原氏衰退と郡衙廃絶は何らかの関連性があるものと推定される。

#### 4. 中世の遺跡

中世になると藤原氏の勢力が衰え、春日大社・興福寺に荘園領主が移り、15世紀中頃までその支配が続く。この時期になると宮田遺跡<sup>12)</sup>や玉櫛遺跡<sup>13)</sup>で見られるような、周囲を堀や溝によって囲まれた、土塹墓や井戸を持つ中世集落が出現する。今回報告する当調査地においても同様に、溝や柵列で区画された屋敷地が確認された。当調査地は、現 總持寺を中心とした三島台地上に、宮田遺跡は西国街道南側に、玉櫛遺跡は元茨木川の東側に広がる沖積地にそれぞれ立地しており、この時期になると嶋上・嶋下郡内の各地で集落が広く展開されるようになる。そして各遺跡では、瓦器・土師器・東播系須恵器などが出土している。

(富田)

#### 《註》

- (1)『東奈良一東奈良土地區画整理事業に伴う発掘調査概要報告』茨木市教育委員会 2003
- (2)『倍賀遺跡発掘調査概要報告書』平成4年度発掘調査概要 茨木市教育委員会 1993
- (3)『耳原遺跡・五日市遺跡発掘調査報告書一中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う一』名神高速道路内遺跡調査会発掘調査報告書 第8輯 名神高速道路内遺跡調査会 1998
- (4)『太田遺跡発掘調査概要』茨木市教育委員会 1986
- (5)『太田遺跡発掘調査報告書一中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う一』名神高速道路内遺跡調査会発掘調査報告書 第7輯 名神高速道路内遺跡調査会 1998
- (6)『高槻市史』第6巻 考古編 高槻市 1973
- (7)『茨木市史』茨木市 1969
- (8)『高槻市史』第1巻 高槻市 1977
- (9)『大藏寺遺跡発掘調査概要一浦堂地区C地点の調査一』大阪府教育委員会 1981
- (10)『嶋上遺跡群 20』高槻市文化財調査概要 X X II 高槻市教育委員会 1996
- (11)『總持寺遺跡一住宅都市整備公団仮称茨木・三島丘地区住宅建設事業に伴う発掘調査一』(財)大阪府文化財調査センター 1998
- (12)『玉櫛遺跡 大阪府営玉櫛住宅建て替えに伴う発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第31集 (財)大阪府文化財調査研究センター 1998

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

調査地域は、東西約2km、南北約0.6kmを測る低位段丘上の南側に位置する。調査地域の西から南西側にかけては、比高差約7m前後を測る段丘崖が存在し、沖積段丘との境になっている。

調査地域周辺は、調査前には大半が宅地として利用され、標高は、20.2mから21.0mを測る比較的平坦な面を有している。

基本層序については、各地区毎に調査中に作成した土層断面図を参考に精査し、各地点ごとの標準的な土層堆積を抽出し、模式図的に図示した。(第5図)

以下、確認した遺構・遺物に基づく層序を上層から記述する。

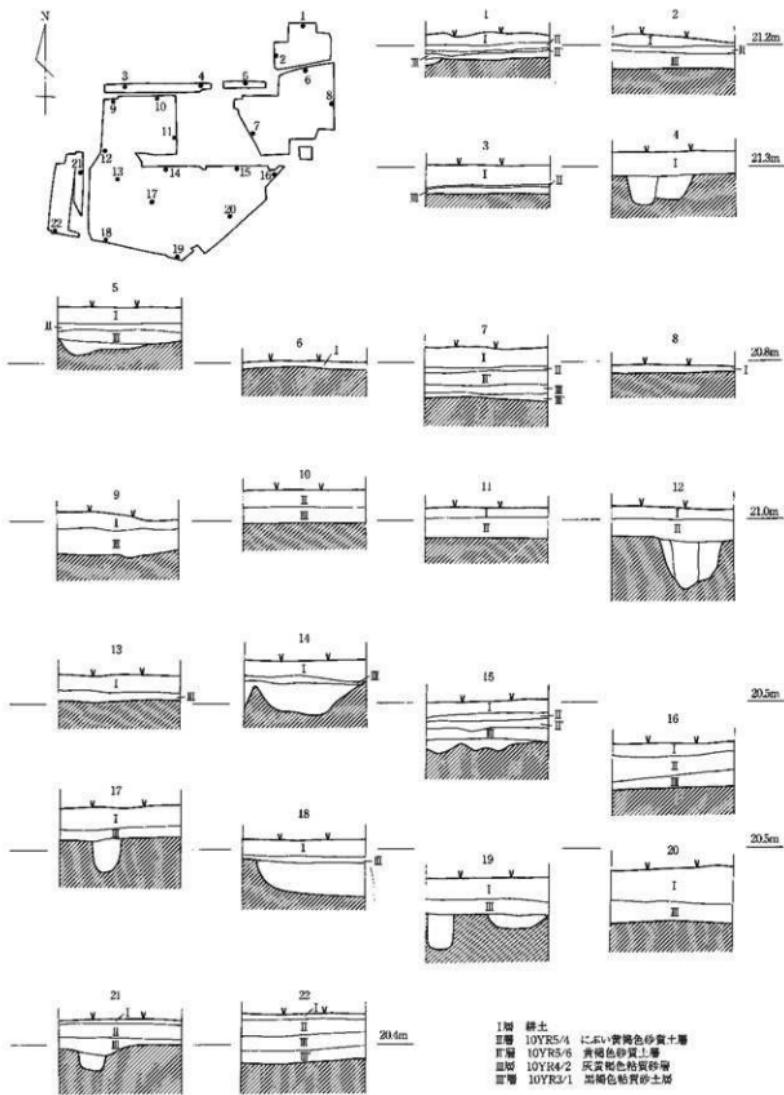
**第I層** 調査地区全域にわたって認められる最上層上で、本府営住宅建設直前までの耕作土である。住宅敷地内では現代まで庭などに利用され、敷地内の道路下では住宅建設前の耕作土として観察される。地点によって多少は色調が異なるが、灰白色砂質土を基本とする。層厚は、0.1mから0.3mを測る。

**第II層・第III層** にぶい黄褐色砂質土ないしは黄褐色砂質土を基本とする層で、上層に存在する耕作土の床上である。調査地域により若干の土質、色調の違いが認められる。部分的に複数に分層できる箇所、存在しない区域もある。層厚は、大半は0.1m前後を測るが、0.2mの地点もある。近世以降の遺物を若干含む。

**第III層** 灰黄褐色粘質砂土を基本とする層で、調査地域により若干の土質、色調の変化が認められるものの、中世を中心にそれ以前の遺物を多く包含する。ほぼ調査地域全域に広がるが、地山の標高が高い地域を中心に削平を受け、存在しない地区もある。層厚0.05mから0.2mを測る。

**第III'層** 黒褐色粘質砂土を基本とする層で、B、C、J地区において標高の低い地域で部分的に認められる。奈良・平安時代を中心にそれ以前の遺物を包含し、上面から中世の遺構が掘り込まれている。層厚0.05mから0.2mを測る。

**地 山** 検出した遺構は、第III層上面より検出した。それ以下の層には全く、遺構・遺物が検出しなかったことから本遺跡の地山であると判断した。本遺跡は、地形分類上下位段丘に位置し、基本的に地山は、赤褐色ないしは黄褐色を呈する粘質土の洪積層であるが、部分的に拳大以上の礫を多量に含む段丘礫層が顔を覗かせている。  
(奥)



第5図 基本層序図

## 第2節 古墳時代後期の遺構と遺物

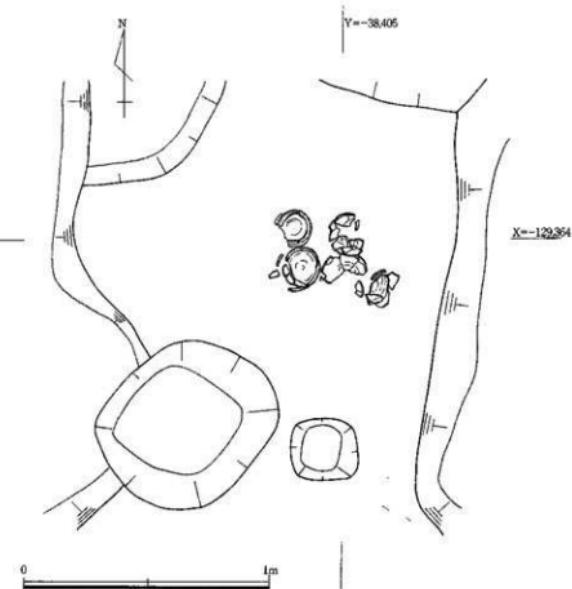
### 1. 概要

弥生時代後期から中世まで連綿と続く遺跡群である總持寺遺跡の中では、最も遺構が少ない時期である。検出した主な遺構は、土坑、土器溜りである。

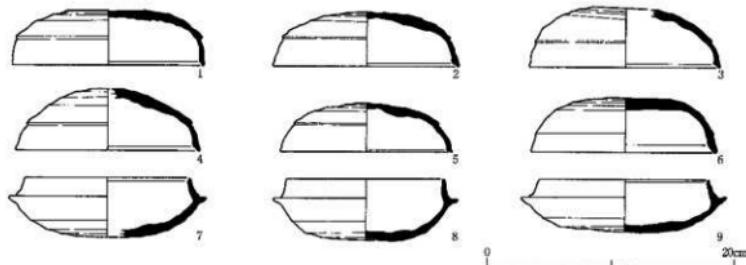
### 2. 遺構

A4438土器溜（第6図） A地区の西側中央付近X = -129,364、Y = -38,405付近で検出した。地山直上から須恵器坏 蓋（6個体）、須恵器 坏身（3個体）が集中して出土した（第7図、図版26-1）が、それと伴う遺構は全く検出されなかった。時期は、出土遺物から6世紀前半と推定される。集中して出土していることから祭祀に伴う遺物と考えているが、不明な点が多い。

D2649土坑（第8図） D地区の西北側、X = -129,755、Y = -38,132付近で検出した土坑である。土坑は、



第6図 A4438土器溜り遺物出土状況図



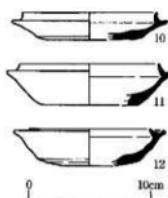
第7図 A4438土器溜り出土遺物

平面形では、平行四辺形に近い形を呈し、長辺約2.1m、短辺約1.7m、深さ約0.1mを測る。土坑のほぼ中央付近から須恵器壺蓋（4個体）、須恵器壺身（7個体）が集中して出土している（第9図、図版25-8・9）。

出土遺物が須恵器壺のみであるため祭祀に伴う遺構の可能性がある。

これらの他に、C454土坑（第10図）、C469溝（第11図）より古墳時代末期の遺物が出土している。

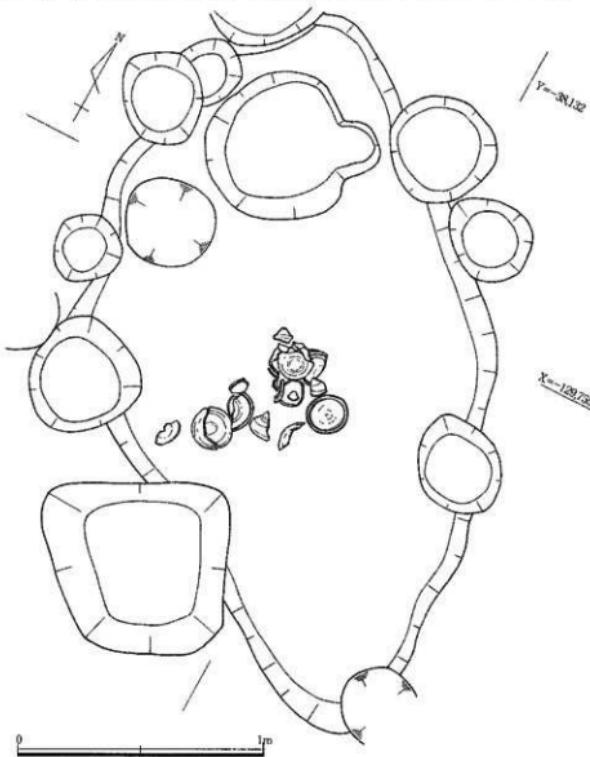
（奥）



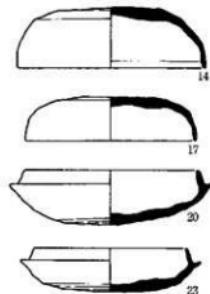
第9図 D2649土坑出土遺物



第10図 C454土坑出土遺物



第8図 D2649土坑遺物出土状況図



第11図 C469溝出土遺物

### 第3節 古代の遺構と遺物

#### 1. 概要

古代の遺構は、主に調査地の南端部付近とK地区を除く範囲に広がっており、飛鳥時代から平安時代にかけての多くの遺構や遺物を検出した。検出した遺構は、住居跡9棟、建物82棟、土坑多数、溝多数、落ち込み1ヵ所、井戸2基などである（第12図）。

古代の建物については、古墳を避けて建てられているものと、古墳を人為的に削平、もしくは自然的に消失した後に建てられているものが認められた。これらについては本書の考案の章で記述しているが、建物の方位、出土遺物などを検討した結果、各建物の主軸方位によって時期差が存在することが明らかとなった。また、一般的な建物と縦柱建物の配置については、築造場所を特に区別し、選別した状況は認められなかった。また建物の柱穴は、方形を呈する柱穴を持つ建物が多くを占めている。

#### 2. B・C・D・E・F地区の調査

##### a. 概要

B・C・D・E・F地区にかけて東西約136m、南北約86mの範囲に存在する。多くの遺構を検出し、本書に掲載した遺構は、住居跡4棟、建物35棟（内、縦柱建物が7棟、持柱建物が1棟）、柱穴2基、土坑6基、落ち込み1ヵ所、井戸1基、溝3本（内、1本は古墳周溝）などである（第12図、図版1-1、2-1）。

包含層からは、須恵器壺蓋、須恵器壺身、須恵器並、須恵器壺蓋、土師器椀、土師器甕など、多くの遺物を出土し、残存状態の良いもの約50点を図化した（第13図）。

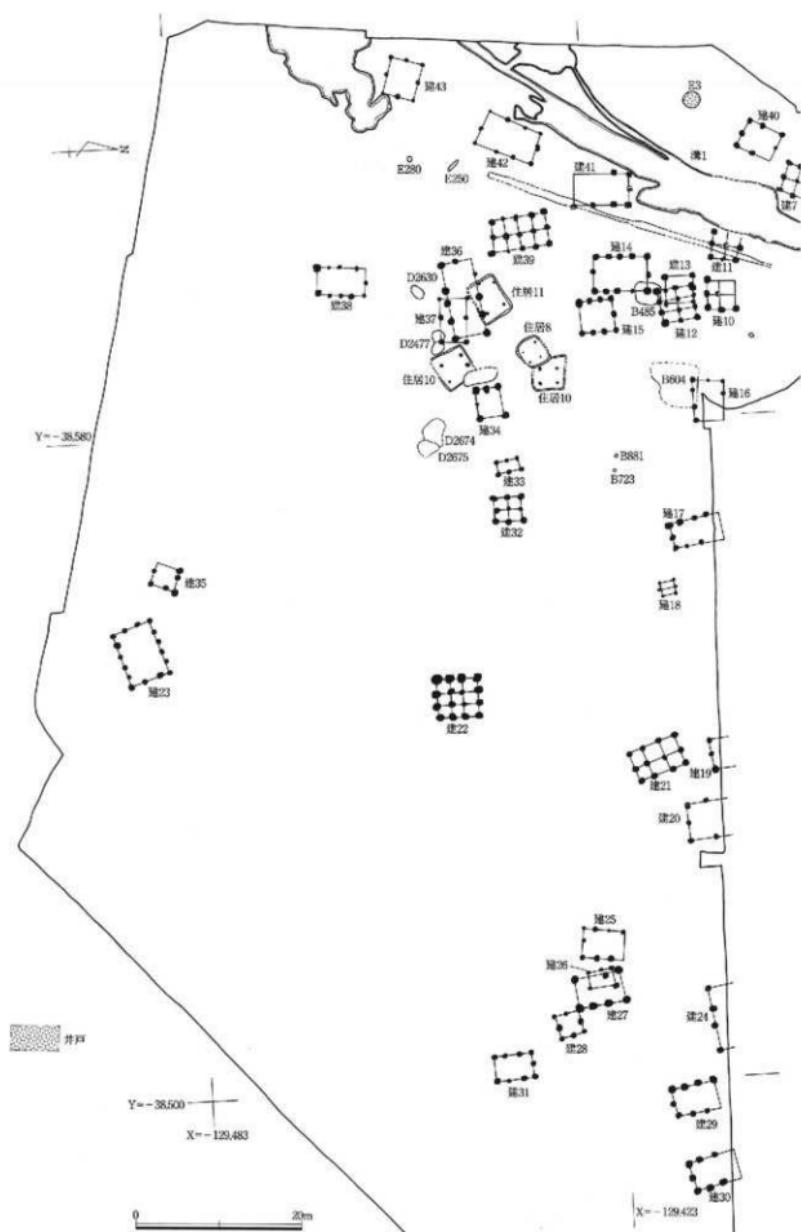
住居は、調査地区の西側を流れる溝1の付近に集中しており、溝1から離れたB地区東側やD地区東側、C地区においては検出していない。検出した住居は、全て平面形が方形を呈しており、住居の四隅付近に円形の柱穴を伴うものである。

特に建物については、当調査区は、前述した「古墳を避けるように建物が建てられている」状況が顕著に見られる地区である。また建物は、その多くが主に古墳密集地域の縁辺（北側）を沿うようにして建てられており、古墳密集地域の隙間においてもわずかに見られるが、古墳密集地域の内側（南側）では、古墳の数が少ないにもかかわらず、建物は2棟しか検出されていない。

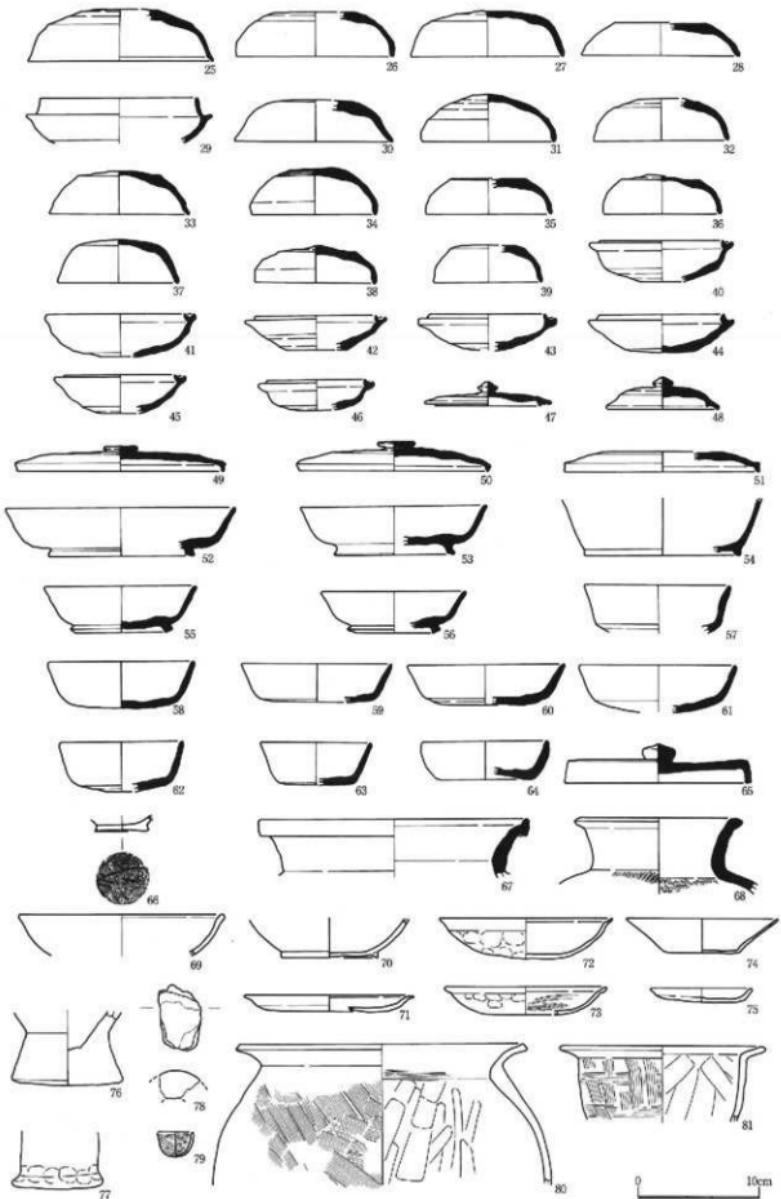
##### b. 住居跡

D地区の北西側に集中して4棟が検出されている。住居跡は、平面形が方形に近いものがほとんどであった。住居の一辺は、それぞれ4.0m前後を測る。

住居8・9（第14図・図版3-2） D地区の北側で、2基の住居が切りあっている状態で検出した。住居8がX=-129,440、Y=-38,389、住居9がX=-129,438、Y=-38,386付近に位置する。住居8の南辺と北辺、住居9の西辺北部分と北辺西部分は地山が削平を受けたものと推定され、欠失している。平面・断面観察の結果、住居9が住居8に時期的に先行する。



第12図 B・C・D・E・F地区古代遺構配置図



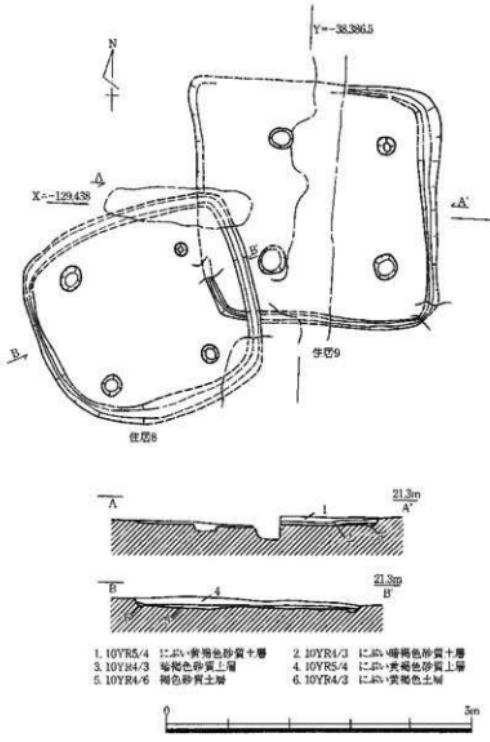
第13図 B·C·D地区包含層出土遺物

柱穴の検出状況から住居8は、東西辺約3.6m、南北辺約3.5m、住居9は、東西辺約4.0m、南北辺約4.2mと推定される。壁溝は、住居8では幅0.15m前後、深さ0.12m前後の壁溝が東西辺に、住居9では幅0.18m前後、深さ0.12m前後の壁溝が東辺と南辺と北辺の一部で検出した。柱穴はそれぞれ4個づつ検出され、住居8は径0.22m前後、深さ0.1m前後、住居9は径0.4m前後、深さ0.1m前後を測る。竈は、地山面が削平を受けたためともに欠失している。

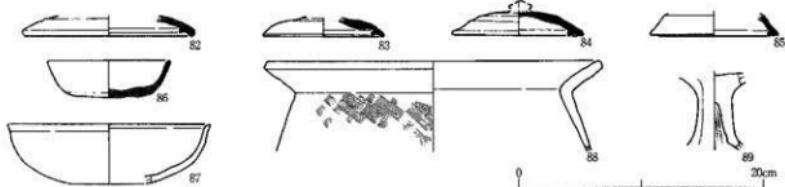
住居に伴う遺物は、住居8から  
は須恵器壺蓋、土師器壺、住居9  
からは須恵器壺蓋、須恵器壺身、  
土師器壺、土師器甕、弥生土器高  
壺が出土した（第15図、図版26—  
8）。これらの遺物から住居跡の  
時期は飛鳥時代と推定される。

**住居10（第16図・図版3-1）**  
D地区において、中央やや北X  
 $= -129,450$ 、Y  $= -38,087$ 付近  
で検出した。住居の北角と南角部  
分は削平を受けており、欠失して  
いる。柱穴の検出状況から、東西  
辺約4.2m、南北辺約4.6mを計る。  
幅0.2m前後、深さ0.1m前後の  
壁溝が住居内側を巡る。柱穴は4  
個検出され、径0.3m前後、深さ  
0.15m前後を測る。住居に伴う遺  
物は、出土しなかった。

**住居11（第17図）** D地区の北  
部やや西 X  $= -129,445$ 、Y  $=$   
38,395付近で検出した。住居の



第14図 住居8・9平面・断面図



第15図 住居9出土遺物

北・西辺の一部と南辺の大半は、削平を受けており欠失している。柱穴の検出状況から、東西辺約3.8m、南北辺約5.1mを測る。住居跡の壁面に沿って、幅0.4m前後、深さ0.15m前後の櫻溝が住居内側を巡る。柱穴は南部を除き3個検出したが、南隅の柱穴は検出しなかった。柱穴は、径0.3m前後、深さ0.25m前後を測る。住居に伴う遺物は、出土しなかった。

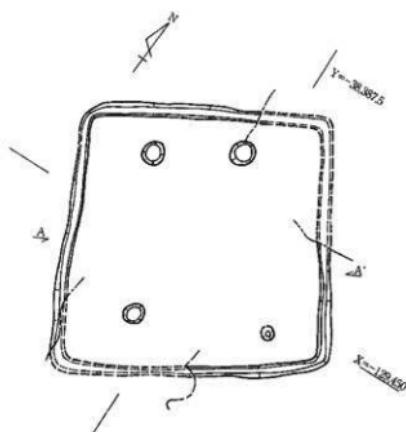
### c. 建物

B・C・D・E・F地区で検出した古代の建物は35棟で、その内純柱建物は7棟である。検出した柱穴の形状は、平面形では方形を呈するものがほとんどであった。

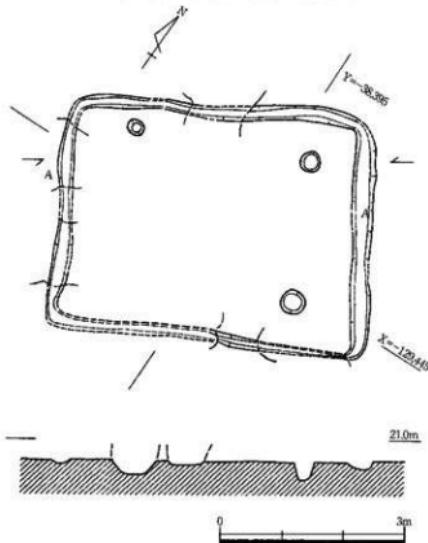
**建物7（第18図、図版5-4）** A地区とF地区的境に存在し、柱穴がほぼ整然と並んだ2間×2間の純柱建物である。建物は、梁間約3.5m、桁行約3.9m、柱間寸法は1.66mから2.10mを測る。主軸方向はN-19°-Eを示す。

**建物10（第19図）** F地区的北西端に存在し、近世の削平により中央と北辺・西辺の一部の柱穴を欠く。建物は、2間×2間の純柱建物で、梁間約3.6m、桁行約4.0m、柱間寸法は1.40mから2.05mを測る。主軸方向はN-5°-Eを示す。

**建物11（第20図、図版3-8）** F地区的中央付近に存在し、北側の柱穴のほとんどが近世の削平により欠失している。建物は、2間×2間の純柱建



第18図 住居10平面・断面図



第19図 住居11平面・断面図

物で、梁間約3.1m、桁行約3.3m、柱間寸法は1.46mから1.75mを測る。主軸方向はN-11°-Eを示す。

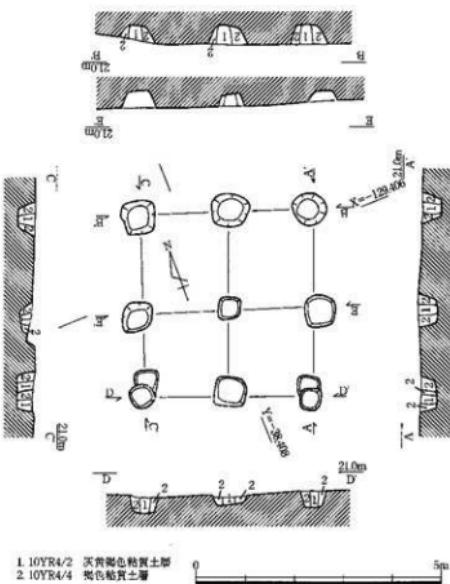
**建物12（第21図、図版1-2）** B地区北西角に存在し、柱穴が整然と並んだ2間×3間の総柱建物である。建物は、梁間約4.1m、桁行約4.1m、柱間寸法は1.32mから2.10mを測る。主軸方向はN-9°-Wを示す。

**建物13（第22図）** B地区に存在し、建物12と重なる位置で、正方形を呈する1間×2間の建物である。建物は、梁間約3.3m、桁行約3.3m、柱間寸法は1.62mから3.30mを測る。主軸方向は真北を示す。

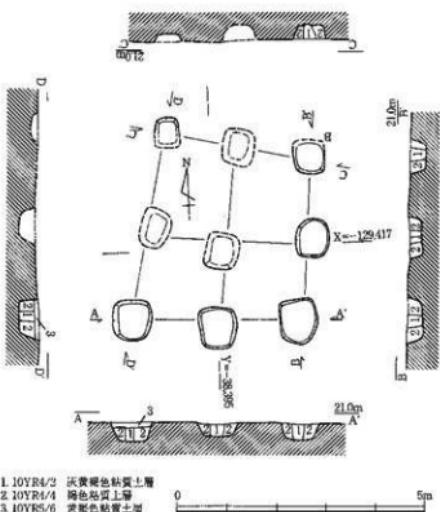
**建物14（第23図、図版1-3）** B地区西端に存在し、柱穴が整然と並んだ2間×4間の建物である。建物は、梁間約4.2m、桁行約6.3m、柱間寸法は1.32mから2.42mを測る。主軸方向はN-4°-Eを示す。

**建物15（第25図、図版1-4）** B地区西部に存在し、ほぼ正方形を呈する建物である。建物北辺の梁間は2間であるが、南辺は攪乱で削平を受けており1間である。建物は、梁間約3.9m、桁行約4.1m、柱間寸法は1.28mから4.06mを測る。主軸方向はN-1°-Wを示す。

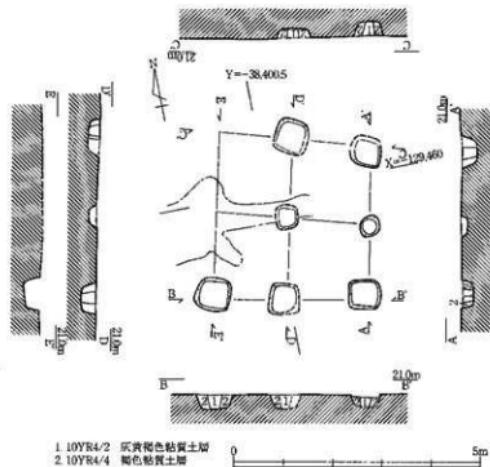
**建物16（第24図）** B・F地区に存在し、2間×3間の建物である。建物の北東部の柱穴は、調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約3.8m、桁行約5.2m、柱間寸法は1.35mから



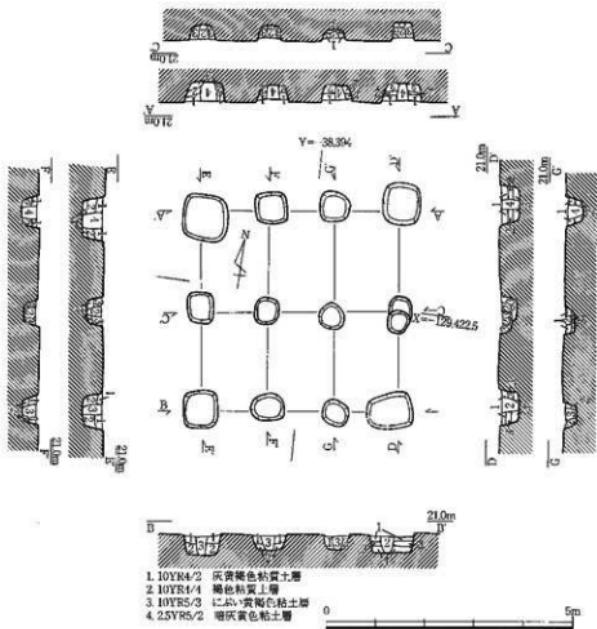
第18図 建物7平面・断面図



第19図 建物10平面・断面図



第20図 建物11平面・断面図



第21図 建物12平面・断面図

1.82mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

**建物17** (第27図、図版1-5) B地区北端部に存在し、2間×3間以上の建物である。建物の北辺は、調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約3.0m、桁行約4.7m以上、柱間寸法は1.35mから1.82mを測る。主軸方向はN-13°-Wを示す。

**建物18** (第29図、図版1-6) B地区北側に存在し、正方形を呈する、1間×1間の棟持柱建物である。建物は、梁間約1.8m、桁行約1.7m、柱間寸法は1.7mから1.8mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

**建物19** (第26図) B地区東部北端に

存在し、梁間が2間の建物である。建物

の桁は、調査区外にあるため不明である。

建物は、梁間約3.8m、柱間寸法は1.75mから2.05mを測る。主軸方向はN-8°-Wを示す。

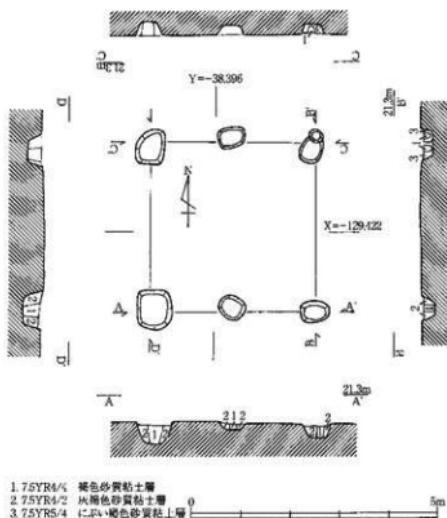
**建物20** (第28図) B地区北東角に存在し、梁間が2間、桁行が1間以上の建物である。建物の北部分は調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約4.5m、桁行約4.0m以上、柱間寸法は2.05mから2.96mを測る。主軸方向はN-5°-Wを示す。

**建物21** (第31図、図版1-7) B地

区北東部に存在し、平面形が整然とした

長方形を呈する2間×3間の総柱建物で

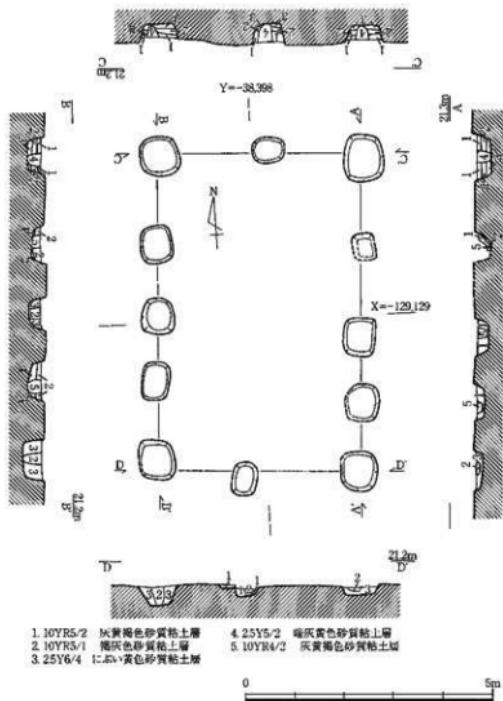
ある。建物中央の2つの柱穴は、やや列



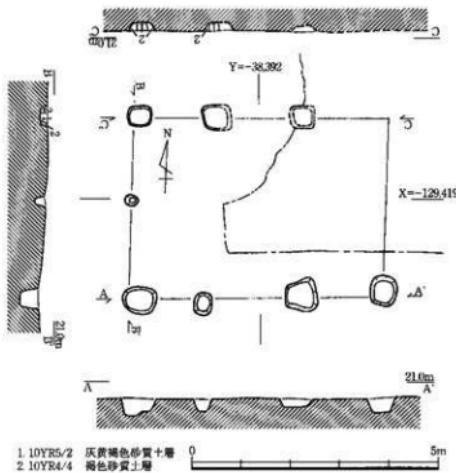
第22図 建物13平面・断面図

番号	施設名	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 柱 状 況	柱穴(m)			柱 底 高 (m)	方位	備考
		間 (m)	間 (m)	幅 (m)	短-長	X	Y	最小 幅-長	最大 幅-長		深 度	深 度	底 底 高 (m)			
7	A-F	2	3.5	2	3.9	1.66-2.10	-129.752	-38.408	○ 方	0.45-0.68	0.42-0.74	0.40	0.20	0.32	N-13°-E	
10	F	2	3.6	2	4.0	1.49-2.03	-129.417	-38.395	○ 方	0.64-0.95	0.52-0.80	0.40	0.15	0.28	N-8°-E	
11	F	2	3.3	2	3.3	1.46-1.75	-129.460	-38.400	○ 方	0.44-0.74	0.40-0.74	0.30	0.16	0.30	N-11°-E	
12	B	2	4.1	3	4.1	1.32-2.10	-129.422	-38.394	○ 方	0.45-0.95	0.44-0.95	0.48	0.22	0.34	N-9°-W	
13	B	1	3.3	2	3.3	1.62-3.30	-129.422	-38.396	○ 方	0.28-0.82	0.28-0.70	0.46	0.14	0.30	N	
14	B	2	4.2	4	6.3	1.32-2.42	-129.129	-38.398	○ 方	0.54-0.98	0.45-0.78	0.44	0.06	0.30	N-4°-E	
15	B	2	3.9	3	4.1	1.28-4.05	-129.432	-38.393	○ 方	0.60-0.82	0.60-0.96	0.56	0.36	0.30	N-1°-W	
16	B-F	3	3.8	3	3.2	1.50-2.00	-128.419	-38.392	○ 方	0.22-0.62	0.26-0.88	0.44	0.12	0.22	N-2°-W	
17	B	2	3.0	3	4.7以上	1.35-1.82	-129.422	-38.366	○ 方	0.46-0.90	0.46-0.70	0.60	0.34	0.34	N-13°-W	
18	B	2	1.8	1	1.7	1.70-1.80	-129.425	-38.329	○ 方	0.28-0.46	0.32-0.42	0.28	0.15	0.20	N-7°-W	棟持柱
19	B	1	3.8		1.2以上	1.75-2.05	-129.420	-38.330	○ 方	0.46-0.80	0.55-0.78	0.48	0.25		N-8°-W	
20	B	2	4.5	1.8以上	4.0以上	2.05-2.96	-129.422	-38.305	○ 方	0.44-0.52	0.40-0.50	0.38	0.16		N-5°-W	

表1 古代建物計測値表1



第23図 建物14平面・断面図



第24図 建物16平面・断面図

より外れる。建物は、梁間約3.8m、桁行約5.9m、柱間寸法は1.70mから2.40mを測る。主軸方向はN-20°-Wを示す。

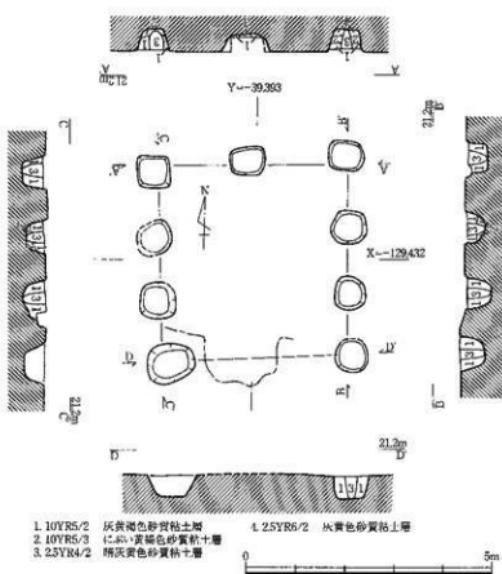
#### 建物22（第30図、図版2-2）

B地区中央に存在し、ほぼ正方形を呈する3間×3間の総柱建物である。建物各辺の柱穴に比べ、建物内にある柱穴はやや小さい。建物は、梁間約4.3m、桁行約5.1m、柱間寸法は1.40mから1.98mを測る。主軸方向はN-1°-Wを示す。

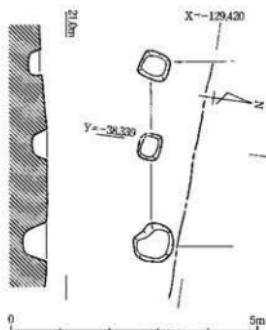
#### 建物23（第32図、図版2-3）

B地区南部に存在し、整然とした長方形を呈する、3間×5間の建物である。建物は、梁間約4.8m、桁行約6.8m、柱間寸法は1.25mから1.90mを測る。主軸方向はN-19°-Wを示す。

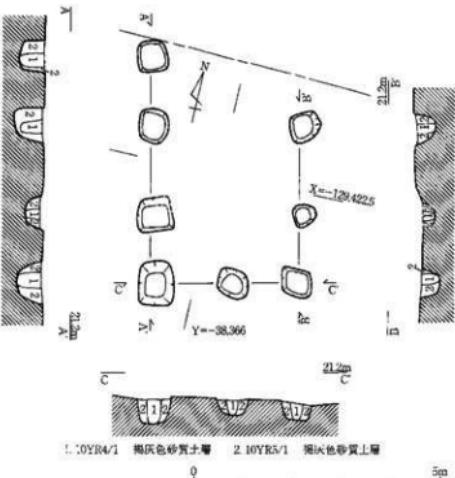
**建物24（第33図）** C地区北端に存在し、桁行が3間の建物である。建物の梁は、調査区外



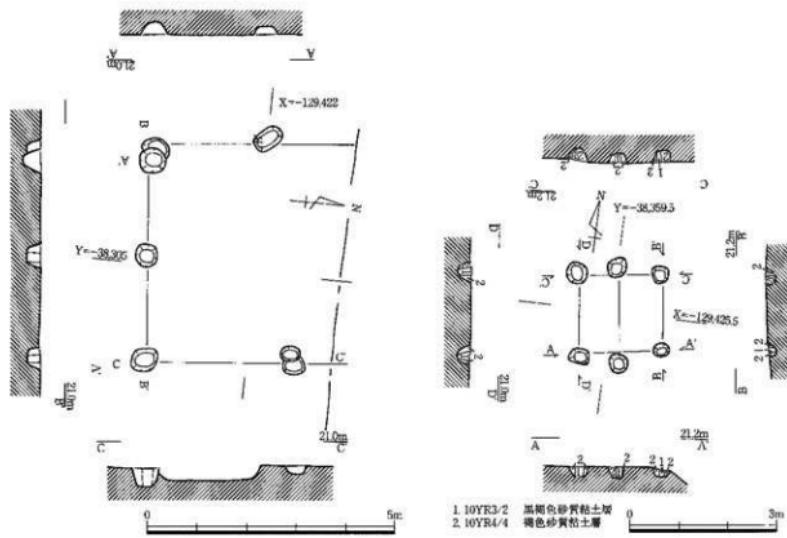
第25図 建物15平面・断面図



第26図 建物19平面・断面図

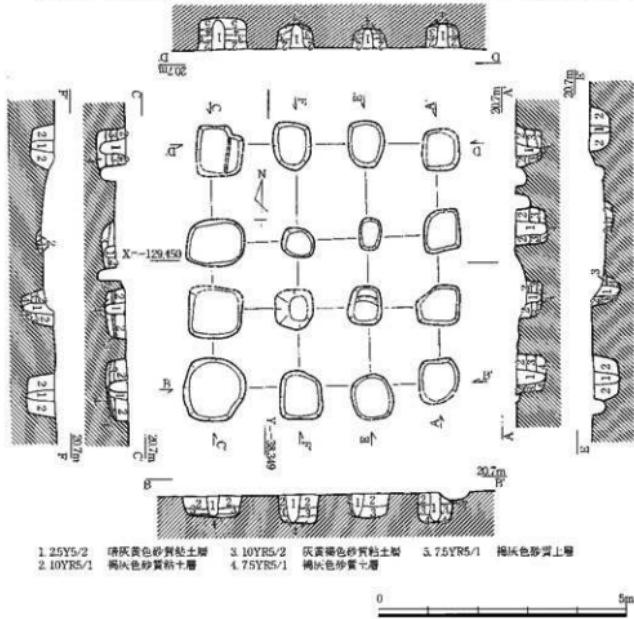


第27図 建物17平面・断面図

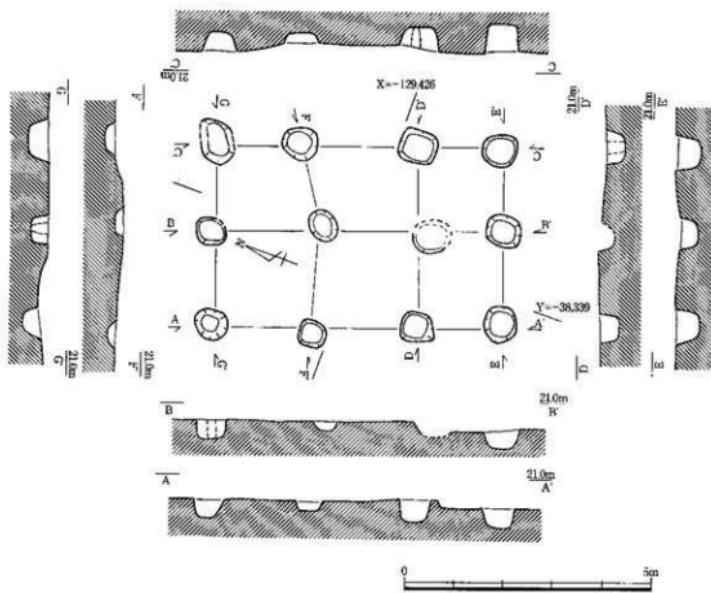


第28図 建物20平面・断面図

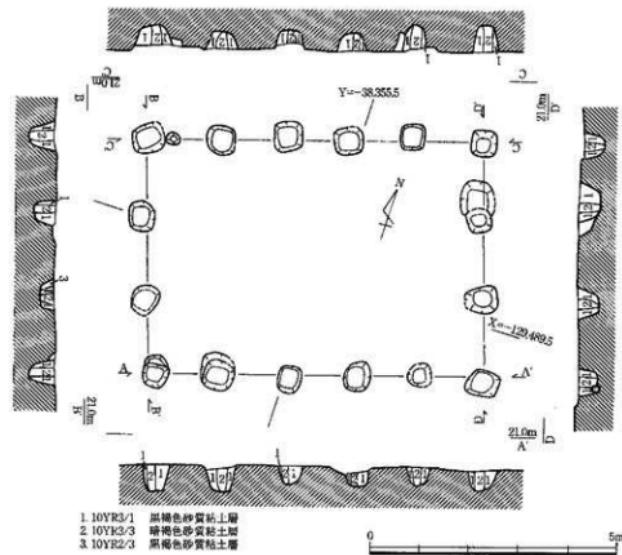
第29図 建物18平面・断面図



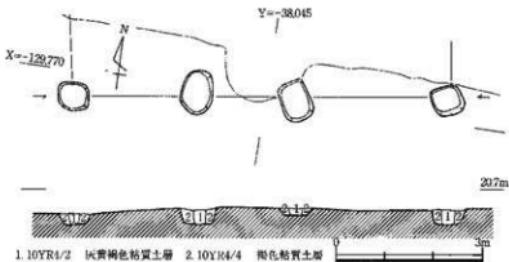
第30図 建物22平面・断面図



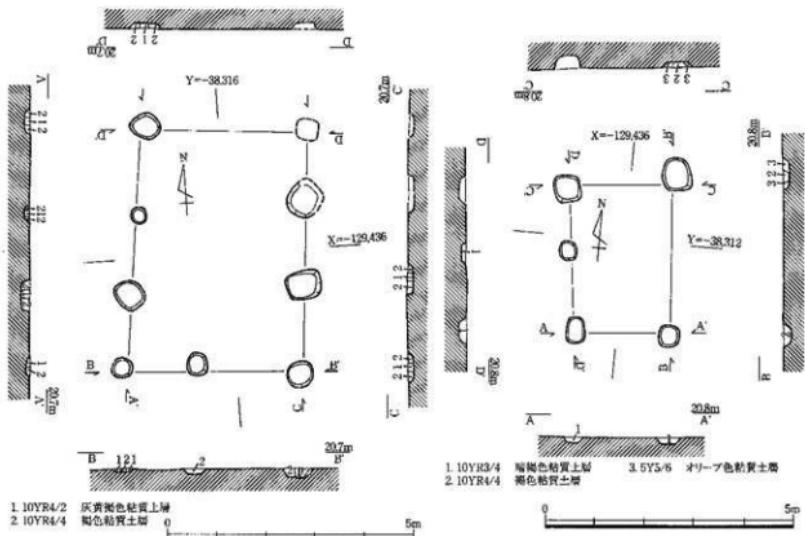
第31図 建物21平面・断面図



第32図 建物23平面・断面図



第33図 建物24平面・断面図

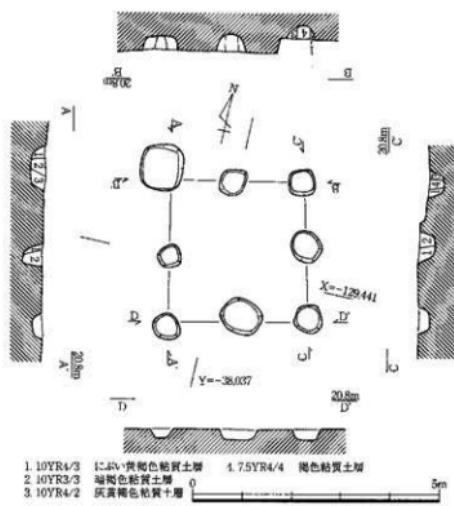


第34図 建物25平面・断面図

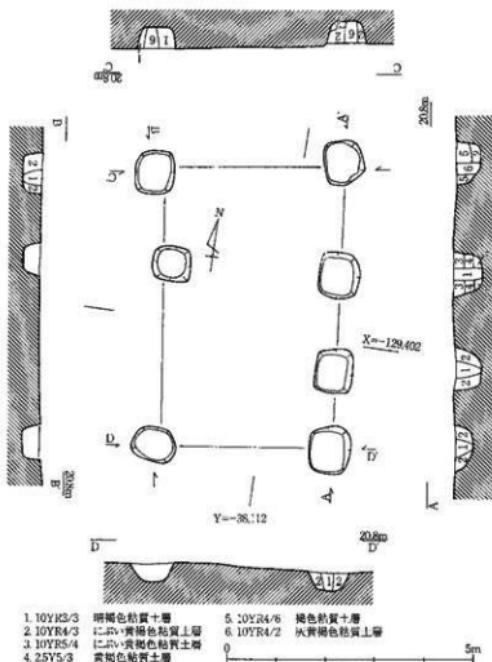
第35図 建物26平面・断面図

番号	地区	渠間		桁行		柱 柱 高 (m)	位置		柱 柱 形状	柱穴 (m)			柱 柱 高 (m)	方位	備考
		間	(m)	間	(m)		幅~長	X		幅~長	幅~長	深さ			
21	B	2	3.8	3	5.9	1.70~2.40	-129.426	-38.339	方	0.56~0.80	0.56~0.90	0.60	0.20	0.24	N-20°-W
22	B	3	4.3	3	5.1	1.40~1.98	-129.451	-38.349	○方	0.60~1.30	0.44~1.26	0.66	0.38	0.10	N-1°-W
23	B	3	4.8	5	6.8	1.25~1.90	-129.489	-38.355	○方	0.50~0.72	0.46~0.70	0.56	0.28	0.24	N-19°-W
24	C	1以上、1.5以上	3	7.7	1.96~3.20	-129.770	-38.045	○方	0.60~0.92	0.60~0.65	0.34	0.14	0.28	N-10°-W	
25	C	2	3.6	3	5.0	1.44~3.38	-129.436	-38.316	○方	0.34~0.82	0.32~0.76	0.20	0.08	0.18	N-7°-E
26	C	1	1.9	2	3.1	1.34~3.00	-129.436	-38.312	○方	0.40~0.68	0.36~0.58	0.28	0.08	0.30	N-7°-W
27	C	1	3.5	3	4.8	1.60~4.00	-129.437	-38.307	○方	0.72~0.98	0.76~0.90	0.60	0.34	0.40	N-7°-W
28	C	2	2.9	2	2.9	1.22~1.56	-129.441	-38.307	○方	0.46~0.96	0.48~0.86	0.45	0.20	0.48	N-14°-W
29	C	2	3.3	3	5.0	1.48~1.90	-129.425	-38.296	○方	0.56~0.88	0.60~0.78	0.56	0.14	0.30	N-10°-W
30	C	2	3.3	2	3.5	1.42~1.90	-129.425	-38.287	○方	0.58~0.82	0.54~0.84	0.48	0.12	0.34	N-14°-W
31	C	2	3.0	3	4.6	1.28~1.84	-129.448	-38.302	○方	0.44~0.74	0.44~0.68	0.40	0.10	0.32	N-2°-W
32	D	2	2.9	2	3.3	0.94~1.98	-129.444	-38.370	○方	0.46~0.86	0.40~0.82	0.44	0.18	0.30	N

表2 B・C・D地区古代建物計測値表



第36図 建物28平面・断面図



第37図 建物27平面・断面図

にあるため不明である。建物は、桁行約7.7m、柱間寸法は1.96mから3.20mを測る。主軸方向はN-10°-Wを示す。

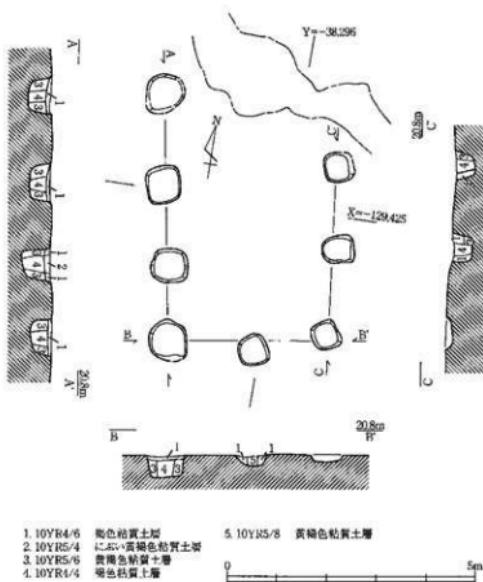
**建物25 (第34図、図版2-4)**  
C地区北西部に存在し、長方形を呈する2間×3間の建物である。建物の北辺中央の柱穴は、検出されていない。建物は、梁間約3.6m、桁行約5.0m、柱間寸法は1.44mから3.38mを測る。主軸方向はN-7°-Eを示す。

**建物26 (第35図、図版2-4)**  
C地区中央部に存在し、長方形を呈する1間×2間の建物である。建物の東辺中央の柱穴は、検出されていない。建物は、梁間約1.9m、桁行約3.1m、柱間寸法は1.34mから3.05mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

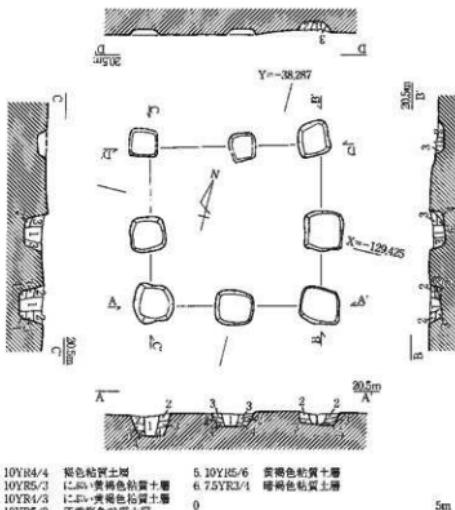
**建物27 (第37図、図版2-4)**  
C地区中央部で、建物26とほぼ同じ位置に存在し、長方形を呈する1間×3間の建物である。建物の西辺中央南側の柱穴は見つかっていない。建物は、梁間約3.5m、桁行約4.8m、柱間寸法は1.60mから4.00mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

**建物28 (第36図、図版2-5)**  
C地区中央部に存在し、正方形を呈する2間×2間の建物である。建物は、梁間約2.9m、桁行約2.9m、柱間寸法は1.22mから1.56mを測る。主軸方向はN-14°-Wを示す。

**建物29 (第38図) C地区北部に**



第38図 建物29平面・断面図



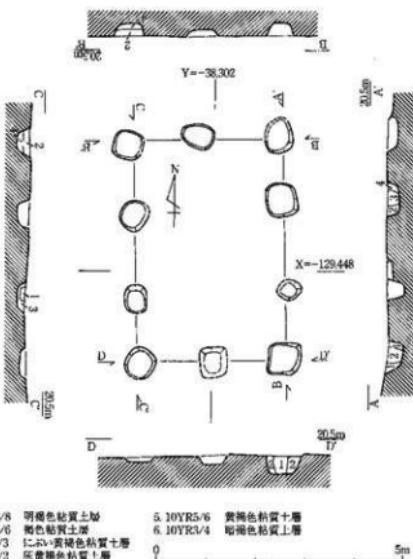
第39図 建物30平面・断面図

存在し、長方形を呈する2間×3間の建物である。建物の北辺中央と北角の柱穴は攪乱によって削平を受けているため不明である。建物は、梁間約3.3m、桁行約5.0m、柱間寸法は1.48mから1.90mを測る。主軸方向はN-10°-Wを示す。

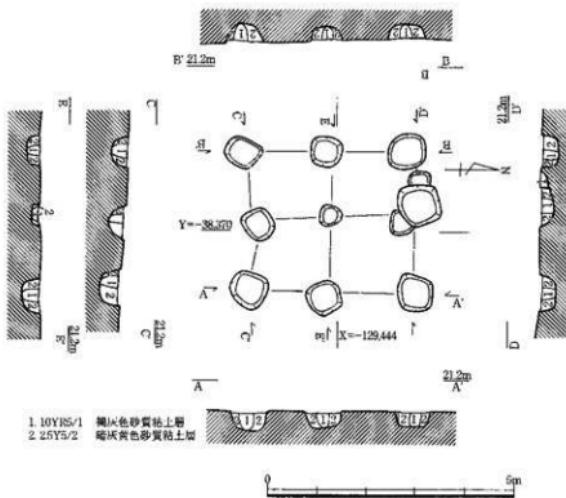
**建物30（第39図、図版2-6）** C地区北東部に存在し、整然とした正方形を呈する2間×2間の建物である。建物は、梁間約3.3m、桁行約3.5m、柱間寸法は1.42mから1.90mを測る。主軸方向はN-14°-Wを示す。

**建物31（第40図、図版2-7）** C地区中央部に存在し、整然とした長方形を呈する2間×3間の建物である。建物は、梁間約3.0m、桁行約4.6m、柱間寸法は1.28mから1.84mを測る。主軸方向はN-2°-Wを示す。

**建物32（第41図）** D地区北東部に存在



第40図 建物31平面・断面図

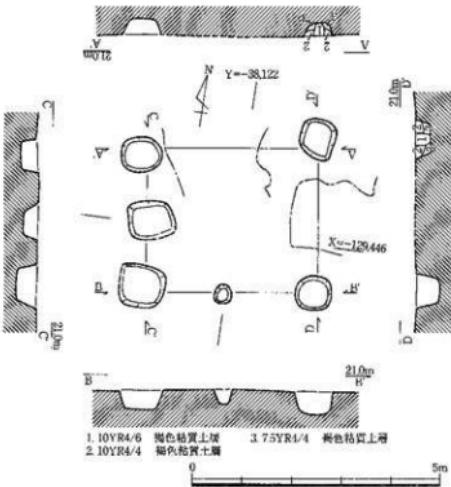


第41図 建物32平面・断面図

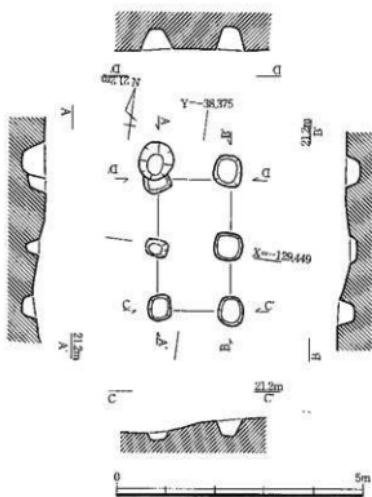
し、ほぼ正方形を呈する2間×2間の総柱建物である。建物は、梁間約2.9m、桁行約3.3m、柱間寸法は0.94mから1.98mを測る。主軸方向は真北を示す。

**建物33(第43図)** D地区北東部に存在し、長方形を呈する1間×2間の小型建物である。建物は、梁間約1.5m、桁行約2.7m、柱間寸法は1.30mから1.48mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

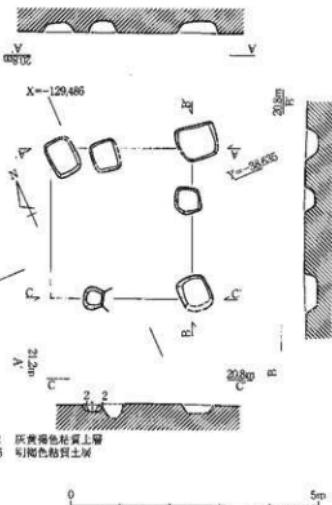
**建物34(第42図)** D地区北部に存在し、正方形に近い形を呈する2間×2間の建物である。建物の北辺・東辺中央の柱穴は、攪乱によって削平を受けているため不明である。建物は、梁間約2.9m、桁行約3.7m、柱間寸法は1.46mから1.48mを測る。主軸方向はN-8°-Wを示す。



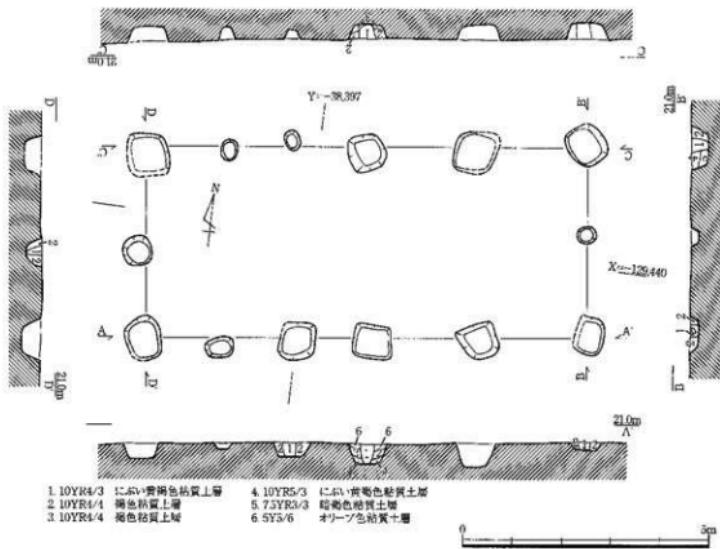
第42図 建物34平面・断面図



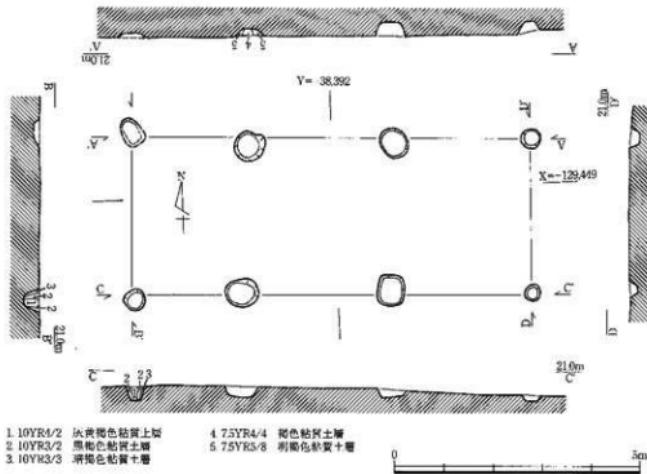
第43図 建物33平面・断面図



第44図 建物35平面・断面図



第45図 建物36平面・断面図



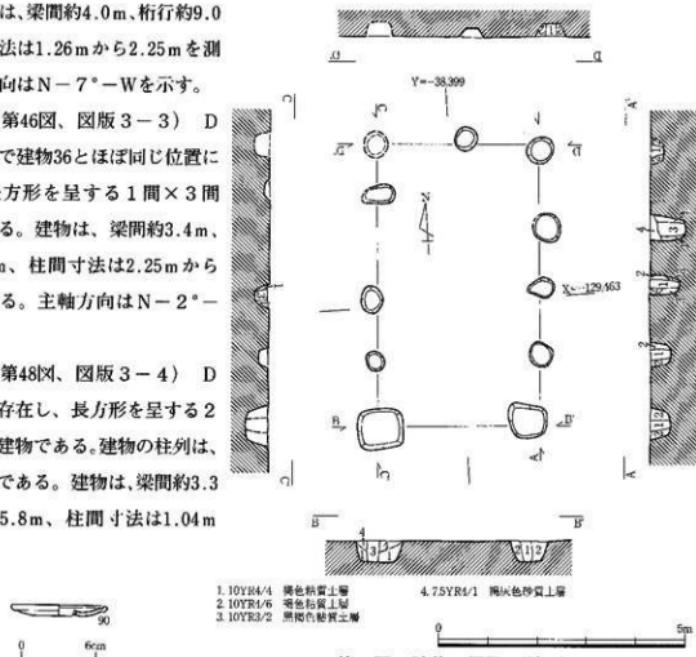
第46図 建物37平面・断面図

**建物35** (第44図) D地区南東部に存在し、柱穴がやや不整列な2間×2間の建物である。建物の西辺中央と南西角の柱穴は検出されていない。建物は、梁間約2.9m、桁行約3.1m、柱間寸法は1.12mから2.04mを測る。主軸方向はN-24°-Eを示す。

**建物36** (第45図、図版3-3) D地区北西部に存在し、長方形を呈する2間×5間の建物である。柱穴の形は、それぞれ不揃いである。建物は、梁間約4.0m、桁行約9.0m、柱間寸法は1.26mから2.25mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

**建物37** (第46図、図版3-3) D地区北西部で建物36とほぼ同じ位置に存在し、長方形を呈する1間×3間の建物である。建物は、梁間約3.4m、桁行約8.1m、柱間寸法は2.25mから3.25mを測る。主軸方向はN-2°-Wを示す。

**建物38** (第48図、図版3-4) D地区西部に存在し、長方形を呈する2間×4間の建物である。建物の柱列は、やや不揃いである。建物は、梁間約3.3m、桁行約5.8m、柱間寸法は1.04m



第48図 建物38平面・断面図

第47図 建物38出土遺物 D1524 (90)

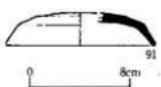
番号	施設	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 径 寸 法	柱穴 (mm)			柱 高 (m)	方位	備考
		間 間	(m)	間 間	(m)	短-長	(m)	X	Y		短-長	短-長	深さ 浅			
33	B	1	1.5	2	2.7	1.30~1.48	-129.449	-38.375	方	0.36~0.78	0.45~0.70	0.50	0.25		N-7°-W	
34	B	2	2.29	2	3.7	1.46~3.50	-129.416	-38.383	○ 方	0.40~0.88	0.34~0.94	0.48	2.60	0.25	N-8°-W	
35	D	2	2.9	2	3.1	1.12~2.04	-129.486	-38.635	○ 方	0.46~0.85	0.40~0.82	0.30	0.14	0.22	N-24°-E	
36	D	2	4.0	5	9.0	1.36~2.25	-129.440	-38.397	○ 方	0.35~0.94	0.32~0.90	0.50	0.12	0.35	N-7°-W	
37	D	1	3.4	3	8.1	2.25~3.25	-129.449	-38.392	○ 方	0.34~0.64	0.32~0.70	0.32	0.10	0.14	N-2°-E	
38	D	2	3.3	4	5.8	1.04~3.30	-129.463	-38.399	○ 方	0.36~0.84	0.36~0.92	0.72	0.10	0.24	N-4°-W	
39	D・E	2	4.0	4	7.1	1.16~2.25	-129.411	-38.403	○ 方	0.32~0.86	0.32~0.85	0.34	0.10	0.32	N-6°-W	鉛柱
40	F	2	3.6	2	4.3	1.76~2.48	-129.141	-38.443	○ 方	0.32~0.78	0.30~0.78	0.42	0.12	0.28	N-29°-E	
41	F	2	2.9	3	6.8	1.00~1.90	-129.431	-38.408	○ 方	0.60~0.65	0.85~0.70	0.40	0.10		N-2°-E	
42	F	2	4.1	3	7.3	1.45~2.85	-129.441	-38.415	○ 方	0.30~0.56	0.32~0.56	0.38	0.12		N-25°-E	
43	F	2	4.0	2	4.4	1.90~2.25	-129.454	-38.423	○ 方	0.28~0.58	0.30~0.66	0.34	0.10		N-16°-E	

表3 B・D・E・F地区古代建物計測値表

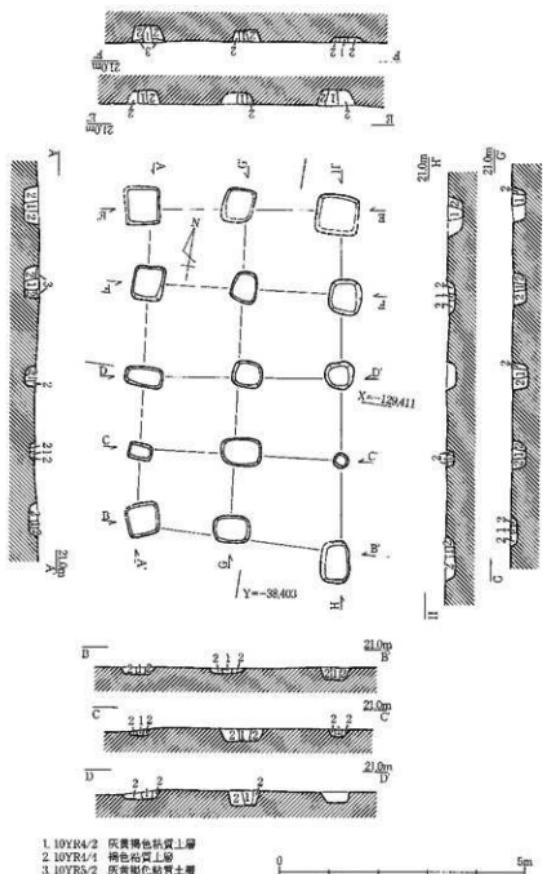
から3.30mを測る。主軸方向はN-4°-Wを示す。平安時代の土師器皿が出土している(第47図)。

建物39(第50図、図版3-5) D-E地区に存在し、長方形を呈する2間×4間の総柱建物である。建物の柱穴は、やや不揃いである。建物は、梁間約4.0m、桁行約7.1m、柱間寸法は1.16mから2.25mを測る。主軸方向はN-6°-Wを示す。古墳時代後期の須恵器壺蓋が出土している(第49図)が、混入遺物と思われる。

建物40(第51図) F地区北端部に存在し、長方形を呈する2間×2間の建物である。建物の北東角の柱穴は、攪乱によって欠失している。建物は、梁間約3.6m、桁行約4.3m、柱間寸法は1.76mから2.48mを測



第49図 建物39  
出土遺物 D194 (91)



第50図 建物39平面・断面図

る。主軸方向はN-29°-Eを示す。

**建物41** (第52図、図版3-6) F地区中央部に存在し、長方形を呈する2間×3間の建物である。建物の南西角部分の柱穴3つは、攪乱による削平などを受け検出されていない。建物は、梁間約3.9m、桁行約6.8m、柱間寸法は1.00mから1.90mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

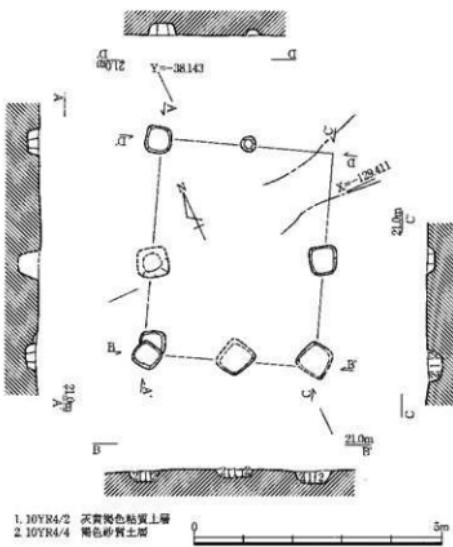
**建物42** (第53図、図版3-7) F地区中央部に存在し、やや不定形な長方形を呈する2間×3間の建物である。建物は、梁間約4.1m、桁行約7.3m、柱間寸法は1.45mから2.85mを測る。主軸方向はN-25°-Eを示す。

**建物43** (第55図) F地区南端部に存在し、ほぼ正方形を呈する2間×2間の建物である。建物は、梁間約4.0m、桁行約4.4m、柱間寸法は1.90mから2.25mを測る。主軸方向はN-16°-Eを示す。奈良時代の須恵器壺蓋が出土している(第54図)。

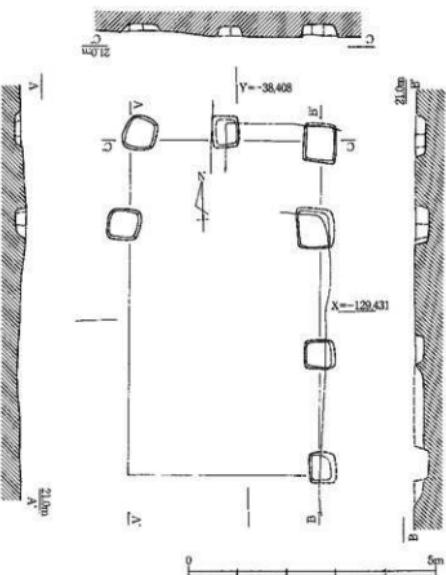
#### d. 柱穴

古代に属する遺構の中で建物にならなかった柱穴には、埋土内から多数の遺物が出土したものが存在する。ここでは、それらを抽出して掲載した。

**B723 柱穴** B地区の北部やや西X=-129,482、Y=-38,374付近で検出された柱穴である。平面形は方形を呈し、径約0.4m、深さ約0.2mを測る。遺構埋土中より、黒色土器椀、土師器杯などが出土した(第56図、図28-8)。



第51図 建物40平面・断面図



第52図 建物41平面・断面図

**B881柱穴（第57図）** B地区の北部やや西  $X = -129,430$ 、 $Y = -38,375$ 付近で検出された土坑である。平面形は方形を呈し、一辺約0.4m前後、深さ約0.1mを測る。遺構埋土中より、黒色土器楕、須恵器皿などが出土した（第59図、図版28-6）。また、図化は出来なかったが、皇朝錢と推定される銭貨が8枚重ねられた状況で出土している。

#### e. 土坑

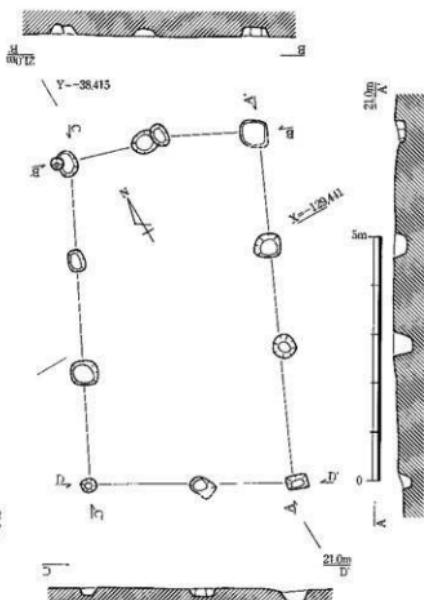
古代に属する土坑で、埋土中から遺物が出土したもののが存在する。その中からそれらを抽出して掲載した。

**B485土坑（第58図）** B地区の北部西端  $X = -129,425$ 、 $Y = -38,395$ 付近で検出した土坑である。平面形は不定形な方形を呈し、短径約2.9m、長径約3.0mで、深さ約0.1mを測る。遺構埋土中より、須恵器壺蓋、須恵器壺身、土師器楕、土師器甕などが出土した（第61図、図版26-6）。

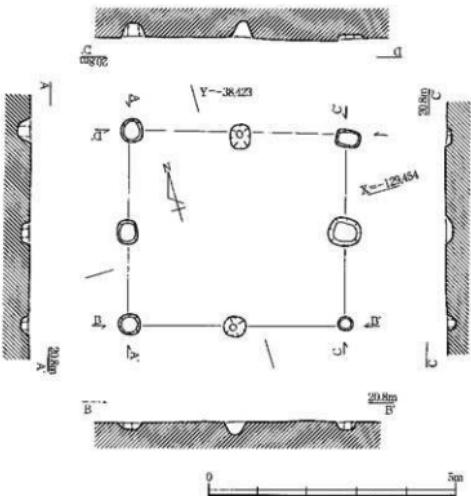
**D2674土坑** D地区の  $X = -129,453$ 、 $Y = -38,379$ 付近で検出した土坑である。短径約2.5m、長径約2.9m、深さ約0.15mを測る。



第54図 建物43出土遺物



第53図 建物42平面・断面図



第55図 建物43平面・断面図

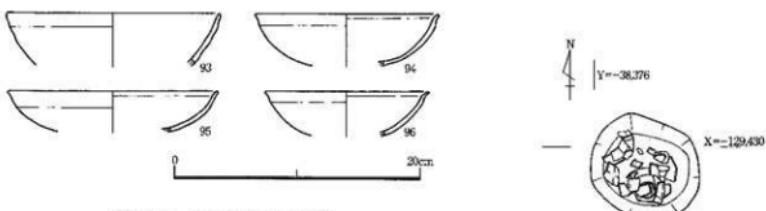
遺構埋土中より、須恵器壺蓋、須恵器壺身などが出土した（第60図、図版27-1）。

**D2630土坑** D地区の中央西 X = -129,448、Y = -38,419付近で検出した土坑である。平面形では楕円形を呈し、短径約1.1m、長径約2.0m、深さ約0.2mを測る。遺構埋土中より、土師器皿、土師器高杯などが出土した（第65-146・147図、図版27-4）。

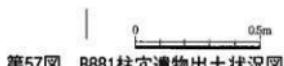
**D2477土坑** D地区のX = -129,451、Y = -38,389付近で検出した土坑である。短径約1.2m、長径約1.7m、深さ約0.04mを測る。遺構埋土中より、黑色土器碗などが出土した（第66図、図版28-9）。

**D2675土坑** D地区のX = -129,453、Y = -38,377付近で検出した土坑である。短径約1.8m、長径約2.6m、深さ約0.14mを測る。遺構埋土中より、土師器杯、土錘などが出土した（第67図）。

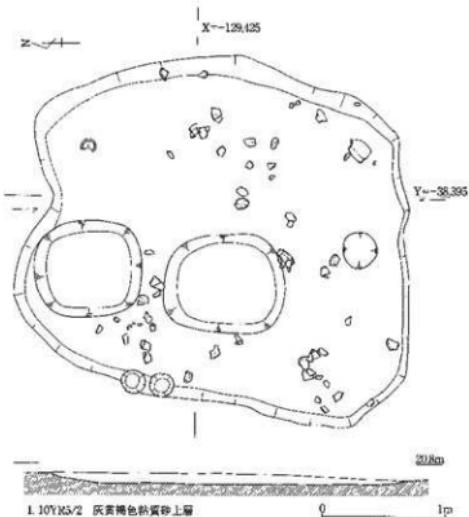
**E280土坑** E地区のX = -129,454、Y = -38,412付近で検出した土坑である。径約0.6m、



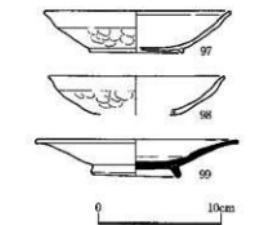
第56図 B723柱穴出土遺物



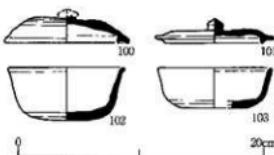
第57図 B881柱穴遺物出土状況図



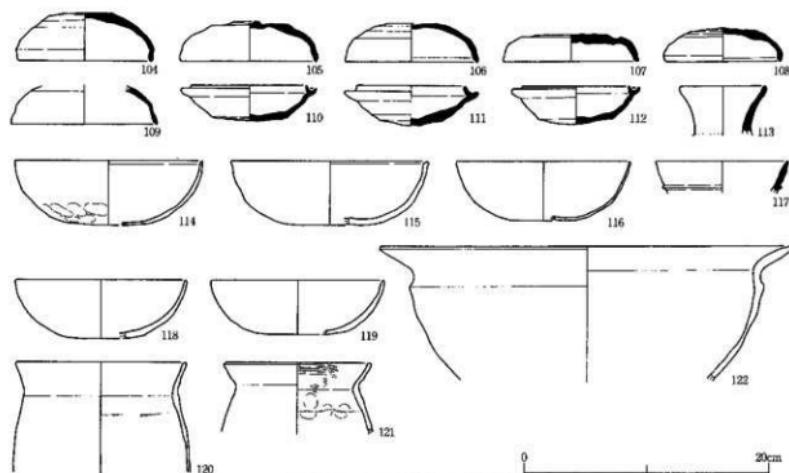
第58図 B485土坑遺物出土状況図



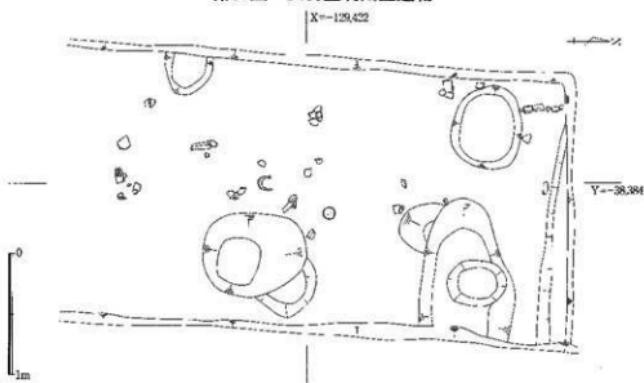
第59図 B881柱穴出土遺物



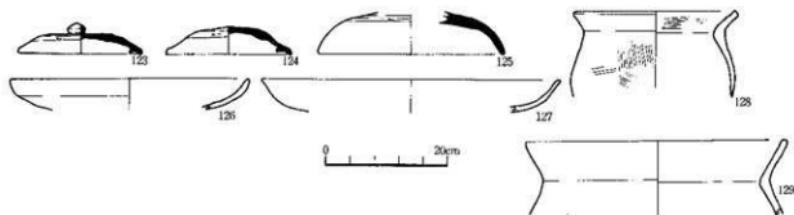
第60図 D2674土坑出土遺物



第61図 B485土坑出土遺物



第62図 B604落ち込み遺物出土状況図



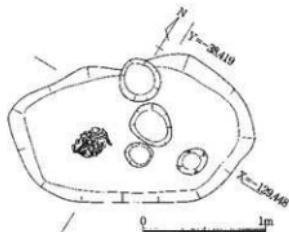
第63図 B604落ち込み出土遺物

深さ約0.07mを測る。遺構埋土中より、黒色土器碗などが出土した(第68図、図版28-9)。

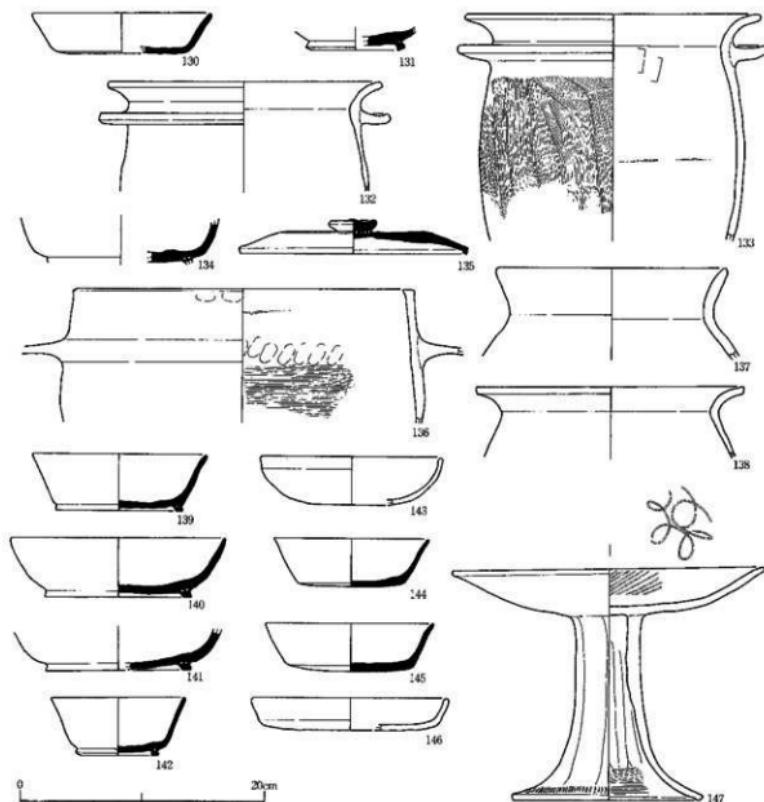
#### f. 落ち込み

B区の北側において、古代に属する落ち込みを検出した。埋土中より遺物が出土し、数点を図化した。

B604落ち込み(第62図) B地区北端 X=-129,422、Y=-38,384付近で検出した落ち込みである。東辺・西辺・北辺がそれぞれ攪乱によって切られているため、その範囲

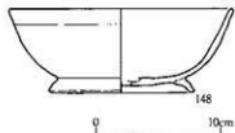


第64図 D2630土坑遺物  
出土状況図

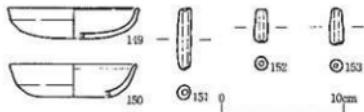


第65図 奈良時代遺構出土遺物

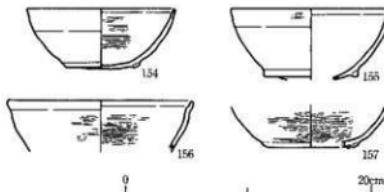
A4514(130) C436(131) B547(132) B839(133) C265(134) D2542(135) D2673(136) C602(137)  
D2673(138・143) D2541(139～141) D1876(142) C958(144) F951(145) D2630(146・147)



第66図 D2477土坑出土遺物



第67図 D2675土坑出土遺物



第68図 E280土坑出土遺物

は不明である。遺構埋土中より、須恵器環蓋、土師器甕、土師器皿などが出土した（第63図、図版26-8）。

#### g. 井戸

F区で、古代に属する井戸を検出した。埋土中より多くの遺物が出土し、数点を図化した。

E3井戸（第69図） E地区の北端X=-129,419、Y=-38,418付近に位置する井戸で、短径約2.1m、長径約2.15m、深さ約1.3mを測る。埋土中より遺物が出土し、底部外面に判別しえない墨書がある土師器杯、土師器皿、土錐、須恵器甕の破片を利用した硯、単弁十二葉蓮華紋軒丸瓦片、円形曲物の蓋、斎串、用途不明の板、横櫛などが出土した（第70図、図版28-4・5）。

#### h. 溝

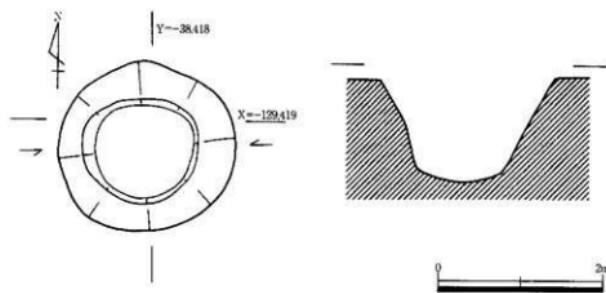
古代に属する溝を数本検出した。埋土中より遺物が出土したものの中から、抽出して掲載した。

E250溝 E地区のX=-129,449、Y=-38,411付近で検出した溝である。長さ約1.8m、幅約0.4m、深さ約0.34mを測る。遺構埋土中より、黒色土器椀などが出土した（第71図）。

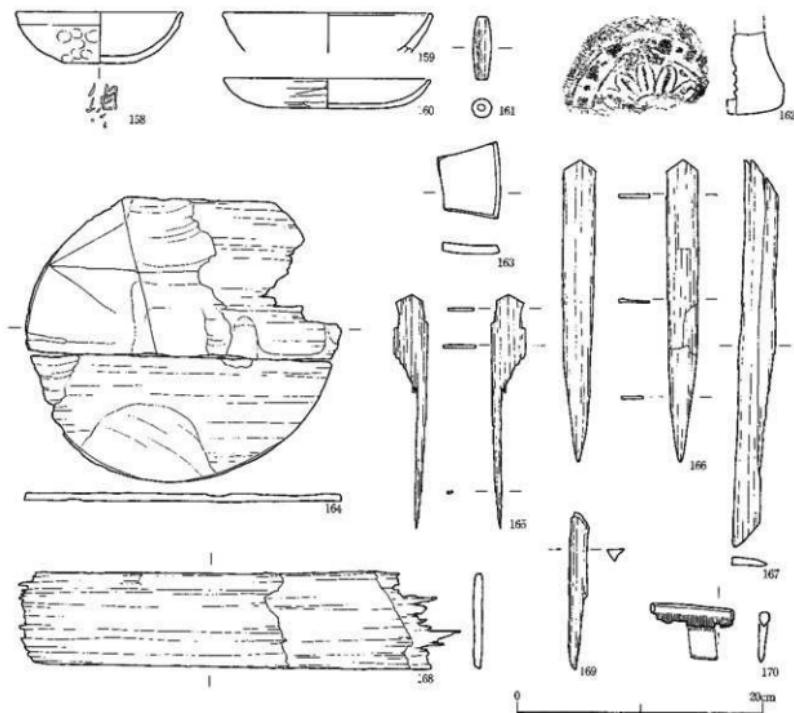
8号墳周溝最上層出土遺物 B地区のX=-129,433、Y=-38,367付近に中心をもつ8号墳周溝の最上層より出土した遺物である。黒色土器椀、土師器鉢甕などが出土した（第72図）。

溝1（第12図） 当調査地の北端であるI地区から、G地区、A地区、E地区・F地区を通る溝である。断面より最高4回の掘り直しが確認されたが、残存部分が浅かったため、その切り合い関係は不明である。溝埋土中から、須恵器環蓋、須恵器环身、須恵器甕蓋、須恵器壺、須恵器鉢、土師器甕などが出土した（第73図・図版27-4～7・9）。また図化はしていないが、平安時代の黒色土器が出土していることから、平安時代まで続くものと思われる。

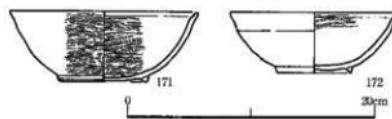
（奥・富田）



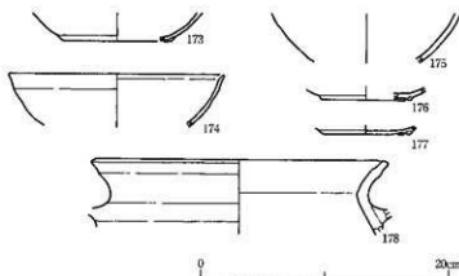
第69図 E3井戸平面・断面図



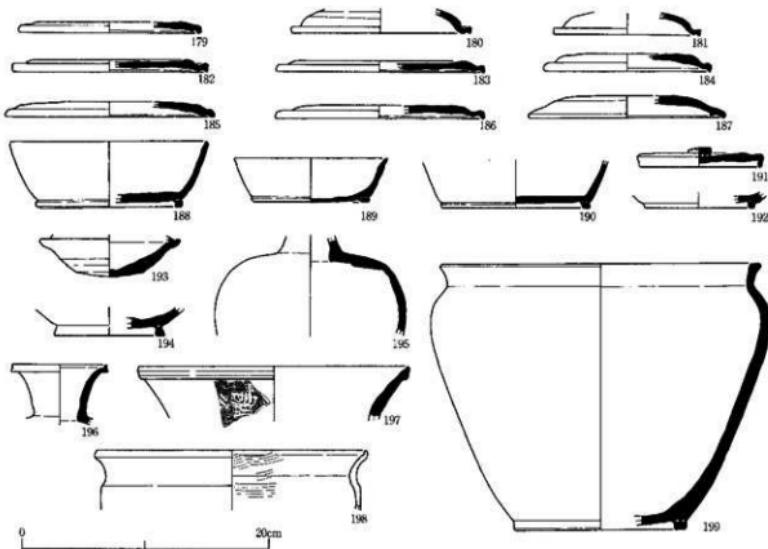
第70図 E3井戸出土遺物



第71図 E250溝出土遺物



第72図 8号墳周溝最上層出土遺物



第73図 溝1出土遺物

### 3. A・G・I 地区の調査

#### a. 概要

A・G・I 地区にかけて東西約110m、南北約65mの範囲に存在する。検出した古代の遺構は、住居跡4棟、建物32棟、柵列2本、溝2本、井戸1基などである（第74図、図版4-1、6-1）。

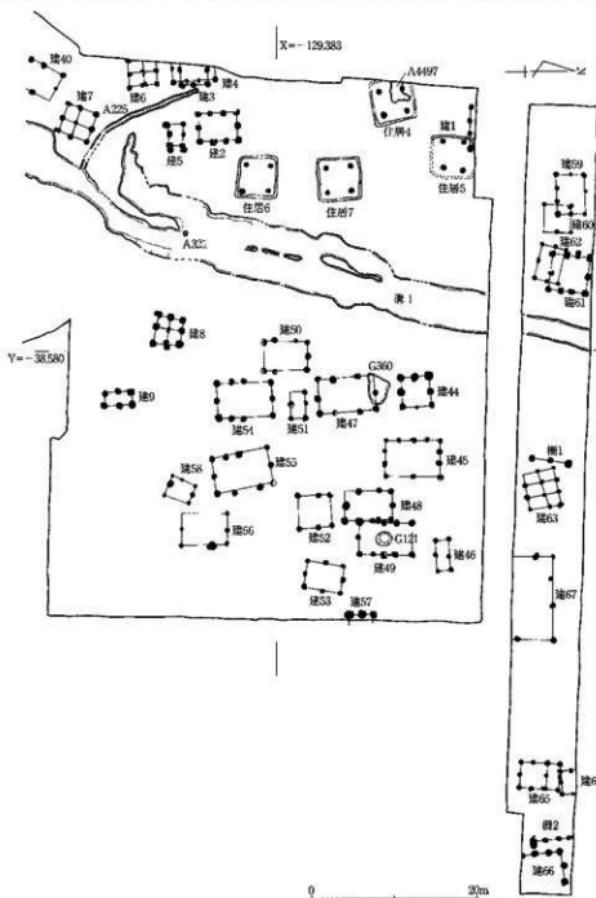
住居跡は、A地区西部、奈良時代の溝1の西側付近に集中し、G地区からは検出しなかった。

建物は、A地区では南西側を中心に8棟を検出した。調査地区的北西部に位置するG・I地区では、古墳時代中期の小方墳の墳丘を削平して、奈良時代から平安時代前期頃の掘立柱建物が築かれている。特にG地区約1500m<sup>2</sup>を測る調査区全域で15棟の掘立柱建物跡を集中して検出している。建物は座標北に近いものが多い。

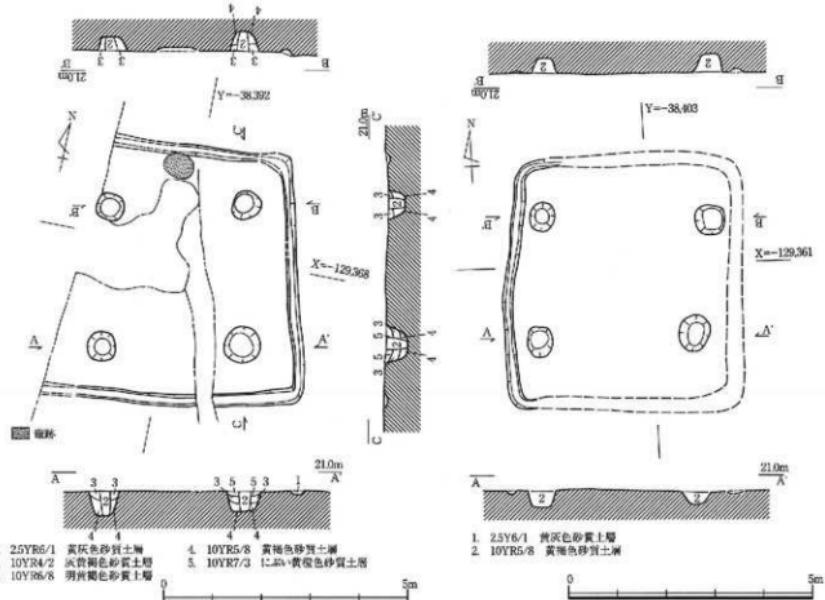
また、G・H・I地区北側にあるI地区は、幅約4.0mの道路を挟んで、南北約10m、東西約100mの調査区であり、Y=-38,360から-38,400地域付近を中心にして9棟の建物を復元した。

#### b. 住居跡

A地区北側で、溝1西側において4棟検出した。その内の2棟からは、竈跡と推定される焼土面を検出した。検出された住居跡は、全て平面形が方形に近い形を呈する。住居の各辺は、それぞれ5.0m前後を測る。各住居に伴う遺物は、出土し



第74図 A・G・I 地区古代遺構配置図

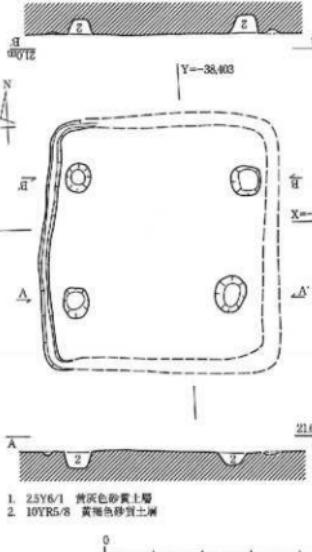


第75図 住居4平面・断面図

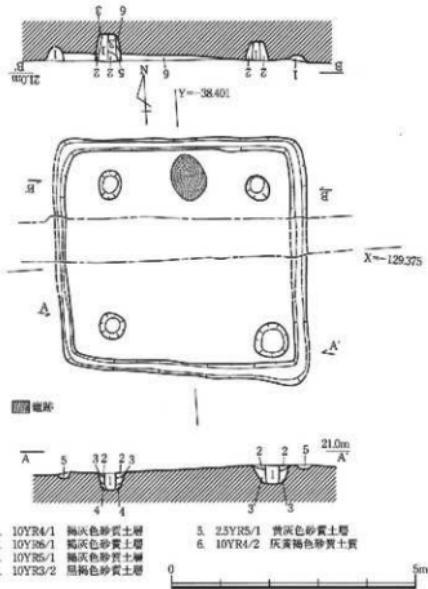
なかった。

**住居4** (第75図、図版4-3) A地区北側西端、X=-129,368、Y=-38,392付近で検出した。住居西辺の一部は、調査区外にあるため不明である。住居北辺・東辺・南辺の一部は、近世に削平を受け欠失している。壁溝の検出状況から、平面形では隅丸方形に近く、一辺約5.3m前後と推定される。幅0.3m前後、深さ0.05m前後の壁溝が住居内側を巡る。柱穴は円形で、4個検出した。径0.6m前後、深さ0.5m前後を測る。北辺の中央部に、径約0.6mを測る竪跡と推定される焼上面を検出した。

**住居5** (第76図、図版4-2) A地区北端の西 X=-129,361、Y=-38,403付近で検出した。住居北辺・東辺・



第76図 住居5平面・断面図



第77図 住居6平面・断面図

南辺の大部分が、近世に削平を受け失している。柱穴の検出状況から、東西辺では約4.8m、南北辺約5.2mを計る。幅0.25m前後、深さ0.05m前後の壁溝が住居内側を巡る。柱穴は円形で、4個検出した。径0.6m前後、深さ0.3m前後を測る。

**住居6**（第77図、図版4-4） A地区の中央部西X=-129,385、Y=-38,401付近で検出した。住居西辺と東辺の一部は、近世に削平を受け失している。住居は、東西辺約5.1m、南北辺約4.7mを測る。幅0.2m前後、深さ0.1m前後の壁溝が住居内側を巡る。柱穴は円形で、4個検出した。径0.6m前後、深さ0.4m前後を測る。北辺の中央部付近の地山面上において、径約0.8mを測る竈跡と推定される焼土面を検出した。

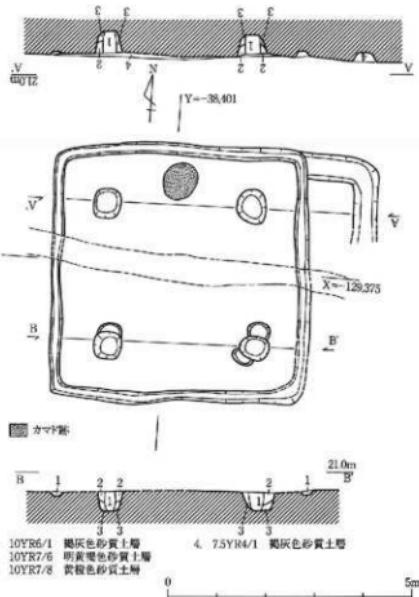
**住居7**（第78図、図版4-5） A地区区中央部北X=-129,375、Y=-38,401付近で検出した。住居西辺と東辺の一部は、近世に削平を受け失している。住居は、平面形では隅丸方形に近く東西辺約5.3m、南北辺約5.3mを測る。幅0.2m前後、深さ0.1m前後の壁溝が住居内側を巡る。柱穴は円形で、4個検出した。径0.6m前後、深さ0.4m前後を測る。北辺の中央部付近の地山面上において、径約0.7mを測る竈跡と推定される焼土面を検出した。また住居に関係するかは不明だが、住居の北東角より、幅約0.5m、深さ約0.15mを測る溝がL字型に伸びている。

#### c. 建物

**建物1**（第79図） A地区北端に存在し、桁が3間以上の建物である。建物の北側は、調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約0.9m以上、桁行約5.0m、柱間寸法は1.40mから1.90mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

**建物2**（第80図、図版5-1） A地区中央部に存在する、2間×3間の建物である。建物は梁間約3.4m、桁行約4.6m、柱間寸法は1.32mから1.74m。主軸方向はN-2°-Wを示す。

**建物3**（第81図） A地区南部西端に存在し、梁が2間の建物である。建物の西側は、調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約3.2m、桁行約2.6m、柱間寸法は1.44mから3.35mを測る。主軸方向はN-4°-Wを示す。



第78図 住居7平面・断面図

**建物4** (第83図) A地区で、建物3とほぼ同位置に存在し、梁が1間以上、桁が3間の建物である。建物の西側は、調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約2.3m、桁行約5.1m、柱間寸法は0.92mから1.58mを測る。主軸方向はN-6°-Wを示す。

**建物5** (第82図、図版5-2) A地区中央部に存在する、1間×2間の小型建物である。建物は、梁間約1.6m、桁行約3.1m、柱間寸法は1.25mから2.00mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

#### 建物6 (第84図、図版5-3)

A地区南部西端に存在し、梁が2間、桁が2間以上の総柱建物である。建物の西側は、調査区外にあるため不明である。建物は、梁間約3.2m、桁行約3.4m以上、柱間寸法は1.60mから1.80mを測る。主軸方向はN-6°-Wを示す。

#### 建物8 (第86図、図版5-5)

A地区東部に存在する、2間×2間の総柱建物である。建物は、梁間約3.1m、桁行約3.2m、柱間寸法は1.28mから2.25mを測る。主軸方向はN-9°-Eを示す。

#### 建物9 (第85図、図版5-6)

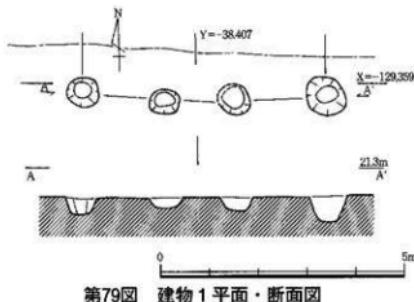
A区東部端に存在する、1間×2間の建物である。建物は、梁間が約1.6m、桁行約3.4m、柱間の寸法は1.50mから1.80m。主軸方向はN-3°-Eを示す。(奥・富田)

#### 建物44 (第88図、図版5-7)

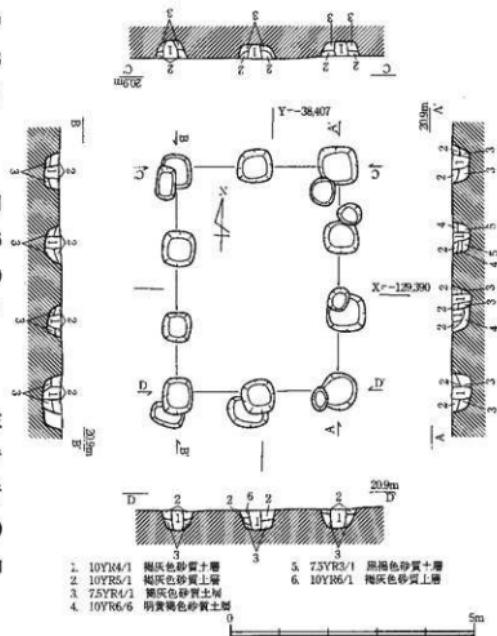
調査区北西部、G200溝の東側に存在する、梁間2間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約3.5m、桁行約3.7m、柱間寸法は2.00mから2.20mを測る。桁行が僅かに長い。主軸方向はN-3°-Eを示す。

#### 建物45 (第87図、図版5-8)

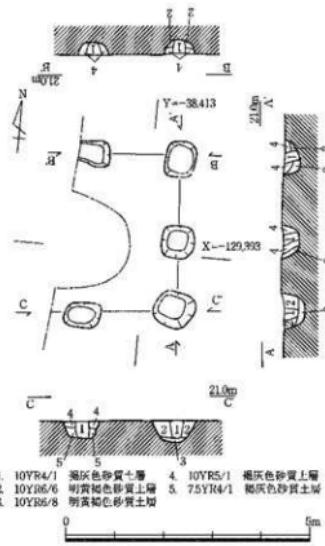
建物44の東側に存在する、梁間3間、



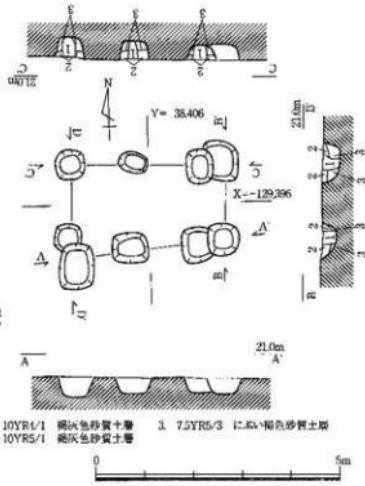
第79図 建物1平面・断面図



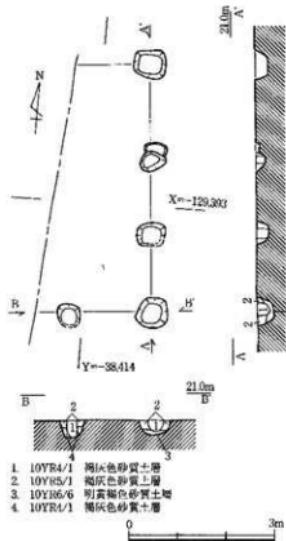
第80図 建物2平面・断面図



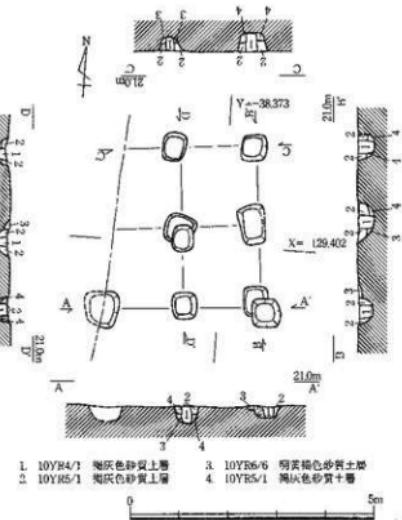
第81図 建物3平面・断面図



第82図 建物5平面・断面図



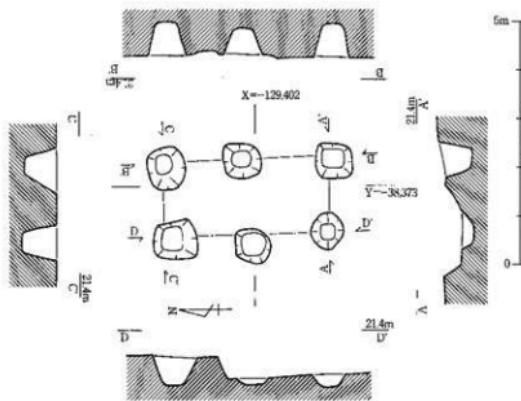
第83図 建物4平面・断面図



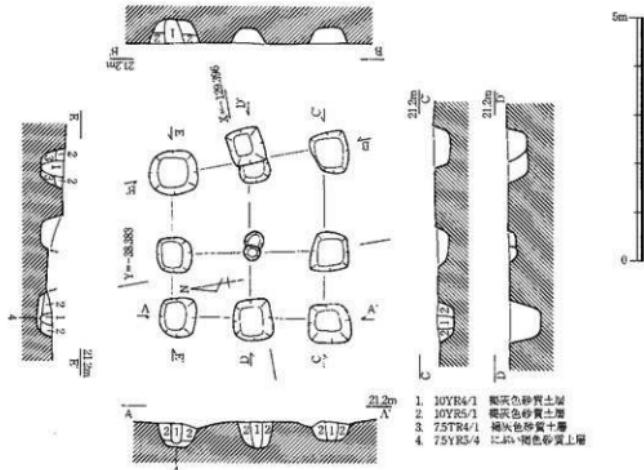
第84図 建物6平面・断面図

桁行4間の建物である。建物は、梁間約4.2m、桁行約5.5m、柱間寸法は1.30mから1.80mを測る。柱穴の掘方は方形から隅丸方形を呈し、径約0.45mから0.78mを測る。主軸はN-1°-Eを示す。

**建物46（第89図） 調査区北東部に存在する、梁間1間、桁行2間の小型建物である。建物は、梁間約1.6m、桁行約3.7m、柱間寸法は1.60m**



第85図 建物9平面・断面図



第86図 建物8平面・断面図

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱穴(m)				柱距 (m)	方位	備考	
	間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	X	Y	柱 種 類	柱 径 寸 法	柱 短 ~ 長	柱 短 ~ 長	柱 深 さ	柱 浅 さ				
1	0.9以上	3	5.0	1.40~1.90	-129.359	-38.407	方	0.50×0.80	0.60×0.78	0.52	0.22	-	N-2°-E			
2	2	3.4	3	4.6	1.32~1.74	-129.390	○	0.48×0.78	0.42×0.80	0.42	0.28	0.32	N-2°-W			
3	2	3.2	1以上~2.6以下	1.44~3.35	-129.393	-38.413	○	0.52×0.75	0.62×0.88	0.46	0.25	0.26	N-4°-W			
4	1以上	2.3	3	5.1	1.58~1.92	-129.393	-38.414	○	0.42×0.62	0.46×0.66	0.34	0.10	0.32	N-6°-W		
5	1	1.6	2	3.1	1.25~2.00	-129.396	-38.406	○	0.44×0.94	0.54×0.74	0.42	0.24	0.36	N-2°-E		
6	2	3.2	2以上	3.4	1.60~1.80	-129.399	-38.413	○	方	0.54×1.80	0.12×0.68	0.42	0.24	0.25	N-6°-W	
8	2	3.1	2	3.2	1.28~2.25	-129.396	-38.382	○	方	0.34×1.00	0.30×0.90	0.64	0.14	0.38	N-9°-E	
9	1	1.6	2	3.4	1.50~1.80	-129.402	-38.373	方	0.68×0.90	0.72×0.88	0.72	0.40	-	N-3°-E		

表4 A地区古代建物計測値表

から2.10mを測る。桁行は柱間隔が揃わない。主軸方向はN-4°-Wを示す。

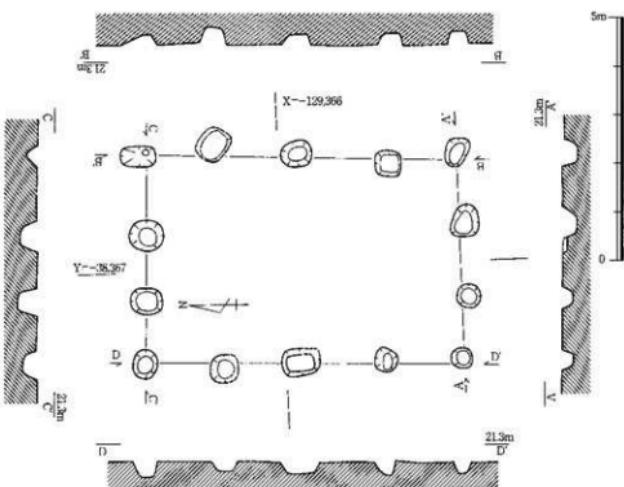
**建物47(第90図)** 建物44の南に存在する、梁間2間、桁行4間の建物である。建物は、梁間約4.1m、桁行約6.7m、柱間寸法は1.50mから3.00mを測る。桁行の柱間隔はやや狭い。主軸はN-1°-Eを示す。

#### 建物48(第91図、

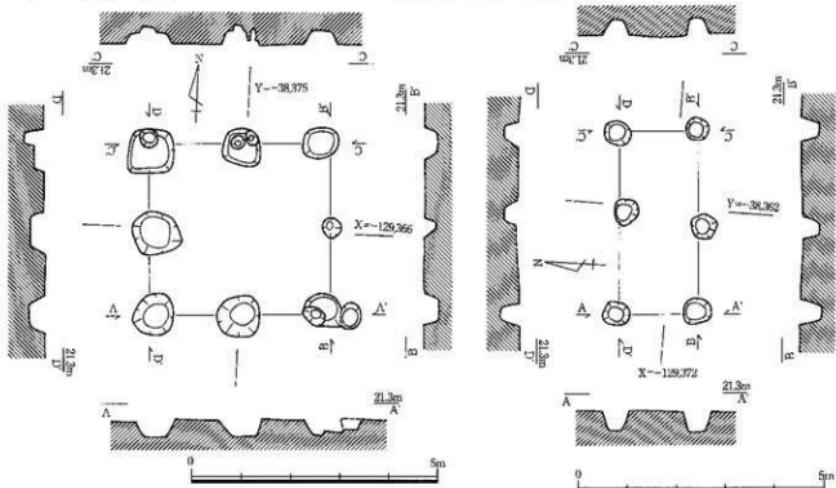
**図版6-2) 建物45の南東に存在する、梁間2間、桁行3間の建物である。建物は、梁間約3.1m、桁行約5.7m、柱間寸法は1.50mから2.10mを測る。主軸方向は座標北を示す。**

#### 建物49(第92図、

**図版6-3) 建物48と西側の柱列**



第87図 建物45平面・断面図

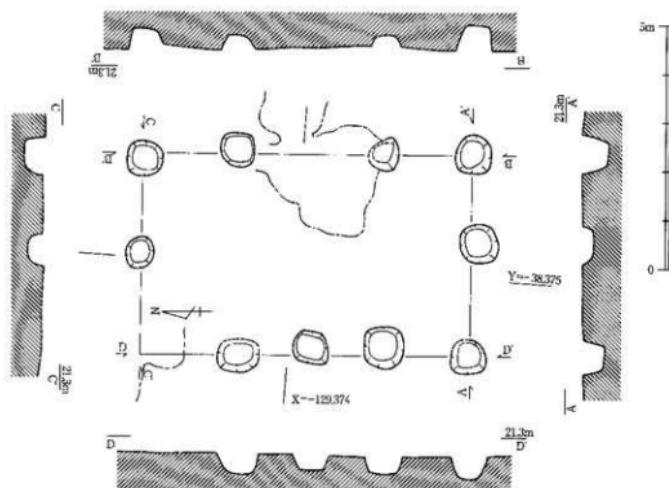


第88図 建物44平面・断面図

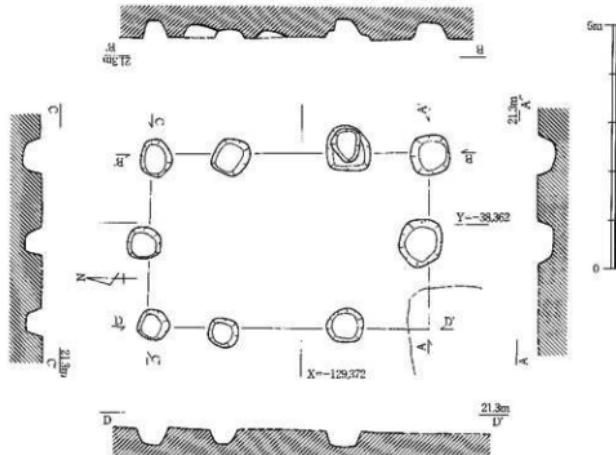
第89図 建物46平面・断面図

が重なる位置に存在する、梁間2間、桁行4間の建物である。建物は、梁間約3.9m、桁行約6.4m、柱間寸法は1.30mから2.00mを測る。主軸方向は真北を示す。G121井戸とも重なるが、覆屋としては規模が大きく、井戸が新しいと考える。

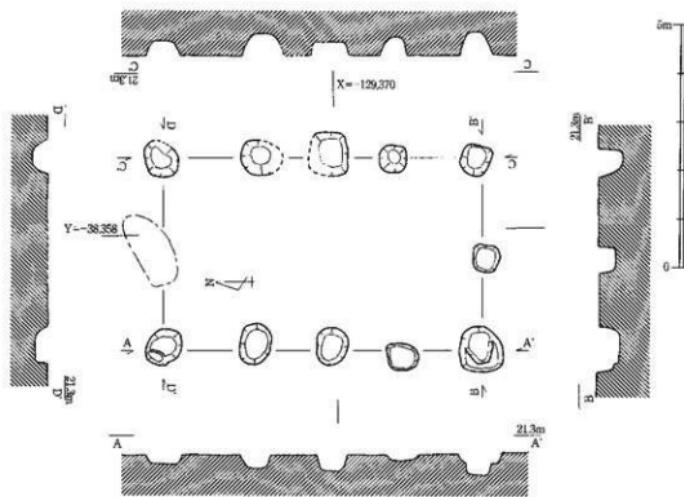
**建物50（第93図、図版6-4）** 建物47の南西に存在する、梁間2間、桁行3間の建物である。建物は、梁間約3.5m、桁行約5.1m、柱間寸法は1.20mから2.50mを測る。桁側は全ての柱を



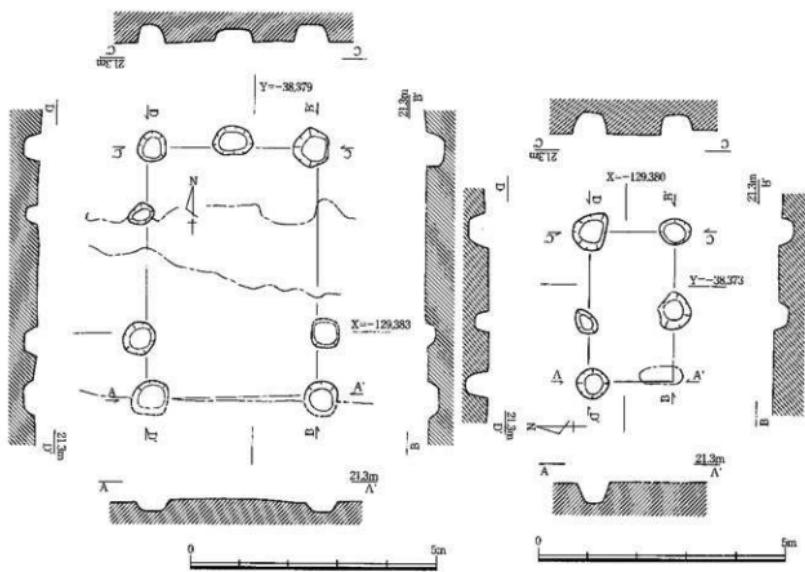
第90図 建物47平面・断面図



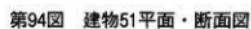
第91図 建物48平面・断面図



第92図 建物49平面・断面図



第93図 建物50平面・断面図



確認できなかったが、柱間寸法が約1.30mと狭いので、4間の可能性がある。主軸方向はN-1°-Wを示す。

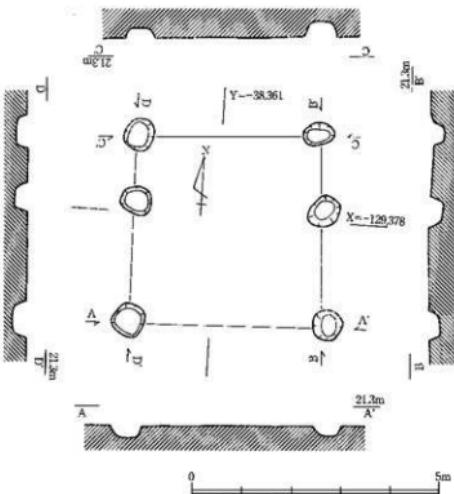
**建物51（第94図）** 建物47の南側に存在する、梁間1間、桁行2間の小型建物である。建物は、梁間約1.6m、桁行約3.1m、柱間寸法は1.30mから1.90mを測る。柱穴は歪な形状である。主軸方向は座標北を示す。

**建物52（第95図）** 建物48の南側に存在する、梁間1間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約3.8m、桁行3.9m、柱間寸法は1.40mから3.80mを測る。中間の柱穴を見つけることができなかった。また、桁側の南の柱間隔が約2.6mと広く、歪な建物である。主軸方向はN-2°-Wを示す。

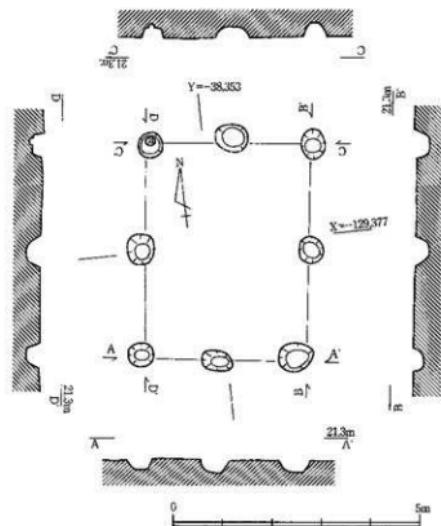
**建物53（第96図）** 建物49の南東に存在する、梁間2間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約3.3m、桁行約4.4m、柱間寸法は1.50mから2.20mを測る。柱穴は歪な方形や円形を呈し、径0.4mから0.7mを測る。主軸方向はN-6°-Eを示す。

**建物54（第97図、図版6-5）** 建物51の南側に存在する、梁間2間、桁行4間の建物である。建物は、梁間約4.2m、桁行6.3m、柱間寸法は1.50mから3.20mを測る。柱穴間の距離は、まちまちである。主軸方向はN-3°-Wを示す。

**建物55（第98図、図版7-1）**



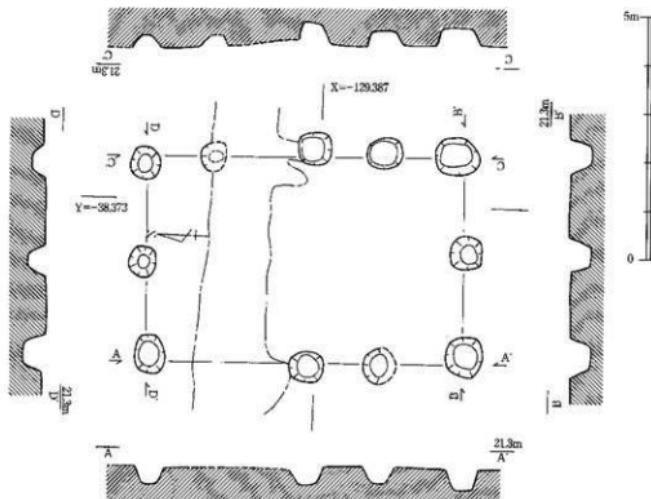
第95図 建物52平面・断面図



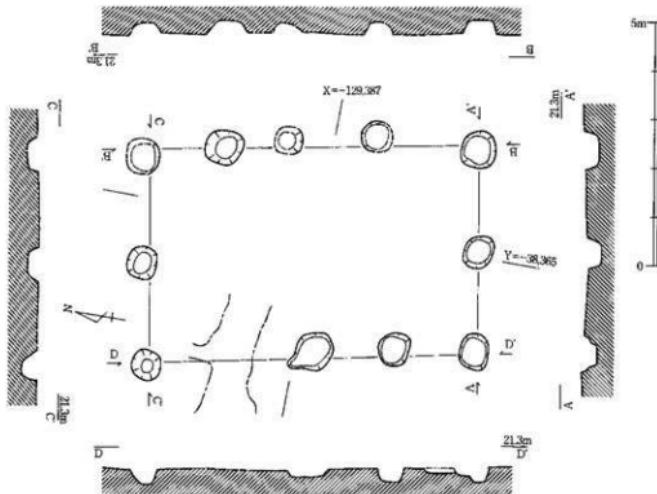
第96図 建物53平面・断面図

建物54の東側に存在する、梁間2間、桁行4間の建物である。建物は、梁間約4.3m、桁行約6.7m、柱間寸法は1.30mから3.30mを測る。桁側の柱間は、間隔が揃わない。主軸方向はN-10°-Wとやや西に振っている。

建物56(第99図) 建物55の南東に存在する、梁2間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約3.8



第97図 建物54平面・断面図



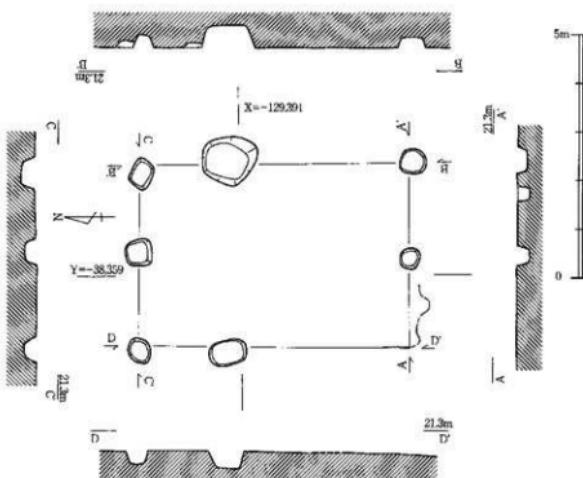
第98図 建物55平面・断面図

m、桁行約5.5m、柱間寸法は1.80mから3.70mを測る。南西隅の柱を検出できなかった。主軸方向は座標北を示す。

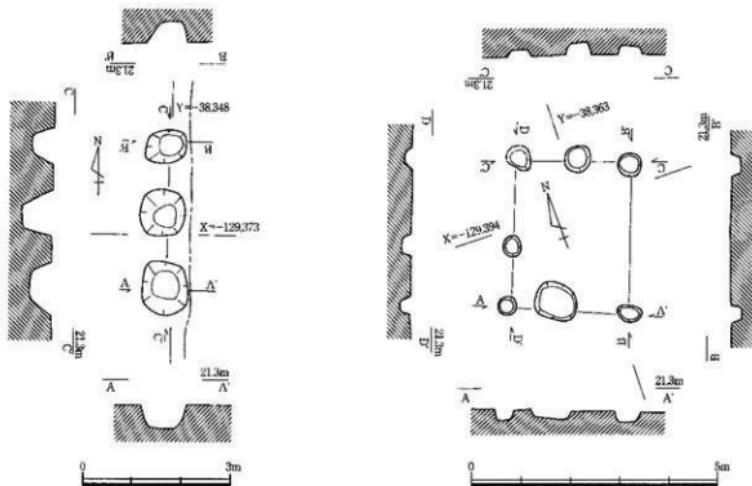
**建物57（第100図）** 調査区東端に存在する、梁間2間の建物である。東西の柱は調査区外にある。建物は、梁間約5.8

m、桁行不明、柱間寸法は1.40mから1.50mを測る。柱穴は大きく、0.9mから1.1m、深さ約0.6mを測る。主軸方向はN-1°-Eを示す。

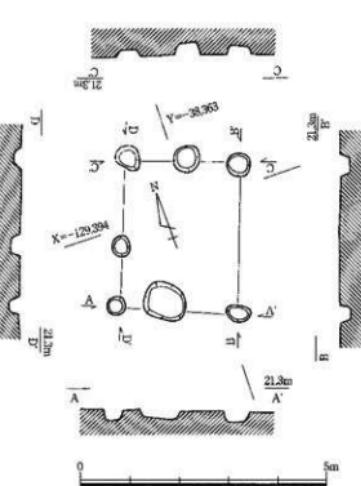
**建物58（第101図）** 建物58の南西部に存在する、梁間2間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約2.3m、桁行約3.1m、柱間寸法は1.10mから3.10mを測る。主軸方向はN-22°-Eを示し、



第99図 建物56平面・断面図



第100図 建物57平面・断面図



第101図 建物58平面・断面図

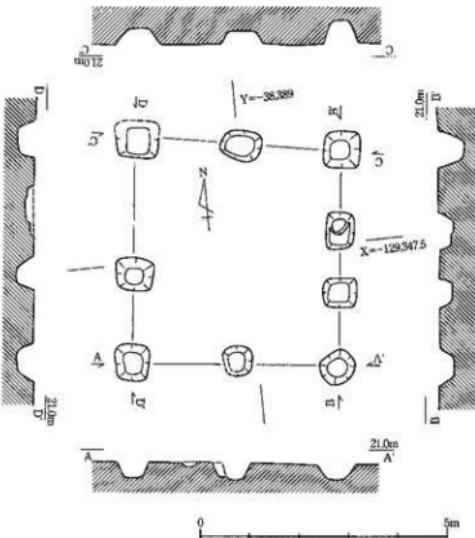
古代の建物としては軸が東に振っている。

**建物59** (第103図、図版7-3) 梁間2間、桁行3間の建物である。建物は、梁間約3.4m、桁行約4.8m、柱間寸法は1.60mから2.00mを測る。柱穴は歪な方形で、規模は0.3mから0.6mを測る。主軸方向はN-1°-Wを示す。

**建物60** (第103図、図版7-4) やや歪な梁間1間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約3.3m、桁行約3.2m、柱間寸法は1.50mから3.30mを測る。東側柱列は、中間に柱穴を確認したが、他の柱列では中間に柱を見つけることはできなかった。主軸方向はN-1°-Eを示す。

**建物61** (第102図、図版7-5) 梁間2間、桁行3間の建物である。建物は、梁間約4.2m、桁行約4.4m、柱間寸法は1.30mから2.20mを測る。柱穴はほぼ方形で、規模は0.5mから0.9mを測る。主軸方向はN-6°-Eを示す。

**建物62** (第103図、図版7-6) 梁間2間、桁行2間の建物である。建物は、梁間約2.9m、桁行約3.9m、柱間寸法は1.40mから2.00mを測る。柱穴は隅丸方形で、径0.4mから0.5mを測る。主軸方向はN-15°



第102図 建物61平面・断面図

番号	地区	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 軸	柱穴 形 状 寸 方	最 小 幅	最 大 幅	深 さ	柱 廣 (m)	方位	参考
		間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	X	Y								
44	G 2	3.5	2	3.7	1.80-1.90	-129.366	-38.375	方	0.60×0.40	0.91×0.93	0.41	0.29	0.4	N-3°-E			
45	G 3	4.3	4	6.3	1.60-1.72	-129.366	-38.367	方	0.42×0.42	0.59×0.80	0.41	0.10		N-1°-E			
46	G 1	1.6	2	3.7	1.60-2.12	-129.365	-38.355	方	0.49×0.49	0.52×0.60	0.46	0.26		N-4°-W			
47	G 2	4.1	3	6.7	1.50-3.00	-129.374	-38.375	方	0.69×0.69	0.81×0.90	0.51	0.20		N-1°-E			
48	G 2	3.1	3	5.7	1.50-2.50	-129.372	-38.362	方	0.60×0.60	0.90×1.00	0.36	0.14	0.7	N			
49	G 2	3.9	4	6.5	1.30-2.00	-129.370	-38.358	方	0.55×0.55	0.90×0.95	0.45	0.07		N			
50	G 2	3.5	3	5.1	1.24-3.80	-129.363	-38.379	方	0.44×0.58	0.74×0.70	0.40	0.20		N-1°-W			
51	G 1	1.6	2	3.1	1.26-1.90	-129.380	-38.373	方	0.40×0.68	0.68×0.82	0.48	0.32		N			
52	G 1	3.8	2	3.9	1.36-3.80	-129.378	-38.361	方	0.45×0.64	0.68×0.68	0.32	0.22		N-2°-W			
33	G 2	3.3	2	4.5	1.50-2.20	-129.377	-38.363	方	0.59×0.59	0.60×0.72	0.3	0.24	0.2	N-6°-E			
54	G 2	4.2	4	6.3	1.54-3.20	-129.387	-38.373	方	0.62×0.54	0.78×0.90	0.48	0.26		N-3°-W			
55	G 2	4.3	4	6.7	1.26-3.30	-129.387	-38.365	方	0.58×0.58	0.80×1.00	0.32	0.18		N-10°-W			
56	G 2	3.8	2	5.5	1.76-3.74	-129.391	-38.359	方	0.42×0.42	1.00×1.16	0.44	0.20		N			
57	G 2	5.8			1.46-1.50	-129.373	-38.348	方	0.70×0.80	0.90×1.10	0.58	0.42		N-1°-E			
58	G 2	2.3	1~2	3.1	1.10-3.10	-129.394	-38.363	方	0.38×0.38	0.76×0.90	0.26	0.20		N-22°-E			

表5 G地区古代建物計測値表

—Eを示す。

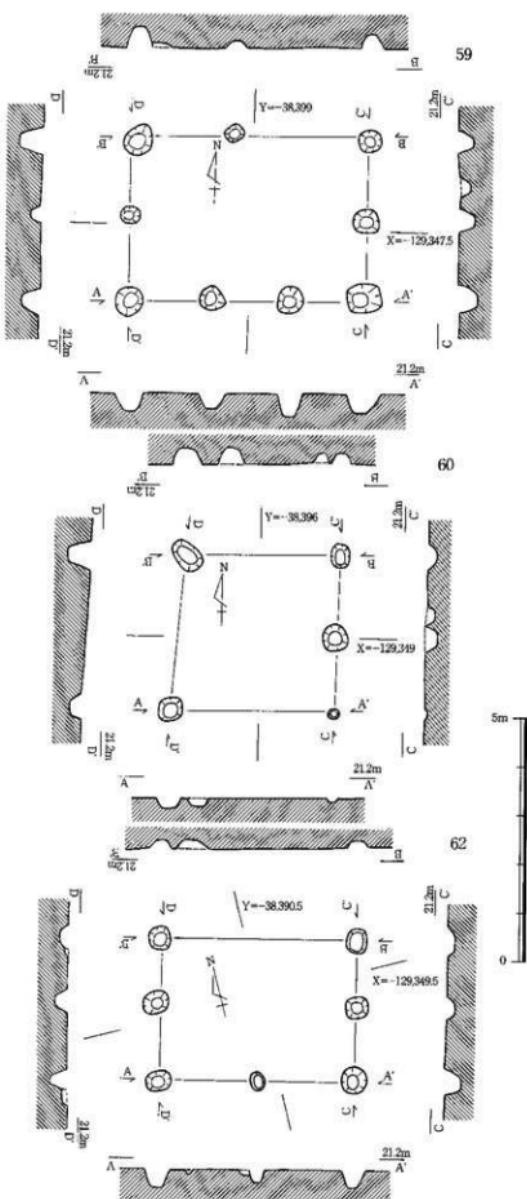
建物63（第104図、図版7-7） 柱行3間、梁間は東が3間、西が2間の総柱建物で、規模は4.5m×3.8mを測る。柱間寸法は柱側1.50m、梁間は、西が約2.0m、東は南端が約1.1m、他は約1.3mを測る。東側柱列は当初から柱間隔を詰めて3間の梁間で建設されたと考えられる。

建物64（第105図） 南側が調査区外に広がるが、2間以上×2間以上の大型建物である。柱穴の掘形は歪な方形から橢円形でを呈する。搅乱で途中の柱を欠くが、柱間寸法は2.10m前後を測る。建物の軸は、N-2°-Eを示す。

建物65（第107図、図版7-8） 北側が調査区外に広がる東西2間、南北2間以上の建物跡で、東西約2.7m、南北1.8m以上を測る。南北軸はN-3°-Wを示す。

建物66（第106図） 2間四方、約3.0m×約3.0mの建物で、北側に1間の庇がつく。庇の幅は約1.5mで身屋と同じ間隔である。主軸はN-3°-Eを示す。

建物67（第108図） 南と東が調査区外に広がる、東西3間以上、南北2間以上の建物



第103図 建物59・60・62平面・断面図

跡である。規模は東西3.8m以上、南北4.5m以上を測る。南北軸はN-8°-Wを示す。

d. 柵列

対応する柱列が確認できなかった所があり、柵列と判断した。

柵列1 (第109図)

建物63の西側にあり2間で、約4.4mを測る。柱穴は方形で0.6mから0.8mを測る。

柵列2 (第110図)

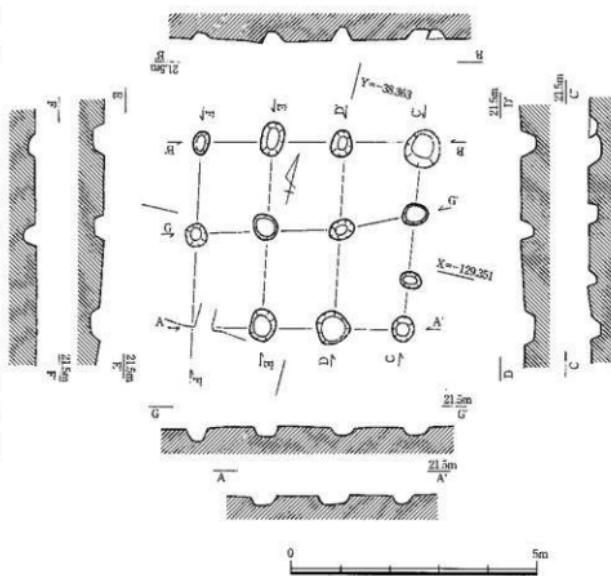
建物67の西側にある柵列である。南端の柱穴は大きいが、他は0.4mから0.6m前後を測る。

e. 土坑

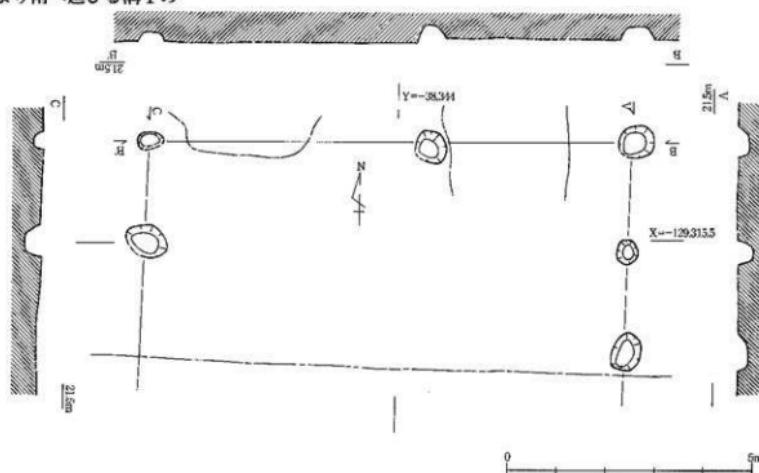
A321土坑 (第74図)

A地区中央、I地区

より南へ延びる溝1の

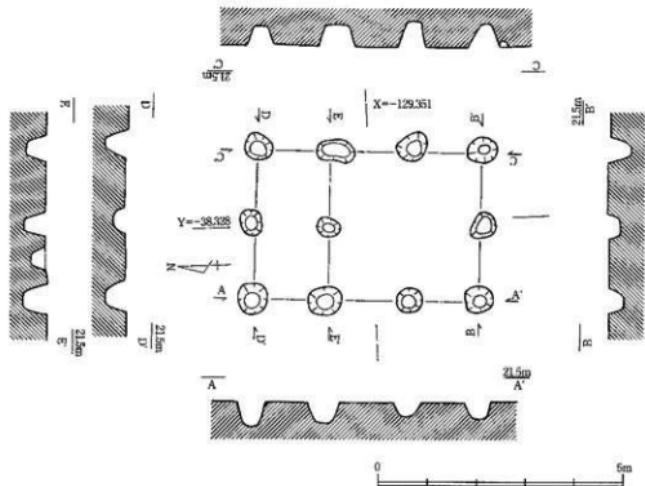


第104図 建物63平面・断面図

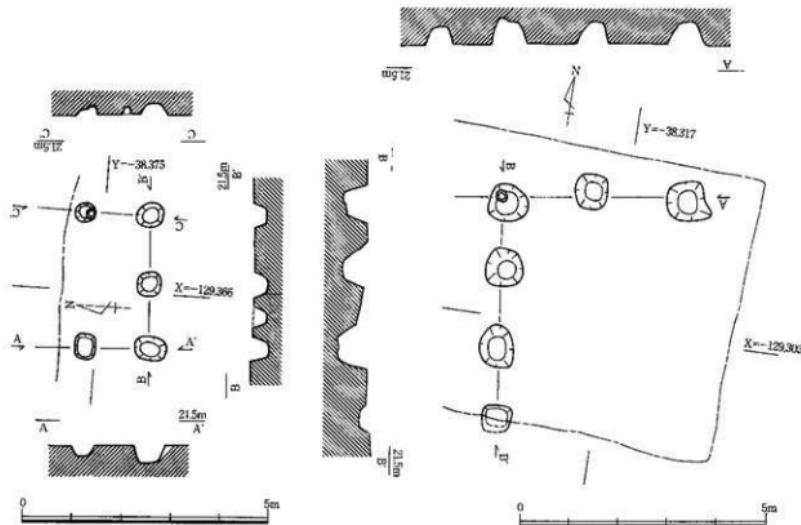


第105図 建物64平面・断面図

中央部  $X = -129.394$ 、 $Y = -38.394$  付近で検出した。平面形では橢円形を呈し、長径約 0.6m、短径約 0.4m、深さ約 0.2m を測る。遺構埋土中より、須恵器壺、土師器壺、平瓦片など（第112図、図版27-2）が出土した。



第106図 建物66平面・断面図



第107図 建物65平面・断面図

第108図 建物67平面・断面図

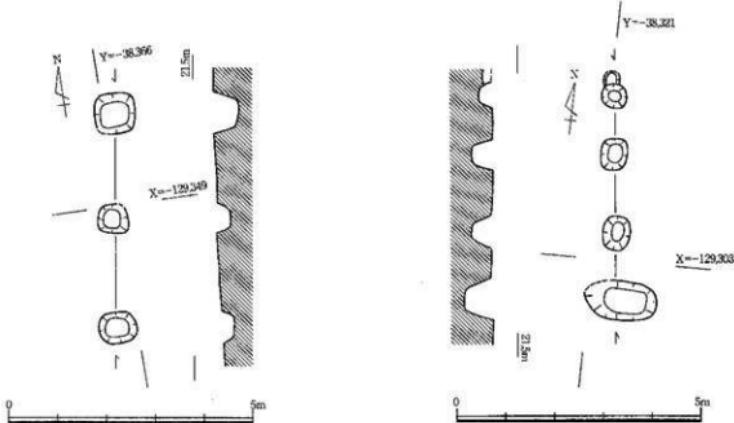
**A4497土坑** (第74図) A地区北側に位置する、住居4に重複した状況で検出した。土坑の西側は調査区外にあり、平面形では正な四角形を呈する。南北最大幅約2.2m、東西幅2.6m以上、深さ約0.1mを測る。遺構埋土中より、須恵器壺蓋、須恵器壺身、土師器碗、土師器甌、須恵器鉢など（第113図、図版27-2）が出土している。

**G360土坑** (付図3) G地区中央北西部のX=-129,370、Y=-38,375付近で検出した正な三角形状の土坑である。規模は東西約3.2m、南北約2.7m、深さ約0.1mを測り、底面は重複する中世の柱穴を除き、ほぼ平坦であった。埋土は主に褐灰色土であった。

**出土物** (第111図) 200から202は須恵器壺蓋である。202はかえりが蓋側につくもの。

番 号	地区	梁間			桁行		柱間(m)		位置		柱穴(m)				柱 痕 (m)	方位	備考
		間		間	間	短~長	X	Y	柱 形状	最小	最大	深さ	深	浅			
		間	間	間	間	間											
59	I	2	3.4	3	4.8	1.6~2.0	-129,374.5	-38,399	方	0.35×0.40	0.60×0.70	0.50	0.15		N-1°-W		
60	I	1	3.3	2	3.2	1.5~3.3	-129,349	-38,396	方	0.20×0.25	0.45×0.70	0.45	0.05		N-1°-E		
61	I	2	4.2	3	4.4	1.3~2.2	-129,347.5	-38,389	方	0.55×0.60	0.75×0.75	0.50	0.25		N-6°-E		
62	I	2	2.9	2	3.9	1.4~2.0	-129,349.5	-38,390.5	方	0.30×0.40	0.50×0.55	0.35	0.15		N-15°-E		
63	I	2	3.8	3	4.5	1.4~1.9	-129,351	-38,363	○	方	0.30×0.45	0.70×0.70	0.30	0.15		N-8°-W	
64	I	2	9.3	2	4.3	20~57	-129,315.5	-38,344	方	0.45×0.50	0.65×0.70	0.35	0.20		N-2°-E		
65	I	1	1.3	2	2.7	1.3~1.5	-129,347.5	-38,328	方	0.40×0.40	0.50×0.55	0.35	0.20		N-3°-W		
66	I	2	3.1	3	4.5	1.5~1.7	-129,351.5	-38,328.5	○	方	0.40×0.45	0.60×0.60	0.55	0.25		N-3°-E	
67	I	2	3.7	3	4.6	1.5~1.9	-129,303	-38,317	方	0.50×0.60	0.75×0.80	0.60	0.15		N-8°-W		

表6 I地区古代建物計測表

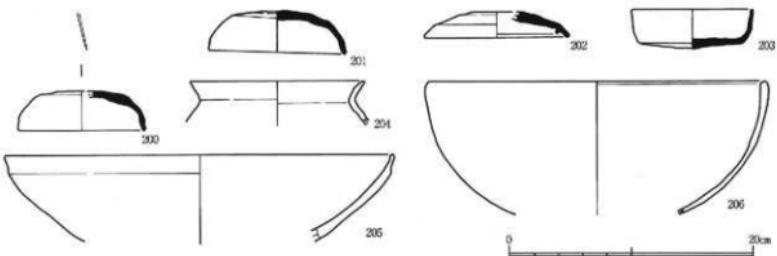


第109図 桁列1平面・断面図

第110図 桁列2平面・断面図

番 号	地区	梁間			柱間(m)		位置		柱 形状	柱穴(m)				柱 痕 (m)	方位	備考
		間		間	短~長	X	Y	柱 形状		最小	最大	深さ	深	浅		
		間	間	間	間	間	間									
1	I	2	4.4	2.20~2.30	-129,350	-38,367	方	0.60×0.60	0.84×0.86	0.56	0.24				N-10°-E	
2	I	3	4.6	1.20~1.60	-129,303	-38,321	方	0.50×0.50	0.80×1.50	0.60	0.30				N-6°-W	

表7 I地区古代柾列計測値表



第111図 G360柱穴出土遺物

203は壊身で平底のもの。205、206は土師器の鉢である。

#### f. 溝

A225溝（第74図）溝は、A地区の南西部X=−129,400、Y=−38,408付近に存在し、古代と推定される溝1より北西方向に延びる。検出長約16.3m、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。遺構埋土中より、須恵器壊蓋、土師器杯身、土師器皿、土師器甕、土師器瓶など（第114図、図版28-1）が出土している。

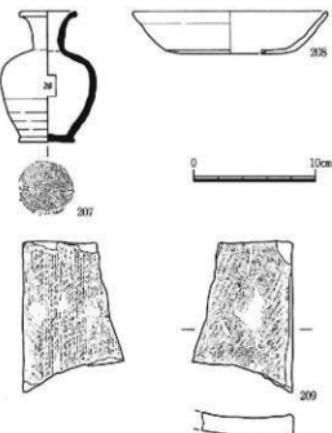
#### g. 井戸

G121井戸（第115図、図版7-2）調査区東北よりのX=−129,033、Y=−38,618付近で検出した井戸で、平面は南北に長い垂な楕円形を呈し、長径約1.9m、短径約1.7mを測る。深さは約1.7mで、調査終了直前に重機で、掘削して断面図を作成した。埋土は礫混じりの褐灰色粘質土など10層で、回レンズ状に堆積しており、水溜の施設や井戸枠等は無く、素掘り井戸であった。奈良時代から平安時代前期頃の土器が出土している。

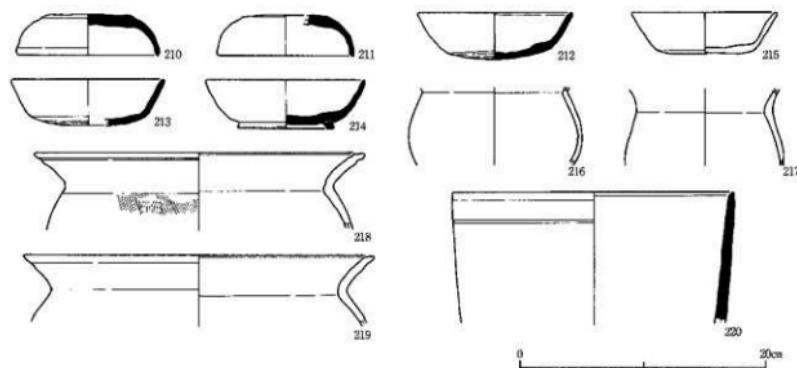
**出土遺物（第116図）** 229から235は土師器である。229は皿で底面に指オサエが残り、口縁部は僅かに外反する。230から232は杯で230、231の体部はナデ、口縁はヨコナデで調整する。232は内面に密なヘラミガキを施す。235は甕の口頭部で、口縁端部を僅かにつまんで内傾させる。体部外面は粗いハケメである。233、234は須恵器杯Bで平らな底部から開いて立ち上がる口縁部をつくる。237は土師器の高杯脚部で、六角形に面取る。238から240は須恵器。238は甕で頭部は外掛気味に立ち上がり口縁端部を僅かに外傾させる。239は甕の底部。240は壺の胴部である。

#### h. 包含層出土遺物

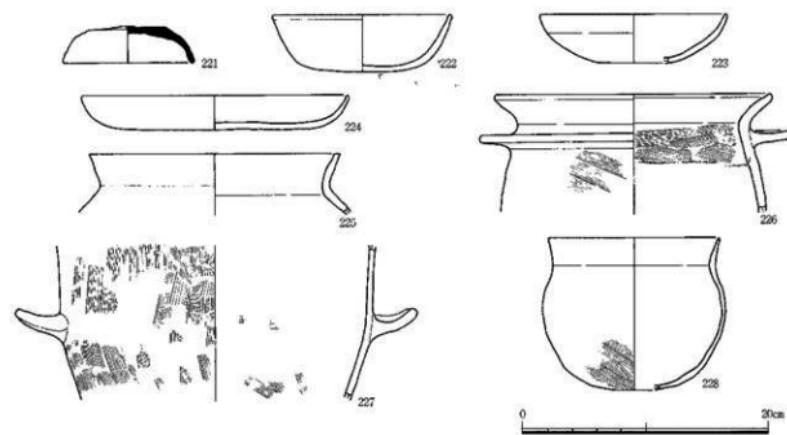
**G地区包含層出土遺物（第117図）** 241から244、255は須恵器。241は扁平な蓋壺で、摘みがつ



第112図 A321土坑出土遺物



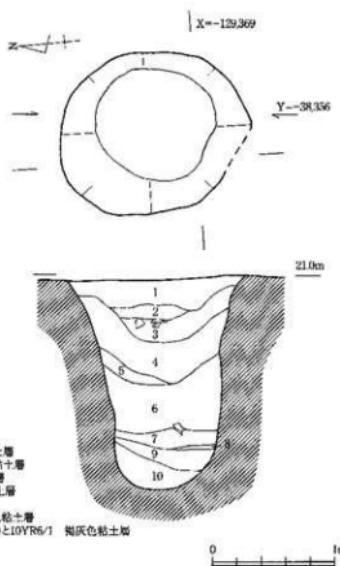
第113図 A4497土坑出土遺物



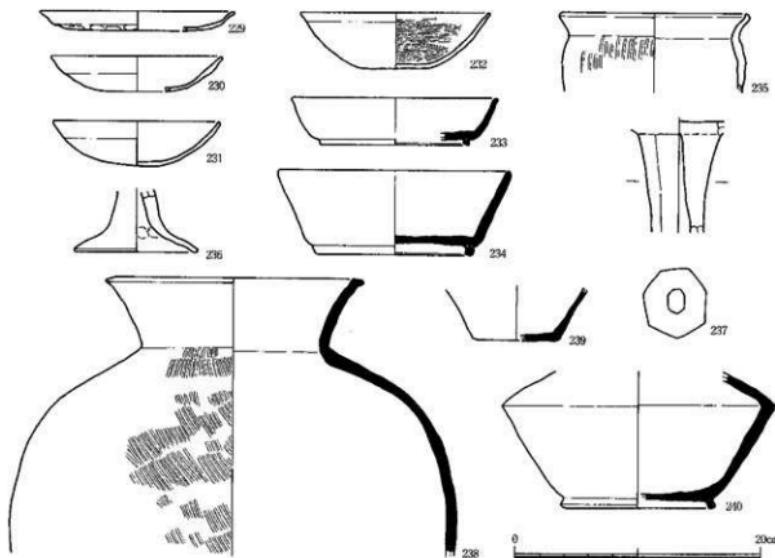
第114図 A225溝出土遺物

くもの。242、243は壺Aで、243はやや丸みを持つ底面から徐々に細くなる口縁部をもつ。244は壺Bである。245、247から254は土師器。245は壺で、外側は板ナデ、内側はハケメで仕上げる。247は平底の甕、248から251は甕胴部で、脹らんだ胴部から、僅かに縮まる頸部をつくり、「く」字形に外反する口縁部をつくる。252、253は土釜で、口縁部は「く」字形に外反する。

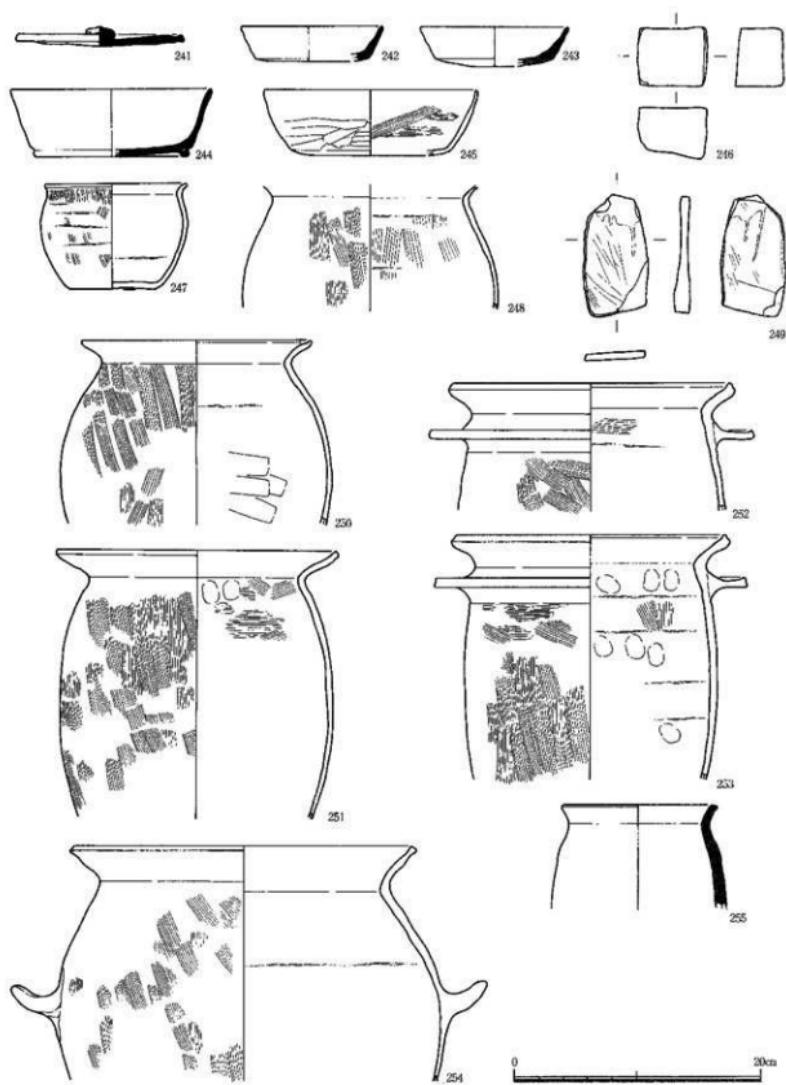
254は把手付きの甕である。246、247は砥石。



第115図 G121井戸平面・断面図



第116図 G121井戸出土遺物



第117図 G地区包含層出土遺物

#### 4. J地区の調査

##### a. 概要

J地区では調査区中央から北側で奈良時代から平安時代前期の9棟の掘立柱建物を検出した。南端では弥生時代後期の周溝墓があり、奈良時代頃には封土が削平され、周溝墓東側の谷が平坦化されるようであるが、この時期の遺構は検出できなかった（第118図）。

##### b. 建物

**建物68**（第119図） 調査区北端で検出した桁行4間、梁間3間の東西建物である。規模は約6.3m×約5.1mを測る。柱穴は丸みを持った方形で、小さいものは直径約0.45m×約0.5m、大きな柱穴で0.75mを測る。柱間寸法は桁側が1.6m前後、梁側は1.7mから1.8mを測り、比較的詰まっている。主軸はN-28°-Wを示す。

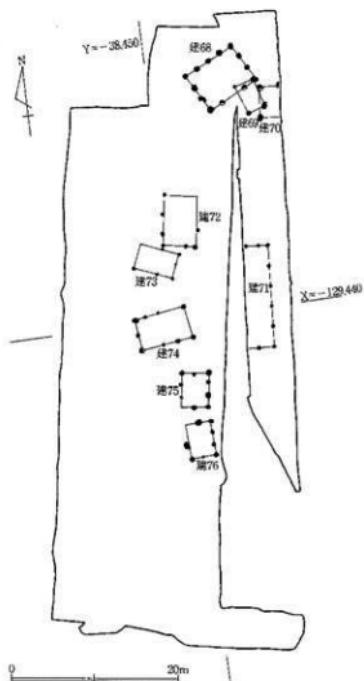
**建物69**（第121図） 建物68の南東部が重なる位置で復元した桁行2間、梁間1間の南北建物である。規模は約3.5m×約2.4mを測る。西側の中間柱を検出できなかったが、東側桁行の柱間寸法は約1.3m、約2.2mを測る。主軸はN-18°-Wを示す。

**建物70**（第122図） 建物68の東側で復元した。東は調査区外に伸びているが、南北2間、東西1間以上の建物である。現況で南北約3.4m、東西約2.4mを測る。南北軸はN-6°-Eを示す。

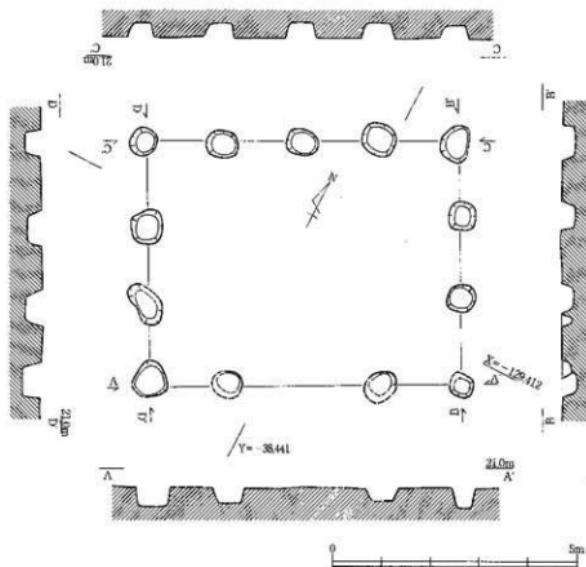
**建物71**（第123図） 東側調査区で復元した南北に長い建物である。桁行は5間、梁間は西側が調査区外であるが、3間から4間になると考えられる。規模は約12.2m×約2.6m以上を測る。桁側の柱間寸法は2.30mから2.40mでほぼ等間隔であるが、梁間は北が約1.2m、約1.5m、南が約1.8mを測る。主軸はN-5°-Eを示す。

**建物72**（第120図） 調査区中央付近で復元した南北建物である。攪乱のため北東部の柱穴を検出できなかったが、南北に長い3間×2間から3間の建物と推定している。規模は約6.1m×約3.9mを測る。西桁行の柱間寸法は約1.4m、約2.3m、約2.4mを測り、南が詰まった間隔となっている。主軸はN-10°-Eを示す。

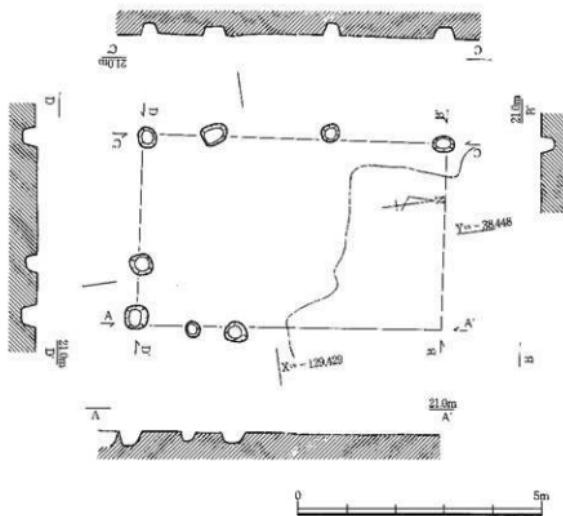
**建物73**（第124図上） 建物72の南側で復元した桁行2間、梁間1間の東西建物である。規模は約4.8m×約3.0mを測る。桁側の柱間寸法はずれるが南



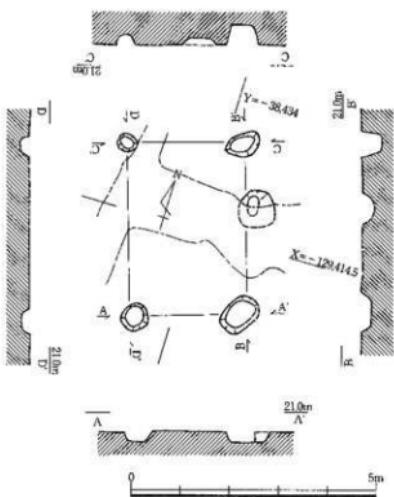
第118図 J地区古代遺構配置図



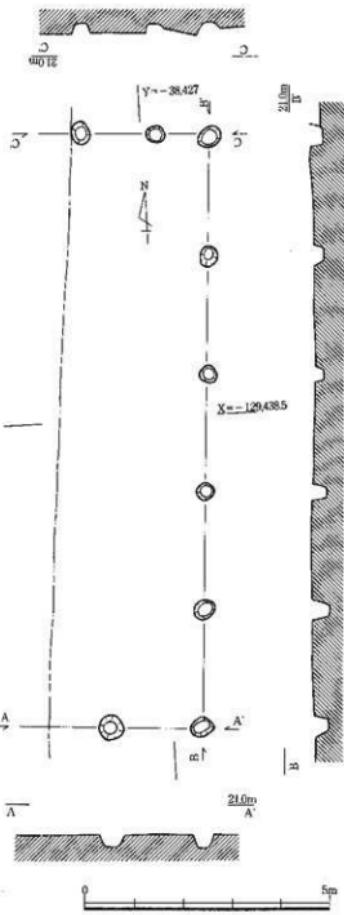
第119図 建物68平面・断面図



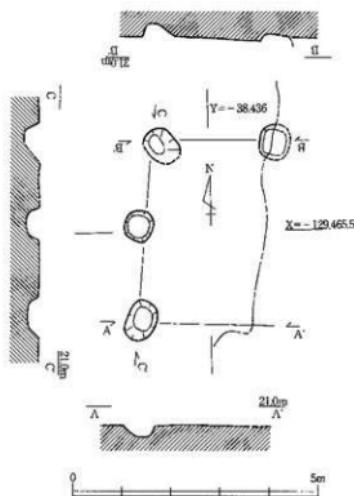
第120図 建物72平面・断面図



第121図 建物69平面・断面図



第123図 建物71平面・断面図



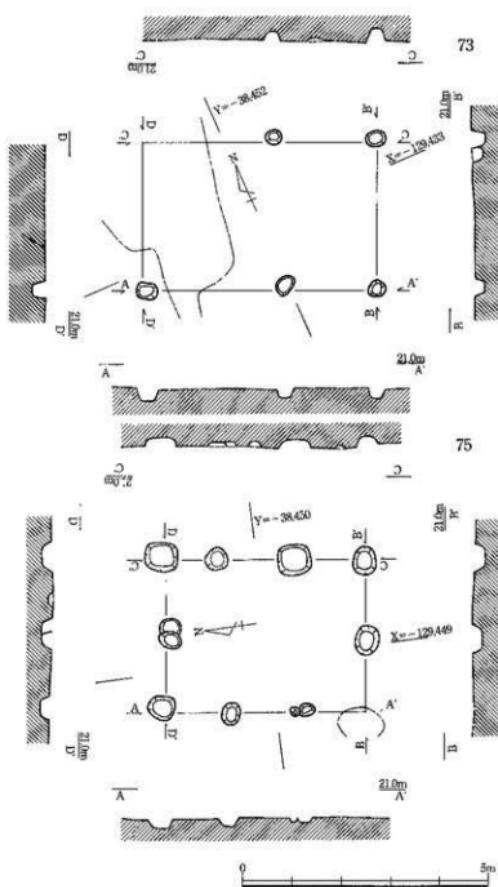
第122図 建物70平面・断面図

は約2.9m、約1.9mを測り、間隔が広い。長軸はN-25°-Wを示す。

**建物74 (第125図)** 調査区のほぼ中央で復元した、桁行3間から4間、梁間2間の東西建物で、規模は約6.0m×約3.8mを測る。柱間寸法は桁行が4間とすると、1.7m前後、梁行は約1.9mを測り、ほぼ等間隔になる。主軸はN-7°-Wを示す。

**建物75 (第124図下)** 建物74の南側で復元した桁行3間、梁間2間の南北建物で、規模は約4.0m×約3.1mを測る。柱間寸法は桁側が1.0mから1.5m、梁間は1.6mを測り、狭い柱間隔の建物である。主軸はN-7°-Eを示す。

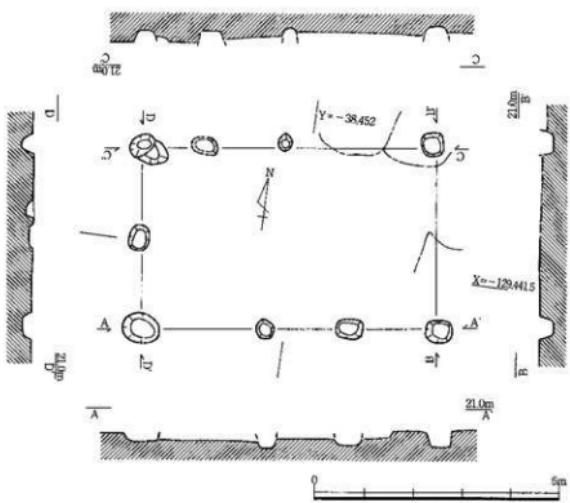
**建物76 (第126図)** 建物75の南側で復元した。北東隅の柱を欠くが桁行3間、梁間2間の南北建物で、約4.1m×約3.0mを測る。この建物も柱間寸法は狭く、1.3mから1.5mの範囲内にある。主軸はN-2°-Eを示す。



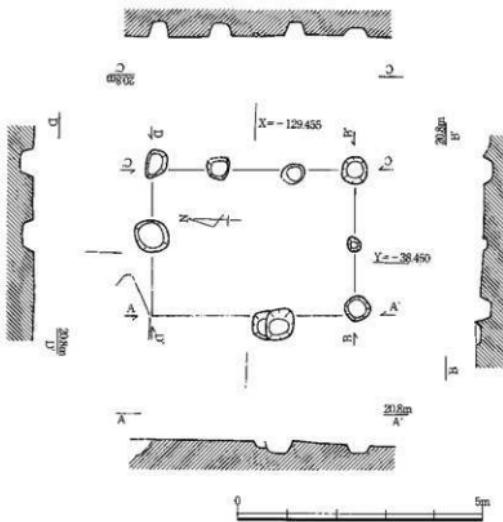
第124図 建物73-75平面・断面図

番号	地区	梁間		桁行		柱間 (m)	位置		柱 柱 形状	柱穴 (m)			柱 高 (m)	方 位	備 考
		間	(m)	間	(m)		短-長	X		方	最小	最大			
68	J	3	5.1	4	6.3	1.6-1.8	-129.412	-38.441	方	0.45×0.80	0.75×0.75	0.35	0.25	N-28°-W	
69	J	1	2.4	2	3.5	1.3-2.4	-129.414	-38.434	方	0.35×0.40	0.60×0.85	0.40	0.20	N-18°-W	
70	J	2	2.7	1以上	2.4以上	1.8-2.5	-129.465	-38.436	方	0.60×0.65	0.60×0.85	0.25	0.15	N-6°-E	
71	J	2以上	2.6以上	5	12.2	1.1-2.4	-129.438	-38.427	方	0.40×0.80	0.54×0.50	0.38	0.18	N-5°-E	
72	J	2	3.9	3	6.1	1.1-2.4	-129.429	-38.448	方	0.34×0.30	0.48×0.48	0.32	0.18	N-10°-E	
73	J	1	3.0	2	4.8	1.9-3.0	-129.433	-38.452	方	0.34×0.30	0.44×0.24	0.30	0.18	N-23°-W	
74	J	2	3.8	3	6.0	1.2-2.6	-129.441	-38.452	方	0.26×0.20	0.78×0.60	0.30	0.10	N-7°-W	
75	J	2	3.1	3	4.0	1.3-1.6	-129.449	-38.450	方	0.25×0.30	0.65×0.65	0.20	0.10	N-7°-E	
76	J	2	3.0	3	4.1	1.3-1.5	-129.455	-38.450	方	0.30×0.30	0.65×0.70	0.30	0.10	N-2°-W	

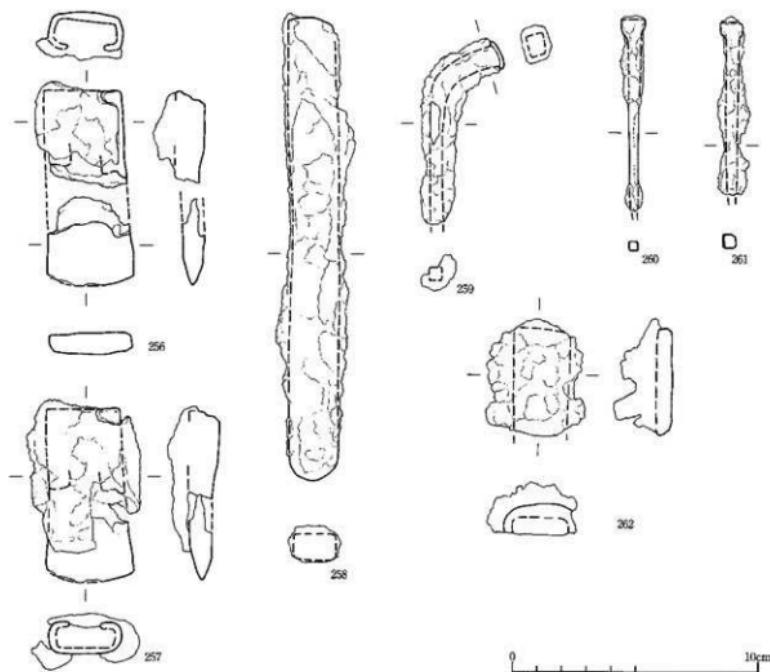
表8 J地区古代建物計測値表



第125図 建物74平面・断面図



第126図 建物76平面・断面図



第127図 J 地区出土鉄製品

c. J 地区出土の鉄製品

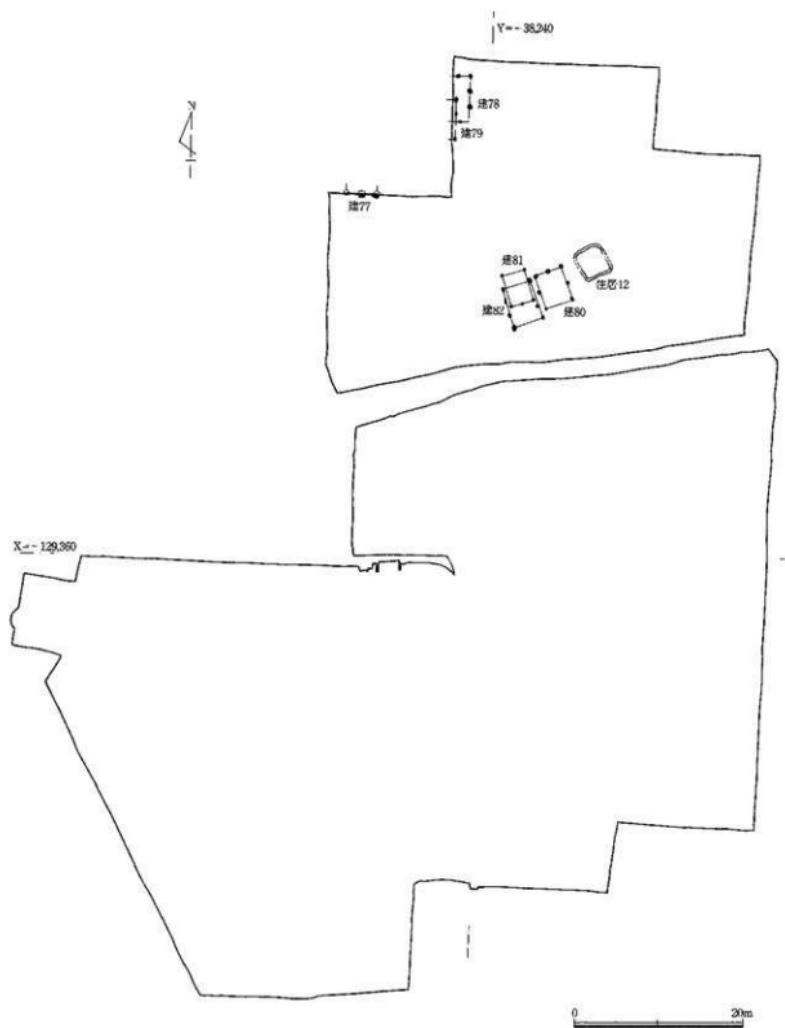
J 地区では中世の石敷造構や包含層から鉄製品が出土した（第127図）。

256・257は鉄斧で 256は現存長約8.4cm、幅約3.6cm、257は約7.6cm、約3.7cmを測る。J4200石敷造構の石の下から出土した。258は長さ約18.5cm、幅約2.0cm、厚さ約1.2cmを測る方形の製品で、両端は折れて丸くなっている。259は鉄釘の曲がったものか。さびが進んでいるが、断面は長方形である。260・261は釘の破片で、260は現存長約8.5cm。262は用途不明。  
(阿部)

## 5. H・K地区の調査

### a. 概要

H地区では多数の柱穴を検出した。中には大型の方形柱穴もあるが、遺物から古代と断定できるものではなく、すべて中世のものとして扱った。



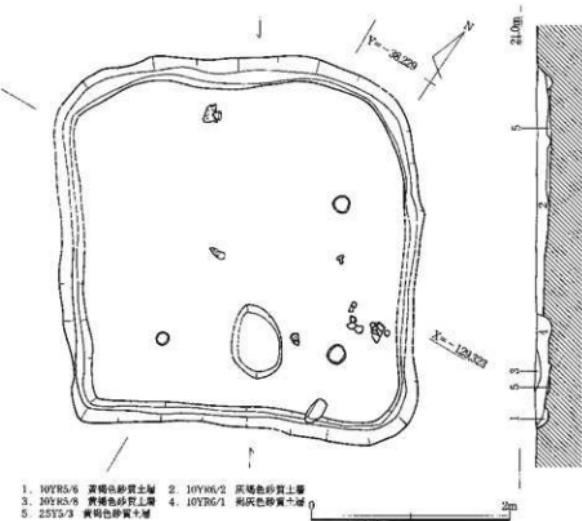
第128図 K地区古代遺構配置図

K地区では、水路の北部で古墳時代後期の竪穴住居と、奈良時代から平安時代前期の掘立柱建物を6棟復元した(第128図)。

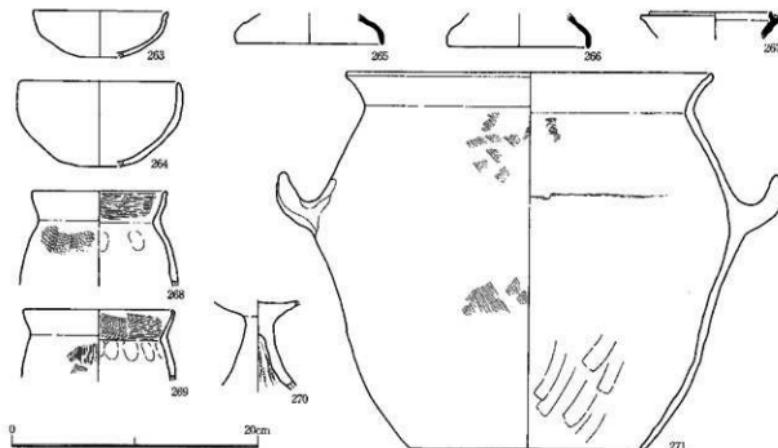
#### b. 造構

**住居12(第129図)** 北東辺の一部が攪乱されているが、約3.8m×約3.6mの隅丸方形の竪穴住居跡である。主軸は座標北から約45度西に振っている。床面までの深さは約0.2mで、南西辺を除く三辺に幅0.2mから0.3m、深さ約0.05mの櫛溝が巡る。南西辺は図化したが、溝と判別できる程度であった。床面で柱痕とみられる3カ所の柱穴を確認したが、深さは数cmであった。

南東部で長径約0.7m、短径約0.5mの楕円形土坑を検出した



第129図 住居12平面・断面図



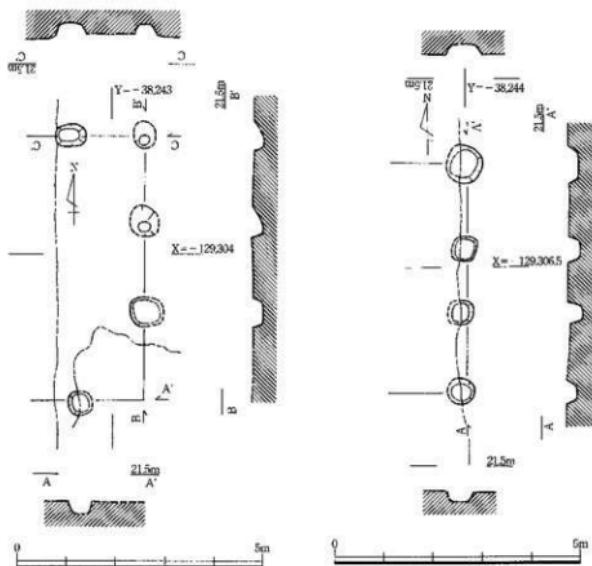
第130図 住居12出土遺物

が、灰や焼土は入っていない  
なかった。

住居跡内からの出土遺物（第130図）は、床面に接して、土師器高杯と須恵器蓋、土師器甕が出土している。また、把手つき甕は埋土内から出土した。遺物から7世紀初め頃の住居であろう。

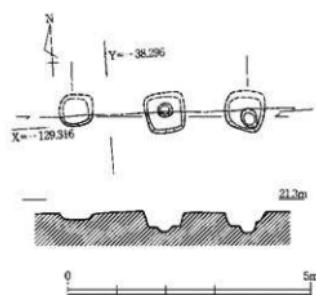
建物77（第133図）調査区西北部にある。東西2間の建物で、規模は約3.6mを測る。北側は調査区外にある。径0.6mから0.8mを測る方形の柱穴で、柱間寸法は、約1.7m、約1.9mを測る。

建物78（第131図）調査区北西端近くで検出した。南北3間、東西2間以上の建物で、南北の規模は約5.4mを測る。柱穴は隅丸方形や梢円形で径0.5mから0.6mを測る。柱間寸法は、1.50mから1.80mを測る。

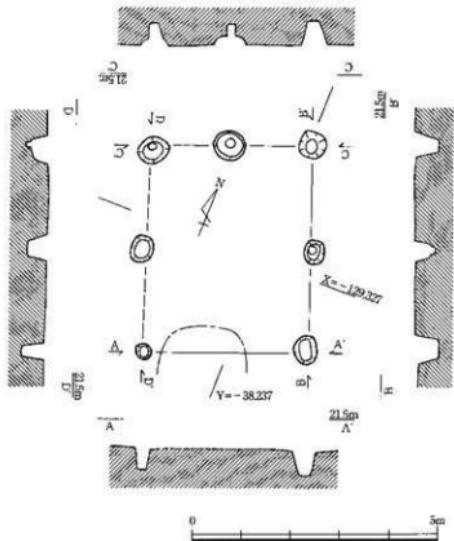


第131図 建物78平面・断面図

第132図 建物79平面・断面図



第133図 建物77平面・断面図



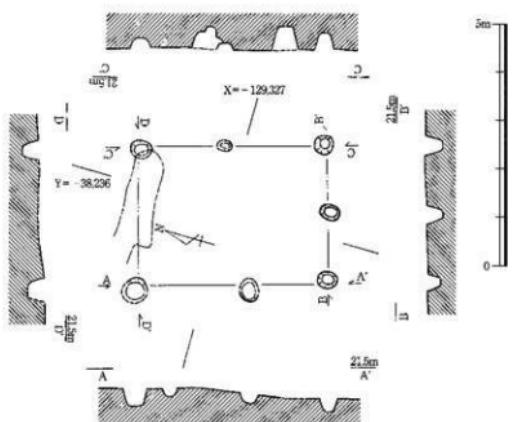
第134図 建物80平面・断面図

**建物79 (第132図)** 建物78と重なる位置で検出した南北3間の建物で、桁行約4.8mを測る。西側は調査区外にある。柱穴は径0.5m前後を測る。

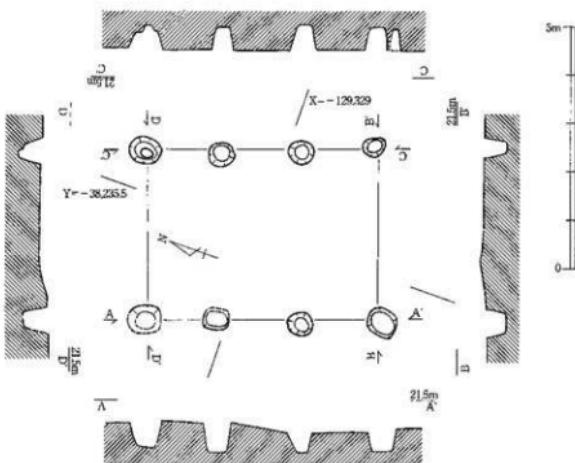
**建物80 (第134図)** 桁行2間、梁間2間の建物で、規模は約4.2m×約3.3mを測る。柱穴に柱底の残るものもあった。長軸はN-19°-Wを示し、住居12の軸に近い。

**建物81 (第135図)** 建物80の西側にある桁行2間、梁間2間の建物で、規模は約3.9m×約2.8mを測る。主軸はN-17°-Wを示す。

**建物82 (第136図)** 建物81と重複する桁行3間、梁間1間の建物で、規模は約4.7m×約3.5mを測る。柱間隔は桁側が約1.70m、梁側は約3.50mと広い。主軸はN-20°-Wを示す。(阿部)



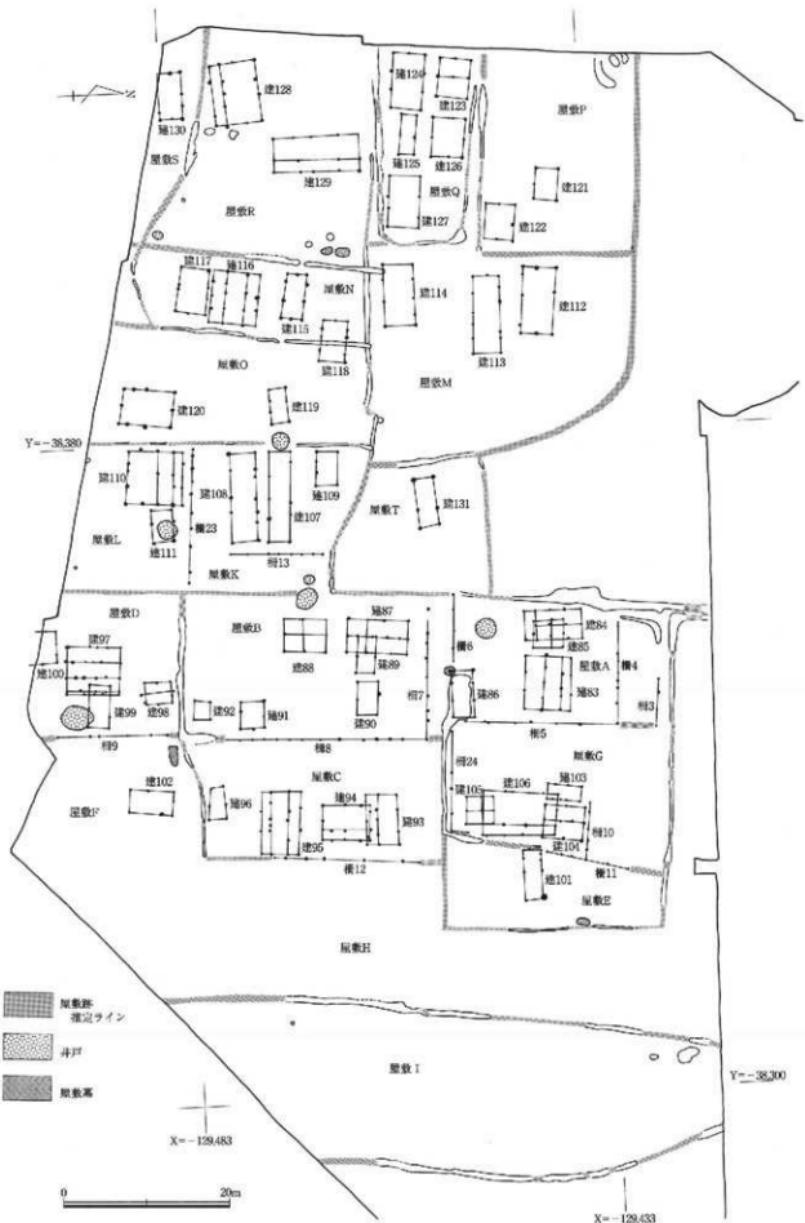
第135図 建物81平面・断面図



第136図 建物82平面・断面図

番号	地区	横間		桁行		柱間(m)	位置		柱 形状	柱穴(m)			柱 径 (m)	方位	備考
		間 (m)	間 (m)	間	短~長		X	Y		最小	最大	深さ			
77	K	2	3.6		1.7~1.9	-129.316	-38.296		方	0.60×0.65	0.80×0.85	0.4	0.01	N-2°-E	
78	K	2.5以. 上	1.8以. 下	3	5.4	1.5~1.8	-129.304	-38.243	方	0.50×0.50	0.60×0.65	0.25	0.30	N-1°-E	
79	K	3	4.3		1.3~1.8	-129.306	-38.244		方	0.45×0.50	0.70×0.80	0.30	0.20	N-1°-E	横列
80	K	2	3.3	2	4.2	1.6~2.1	-129.327	-38.231	方	0.30×0.35	0.60×0.65	0.50	0.40	N-19°-W	
81	K	2	2.8	2	3.9	1.4~2.3	-129.327	-38.236	方	0.23×0.30	0.55×0.60	0.35	0.15	N-17°-W	
82	K	1	3.5	3	4.7	1.4~3.5	-129.329	-38.235	方	0.35×0.45	0.55×0.65	0.60	0.40	N-20°-W	

表9 K地区古代建物計測値表



第137図 中世屋敷跡群配置図

## 第4節 中世の遺構と遺物

### 1. 概要

中世の遺構は、遺構の濃淡、時期の違いはあるものの、ほぼ調査地区の全域に広がる。検出した遺構は、屋敷跡20箇所、掘立柱建物49棟、柵列12本、埋納穴5基、柱穴多数、土坑32基、石敷土坑6基、井戸7基、土塙墓5基、区画溝17本など多数の遺構を検出した。

それらの中で中世の遺構が集中しているのは、屋敷跡が20ヶ所確認されたB地区からE地区にかけての区域、H地区全域とK地区西側の区域の2ヶ所である。これら2ヶ所で検出された遺構は、建物の配置状況が異なり、また、出土遺物から時期差があるものと推定される。

### 2. 屋敷跡群の調査

#### a. 概要

B地区からE地区にかけての東西136m以上、南北86m以上の範囲で検出した屋敷跡群（第137図）である。屋敷跡は、ほぼ東西方向や南北方向に延びる、区画溝、柵列、道状遺構などによって区画され、現在の所、20区画を確認している。

これらの屋敷跡の名称については、当初「区画」の名称を与えていた。しかし、報告書作成作業時に屋敷跡の遺構配置・名称の再検討を行った。その結果、遺構の名称については、最初に遺構名称を記し、区画の順については、1994年度から1996年度の調査時の区画名を踏襲することにした。また、遺構の再検討の結果、新たに区画を設けた区域については、統きの名称を与えた。また、屋敷跡内に存在する建物の配置・復元について再検討を行った。その結果、建物の配置が大幅に変わった屋敷跡も存在する。

屋敷跡内に存在する遺構は、基本的に掘立柱建物、井戸、屋敷幕と推定される土塙墓、土坑、埋納穴などによって構成されている。しかし、これら的一部が存在しない屋敷地もある。この他に建物にならない柱穴、用途不明の落ち込みなどが多数存在している。

遺物包含層である灰黄褐色粘質砂土層から出土した中世の遺物（第139図）は、瓦器碗、瓦器小皿、土師器小皿、青磁碗、白磁碗、東播系捕鉢などである。遺物の大半が12世紀末から13世紀初頭を中心とするが一部には13世紀後半に下るものもある。

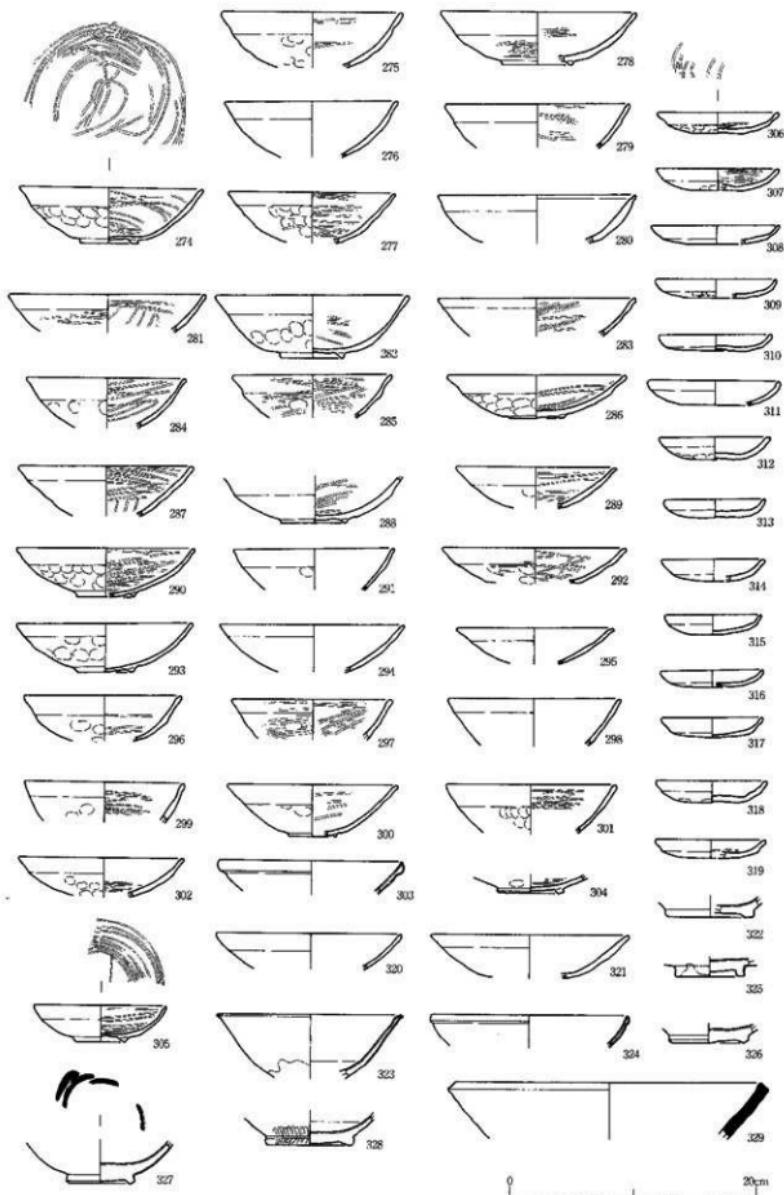
#### b. 屋敷A（第140図、図版8-1）

##### i) 概要

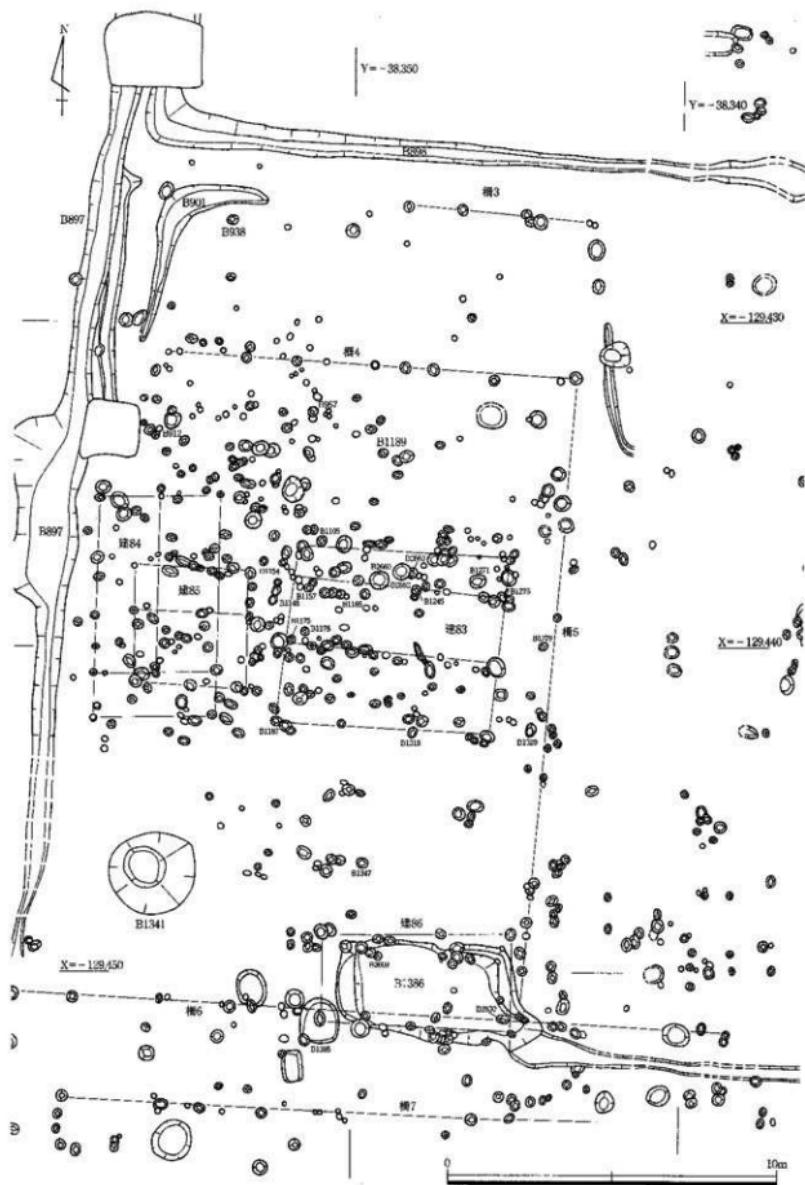
屋敷Aは、B地区の北東側X = -129,439、Y = -38,348付近を中心として存在する。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約15.0m、南北約24.5m、面積約367.5m<sup>2</sup>を測る。東側は柵5



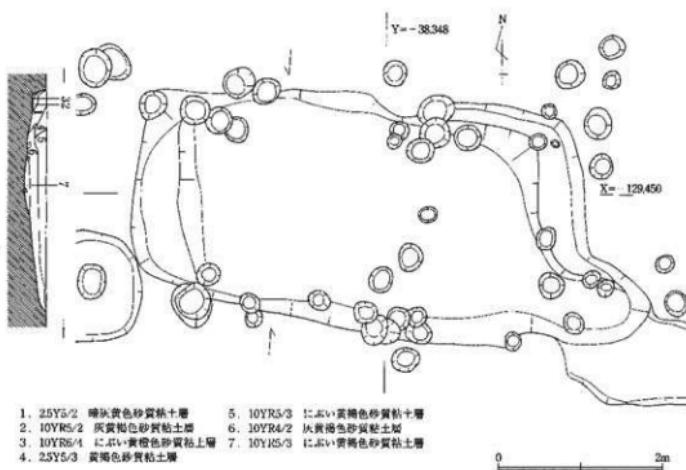
第138図 屋敷A区画溝出土遺物



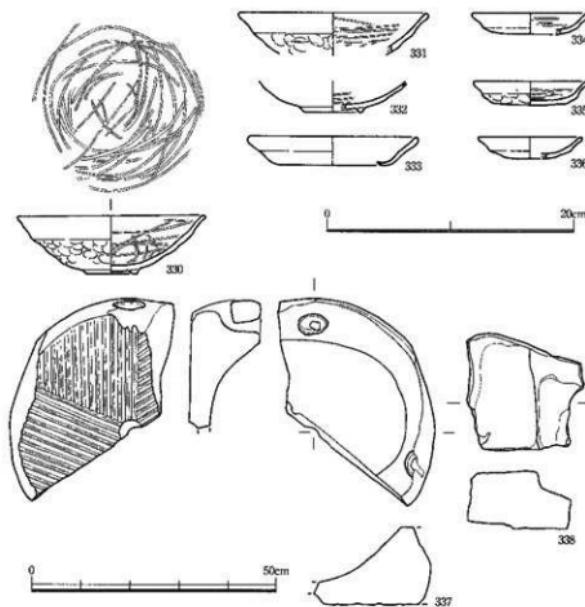
第139図 包含層出土遺物



第140図 屋敷A平面図



第141図 B1386 范池平面・断面図



第142図 B1386 范池出土遺物

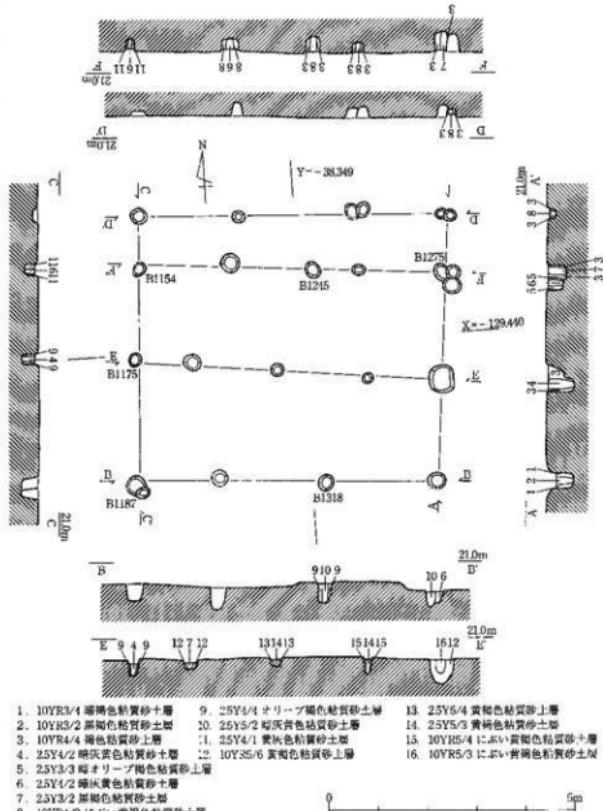
を隔て屋敷G、西側は道状遺構を隔て中世の遺構が全く存在しない空白域、北側は道状遺構を隔て中世の遺構が全く存在しない空白域、南側の東側をB1386苑池、西側を柵6を隔て屋敷Bが存在する。

屋敷Aで確認した遺構は、区画溝2本、区画溝や柵列に囲まれ道状を呈する遺構2ヵ所、柵列4本、苑池と推定される土坑1基、建物4棟、建物にならなかった柱穴多数、土坑1基、井戸1基、屋敷墓と推定される土壙墓1基などである。

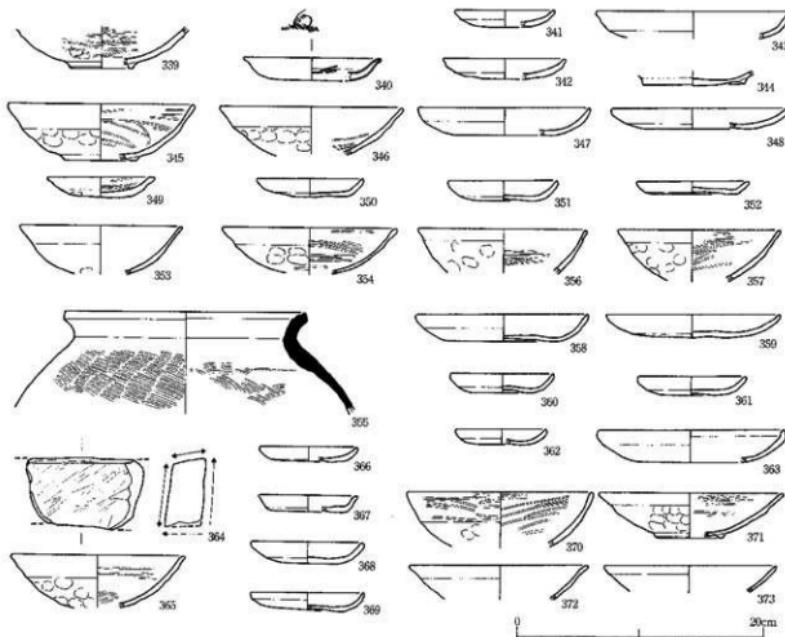
#### ii) 区画する遺構

**区画溝及び溝状遺構（第140図）** 屋敷Aの北端、西端で検出した。溝の北西コーナー付近では約1.0m隔て、逆「L」字状の溝状の落ち込みB901（第140図）が存在すること。また北側の溝B898（第140図・第210図）は、この付近で「L」字状に屈曲し、西側の区画溝B897（第140図）とほぼ平行して北側の調査区外に延びていること、逆「L」字状の溝の東側にはほぼ平行して柵列3が存在していることなどから、その間は道であった可能性が高いと考えている。西側に存在する区画溝B897は幅0.75m前後、深さ0.1m前後を測る。北側の区画溝B898は幅0.8m前後、深さ0.1m前後を測る。溝内から出土した団化できた遺物（第138図）は少量であるが<sup>5</sup>、瓦器椀、土師器鉢などが出土している。

**柵列 屋敷Aの外側**  
を囲むように存在する

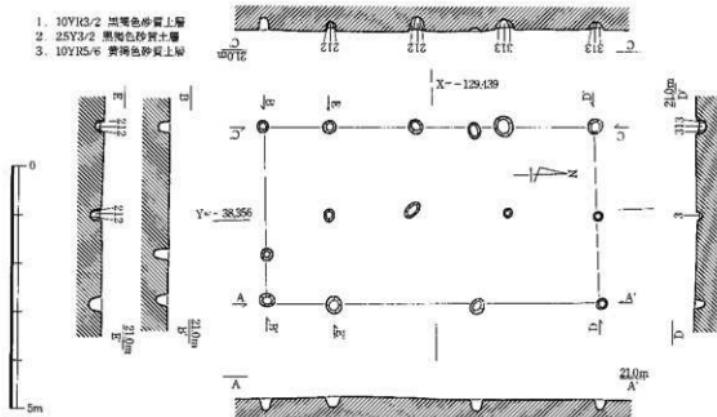


第143図 建物83平面・断面図



第144図 建物83及び周辺柱穴出土遺物

B1318(339) B1187(340) B1154(341) B1275(342・343) B1245(344) B1271(345・346・349～352)  
 B1175(353～355・364) B2660(356～361) B1157(362・366) B1165(313) B2662(365・368・369)  
 B1148(367) B1178(370) B2663(371) B1105(372) B1185(373)



第145図 建物84平面・断面図

もの（柵列3、柵列5、柵列6）と屋敷内に存在するもの（柵列4）がある。

柵列3（第140図）は、B901溝の延長線上のX = -129,427付近を東西に延びる。延長約5.7m間に4本の柱穴を確認している。柱穴は径0.4m前後、深さ0.1m前後、柱間は1.6mから2.0mを測る。その北側にはB898溝が約1.4m離れて平行に延びることから、その間に道が存在していたものと推定される。

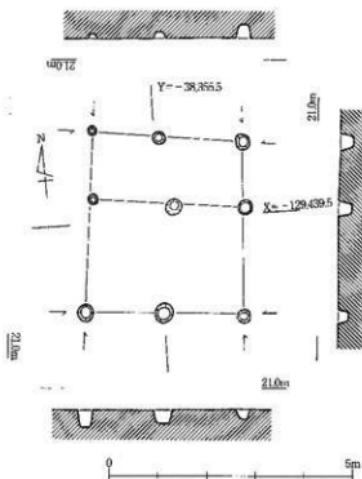
柵列4（第140図）は、X = -129,431付近をほぼ屋敷Aの東西端まで延びる。柵列4の北側は遺構が少なく、南側は建物、柱穴などの遺構を数多く確認している。このことから屋敷地内における建物群と用途は不明であるが、他の場所とを分けることを目的とした柵列であったものと推定している。延長約12.1mの間に8本の柱穴を検出した。柱穴は径0.4m前後、深さ0.15mから0.2m、柱間は1.0mから3.9mを測る。

柵列5（第140図・第225図）は、屋敷Aの東端に存在し、B1386苑池の東端付近からY = -38,344付近の軸線上を北に延びる。屋敷地の位置関係から屋敷Aと屋敷Gとを区画する柵列と推定される。延長約15.2mの間に7本の柱穴を検出した。柱穴は径0.5m前後、深さ0.15mから0.3m、柱間は1.8mから4.5mを測る。

柵列6（第140図）は、屋敷Aの南端に存在し、B1386苑池の西端付近からX = -129,452付近の軸線上を西に延びる。屋敷地の位置関係から屋敷Aと屋敷Bとを区画する柵列と推定される。延長約21.8mの間に4本の柱穴を検出した。柱穴は径0.3m前後、深さ0.1mから0.2m、柱間は1.5mから5.0mを測る。

これらの柵列の柱穴からは、瓦器棧、土師器小皿などの遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

B1386苑池（第141図、図版8-3） 屋敷Aの南東側 X = -129,450、Y = -38,347



第146図 建物85平面・断面図

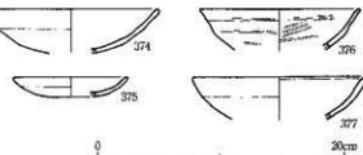
番号	渠間	桁行	柱間(m)	位置	柱 形状	柱穴 (m)			柱底 (m)	方位	備考					
						最小	最大	深さ 浅								
83	2	4.5	3	6.1	0.95~2.45	-129,440	-38,349	○	円	0.23×0.22	0.53×0.48	0.58	0.18	0.20	N-3°-E	底 6.30m
84	2	3.6	3~4	6.8	0.60~2.90	-129,439	-38,356	○	円	0.19×0.19	0.42×0.38	0.30	0.12	0.18	N-2°-E	
85	2	3.2	2	3.7	1.25~2.35	-129,439	-38,356	○	円	0.19×0.18	0.40×0.36	0.36	0.10	0.18	N-7°-E	
86	1	2.5	3	5.5	1.40~2.65	-129,450	-38,348	○	円	0.32×0.29	0.49×0.41	0.50	0.18	0.20	N-3°-E	

表10 屋敷A建物計測値表

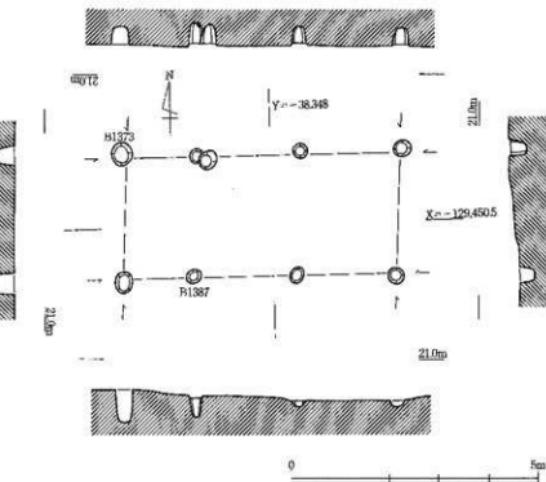
付近を中心として存在する。平面形では隅丸長方形に近く、東西長約5.4m、南北長約2.9m、苑池の底面はフラットに近く、深さ約0.2mを測る。苑池の南東端から屋敷Gと屋敷Cとを分けるB3492区画溝が東へ延びる。苑池の埋土中から、瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿、石臼、不明石製品（第142図、図版28-1・2・4）などが出土している。

### iii) 建物 (表10)

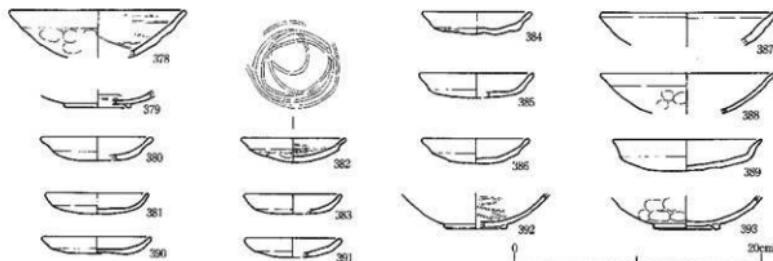
屋敷A内で確認した建物は、建物83（第143図、図版8-2）、建物84（第145図）、建物85（第146図）、建物86（第148図）の4棟である。建物83、建物84、建物85の3棟の建物は、敷地中央付近に集中して検出されている。また、建物84、建物85の建物は、前後関係は不明であるが重な



第147図 建物86及び周辺柱穴出土遺物



第148図 建物86平面・断面図



第149図 屋敷A柱穴出土遺物

B1329(378~386) B938(387) B957(388) B1189(389) B1347(390) B1279(391) B912(392) B2609(393)

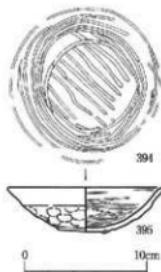
り合っている。

検出した4棟の建物の内母屋と推定される建物は、建物の規模、屋敷地内での位置関係などから総柱建物の建物83で、北側に庇が付く。

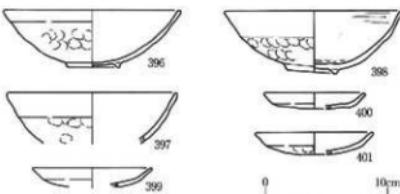
建物83からはB1187、B1318、B1275の各柱穴および建物周辺に存在する柱穴B1271、B2660、B1178、B1245、B2263、B1175、B1165、B2662、B1154、B1185、B1329、B1157、B1148、B1245、B1165、B1329、B1279から瓦器楕、瓦器小皿、土師器小皿、土師器皿、須恵器甕、砥石などの同化できる遺物（第144図、図版29-3・4）が出土している。

建物84は、建物の配列状況から当初作業小屋と考えていたが、柱穴の配列が総柱建物に近く、規模が大きいことから母屋に伴う一連のものであると判断した。

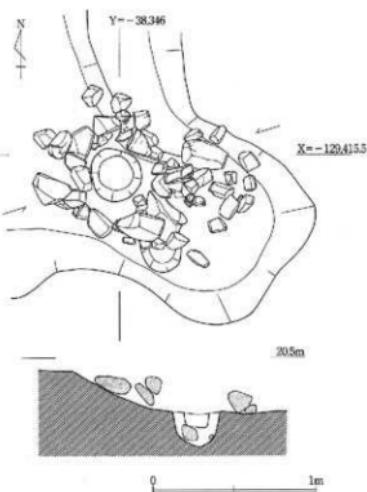
建物86は、土層断面等では確認は出来なかったが、苑池内X=-129,450、Y=-38,348付近で検出したB2630柱穴（第150図）の周囲に石を敷き詰めて柱を固定していた状況を示していることから、B1386苑池が使用されなくなり、埋没しないしは埋められた後建て



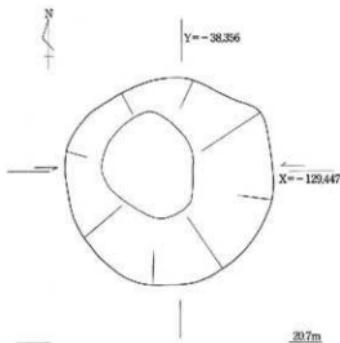
第152図 B1341  
井戸出土遺物



第153図 B1377土坑出土遺物



第150図 B2630柱穴平面・断面図



第151図 B1341井戸平面・断面図

られたものと推定される。建物86からは、B1373、B1387、B1396の各柱穴、周辺のB1385、B2609の各柱穴より瓦器碗、土師器小皿などの図化できる遺物（第147図、図版29-10）が出土している。

なお、建物にならなかった屋敷A内の柱穴からも瓦器碗、瓦器小皿、土師器小皿などの遺物（第149図）が出土している。

建物の配列状況、前後関係から当初から存在していたのは屋敷地中央に存在する2棟で、その後B1386苑池周辺にも建てられたものと推察している。

これら確認出来的建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において何回かの建て替えが行われた可能性が高い。

#### iv) 土坑

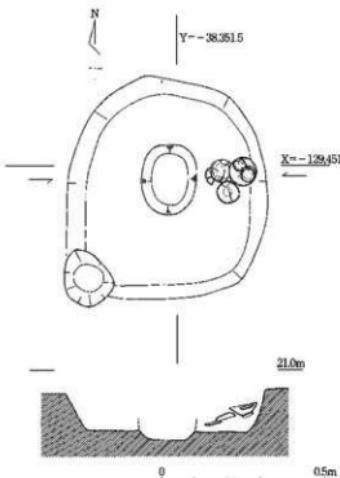
**B1377土坑** 屋敷Aの南端中央付近X = -129,451、Y = -38,352付近で検出した。平面形では円形に近く、径0.6m前後、深さ約0.15mを測る。土坑内埋土から瓦器碗、土師器小皿（第153図、図版29-4）などが出土している。

#### v) 井戸

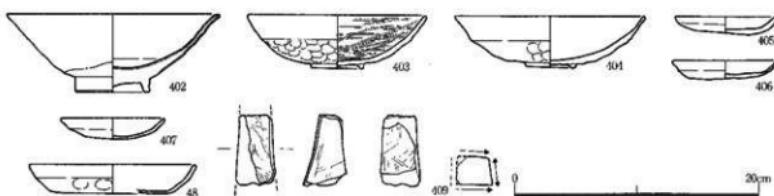
**B1341井戸**（第151図） 屋敷Aの南西端X = -129,446、Y = -38,356付近を中心存在する。平面形では円形に近い形を呈し、径2.5m前後を測る。井戸は、深さ約1.4m付近までは、鉢鉢状に斜めに下り、そこから下は径0.9m前後でほぼ垂直に下る。深さ約2m付近で、土砂の崩壊の可能性が高かったため掘削を中止した。井戸の断面の形状から、当初は井戸枠が存在していたが、放棄する際に抜き取られた可能性が高い。井戸から出土した遺物の量は少なく、図化できたものとして埋土中より瓦器碗（第152図、図版29-4）が出土している。

#### vi) 土塙墓

**B1385土塙墓**（第154図、図版8-4） 屋敷Aの南端中央付近X = -129,451、Y = -38,351付近を



第154図 B1385土塙墓平面・断面図



第155図 B1385土塙墓出土遺物



第156図 屋敷B平面図

中心として検出した。東側には接するようにB1386苑池が存在する。また、断面および平面観察の結果、建物86よりは古い。平面形では橢円形に近い形を呈し、東西長約0.6m、南北長約0.68m、底面はほぼフラットで深さ約1.1mを測る。同一地点に存在する建物86との前後関係は、土壤墓の中央部付近に存在する柱穴が土壤墓埋土中に存在していることからこれよりは古い。

遺物は、東端中央付近の土壤肩部中央から底部付近にかけて集中して出土した。出土状況から棺上部に置かれていたものと推察される。遺物の種類（第155図、図版29-5～9）は、瓦器椀（2個体）、土師器小皿（3個体）、土師器皿（1個体）、白磁碗（1個体）である。また埋土中より砾石が出土している。

### c. 屋敷B（第156図、図版9-1）

#### i) 概要

屋敷Bは、B地区の西中央X=-129,467、Y=-38,352付近を中心存在する。屋敷地の大半はB地区にあるが、西側の一部はD地区に存在する。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約17.5m、南北約29.0m、面積約507.5m<sup>2</sup>を測る。東側は柵8を隔て屋敷C、西側は区画するものは検出しなかったが、屋敷Aの西端を南北



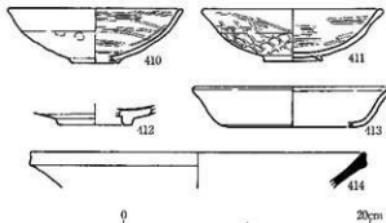
0  
8cm

第158図 建物87出土  
遺物 B1524(415)

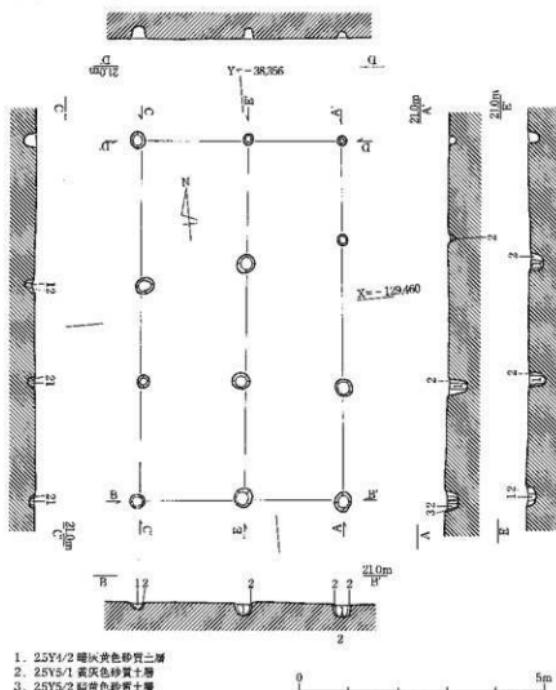


0  
8cm

第159図 建物87  
周辺柱穴出土遺物  
B1609(423)



第157図 屋敷B溝出土遺物 B1971(410-414)



第160図 建物87平面・断面図

に走る区画溝（B897）の延長線付近を境に、北は屋敷K、南は屋敷Tに接する。北側は屋敷Aで前述したように、東はB1386苑池、西は柵7を隔て屋敷A、南側は区画溝B1971を隔て屋敷Dが存在する。

屋敷B内で確認した遺構は、建物6棟、柵列2本、建物にならなかた柱穴多数、埋納穴と推定される土坑3基、土坑2基、井戸1基、屋敷跡を区画する溝2本などである。

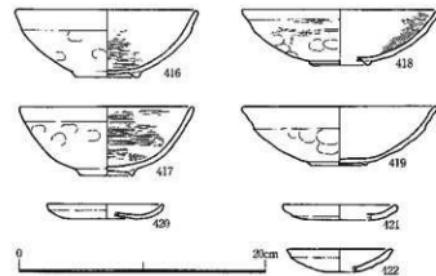
## ii) 区画する遺構

### 区画溝 B1971区西溝

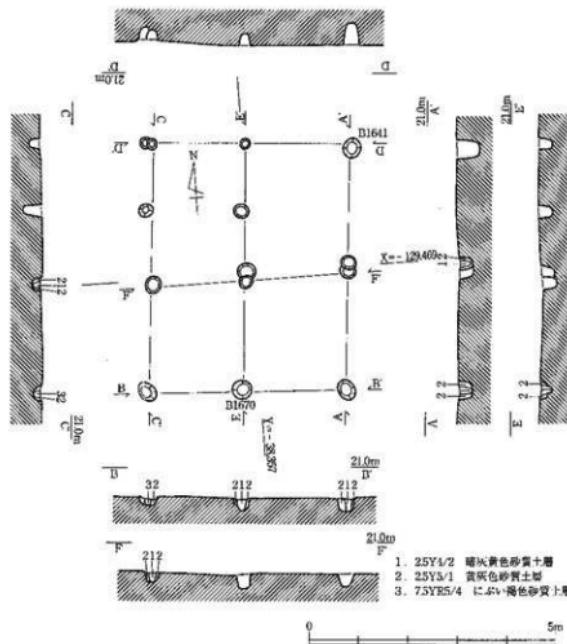
(第156図・第182図・第195図・第215図)は屋敷Aの南端で検出した。X = -129,484付近を東西に延び、屋敷Cと屋敷Fの境に存在する区画溝へ続く。溝は、屋敷Bと屋敷Cとの境のY = -38,344付近で北へ約4.1m「L」字状に屈曲し、屋敷Bと屋敷Cを分けている。その屈曲地点からやや北東方向に延び屋敷CとFを分けている。幅約1.4m、深さ約0.05mを測る。溝内からは、瓦器碗、土師器皿、青磁碗、東播系捕鉢(第157図、図版30-1)などが出土している。

**柵列** 屋敷Bの外側を囲むように存在するもの(柵列8)と屋敷内に存在するもの(柵列7)とがある。

柵列7(第156図)は、屋敷Bの北側中央X = -



第161図 建物88及び周辺柱穴出土遺物  
B1641(416・417) B1664(418) B1656(419・421) B1670(420) B1649(422)



第162図 建物88平面・断面図

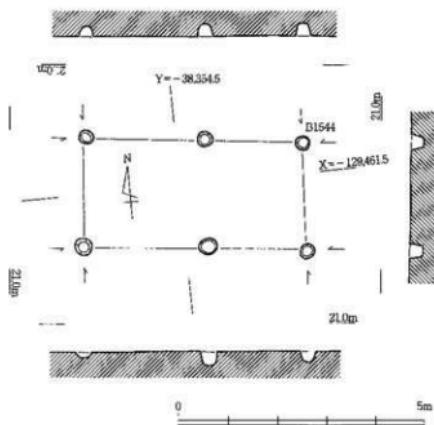
129,455付近を東西端まで延びる。柵列7の北側は遺構が比較的少なく、南側は建物、柱穴などの遺構を数多く確認している。このことから屋敷地内における建物群と他の場所とを分けることを目的とした柵列であったものと推定している。延長15.9mの間に7本の柱穴を検出した。柱穴は径0.5m前後、深さ0.1mから0.25m、柱間は1.2mから3.0mを測る。

柵列8(第156図・第182図)は、屋敷Bの東端に存在し、B1971区画溝の屈曲部Y=-38,343付近の軸線上を北に延びる。屋敷地の位置関係から屋敷Bと屋敷Cとを区画する柵列と推定される。延長約24.2mの間に11本の柱穴を検出した。柱穴は径0.5m前後、深さ0.2mから0.3m、柱間は1.5mから2.9mを測る。

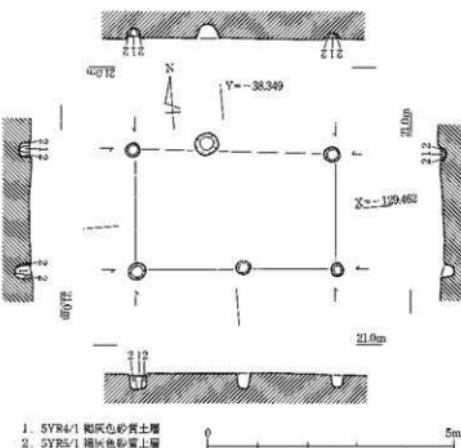
これらの柵列の柱穴からは、瓦器碗、上師器小皿などの遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

### iii) 建物(表11)

屋敷B内で確認した建物は、建



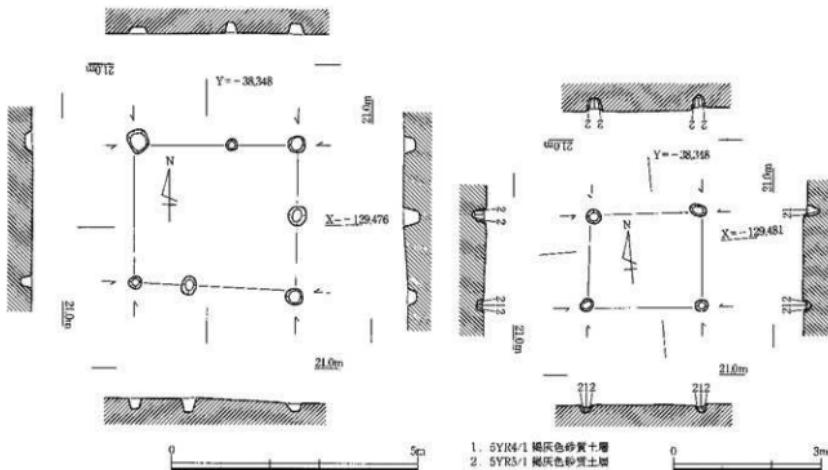
第163図 建物89平面・断面図



第164図 建物90平面・断面図

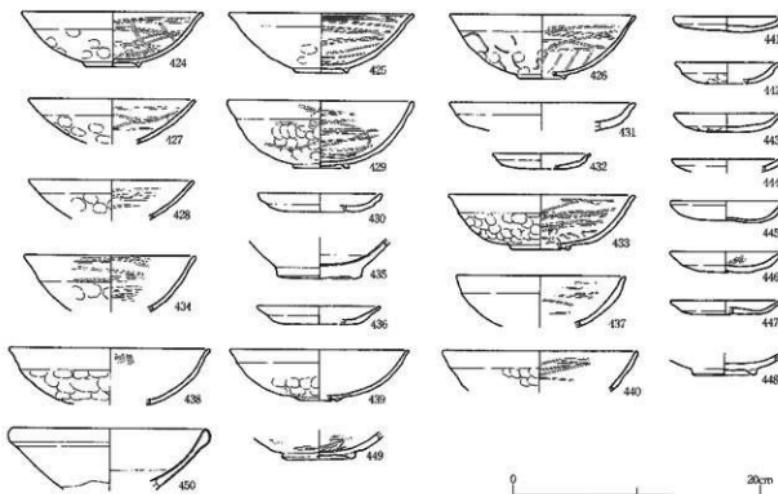
番号	梁間		柱行		柱距(m)		位差		柱 高 状 態	柱穴 (m)			柱 距 (m)	方位	備考	
	間	間	間	長	X	Y	柱 高 状 態	最小	最大	深さ	深	浅				
87	2	4.2	3	7.4	190~305	-129,460	-38,356	円	0.19×0.18	0.38×0.30	0.40	0.10	0.26	N-5°-E		
88	2	4.1	2~3	5.1	145~255	-129,469	-38,357	○	円	0.21×0.18	0.42×0.31	0.30	0.16	0.20	N-5°-E	
89	1	2.3	2	4.5	196~254	-129,461	-38,354	円	0.29×0.26	0.36×0.31	0.28	0.10		N-5°-E		
90	1	2.5	2	4.1	150~250	-129,462	-38,349	円	0.27×0.23	0.45×0.42	0.34	0.14	0.18	N-4°-E		
91	1	2.9	2	3.2	110~282	-129,476	-38,348	円	0.22×0.21	0.48×0.42	0.34	0.14		N		
92	1	1.8	1	2.3	180~230	-129,481	-38,348	円	0.24×0.24	0.27×0.25	0.30	1.60	1.80	N-6°-E		

表11 屋敷B建物計測値表



第165図 建物91平面・断面図

第166図 建物92平面・断面図

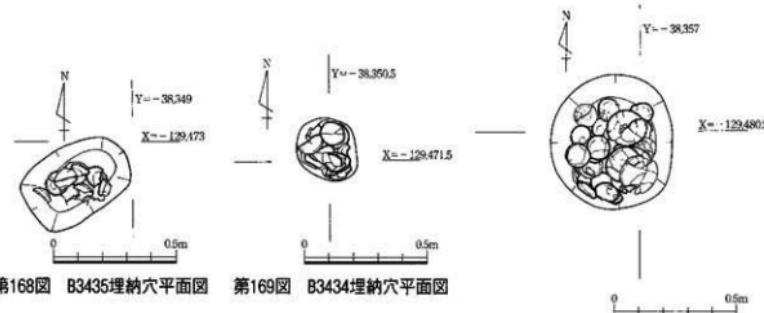


第167図 屋敷B柱穴出土遺物

B6072(424~426) B1555(427・428) B1690(429・430) B2646(431・432) B1789(433) B1881(434)  
 B1878(435・436) B247(437) B1837(438) B1544(439) B6005(440) B1706(441) B353(442)  
 B1704(443) B1757(444) B215(445) B2407(446) B263(447) B352(448)

物87（第160図、図版9-2）、建物88（第162図、図版9-3）、建物89（第163図）、建物90（第164図）、建物91（第165図、図版9-4）、建物92（第166図）の6棟である。これら確認出来的建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。

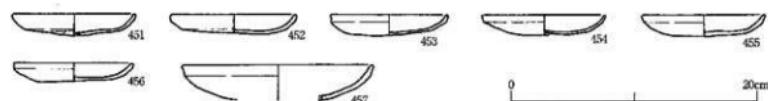
検出した6棟の建物の内、母屋と推定される建物は、建物の規模、屋敷地内の位置関係から總



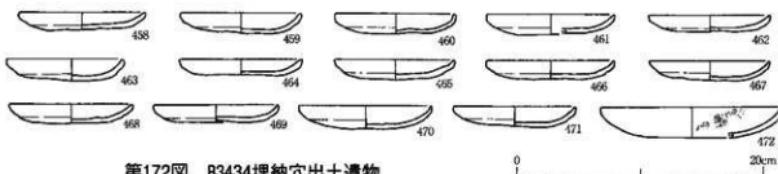
第168図 B3435埋納穴平面図

第169図 B3434埋納穴平面図

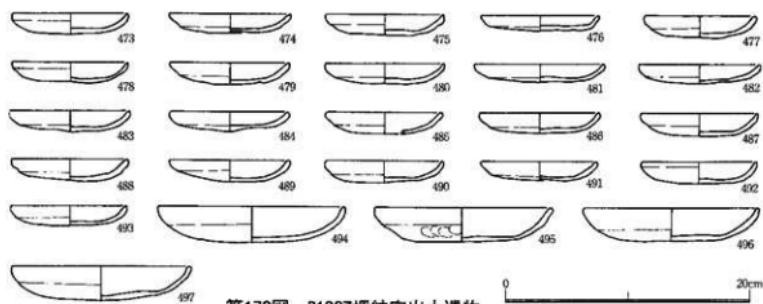
第170図 B1827埋納穴平面図



第171図 B3435埋納穴出土遺物



第172図 B3434埋納穴出土遺物



第173図 B1827埋納穴出土遺物

柱建物の建物87である。建物87の柱穴B1524（第158図、図版30-1）、周辺の柱穴B1609（第159図）より土師器小皿などが出土している。

建物87の南側約2.5m隔てて存在する、総柱建物である建物88は、建物の規模、方向、位置関係などから建物88に付随するものと考えている。遺物（第161図）は、B1641、B1670の各柱穴、周辺のB1664、B1649、B1656の柱穴より瓦器椀、土師器皿などが出土している。

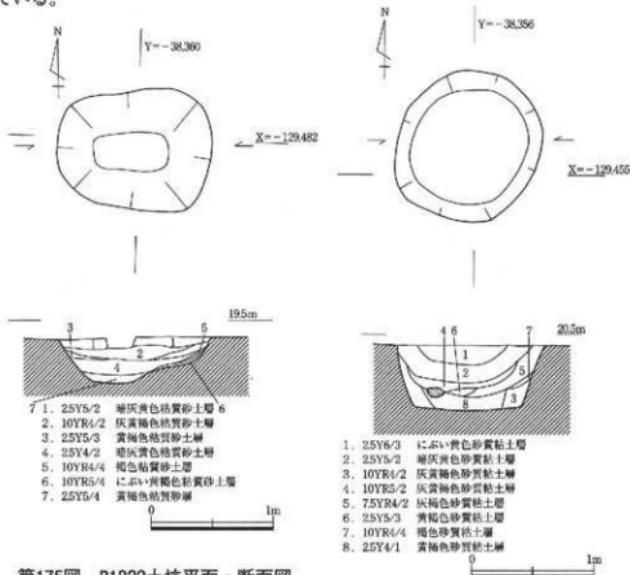
これ以外の建物89、建物90、建物91、建物92は、規模、位置から作業小屋と考えている。

なお、建物にならなかった屋敷B内の柱穴からも瓦器椀、土師器皿、白磁碗などの遺物（第167図、図版30-2）が出土している。

#### iv) 埋納穴

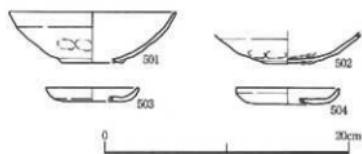
B3435埋納穴（第168  
図、図版9-5）屋敷Bの南東側X =  
- 129,473、Y = - 38,349付近を中心とす

る埋納穴である。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約0.4m、短径約0.3m、深さ約0.05mを測る。穴内部には土師器小皿（6個体）、土師器皿が（1個体）が穴底部に並べられた状況で出土している（第171図）。



第175図 B1822土坑平面・断面図

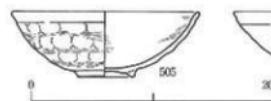
第174図 B1482土坑平面・断面図



第177図 D243土坑出土遺物



第176図 B1482土坑出土遺物



第178図 B1822土坑出土遺物

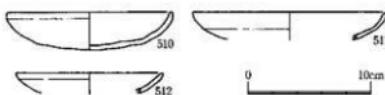
B1824埋納穴（第169図、図版9-6）屋敷Bの南東側、X=-129,471、Y=-38,350付近を中心とする埋納穴である。平面形では円形に近い形を呈し、径0.3m前後、深さ約0.05mを測る。穴内部には、土師器皿（14個体）、土師器皿（1個体）が重ねられた状況で出土している（第172図、図版30-3）。

B1827埋納穴（第170図、図版9-7）屋敷Bの南西側のX=-129,481、Y=-38,357付近を中心とする埋納穴である。平面形では円形に近い形を呈し、径0.5m前後、深さ約0.2mを測る。

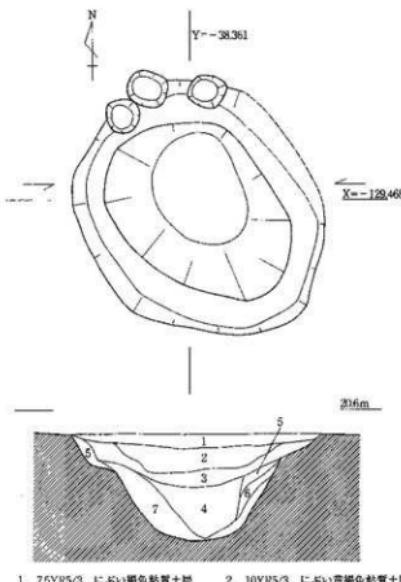
穴内部の底部から上部にかけて、土師器小皿（21個体）、土師器皿（4個体）が重ねられた状況で出土している（第173図、図版30-4）。

#### v) 土坑

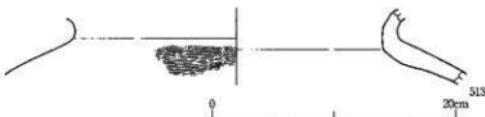
B1482土坑（第174図）屋敷Bの北西側、建物87の上方にありX=-129,455、Y=-38,356付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、底部は平らに近い。径約1.2m、深さ約0.5mを測る。土坑内部から瓦器椀、土師器皿（第176図、図版30-1）などが出土している。



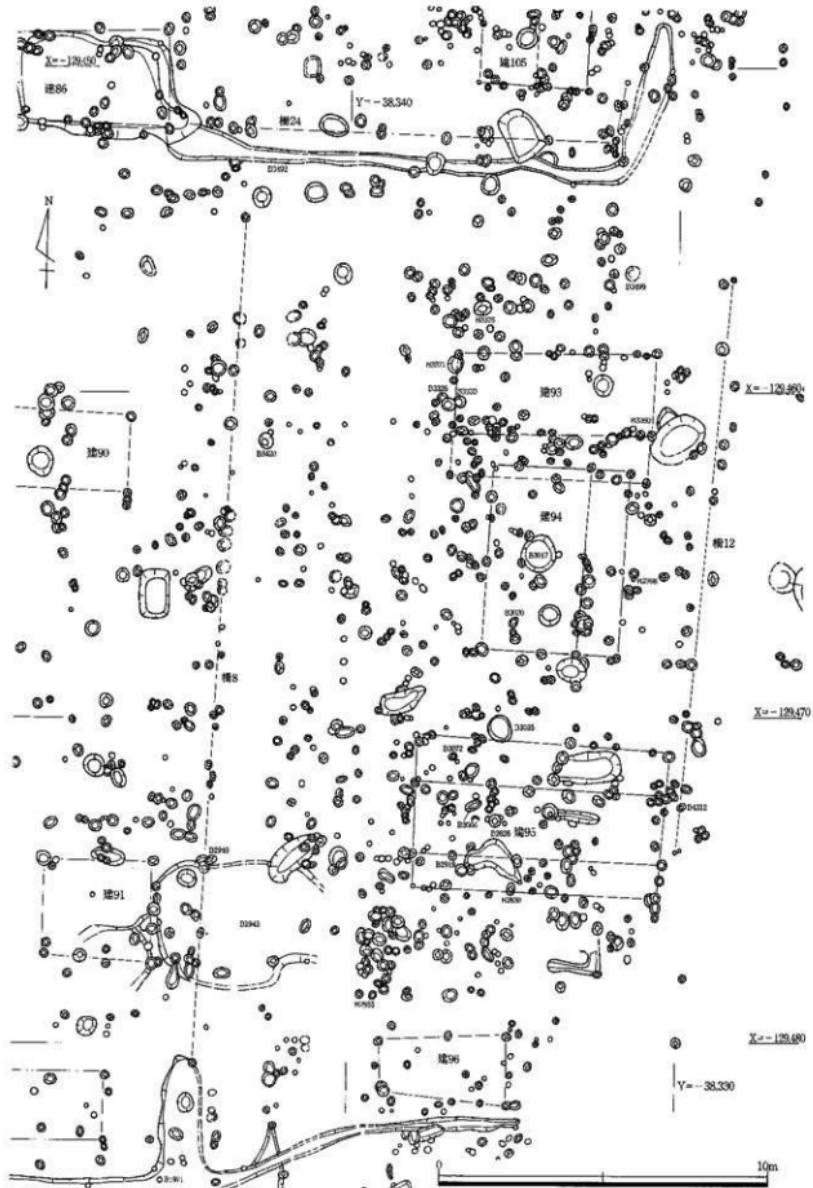
第179図 B1825土坑出土遺物



第180図 D293井戸平面・断面図



第181図 D293井戸出土遺物



第182図 屋敷C平面図

B1822土坑（第175図） 屋敷Bの南西端X = -129,482、Y = -38,360付近を中心とする土坑である。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約0.4mを測る。土坑内部から瓦器椀、土師器小皿（第178図、図版30-1）などが出土している。

B1825土坑（第156図） 屋敷B南側X = -129,480、Y = -38,356付近を中心とする土坑である。平面形では楕円形に近く、長径約1.5m、短径約0.7m、深さ約0.6mを測る。土師器皿（第179図、図版30-1）などが出土している。

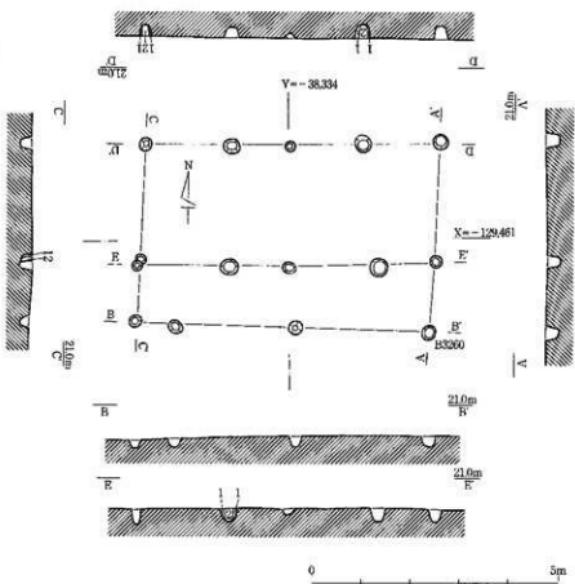
D243土坑（第156図） 屋敷Bの西側中央X = -129,478、Y = -38,361付近に存在する土坑である。土坑は周辺の柱穴と切りあっている。平面形では円形に近い形を呈し、径0.7m以上、深さ0.1mを測る。土坑内部から瓦器椀、土師器小皿（第177図）などが出土している。

#### vi) 井戸

##### D293井戸（第180図）

###### 屋敷Bの西端中央付近

X = -129,469、Y = -38,361付近を中心に存在する。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約2.7m、短径約2.4m、深さ約1.1mを測る。検出面上面から約0.4m付近で段が付き、そこからさらに底部に向かって擂鉢状に下がる。遺構の位置関係から井戸としたが、深さ約1.1mと浅いため、地下水を汲み上げるものと言うよりも、水溜の機能を持つものと考えている。埋土中より土師器甕



第183図 建物93平面・断面図

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 種 類	柱穴 (m)			柱 板 (m)	方位	備考
	間 (m)	間 (m)	間 (m)	短~長	X	Y	柱 形 状	最 小	最 大	深 さ	深 度	柱 板 (m)			
93	1.25	4	6.0	0.85~2.50	-129,461	-38,334	円	0.20×0.20	0.35×0.35	0.30	0.22	0.18	N-3°-E	柱 6.00m	
94	1.30	3	5.7	0.80~2.70	-129,466	-38,334	円	0.15×0.15	0.35×0.34	0.28	0.14	0.14	N-4°-E	柱 5.62m	
95	1.33	3~4	7.6	1.12~2.90	-129,473	-38,334	円	0.25×0.25	0.36×0.30	0.18	0.14	0.16	N-3°-E	柱 7.36m	
96	1.20	2	3.7	1.75~2.15	-129,480	-38,337	円	0.24×0.21	0.39×0.29	0.31	0.18	0.20	N-7°-E		

表12 屋敷C建物計測値表

片（第181図）などが出土している。

d. 屋敷C（第182図、図版10-1）

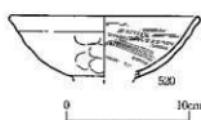
i) 概要

屋敷Cは、B地区の東中央付近X=-129,466、Y=-38,338付近を中心には存在する。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約15.0m、南北約28.0m、面積約420m<sup>2</sup>を測る。東側は柵12を隔て屋敷H、西側は柵8を隔て屋敷B、北側はB3492区画溝を隔て屋敷G、南側はB1971区画溝を隔て屋敷Fが存在する。

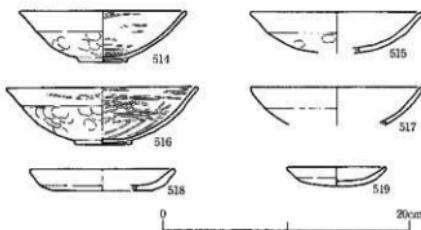
屋敷C周辺で確認した遺構は、建物4棟、柵列2本、建物にはならなかった柱穴多数、土坑3基、区画溝2本などである。

ii) 区画する遺構

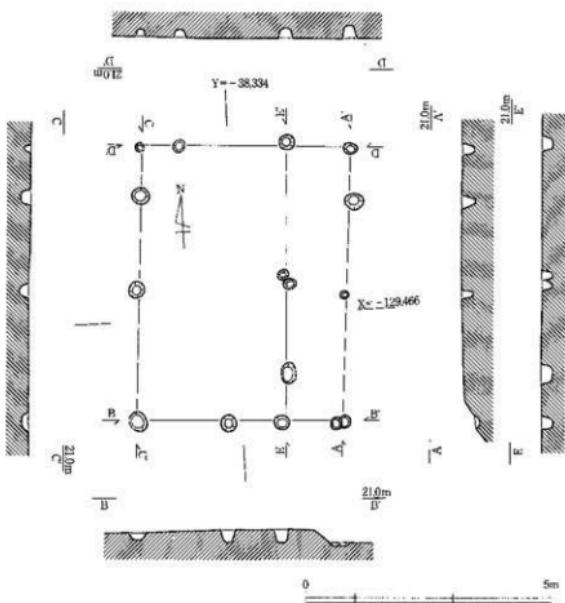
区画溝 B3492区画溝（第182図・225図）は、屋敷Cの北端、屋敷Gの南端で検出した。溝は、X=-129,453付近を東西方向に延び、X=-129,453、Y=-38,332付近で屋敷Gを囲むように北側に逆「L」字状に屈曲し、屈曲部から北へ5m付近で消滅する。幅約1.0m、深さ約0.05mを測る。区画溝の埋土からは、瓦器碗、土師器小皿などの遺物が出土したが図化できるものはなかった。



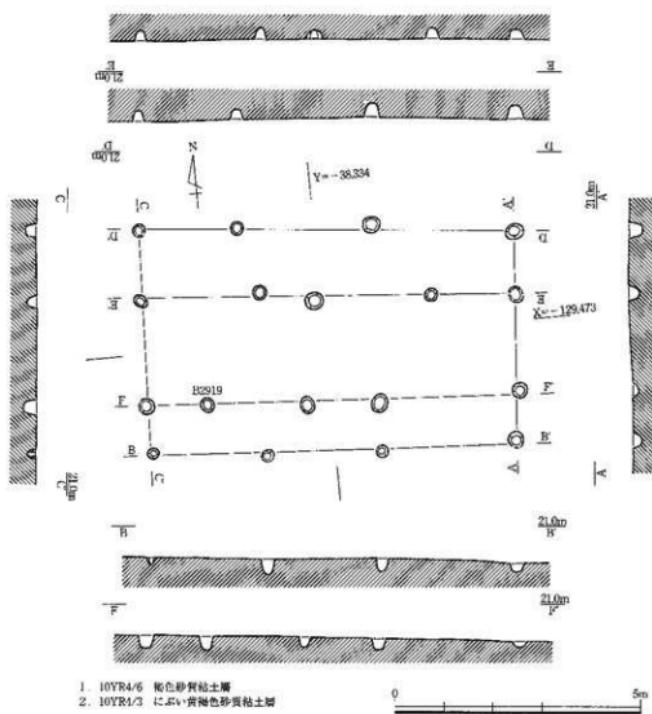
第186図 建物95及び周辺柱穴出土遺物 B2919(520)



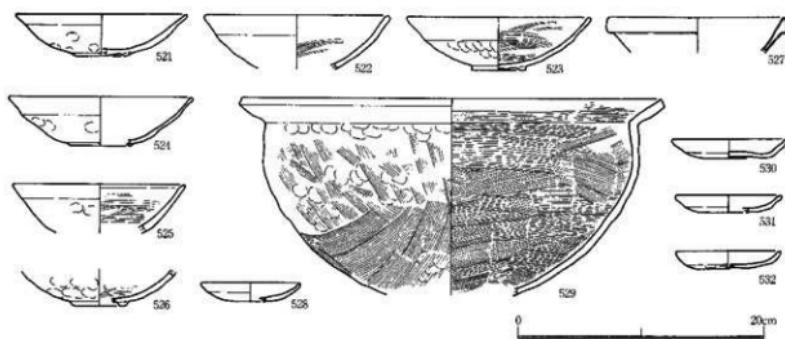
第184図 建物94及び周辺柱穴出土遺物  
B2998(514~519) B3020(515・517・519)



第185図 建物94平面・断面図



第187図 建物95平面・断面図



第188図 屋敷C柱穴出土遺物  
B2830(521) B2940(522) B3072(523) B3330(524) B4312(525) B3375(526)  
B3066(527) B3375(528) B3371(529) B2855(530) B3328(531) B3420(532)

なお、B1971区画溝については屋敷Bで記述しているので、ここでは割愛する。

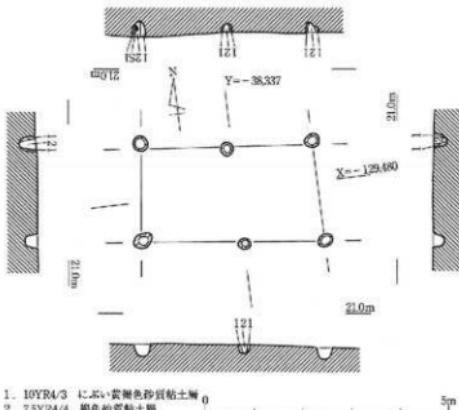
柵列 屋敷Bの東辺と西辺と推定される地点に存在している（柵列8、柵列9）。なお、柵列8については屋敷Bで記述しているため割愛する。

柵列12（第182図）は、屋敷Cの東端、屋敷Hの西端Y=-38,330付近を南北に延びる。位置関係から屋敷地と屋敷地を分ける柵列と推定される。延長約17.5mの間に7本の柱穴を検出した。柱穴は径0.5m前後、深さ0.15mから0.2m、柱間は2.0mから5.0mを測る。

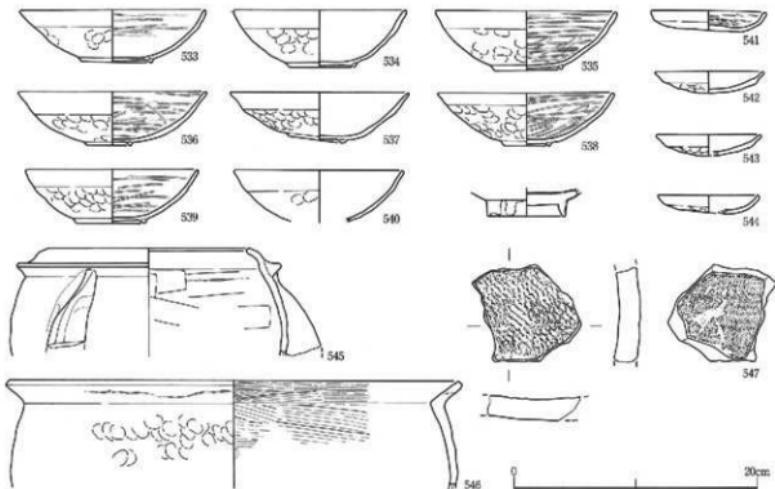
これらの柵列の柱穴からは、瓦器  
椀、土師器小皿などの遺物が出土し  
たが、図化できるものはなかった。

### iii) 建物（表12）

屋敷C内で確認した建物は、建物93（第183図、図版10-2）、建物94（第185図、図版10-2）、建物95（第187図）、建物96（第189図）の4棟である。これら確認できた建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において何回かの建て



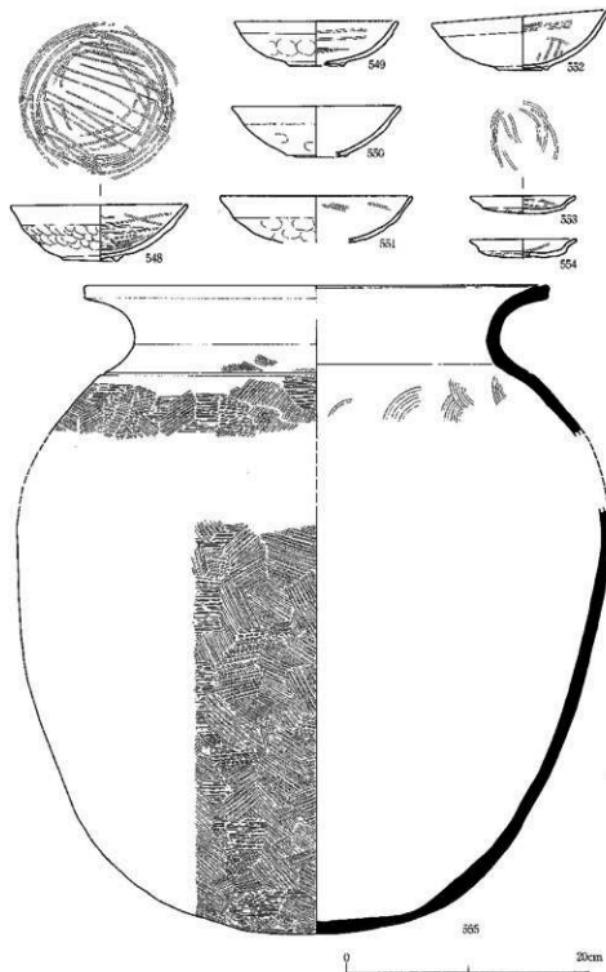
第189図 建物96平面・断面図



第190図 B1943落込み出土遺物

替えが行われた可能性が高い。検出した4棟の建物の内、母屋と推定される建物は、建物の規模、屋敷地内の位置関係から両面庇を持つ建物95と推定される。建物95からは、B2919（第186図、図版31-2）、B2830（第188図、図版31-2）の各柱穴、周辺の柱穴B3072（第188図、図版31-2）、B3066（第188図、図版31-2）より瓦器椀、土師器小皿など図化できる遺物が出土している。

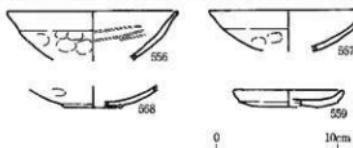
建物95の北側に存在する南側に庇を持つ建物93、東側に庇を持つ建物94は、位置関係から建物



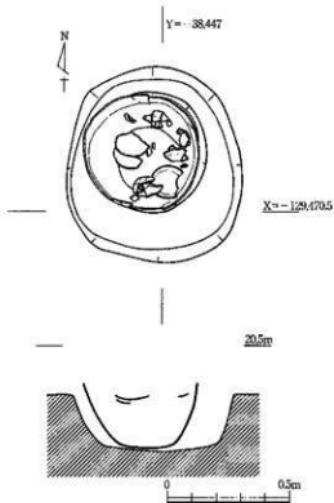
第191図 B3035土坑出土遺物

95に付随するものと考えているが、規模が両建物とも比較的大きいことから、3棟の建物とも同じ機能を持つ建物であったものと推定される。また、建物93、建物94は建物同士が重なり合っているが、平面および柱穴内からの遺物からでは前後関係は不明である。建物の配置状況から主建物は建物95と推定され、前後関係は不明だが建物93ないしは建物95のどちらかの建物が付随するものと推定される。

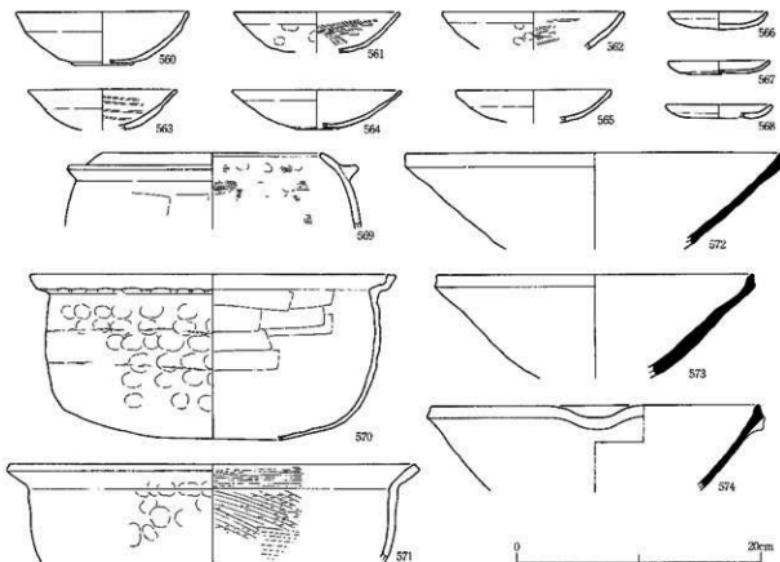
建物93の周辺柱穴 B3371、B3328（第188図、図版31-2）、建物94の柱穴 B2998、B3020（第184図、図版31-2）より図化できる遺物が出土している。



第192図 屋敷C内土坑出土遺物  
B3499(556・558) B3260(557) B2828(559)



第193図 B3035土坑平面・断面図



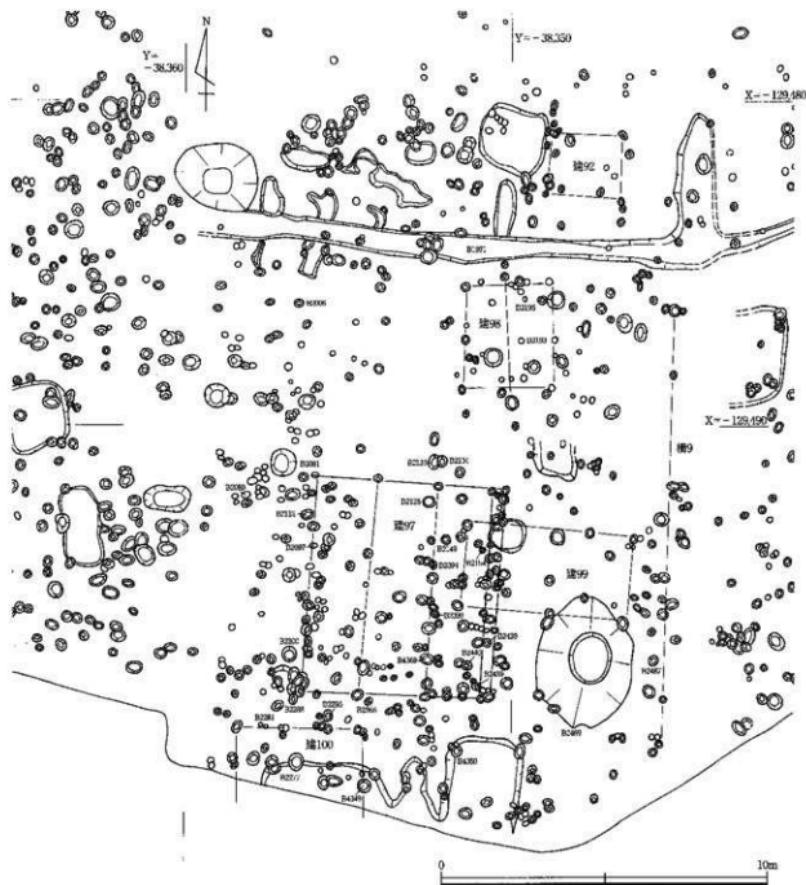
第194図 B3017土坑出土遺物

また、屋敷地南東端に存在する建物96は、建物の規模、位置関係から作業小屋であった可能性が高い。

なお、建物にならなかった屋敷B内の柱穴からも瓦器椀、土師器皿、土師器鉢、白磁碗などの遺物（第188図）が出土している。

iv) 土坑

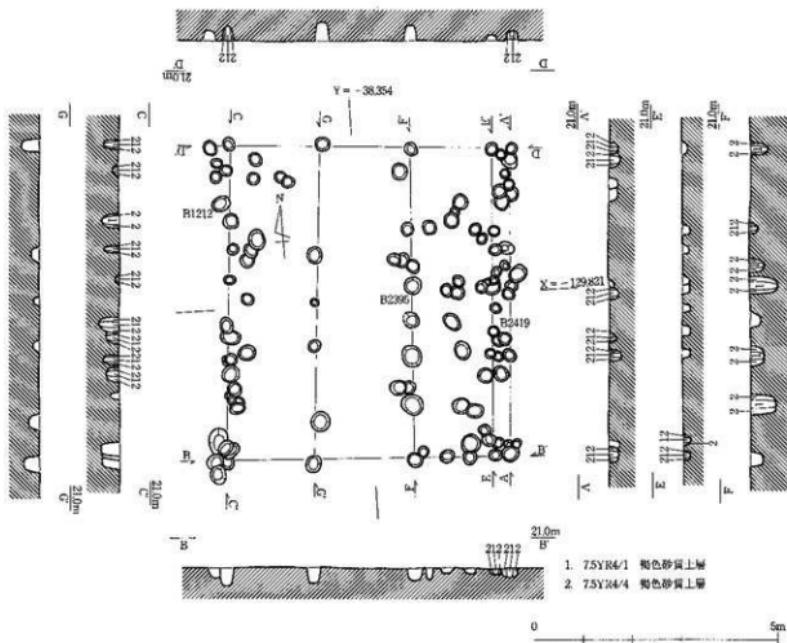
B3035土坑（第193図、図版10-3）屋敷地の中央南側X=-129,470、Y=-38,447付近を中心とする土坑である。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約0.8m、短径約0.7m、深さ約0.25mを測る。土坑内部のほぼ中央、土坑底部に須恵器甌が埋められた状況で配置されていることか



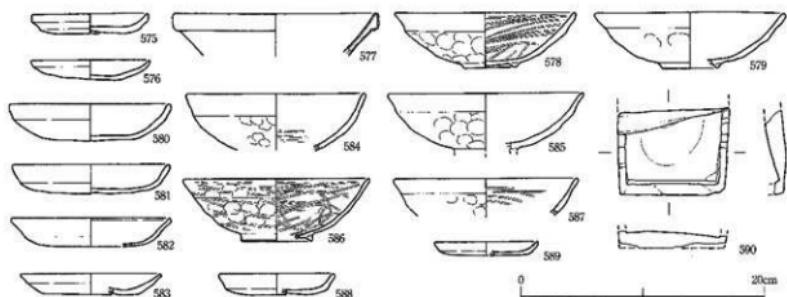
第195図 屋敷D平面図

ら、埋甕（第191—555図・第193図）であったものと推定される。甕内部上層から瓦器碗、瓦器小皿、土師器小皿（第191図、図版31—4・5）などが出土している。

B3017土坑（図版10—4）屋敷地の北西側X = -129,465、Y = -38,343付近を中心とする



第196図 建物97平面・断面図



第197図 建物97及び周辺柱穴出土遺物

B4369(575) B2395(576-577) B2288(578-579) B2440(580-582) B2149(583) B2300(584)

B2128(585) B2112(586) B2429(587) B2399(588) B2154(589) B2697(590)

土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、径1.1m前後、深さ約0.2mを測る。埋土中より、瓦器椀、土師器小皿、土師器羽釜、土師器壺、須恵器擂鉢（第194図、図版31-1）などが出上している。なお、B3499、B3260、B2828の各土坑からも瓦器椀、土師器皿などの遺物（第192図、図版31-2）が出土している。

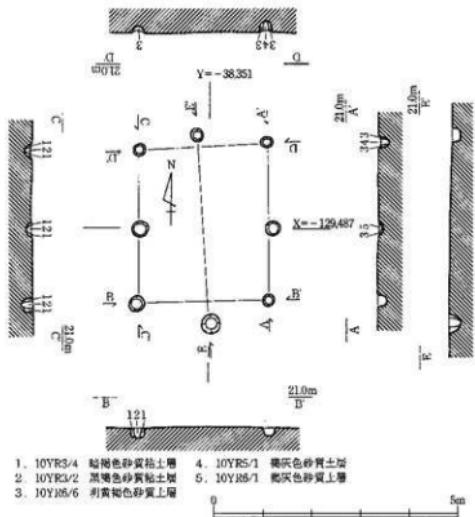
#### B1943落込み（第182図）

屋敷Cの西端南側X=-129,465、Y=-38,334付近を中心に存在する。落ち込みの東側は近世の埋管により削平され欠失している。平面形では梢円形に近い形を呈していたものと推定され、長径5.0m以上、短径約3.9mを測る。落ち込みの底面はフラットに近く、深さ0.1m前後を測る。埋土中より瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿、瓦器羽釜（三足）、土師器壺、白磁碗、瓦片（第190図、図版32-6）などが出土している。

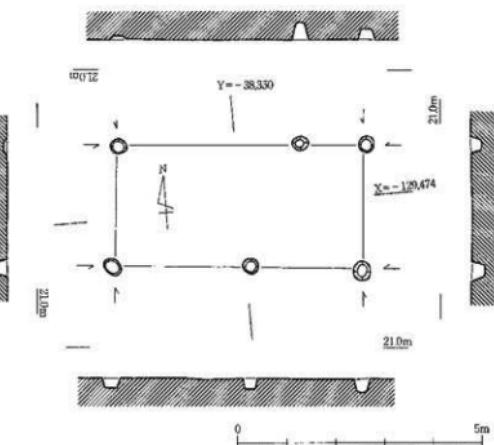
#### e. 屋敷D（第195図、図版11-1）

##### i) 概要

屋敷Dは、B地区の南西側に存在する。調査区内での屋敷Dの中心は、X=-129,490、Y=-38,353付近であるが、屋敷地の南側が調査区外にあるため全容は不明である。平面形では長方形に近い形を呈しているものと推定され、東西約17.0m、南北約16.5m以上、面積約280.5m<sup>2</sup>以上を測る。東側は柵9を隔て屋敷F、西側は区画する遺構は検出されなかったが、



第198図 建物98平面・断面図



第199図 建物99平面・断面図

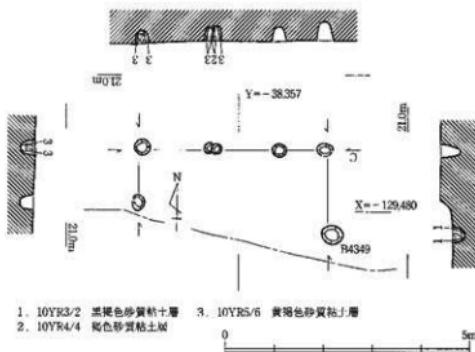
屋敷Aから南に下る区画溝（B897）の延長線上を挟んで西側を屋敷L、北側は区画溝（B1971）を隔て屋敷Bが存在する。南側の境は調査区外であるため不明である。

屋敷D周辺で確認した遺構は、建物4棟、建物にはならなかった柱穴多数、埋納穴1基、土坑3基、井戸1基、屋敷跡を区画する溝1本などである。

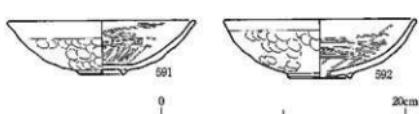
## ii) 区画する遺構

区画溝 B1971区画溝については屋敷Bで記述しているので、ここでは割愛する。

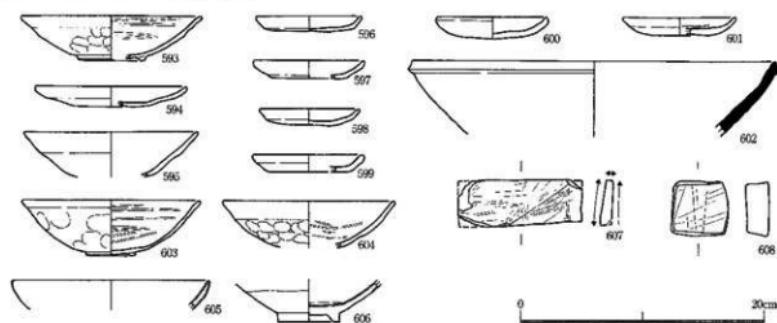
柵列 柵列9（第195図）は屋敷Dの東端、屋敷Fの西端Y = -38,345付近を南北に延びる。位置関係から



第200図 建物100平面・断面図



第201図 建物100出土遺物

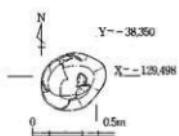


第202図 屋敷D柱穴出土遺物

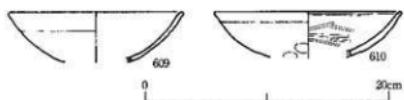
B2133(593・594・596・597) B2295(595) B4350(598) B2195(599) B2134(600) B2089(601)  
B2081(602) B1293(603) B2394(605) B2366(606) B4350(607) B2439(608)

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 柱 位 置 認 可	柱穴 (m)		柱 直 径 (m)	方位	備考
	間	(m)	間	(m)	厘~兵	X	Y	最小		最大				
97	2	3.7	4~5	6.5	0.96~2.32	-129.821	-38.354	円	0.16×0.15	0.45×0.40	0.58	0.12~0.18	N~4°~E	純柱 6.28m
98	2	2.7	2	3.2	1.16~1.78	-129.487	-38.351	円	0.24×0.19	0.39×0.35	0.25	0.10~0.16	N	純柱 3.88m
99	1	2.5	2	5.1	1.36~3.75	-129.474	-38.350	円	0.32×0.28	0.38×0.33	0.36	0.08~0.08	N~4°~E	
100	1以上	2.2以上	3	3.7	0.94~3.75	-129.480	-38.375	円	0.20×0.18	0.42×0.38	0.40	0.28~0.30	N	カクラン

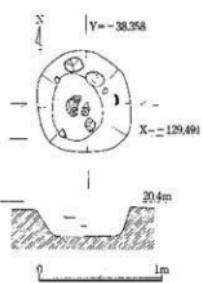
表13 屋敷D建物計測値表



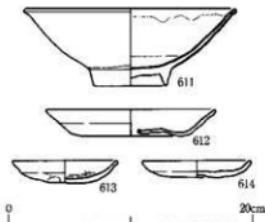
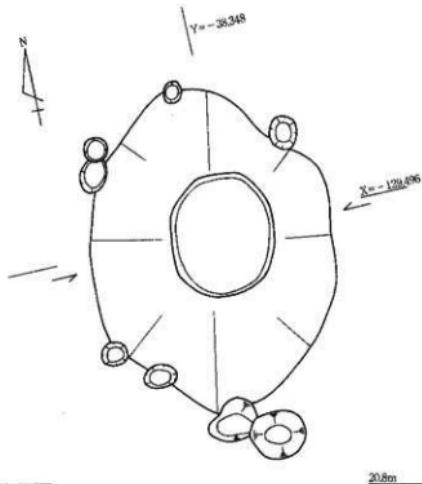
第204図 B2281土坑遺物出土状況図



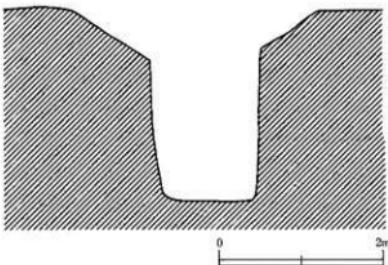
第203図 B2277土坑出土遺物



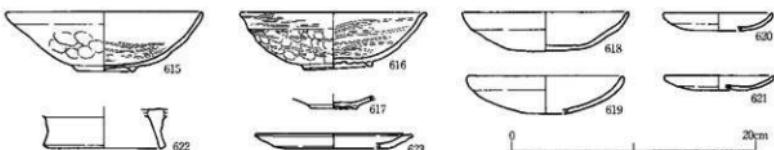
第205図 B2081土坑遺物出土状況図



第206図 B2006埋納穴出土遺物



第207図 B2469井戸平面・断面図

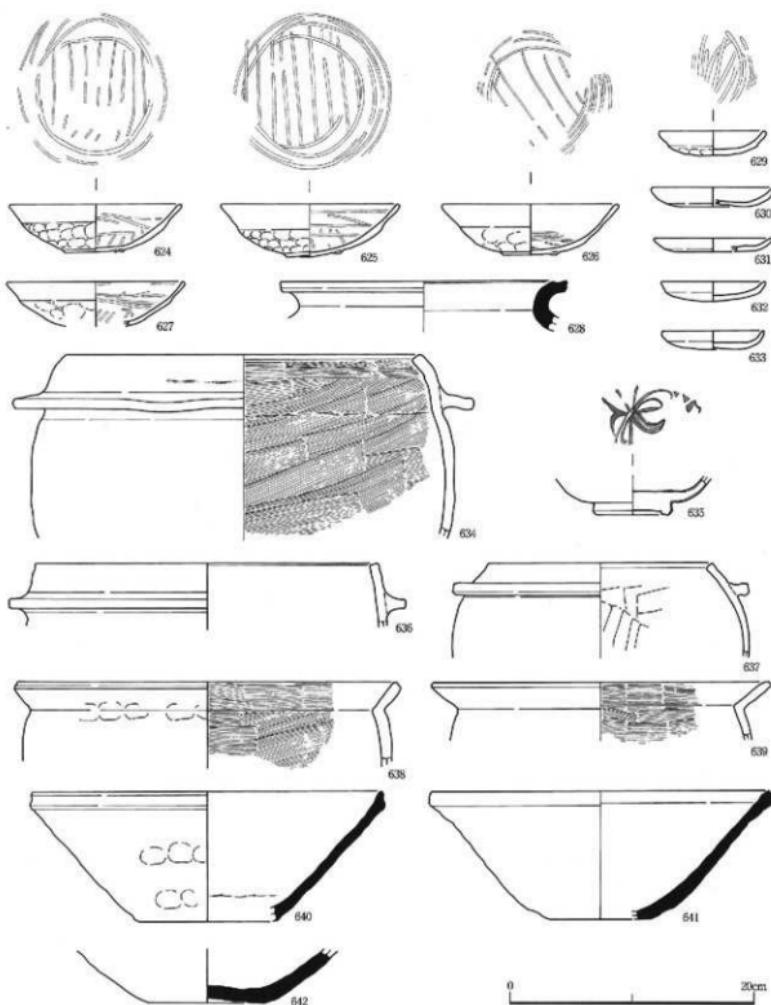


第208図 B2081土坑出土遺物

屋敷地と屋敷地を分ける柵列と推定される。延長約13.3mの間に6本の柱穴を検出した。柱穴は径0.4m前後、深さ0.15mから0.25m、柱間は1.0mから3.5mを測る。

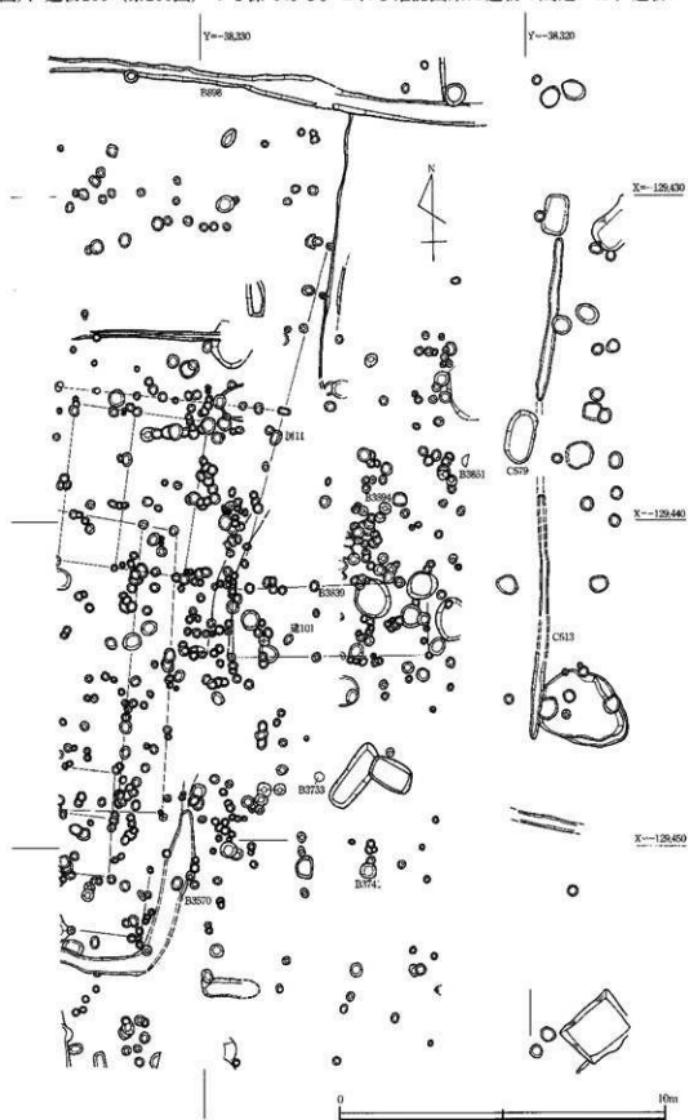
柵列9の柱穴からは、瓦器楕、土師器小皿などの遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

iii) 建物 (表13)



第209図 B2469井戸出土遺物

屋敷D内で確認した建物は、建物97（第196図、図版11-2）、建物98（第198図）、建物99（第199図）、建物100（第200図）の4棟である。これら確認出来た建物の周辺には、建物にはならな



第210図 屋敷E平面図

い柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。検出した4棟の建物の内、母屋と推定される建物は、建物の規模、屋敷地内の位置関係から両面庇を持つ建物97と推定される。

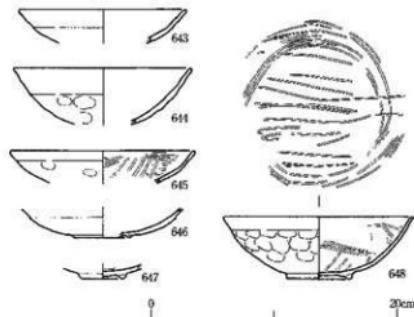
建物97の柱穴B2128、B2395、周辺の柱穴B1212、B2097、B2306、B2439、B2440、B2339、B2419、B2429から瓦器楕、土師器皿、土師器小皿、白磁碗、観片（第197図、図版32-1）などが出土している。

また、建物98の周辺の柱穴B2195、B2193（第202図、図版32-4）、建物100の柱穴B4349（第201図、図版32-4）からも遺物が出土している。残りの3棟は、規模などから作業小屋と推定される。

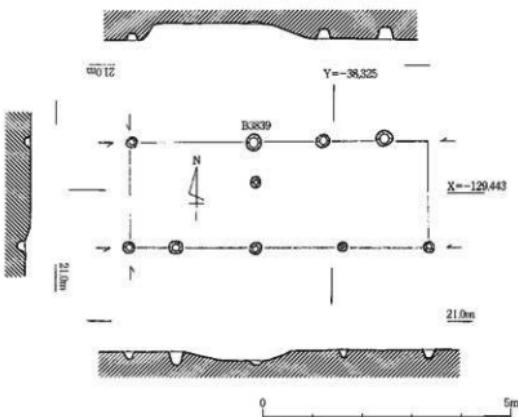
なお、建物にならなかった柱穴からも瓦器楕、土師器小皿、東播系擂鉢、白磁碗、砥石（第202図、図版32-4）などが出土している。

#### iv) 埋納穴

B2006埋納穴 屋敷Dの北側X=-129,486、Y=-38,356付近を中心とする埋納穴である。平面形では円形に近い形を呈し、径約0.25m、深さ約0.1mを測る。穴内部には、青磁碗片（1個体）、土師器小皿（3個体）、土師器皿（1個体）が穴中央付近から出土している（第206図、図版32-7）。



第211図 建物101及び周辺柱穴出土遺物  
B3839(643) B3572(644) B3894(645) B3741(646) B3851(647) B3753(648)



第212図 建物101平面・断面図

番号	渠面		柱行		柱間(m)		位置		柱 種 類	柱穴 (m)			柱 頭 (m)	方位	備考
	渠 間 (m)	渠 間 (m)	渠 間 (m)	渠 間 (m)	渠 間 (m)	渠 間 (m)	X	Y		柱 頭 状 態	最 小	最 大	深 さ 深 浅		
101	1	2.1	4	6.1	0.95~2.50	-129.443	-38.325		14	0.18×0.19	0.31×0.30	0.36	0.12	N	

表14 屋敷E建物計測値表

v) 土坑

**B2081土坑** (第205図、図版11-4) 屋敷Dの西側中央付近X=-129,491、Y=-38,357付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、径約0.9m、深さ約0.2mを測る。土坑内部から瓦器椀、土師器皿、土師器小皿、器種は不明だが土師器脚部片（第208図、図版32-2）などが出土している。

**B2281土坑** (第204図) 屋敷Dの南西側X=-129,491、Y=-38,357付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、長径約0.5m、短径約0.3mを測る。図化は出来なかったが、土坑底部から肩部にかけて埋甕と推定される須恵器甕が出土している。

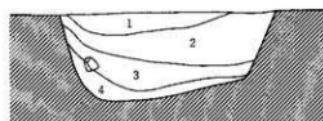
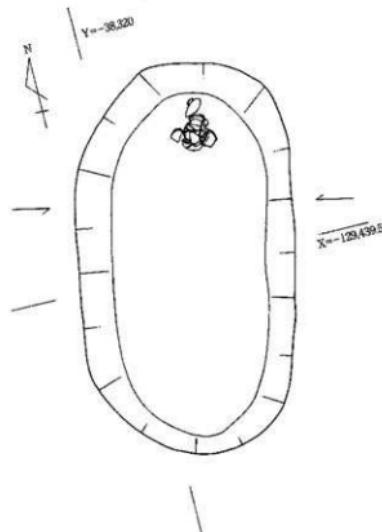
**B2277土坑** (第203図) 屋敷Dの南西側X=-129,501、Y=-38,357付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、長径約0.4m、短径約0.3mを測る。土坑内部からは瓦器椀（第203図、図版32-4）などが出土している。

vi) 井戸

**D2469井戸** (第207図、図版11-3)

屋敷Dの南東側X=-129,497、Y=-38,348付近を中心とする井戸である。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約4.0m、短径約3.0m、深さ約1.7mを測る。井戸は、深さ約0.4m付近までは、斜めに擂鉢状に斜めに下り、そこから下は径約0.9m前後でほぼ垂直に下る。井戸の断面の形状から、当初は井戸枠が存在していたが、廃棄する際に抜き取られた可能性が高い。

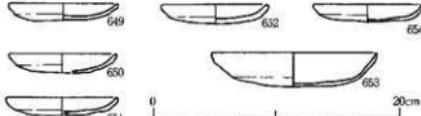
井戸埋土中より瓦器椀、土師器小皿、土師器羽釜、土師器壺、東播系擂鉢、青磁碗（第209図、図版32-5）、井戸底部から図化は出来なかったが、曲物の桶（図版11-3）が出土している。



1. 7.5YR4/3 閑色粘質土層  
2. 10YR2/4 暗褐色粘土層  
3. 10YR5/6 黄褐色粘土層  
4. 10YR4/3 にかい黄褐色粘土層



第213図 C579土壤墓平面・断面図

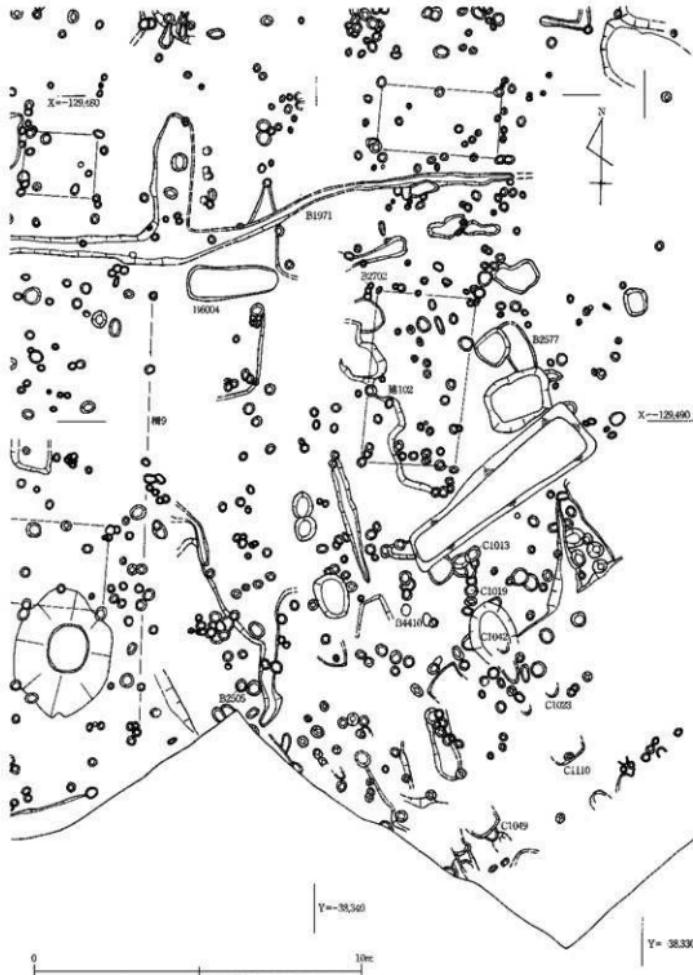


第214図 C579土壤墓出土遺物

f. 屋敷E (第210図、図版12-1)

i) 概要

屋敷Eは、B地区の北東側、C地区の北西側に位置し、X = -129,441、Y = -38,326付近を中心とする。平面形では台形に近い形を呈し、北側の東西長約11.5m、南側の東西長12.0m、南北長26.5m、面積約318.0m<sup>2</sup>を測る。東側は区画溝(C513)を隔て屋敷H、西側は柵11を隔て屋敷G、北側は区画溝(B898)を隔て中世の遺構が全く存在しない空白域、南側は区画する遺構は



第215図 屋敷E平面図

検出しなかったが、屋敷Bと屋敷Cを分ける区画溝の延長線付近と推定している。

屋敷E周辺で確認した遺構は、建物1棟、屋敷地と屋敷地分ける柵列1本、建物にならなかった柱穴多数、屋敷墓と推定される土壙墓1基、区画溝2本などである。

## ii) 区画する遺構

区画溝 B898区画溝についても屋敷A

で記述しているので、ここでは割愛する。

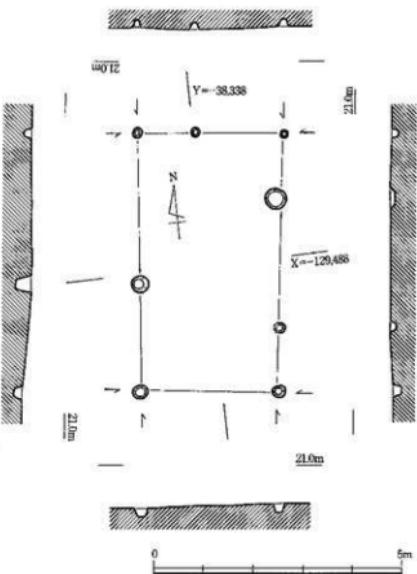
C513区画溝（第210図） 屋敷Eの東端、屋敷Dの西端で検出した。溝は屋敷地の北側に存在するB898区画溝との境付近からY=-38,320付近を南方向に延びる。幅約0.2m、深さ約0.05mを測る。

C513区画溝の埋土からは、瓦器瓶、土師器小皿などの遺物が出土したが図化できるものはなかった。

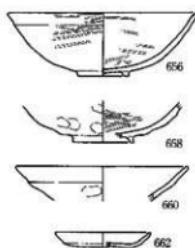
柵列 柵列11（第210図）は、屋敷Gの東端、屋敷Eの西端Y=-38,326付近



第217図 建物102出土遺物  
B2702(655)



第216図 建物102平面・断面図



第218図 屋敷F柱穴出土遺物  
B2505(656・658) B2577(657・659) B1023(661) B1019(662) B4410(663) B1110(664)

番号	渠間		平行		柱 間(m)	位置		柱 状 態	柱穴(m)			柱 底 (m)	方位	備考
	間 (m)	間 (m)	短 時	長 時		X	Y		柱 底 最小	柱 底 最大	深 度 (m)			
102	1	2.8	2~3	4.0	1.20~3.15	-129,488	-38,338	円	0.14×0.14	0.41×0.40	0.32	0.10	N-7°-E	

表15 屋敷F建物計測値表

を南北方向に延びる。位置関係から屋敷地と屋敷地を分ける柵列と推定される。延長約9.8mの間に6本の柱穴を検出した。柱穴は径0.4m前後、深さ0.15m前後、柱間は2.0mから2.7mを測る。

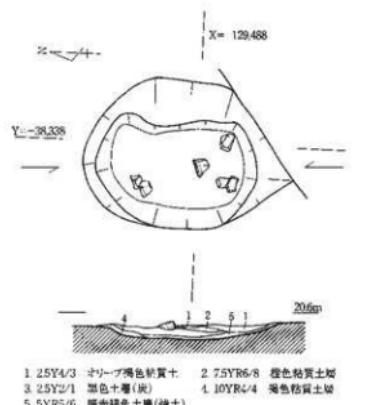
柵列11の柱穴からは、瓦器碗、土師器小皿などの遺物が出土したが、図化できるものはなかつた。

### iii) 建物（表14）

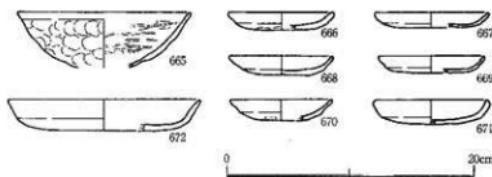
屋敷E内で確認した建物は、建物101（第212図）の1棟である。これら確認出来的建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。建物101の柱穴B3839、周辺の柱穴B3570、B3894、B3741、B3851、B3753から瓦器碗などの遺物（第211図、図版32-3）が出土している。

### iv) 土壙墓

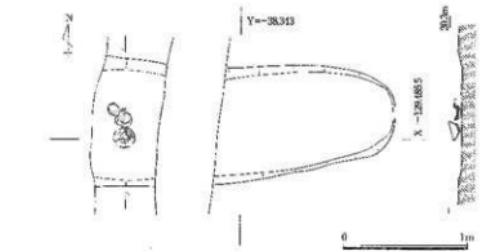
C579土壙墓（第213図、図版12-2・3） 屋敷地の東端中央よりやや北側X=-129,440、Y=-38,320付近を中心として検出した。平面形では楕円形に近い形を呈し、東西長約1.8m、南北長約3.2m、底部は平らに近く、深さ約0.7mを測る。土



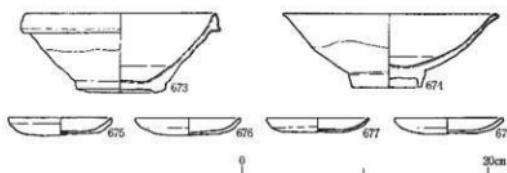
第219図 C1042土坑平面・断面図



第220図 C1013土坑出土遺物



第221図 B6004土壙墓遺物出土状況図



第222図 B6004土壙墓出土遺物

壇北端中央部の底部付近、埋葬主体部頭部と推定される地点に集中して出土した。出土した遺物は、土師器小皿（5個体）、土師器皿（1個体）である（第214図、図版32-8）。

#### g . 屋敷F（第215図、図版13-1）

##### i) 概要

屋敷FはB地区の南東端に大半が存在し、南側の一部がC地区にある。調査区内での屋敷Fの中心はX=-129,492、Y=-38,338付近であるが、屋敷地の南側が調査区外にあるため全容は不明である。屋敷Fは、平面形では長方形に近い形と推定され、東西約15.0m、南北約21.0m以上、面積約315m<sup>2</sup>以上を測る。東側は区画する遺構は検出しなかったが、屋敷Cと屋敷Hを分ける区画溝の延長した線付近と推定している。西側は柵9を隔て屋敷D、北側は区画溝（B1971）を隔て屋敷Cが存在する。

屋敷F周辺で確認した遺構は、建物1棟、柵列1本、建物にならなかった柱穴多数、土坑2基、屋敷墓と推定される土壙墓1基、屋敷地を区画する

溝1本などである。

##### ii) 区画する遺構

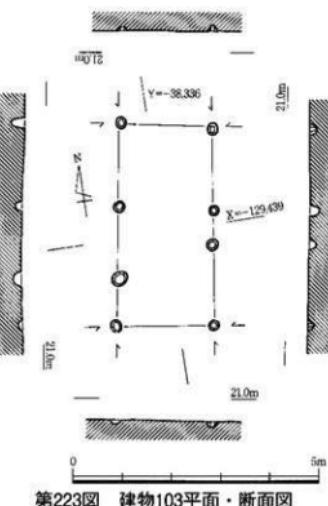
区画溝 B1971区画溝については屋敷Bで前述しているので、ここでは割愛する。

柵列 柵列9については屋敷Dで前述しているので、ここでは割愛する。

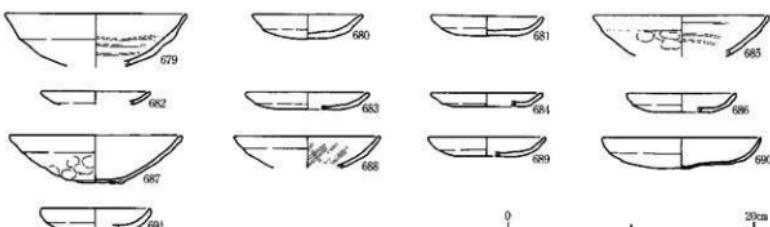
##### iii) 建物（表15）

屋敷F内で確認した建物は、建物102（第216図）の1棟のみである。建物102の柱穴B2702から瓦器碗（第217図、図版33-1）が出土している。

これら確認出来た建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。



第223図 建物103平面・断面図



第224図 屋敷G遺構内出土遺物  
B3732(679-684) B3988(685-686) B3492(687) B1222(688) B4096(689) B3494(690) B1421(691)



第225図 屋敷G平面図

なお、屋敷地内に存在する柱穴からも瓦器梶、土師器皿、土師器羽釜、束擂系擂鉢などの遺物(第218図、図版33-1)が出土している。

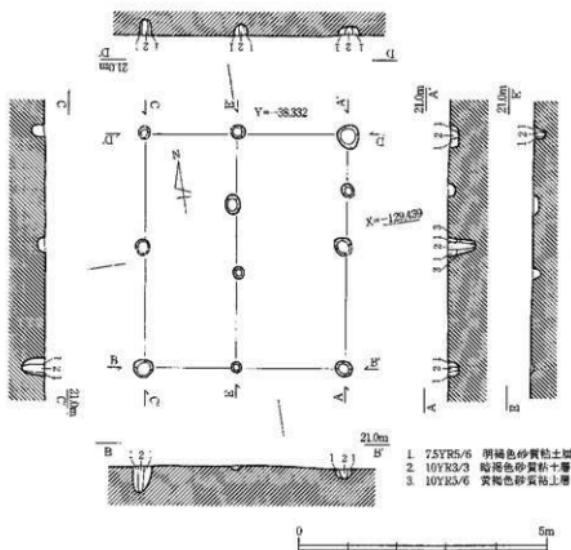
#### iv) 土坑

##### C1042土坑(第219図)

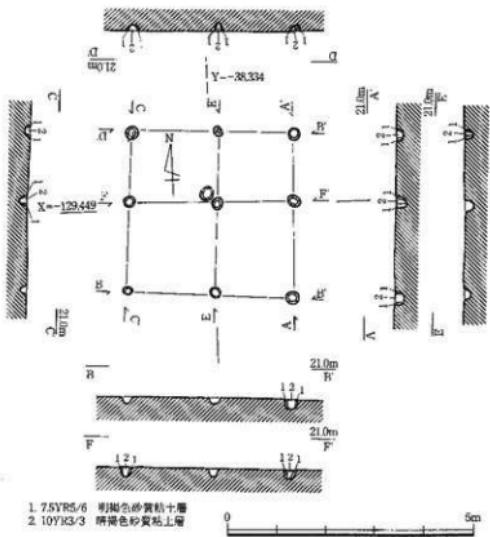
屋敷Fの南東側、X=-129,497、Y=-38,336付近を中心とする土坑である。平面形では梢円形に近い形を呈し、径約1.2m、深さ約0.1mを測る。土坑内面は高熱を受けたものと推定され明赤褐色を呈する。土坑底部には、焼けて赤変した川原石が数ヶ所存在している。土坑内部から瓦器、土師器などが出土しているが細片で図化できなかつた。

**C1013土坑** 屋敷地の中央付近X=-129,494、Y=-38,335付近を中心として検出した。平面形では梢円形に近い形を呈し、長径約0.6m、短径0.4m、深さ約0.1mを測る。土坑内から瓦器梶、土師器皿、土師器小皿などの遺物(第220図、図版33-1)が出土している。

#### v) 土塚墓

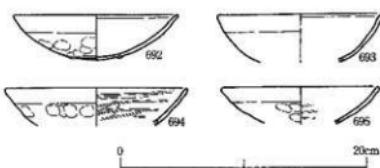


第226図 建物104平面・断面図

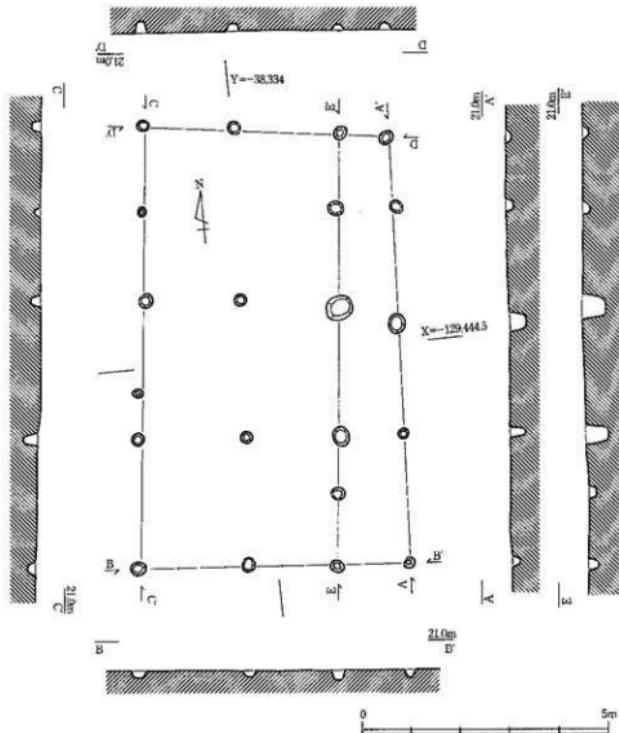


第227図 建物105平面・断面図

B6004土壤塗（第221図、図版13-2）屋敷地の北西隅X=-129,486、Y=-38,343付近を中心として検出した。平面形では橢円形に近い形を呈し、東西長約2.5m以上、南北長約1.0m、深さ約0.05mを測る。遺物は土坑西側中央部付近の埋葬主体部頭部と推定



第228図 建物106出土遺物 B3944(692-695)



第229図 建物106平面・断面図

番号	受間		桁行		柱間(m)		位置		柱 形状	柱穴 (m)				柱 根 (m)	方位	備考		
							X	Y		最小		最大	深さ					
	間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	幅~長					深	浅		深	浅				
103	1	2.0	3	4.2	0.70~1.70	-129.439	-38.336	円	0.18×0.18	0.31×0.25	0.16	0.08	0.10	N-10°-E				
104	2	4.0	2~3	4.7	1.20~2.55	-129.439	-38.332	円	0.22×0.20	0.48×0.40	0.55	0.18	0.20	N-8°-E				
106	2	3.3	2	3.4	1.40~2.00	-129.449	-38.314	○	0.20×0.14	0.27×0.24	0.22	0.10	0.18	N-2°-E				
106	2	4.0	4	9.1	0.95~2.66	-129.441	-38.334	円	0.20×0.14	0.55×0.48	0.50	0.12		N-7°-E	底 7.70m			

表16 屋敷G建物計測値表

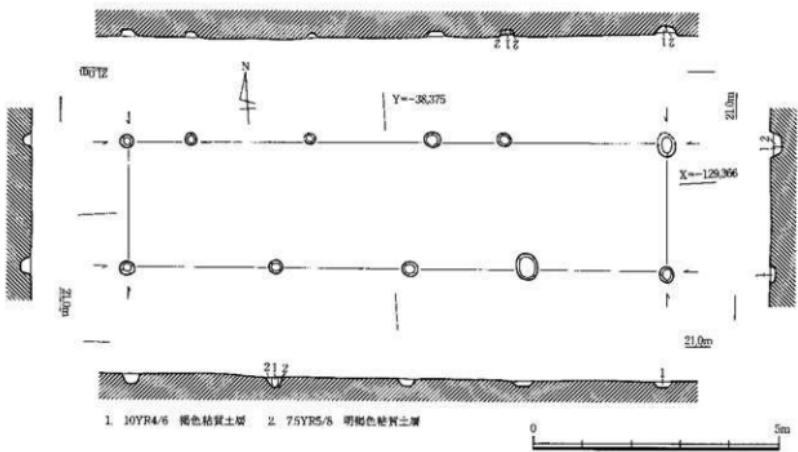
される地点周辺に集中して出土した。出土した遺物（第222図、図版33-2・3・4）の種類は、土師器小皿（4個体）、白磁碗（2個体）である。

h. 屋敷G（第225図、図版13-3、14-1）

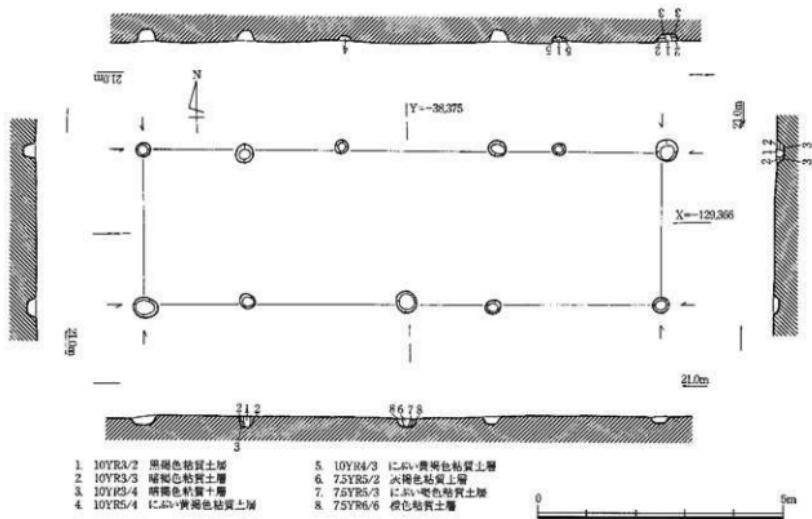
i) 概要



第230図 屋敷K平面図



第231図 建物107平面・断面図



第232図 建物108平面・断面図

番号	梁間		柱行		柱間(m)		位置		柱 形状	柱穴 (m)			柱 径 (m)	方位	備考
	間 (m)	間 (m)	短~長	X	Y	深さ				最小	最大	深 浅			
						深	浅	0.22×0.21		0.51×0.40	0.24	0.30	N-4°-E		
107	1	2.5	4~5	10.9	1.25~3.30	-129.471	-38.374		円	0.22×0.21	0.51×0.40	0.24	0.30	N-4°-E	
108	1	3.1	4~5	10.4	2.25~3.40	-128.675	-38.374		円	0.25×0.22	0.45×0.43	0.28	0.12	N-2°-E	
109	1	2.5	3	4.1	1.20~4.15	-129.465	-38.377		円	0.31×0.26	0.32×0.30	0.24	0.10	N-6°-E	

表17 屋敷K建物計測値表

屋敷Gは、B地区の北東側X= - 129,439、Y= - 38,334付近を中心とする。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約16.0m、南北約26.0m、面積約416m<sup>2</sup>を測る。東側は柵11を隔て屋敷E、西側は柵5を隔て屋敷A、北側は区画溝(B898)を隔て中世の遺構が全く存在しない空白域、南側は区画溝(B3492)を隔て屋敷Cが存在する。

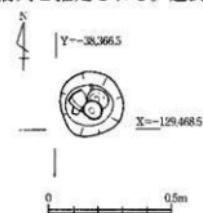
屋敷G周辺で確認した遺構は、建物4棟、柵列2本、建物にならなかった柱穴多数、区画溝2本などである。

#### ii) 区画する遺構

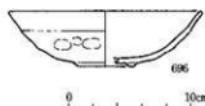
区画溝 B898、B3492区画溝について  
ては屋敷A・屋敷Cでそれぞれ記述し  
ているので、ここでは割愛する。

柵列 柵列5、柵列11については屋  
敷A・屋敷Eでそれぞれ記述している  
ので、ここでは割愛する。

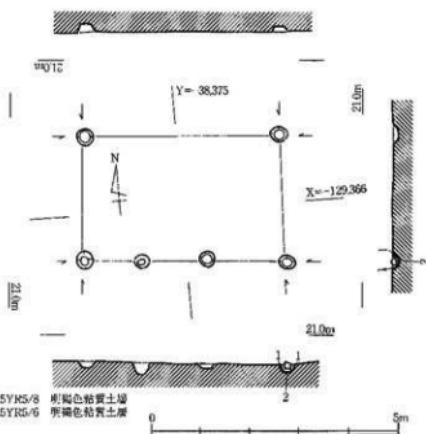
**柵列10**(第225図) 屋敷Gの中央、  
X= - 129,436付近を東西方向に延び  
る。位置関係から屋敷地と屋敷地を分  
ける柵列と推定される。延長約7.0m



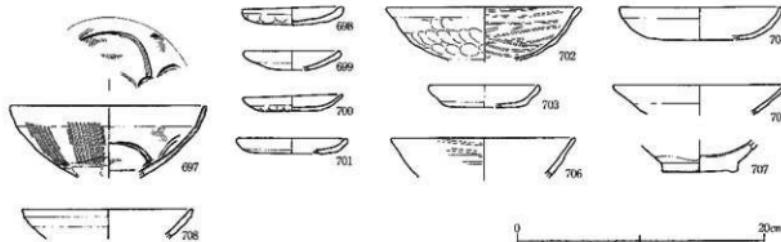
第234図 D957柱穴遺物出土状況図



第233図 建物109出土遺物 D4097(696)



第235図 建物109平面・断面図



第236図 屋敷K柱穴出土遺物  
D957(697-701) D803(702) D843(703) D1016(704) D984(705) D1008(706) D1026(707) D306(708)

の間に7本の柱穴を検出した。柱穴は径0.4m前後、深さ0.1mから0.2m、柱間は0.9mから1.8mを測る。

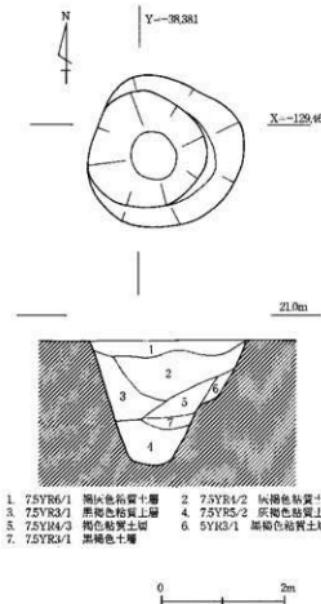
柵列10の柱穴からは、瓦器椀、土師器小皿などの遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

### iii) 建物 (表16)

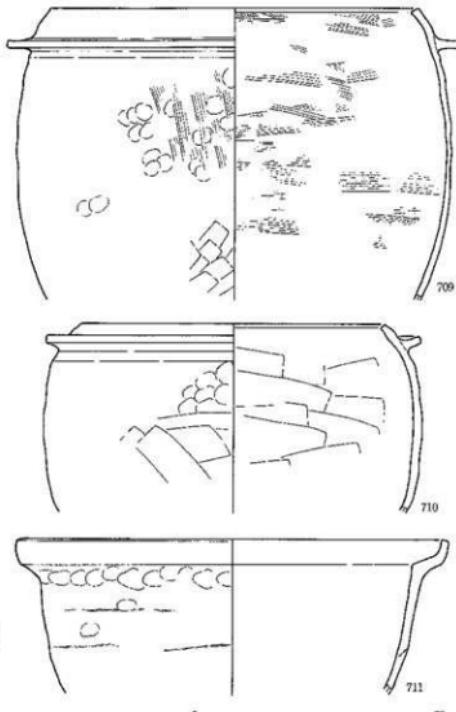
屋敷G内で確認した建物は、建物103（第223図）、建物104（第226図）、建物105（第227図）、建物106（第229図）の4棟である。これら建物は、前後関係は不明だが屋敷地の東半に集中し重複して存在することから、何回かの建て替えが行われたものと推定される。検出した建物の中で母屋と推定される主建物は建物104、建物106と推定される。残りの建物103、建物105は、建物群の位置関係から建物104に付随するものと推察される。

これら確認できた建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。建物106の柱穴B3944（第228図、図版33-7）、周辺の柱穴B4096（第224図、図版33-7）から瓦器椀、土師器小皿などの遺物が出土している。

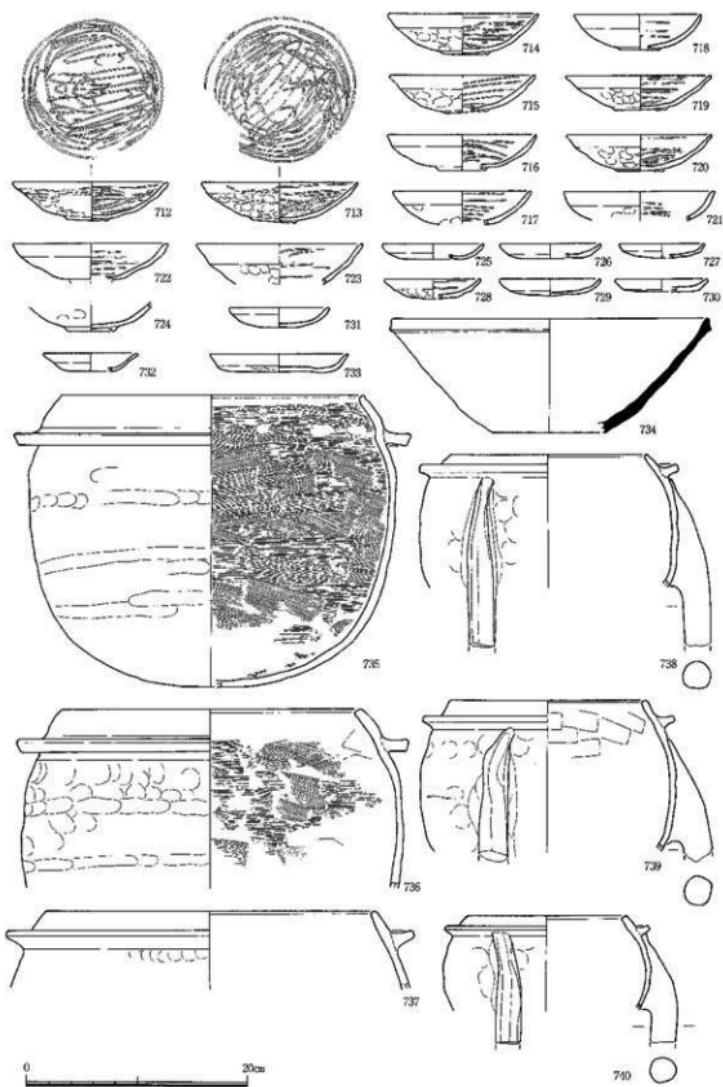
また、屋敷地の西・北側は、東側の建物群周辺に比べ極めて遺構



第237図 D287井戸平面・断面図



第238図 D287井戸出土遺物1



第239図 D287井戸出土遺物2

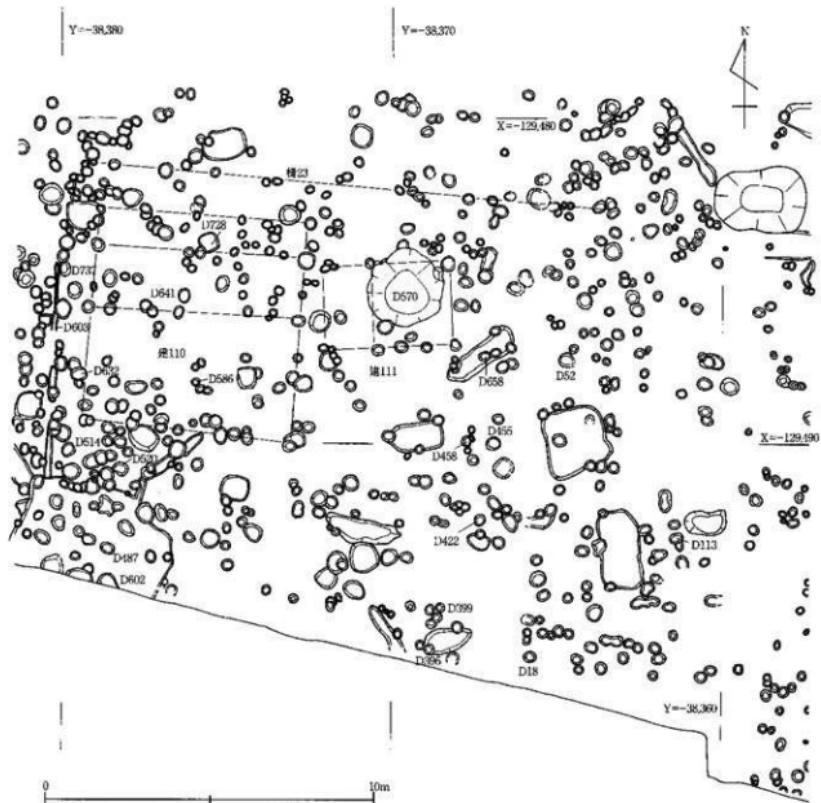
が少ないことから、広場ないしは庭として機能していたものと推察される。

また、これ以外の遺構からも瓦器楕、土師器皿、土師器小皿（第224図、図版33-7）などの遺物が出土している。

i. 屋敷K（第230図、図版14-2）

i) 概要

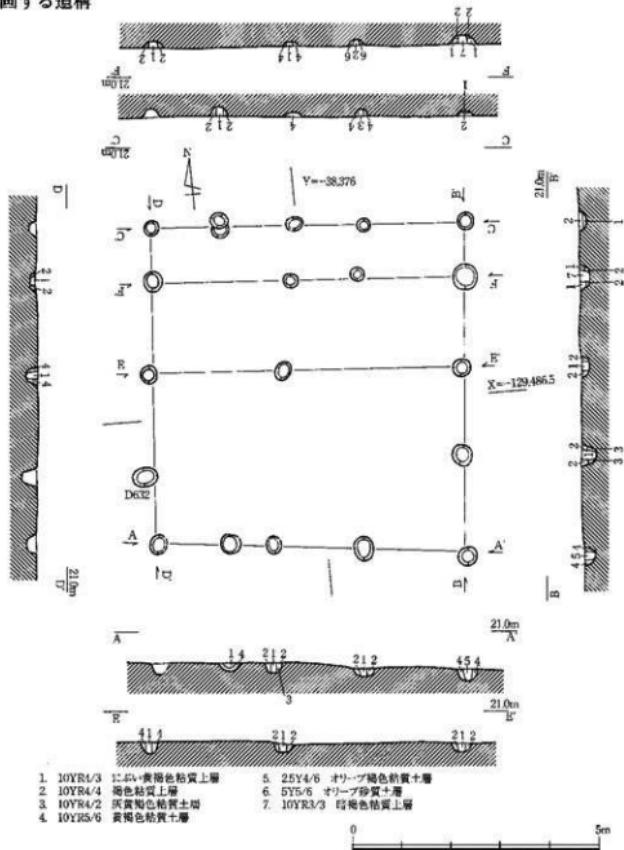
屋敷Kは、D地区の南東X=-129,471、Y=-38,369付近を中心とする。平面形では正方形に近い形を呈し、東西約18.0m、南北約17.5m、面積約315m<sup>2</sup>を測る。屋敷地の東側は区画する遺構は検出しなかったが、屋敷Aの西端に存在する区画溝（B897）の延長線上付近と推定している。西側は区画溝（D2788）を隔て屋敷O、北側は区画溝（D310）を隔て屋敷T、南側は柵列23を隔て屋敷Lが存在する。



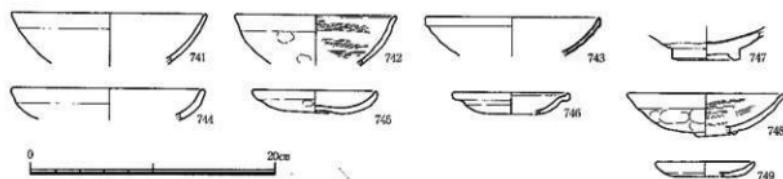
第240図 屋敷L平面図

屋敷K周辺で確認した遺構は、建物3棟、柵列1本、建物にならなかった柱穴多数、井戸1基、区画溝2本などである。

ii) 区画する遺構



第241図 建物110平面・断面図



第242図 建物110及び周辺柱穴出土遺物 D641(741~747) D586(748) D632(749)

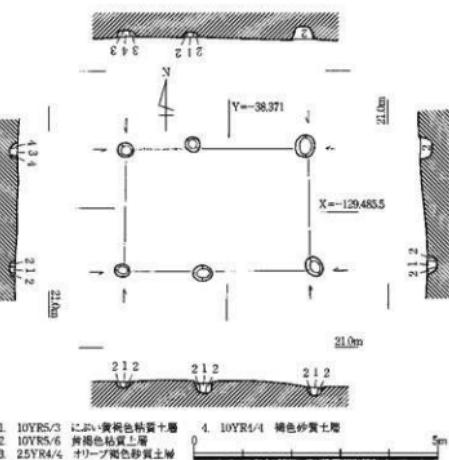
### 区画溝

D2788区画溝（第230図・第259図）

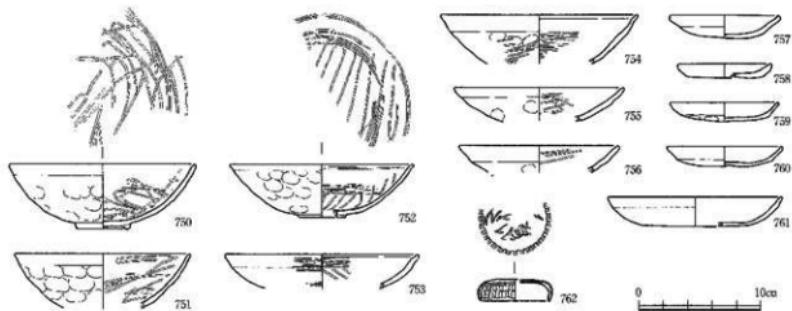
屋敷Kの西端、屋敷Oの東端で検出した。溝は屋敷地の北側に存在するD1559区画溝との境付近からX = -129,460付近をほぼ南方向に延びる。幅約0.4m、深さ約0.05mを測る。

D310区画溝（第230図・第253図）

屋敷Kの北端、屋敷Mの南端で検出した。屋敷地の西端 X = -129,460、Y = -38,380付近をほぼ東西方向に延びる。幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。



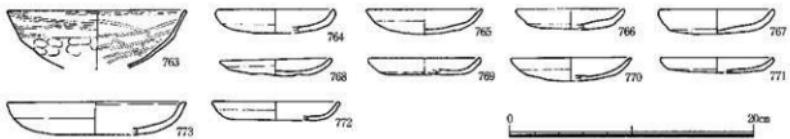
第243図 建物111平面・断面図



第244図 屋敷L柱穴出土遺物

D458(752) D455(753) D113(761) D442(764) D737(755) D514(756)

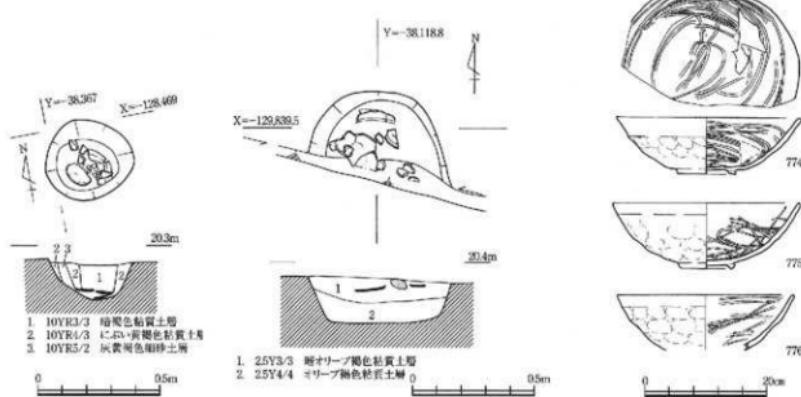
D658(762) D520(757) D396(758) D399(759) D52(760)



第245図 D728土坑出土遺物

番号	梁間		桁行		柱間(m)	位置		柱 形狀	柱穴 (m)			柱 積 (m <sup>3</sup> )	方位	備考	
	間 (m)	間 (m)	間	鉛~長		X	Y		最小	最大	深さ				
110	3	5.6	3	6.3	0.90~3.75	-129,486	-38,376	円	0.26×0.26	0.50×0.46	0.30	0.10	0.24	N-6°-E	範 6.40m
111	1	2.5	2	4.0	1.36~2.52	-129,485	-38,371	円	0.30×0.25	0.43×0.37	0.28	0.10	0.18	N	

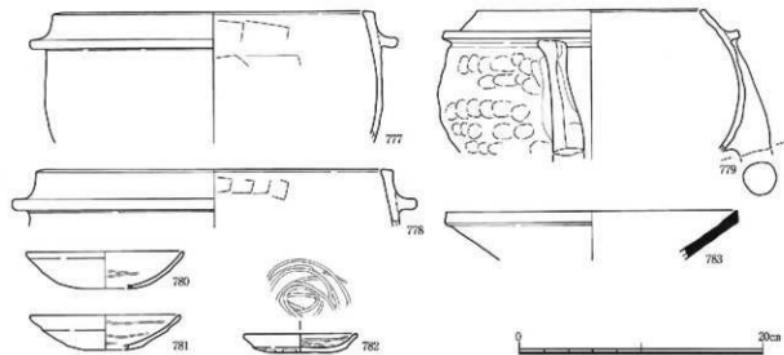
表18 屋敷L建物計測値表



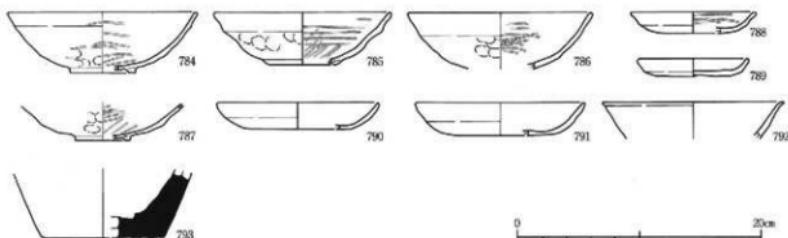
第246図 D18土坑  
平面・断面図

第247図 D602土坑平面・断面図

第248図 D18土坑出土遺物



第249図 D602土坑出土遺物



第250図 D487土坑出土遺物

これらの区画溝の埋土からは、瓦器椀、土師器小皿などの遺物が出土したが図化できるものはなかった。

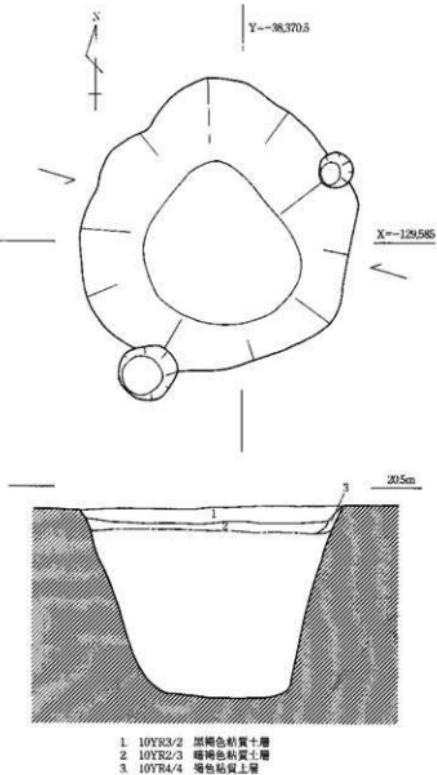
柵列 柵列13（第230図）は、屋敷Kの東側、Y = -38,365付近を南北方向に延びる。建物の位置関係から屋敷群と他の区域を分ける柵列と推定される。延長約20.0mの間に10本の柱穴を検出した。柱穴は径0.4m前後、深さ0.1m前後、柱間は1.3mから2.5mを測る。

柵列23（第230図・第240図）は、屋敷Kの南側Y = -129,482付近を東西方向に延びる。建物の位置関係から屋敷群と他の区域を分ける柵列と推定される。延長約20.0mの間に10本の柱穴を検出した。柱穴は径0.4m前後、深さ0.1mから0.25m前後、柱間は1.3mから2.5mを測る。

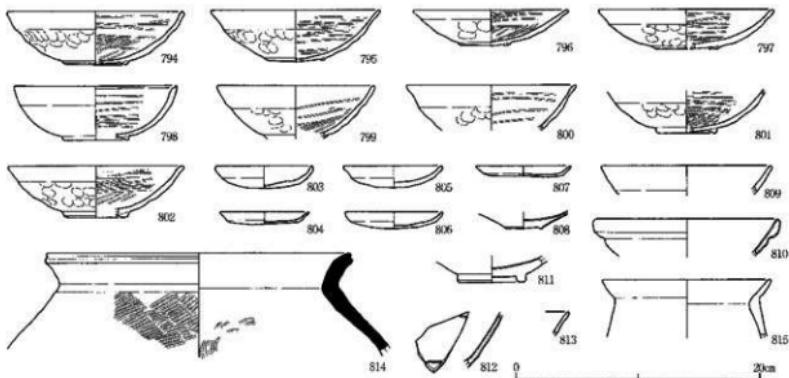
これらの柵列の柱穴内からは、瓦器椀、土師器小皿などの遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

### iii) 建物（表17）

屋敷K内で確認した建物は、建物107（第



第251図 D570井戸平面・断面図



第252図 D570井戸出土遺物



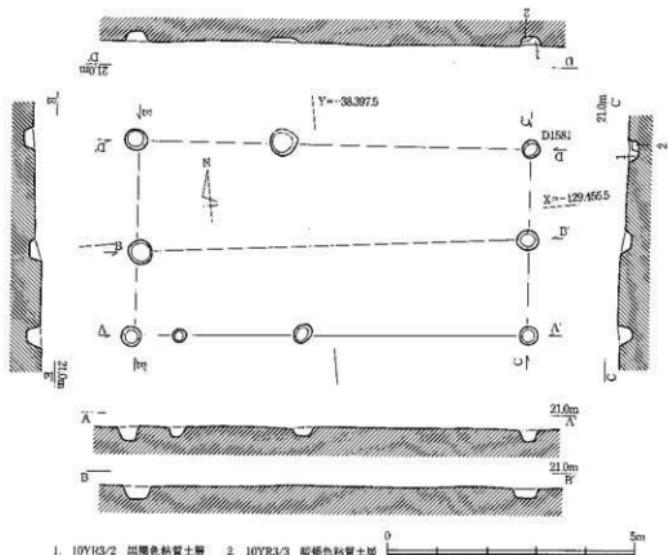
第253図 星数M平面図

231図)、建物108(第232図)、建物109(第235図)の3棟である。屋敷地の西側に集中している。これら確認出来た建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。建物109の柱穴D4097(第233図)、建物107の周辺の柱穴D1026、D1016(第236-704・707図、図版33-8)から図化できる遺物が出土している。なお、D957から出土した遺物は、遺物の量は少ないものの埋納穴の遺物出土状況(第234図)を示していることから、埋納穴の可能性が高い。青磁碗片、土師器小皿(第236図、図版33-8)が出土している。

また、建物にならなかった柱穴から瓦器椀、土師器小皿、土師器皿、白磁碗などの遺物(第236図、図版33-8)が出土している。

#### iv) 井戸

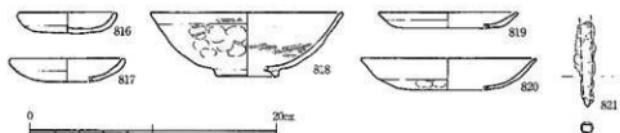
**D287井戸**(第237図) 屋敷Kの北東端X=-129,464、Y=-38,381付近を中心に存在する。平面形では円形に近い形を呈し、井戸上面から底部に向かって斜めに下る。井戸上面で径2.4m



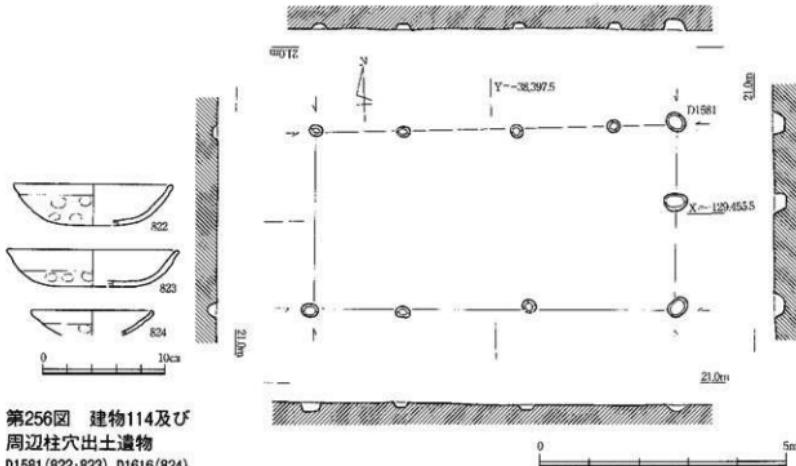
第254図 建物112平面・断面図

番号	渠間		柱行		柱間(m)		位置		柱 径 (mm)	柱穴 (m)				柱 底 (m)	方位	備考
	間	間	列	行	列	行	X	Y		柱	最小	最大	深さ	深	浅	
112	2	4.0	3	8.0	1.94~5.04	-129.438	-38.396	円	0.27×0.27	0.50×0.46	0.32	0.10		N-6°-E		
113	1~2	3.1	4	9.3	1.34~3.68	-129.445	-38.394	円	0.34×0.36	0.42×0.36	0.30	0.10		N-3°-E		
114	1~2	3.8	3~4	7.4	1.22~3.60	-129.455	-38.397	円	0.28×0.21	0.48×0.37	0.25	0.10		N-3°-E		

表19 屋敷M建物計測値表

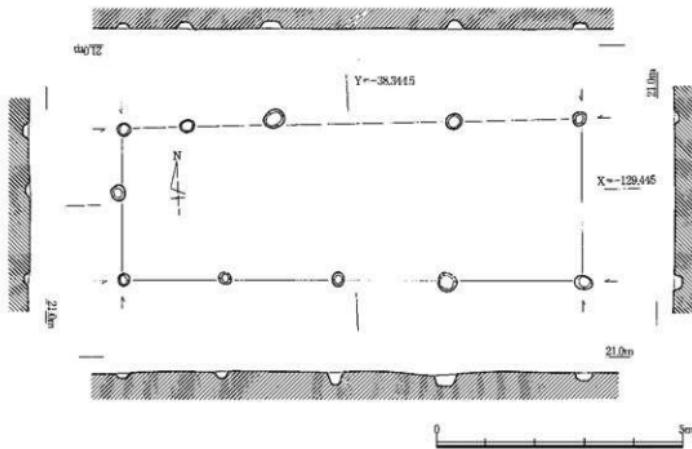


第255図 建物113周辺柱穴出土遺物 D1664(816-817) D1639(818) D2807(819) D1688(820) D1686(821)

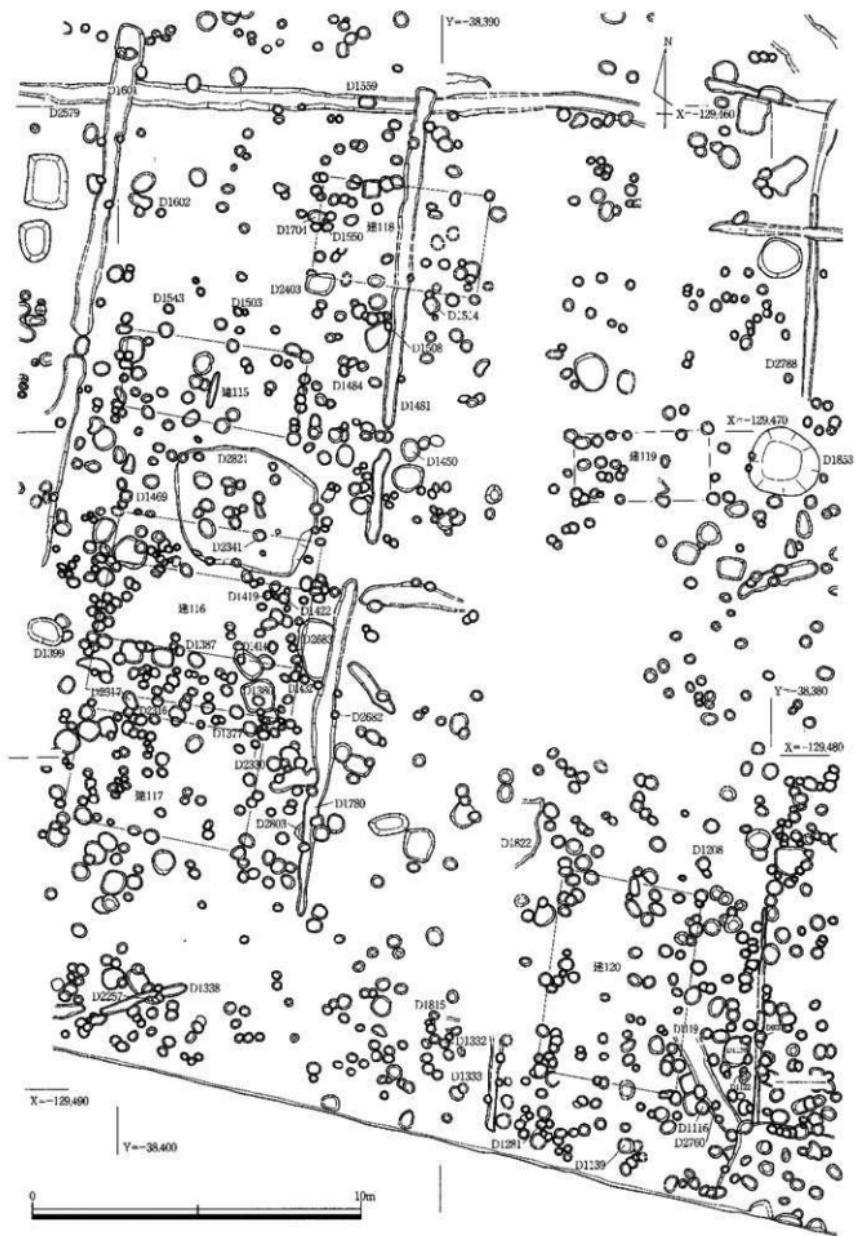


第256図 建物114及び  
周辺柱穴出土遺物  
D1581(822-823) D1616(824)

第257図 建物114平面・断面図



第258図 建物113平面・断面図



第259図 屋敷N・O平面図

前後、底部で0.8m、深さ約2.0mを測る。遺物は、埋土中より瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿、東播系播鉢、土師器羽釜、上師器壺、瓦器三足羽釜（第238・239図、図版33-9）などが多数出土している。

j. 屋敷L（第240図、図版14-2）

i) 概要

尾敷Lは、D地区の南西側に存在する。屋敷地の調査区内での中心はX=-129,490、Y=-38,370付近であるが、屋敷地の南側が調査区外にあるため全容は不明である。平面形では長方形に近い形と推定され、東西約18.5m、南北約15.0m、面積は約277.5m<sup>2</sup>以上を測る。屋敷地の東側は区画する遺構は検出しなかったが、屋敷Aの西端を南北に延びる区画溝（B897）の延長線付近、西側は区画溝（D603）を隔て屋敷O、屋敷地の北側は柵列23を隔て屋敷K、南側は調査区外であるため不明である。

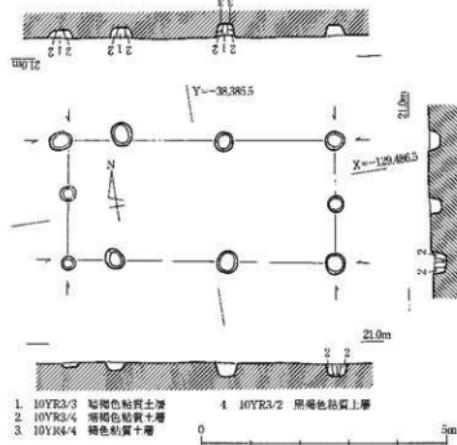
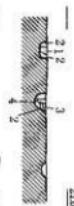
尾敷L周辺で確認した遺構  
は、建物2棟、建物にならなかつ  
た柱穴多数、土坑2基、井戸1  
基、区画溝1本などである。

ii) 区画する遺構

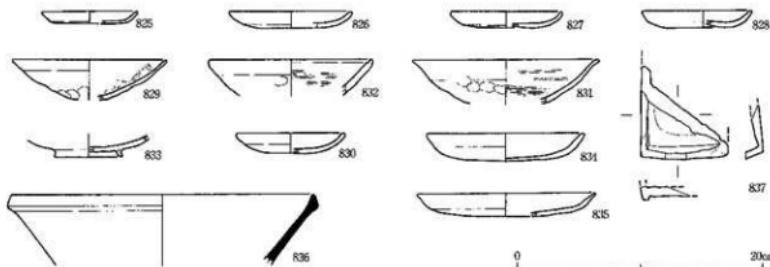
区画溝

D603区画溝（第240図・第259  
図）屋敷Lの西端、屋敷Oの  
東端で検出した。溝はX=-  
129,485付近をほぼ南方向に延  
びる。幅約0.2m、深さ約0.05  
mを測る。

D603区画溝の埋上からは、瓦



第260図 建物115平面・断面図



第261図 屋敷N・O溝出土遺物

D1559(825) D603(826-828-837) D2682(829-831) D1780(832-834) D1481(833) D1338(835-836)

器楕、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかつた。

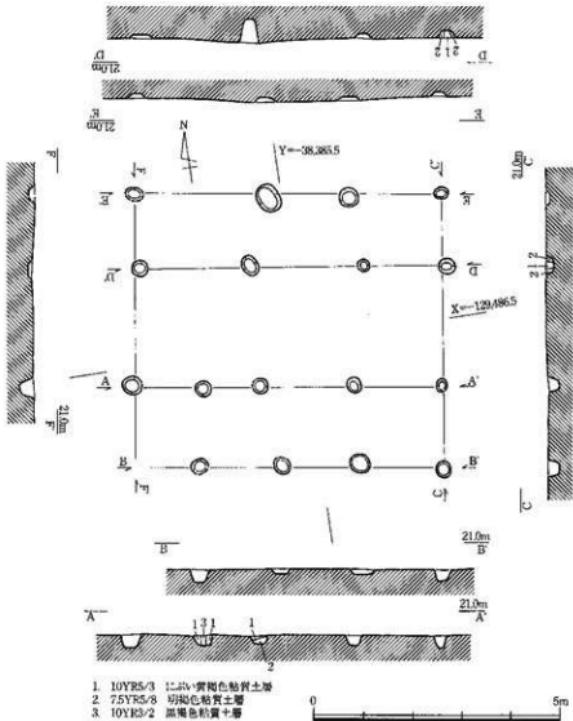
柵列 柵列23については屋敷Kで記述しているのでここでは割愛する。

### iii) 建物 (表18)

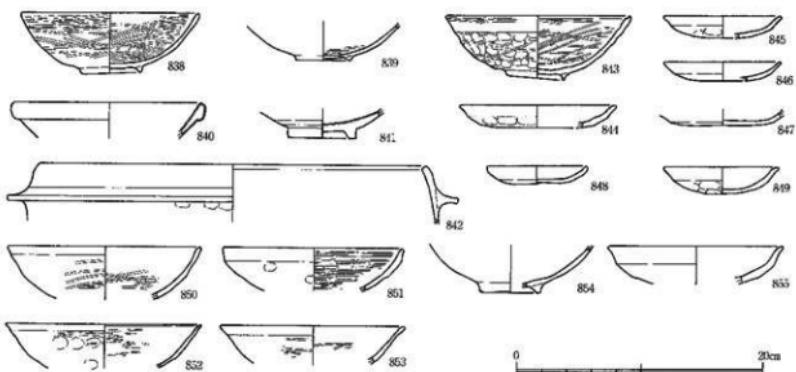
屋敷L内で確認した建物は、建物110（第241図）建物111（第243図）の2棟である。これら確認出来た建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。

建物110の柱穴D632・D641

(第242図、図版34-2)、周



第262図 建物111平面・断面図



第263図 建物111及び周辺柱穴出土遺物

D2341(838-842) D2317(843-844) D1377(845-847) D1543(848) D1419(849) D1414(850-851-854) D1432(852-853) D1422(855)

辺の柱穴D586・D520・D658（第242-748図、第244図、図版34-1）より瓦器椀、土師器皿、青磁碗などが出土している。

また、建物にならなかった柱穴からも瓦器椀、土師器小皿、土師器皿、青磁合子蓋など多数の遺物（第244図、図版34-1）が出土している。

#### iv) 土坑

**D18土坑**（第246図）星敷地の南東側X=-129,497、Y=-38,366付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、径約0.4m、深さ約0.15mを測る。土坑内部から瓦器椀（第244-750・751図、第248図）

などが出土している。

#### D602土坑（第247図）屋敷

地の西南側X=-129,494、

Y=-38,379付近を中心とす

る土坑である。平面形では円

形に近い形を呈し、径約1.3

m、深さ約0.4mを測る。土

坑内部から瓦器椀、瓦器小皿、

土師器羽釜、瓦器羽釜（三足）、

東播系擂鉢（第249図、図版

34-4）などが出土している。

#### D728土坑（第240図）屋敷

地の西北側X=-129,484、

Y=-38,376付近を中心とす

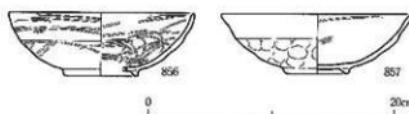
る土坑である。平面形では円

形に近い形を呈し、長径約

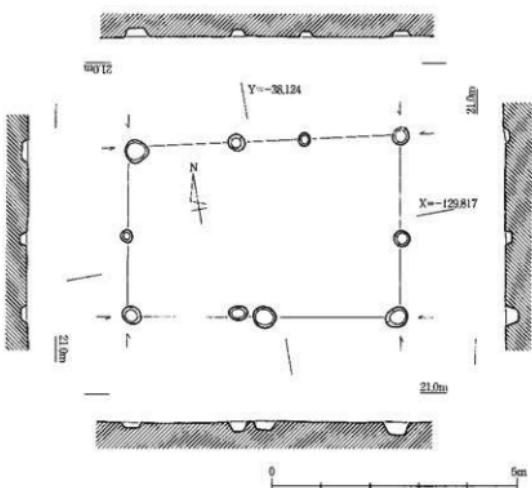
0.5m、短径約0.4mを測る。

土坑内部から瓦器椀、土師器

小皿（第245図、図版35-1）



第264図 建物117及び周辺柱穴出土遺物 D2330(856・857)



第265図 建物117平面・断面図

番号	架間 間(m)	桁行 間(m)	柱間(m)	位置		柱 形状	柱穴(m)				柱 底 (m)	方位	備考
				X	Y		最小	最大	溝	底			
115	2.25	3	5.4	0.96~2.28	-129,468	-38,398	円	0.28×0.25	0.46×0.39	0.30	0.10	0.20	N-10°-E
116	2.42	4	6.3	1.14~2.68	-129,475	-38,398	○	0.26×0.24	0.42×0.38	0.48	0.08	0.16	N-10°-E
117	2.35	2~3	5.4	0.50~2.74	-129,480	-38,399	△	0.24×0.22	0.45×0.33	0.26	0.12	0.18	N-6°-E
118	1~2	3~4	5.0	0.90~3.15	-129,463	-38,392	円	0.24×0.24	0.43×0.38	0.35	0.12	0.18	N-9°-E
119	2.25	3	5.5	1.35~2.50	-129,817	-38,124	円	0.30×0.30	0.48×0.38	0.24	0.10	0.16	N-2°-W
120	2.43	2~3	6.2	1.16~3.44	-129,486	-38,385	円	0.39×0.29	0.50×0.46	0.28	0.06	0.16	N-8°-E

表20 屋敷N・O建物計測値表

などが出土している。

D487土坑（第240図）屋敷地の西  
南側 X = -129,493、Y = -38,379

付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、長径約 0.5m、短径約 0.3m を測る。土坑内部から瓦器楕、瓦器小皿、土師器小皿、土師器皿、須恵器壺、白磁碗（第250図、図版34-4）などが出土している。

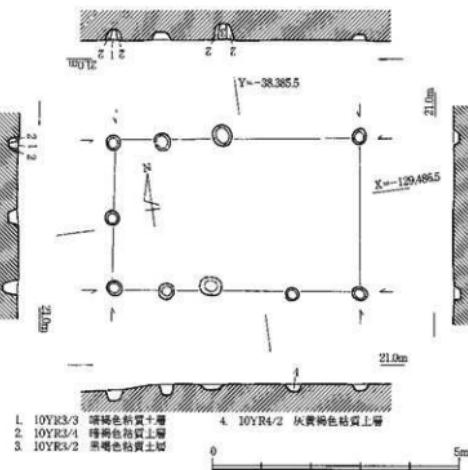
v) 井戸

D570井戸（第251図）屋敷地の  
北側中央 X = -129,485、Y = -  
38,370付近を中心とする井戸であ  
る。平面形では楕円形に近い形を呈  
し、長径約 2.5m、短径約 2.2m、深  
さ約 1.6m を測る。井戸内部から瓦  
器楕、土師器小皿、白磁碗、青磁碗、  
須恵器壺、土師器壺（第252図、図  
版34-3）などが出土している。

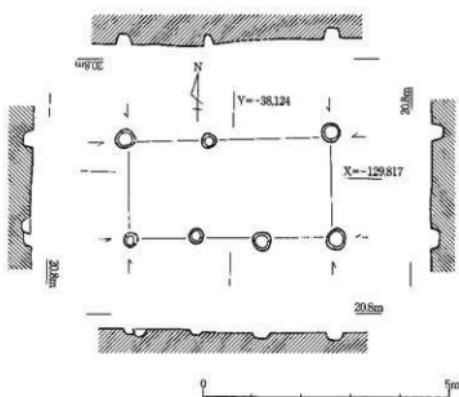
k. 屋敷M（第253図、図版15-1）

i) 概要

屋敷Mは、D地区の北西側 X = -129,450、Y = -38,390付近を中心とする。平面形では台形に近い形を呈するものと推定され、東西上辺約 16.0m、東西下辺約 26.0m、南北約 31.0m、面積約 651m<sup>2</sup> を測る。東側は区画溝（D2671）を隔て屋敷T、西側は区画溝（E191）を隔て屋敷Q、北側は中世の遺構が全く存在しない空白域、南側は区画溝（D1559）を隔て屋敷N・O が存在する。屋敷Mで確認した遺構は、建物 3 棟、建物



第266図 建物118平面・断面図



第267図 建物119平面・断面図

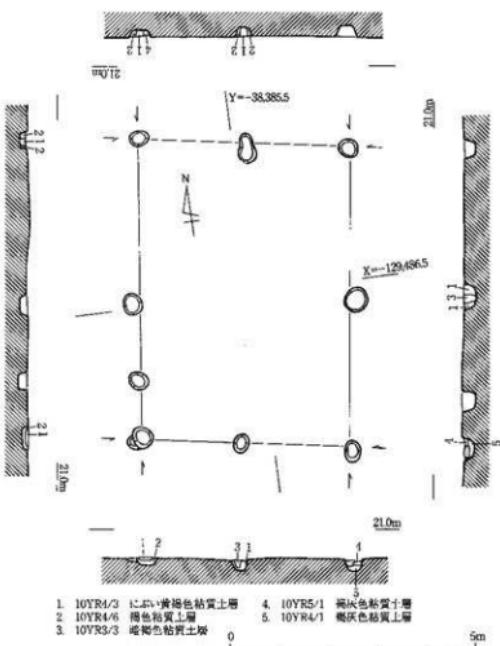
にならなかつた柱穴多数、区画溝3本などである。

## ii) 区画する造構

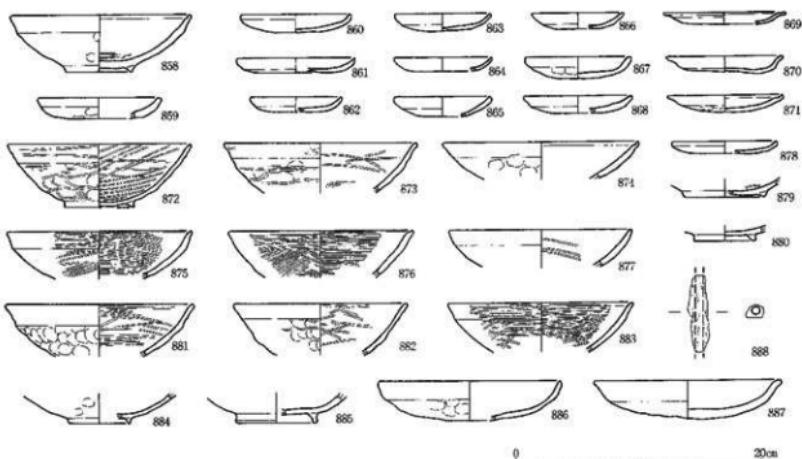
区画溝 E191区画溝については屋敷Qで記述するので、ここでは割愛する。

D1559区画溝（第253図・第259図）屋敷N・Oの北端、屋敷Mの南端で検出した。溝は屋敷地の北端X = -129,460付近を東西北方向に延びる。幅約0.6m、深さ約0.05mを測る。

D2671区画溝（第230図）屋敷Mの東端、屋敷Jの西端で検出した。溝は屋敷地の東端Y = -38,376付近を南北方向に延び



第268図 建物120平面・断面図



第269図 屋敷N・O柱穴出土遺物

D1704(858-859) D1333(860-861) D1119(862-864) D2257(865-868) D1815(869) D1602(870) D1550(871)  
D1469(872) D2316(873) D1508(874) D1139(875) D1208(876) D1122(877) D3579(878) D2760(880)  
D1116(881-882) D1503(883) D1514(884) D1281(885) D1450(886) D1442(887) D1332(888)

る。幅約0.9m、深さ約0.05mを測る。

これらの区画溝の埋土からは、瓦器椀、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかった。

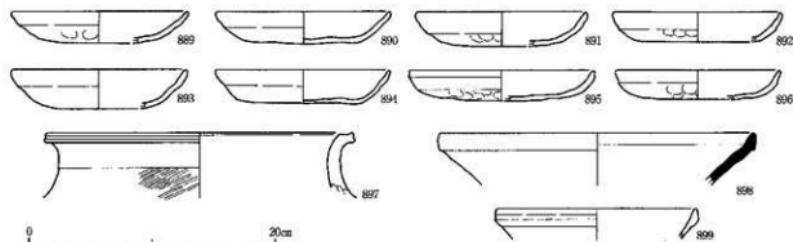
### iii) 建物 (表19)

屋敷M内で確認した建物は、建物112（第254図）、建物113（第258図）、建物114（第257図）の3棟で屋敷地の西側に集中している。これら建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。

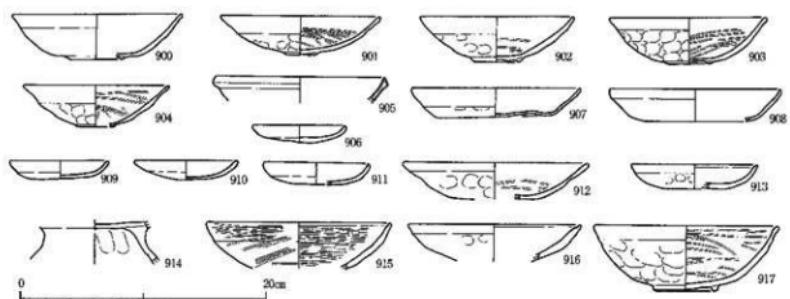
建物113の周辺柱穴のD1688、D1686、D1664、D2807、D1639から瓦器椀、上師器小皿、土師器皿などの遺物（第255図）、建物114の柱穴D1581、周辺の柱穴D1616から土師器小皿、土師器皿などの遺物（第256図、図版34-4）が出土している。

#### 1. 屋敷N・O（第259図、図版15-2）

##### i) 概要



第270図 D1853井戸出土遺物



第271図 屋敷N・O土坑出土遺物

D1126(900-906) D1822(907-911) D2403(912) D2821(913-914) D2683(915) D1399(916) D1387(917)

屋敷N・Oは、当初は同一区画と考えていたが、遺構の配置状況、両屋敷跡の中央付近にD1780区画溝が南北に延びていることから2区画に分かれる可能性が高いと判断した。しかし建物118が区画溝を跨いで存在することから、同一区画である可能性も捨てきれない。

屋敷Nは、D地区の南西側に存在し、調査区内での中心はX=-129,475、Y=-38,397付近である。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約7.0m、南北約30.0m以上、面積237m<sup>2</sup>以上を測る。東側は区画溝(D1780)を隔て屋敷O、西側は区画溝(D1601)を隔て屋敷R、北側は区画溝(D1559)を隔て屋敷M、南側は調査区外であるため不明である。

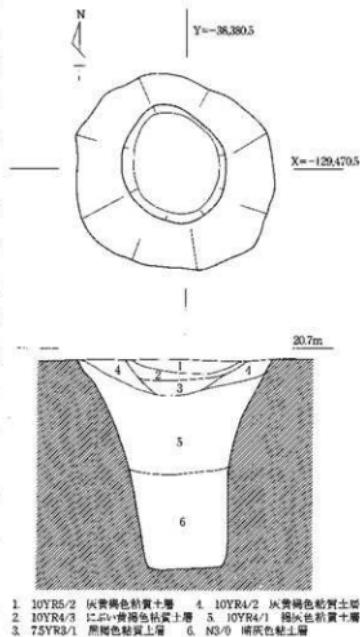
屋敷Oは、D地区の南中央付近に存在し、調査区内での中心はX=-129,475、Y=-38,386付近である。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約12.0m、南北約32.5m、面積390m<sup>2</sup>以上を測る。東側は区画溝(D2788)を隔て屋敷K・L、西側は区画溝(D1780)を隔て屋敷N、北側は区画溝(D1559)を隔て屋敷M、南側は調査区外であるため不明である。

屋敷N・Oで確認した遺構は、建物6棟、建物にならない柱穴多数、土坑8基、井戸1基などである。

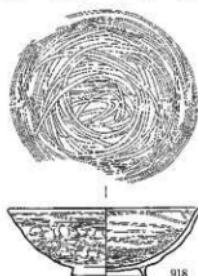
#### ii) 区画する遺構

区画溝 D2788・D1559区画溝については屋敷K・Mでそれぞれ前述しているので、ここでは割愛する。

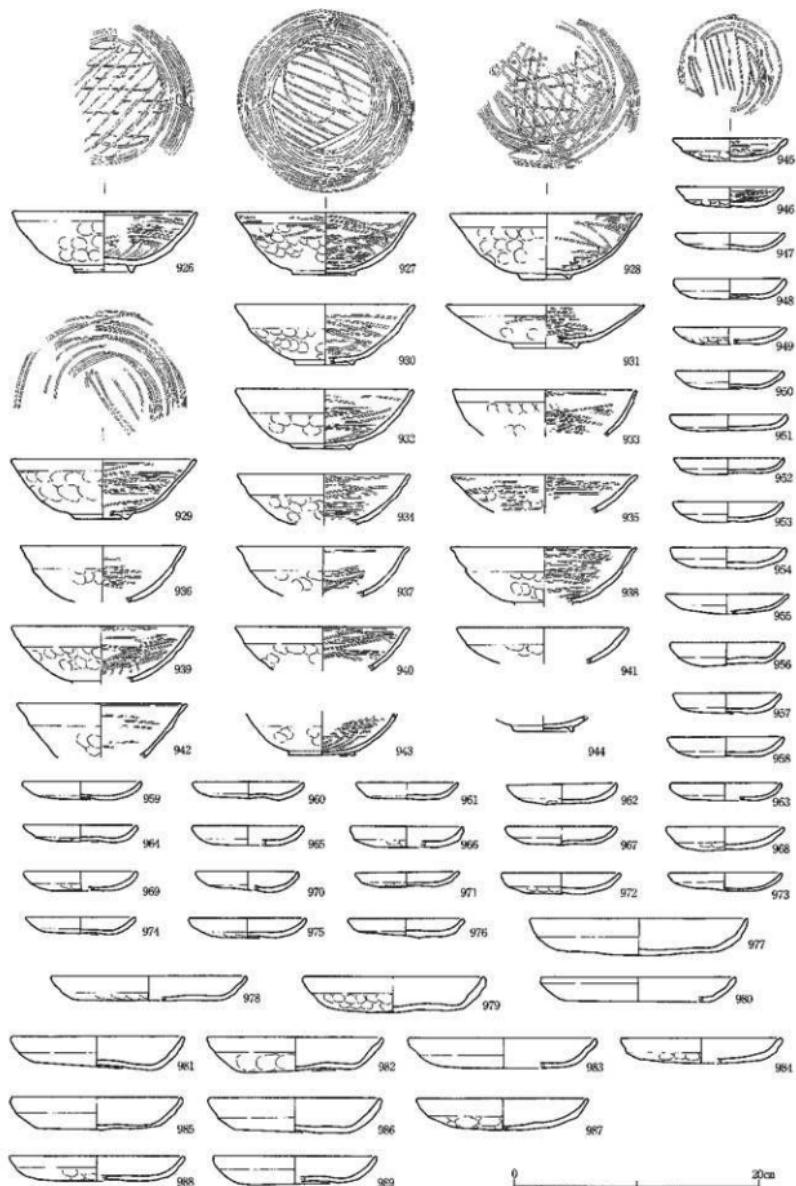
D1780区画溝(第259図) 屋敷Oの西端、屋敷Nの西端で検出した。溝は屋敷地の西端Y=-38,394



第272図 D1853井戸平面・断面図



第273図 D2803土坑出土遺物



第274図 D1853井戸出土遺物

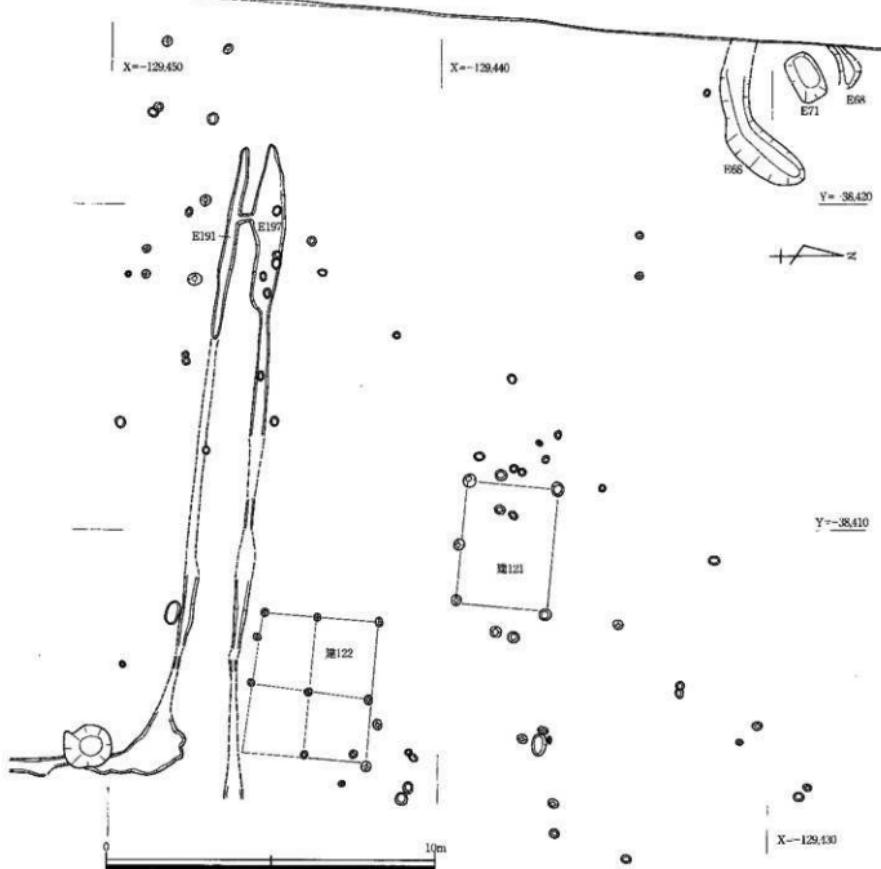
付近を南北方向に延びる。幅約0.7m、深さ約0.05mを測る。

D1601区画溝（第259図・第284図） 屋敷Nの西端、屋敷Rの東端で検出した。溝は屋敷地の西端Y=-38,400付近をほぼ南北方向に延びる。幅約0.7m、深さ約0.05mを測る。

なお、これらの区画溝からは瓦器碗、土師器皿、土師器小皿、東播系擂鉢、硯などの遺物（第261図、図版35-3）が出土している。

### iii) 建物（表20）

屋敷N・O内で確認した建物は、建物115（第260図）、建物116（第262図）、建物117（第265図）、建物118（第266図）、建物119（第267図）、建物120（第268図）の6棟である。これら確認出来た



第275図 屋敷P平面図

建物の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在している。このことから、これら以外にも建物が存在し、また同一地点において建て替えが行われた可能性が高い。

建物116の柱穴D1543、D2341、周辺の柱穴D1419、D1422、D1414、D1432（第263図、図版34-2-4）、建物117の周辺柱穴D1377、D2330（第264図、図版35-2-4）、建物118の周辺柱穴D2330、D1469、D1514（第269図、図版35-4）、建物120の周辺柱穴D1704、D1333、D1119、D2257、D1815、D1469、D2316、D1139、D1122、D3579、D1484、D1116、D1503、D1514、D1450（第269図、図版36-1）から瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿、土師器皿、土師器羽釜、白磁碗などの遺物が出土している。

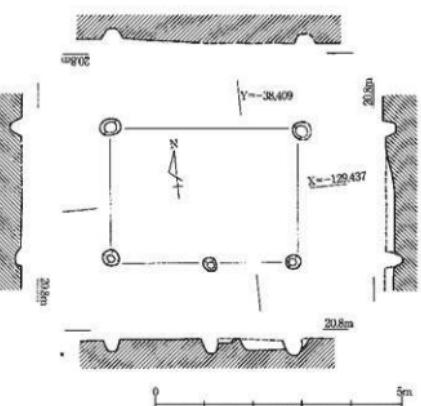
#### iv) 土坑

D2803土坑（第259図）屋敷Nの南西側、建物117の右側にありX=-129.481、Y=-38.394付近を中心とする土坑である。平面形では半円形に近い形を呈し、底部は平らに近い。径約1.2m、深さ約0.5mを測る。

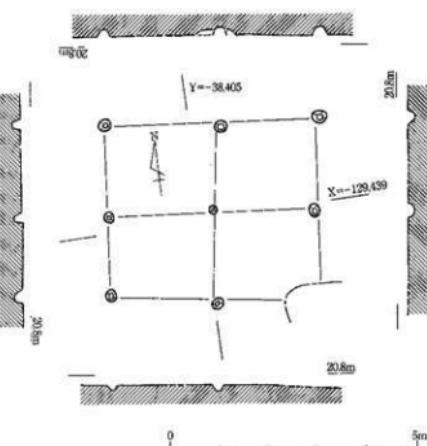
土坑内部から瓦器椀、土師器小皿（第273図、図版35-4）などが出土している。なお、屋敷地内に存在するD1126、D1822、D2403、D2821、D2683、D1399、D1387の各土坑より土師器皿、土師器小皿、東播系播鉢、白磁碗などの遺物（第271図、図版35-3）が出土している。

#### v) 井戸

D1853井戸（第272図、図版15-3）屋



第276図 建物121平面・断面図

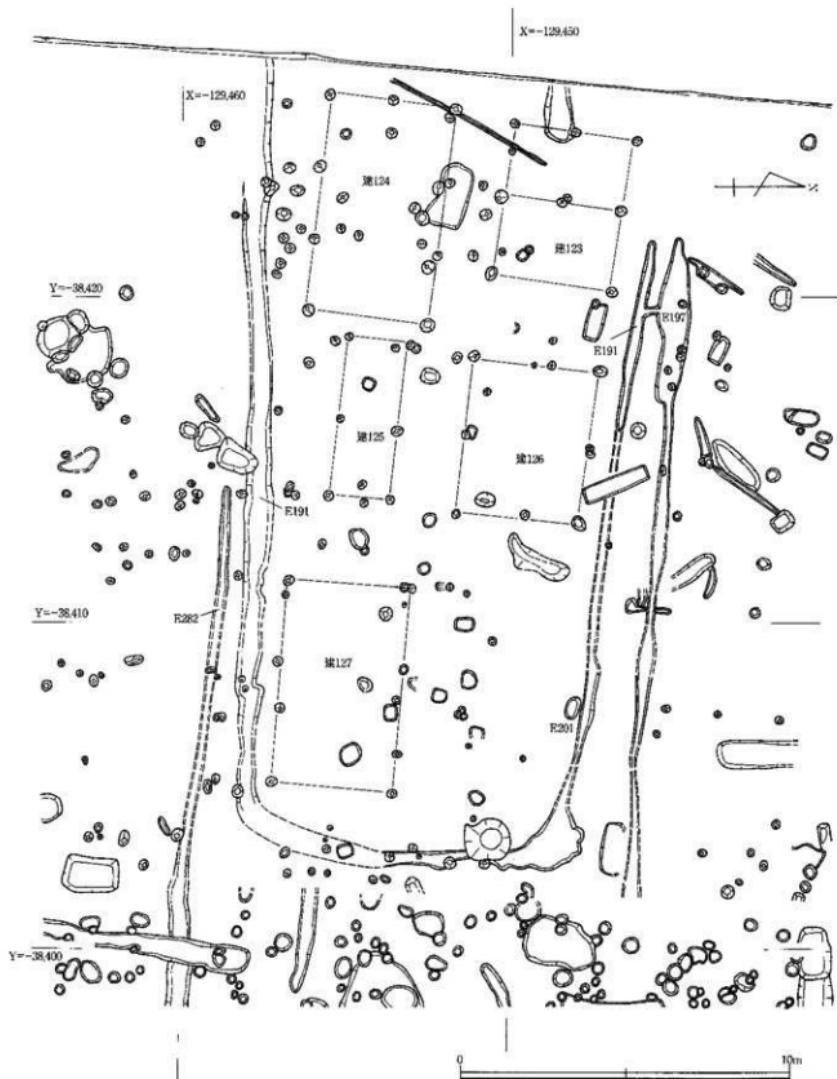


第277図 建物122平面・断面図

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 形 状	柱穴 (m)			柱 底 (m)	方位	備考
	間 (m)	間 (m)	間 (m)	幅 長	X	Y	最 小	最大		深 さ (m)	深 さ (m)				
121 1	2.28	2.38	1.40-3.80	-129.437	-38.409		円	0.30×0.25	0.45×0.35	0.36	0.15		N-6°-E		
122 2	2.35	2.44	1.60-2.20	-129.439	-38.405	○	円	0.18×0.18	0.30-0.26	0.20	0.10		N-5°-E		

表21 屋敷P建物計測値表

數〇の北側、 $X = -129,471$ 、 $Y = -38,380$ 付近を中心とする井戸である。平面形では円形に近い形を呈し、長径約1.0m、短径約0.9m、深さ約1.1mを測る。井戸内部から土師器皿、土師器甕、須恵器擂鉢、白磁碗（第270・274図、図版36-6）などが出土している。



第278図 星敷Q平面図

m. 屋敷P (第275図、図版16-1)

i) 概要

屋敷Pは、E地区の北側X = -129,440、Y = -38,414付近を中心とする。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約24.5m以上、南北約18.0m、面積441m<sup>2</sup>以上を測る。東側には区画する遺構は検出しなかつたが、屋敷Qの東端に存在する区画溝の延長線を隔て屋敷M、西端は調査区外のため不明、北側は明確な区画する遺構は存在しないが、環状の溝に囲まれた土坑からの延長線付近と推定され、それより北は中世の遺構がほとんど存在しない空白域、南側は区画溝を隔て屋敷Qが存在する。

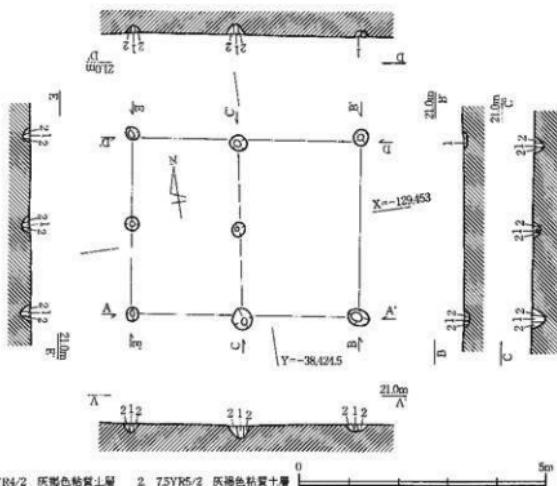
屋敷P内で確認した遺構は、建物2棟、建物にならなかった柱穴多數、環状の溝に囲まれた上坑1基、区画溝1本などである。

ii) 区画する遺構

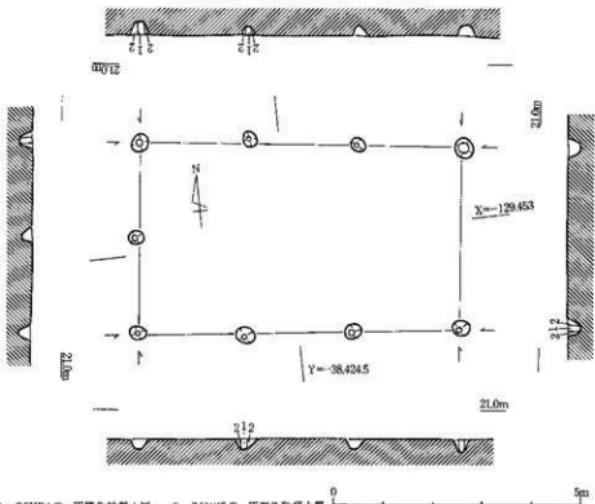
区画溝 E197・E191  
区画溝について、屋敷Qで記述するのでここでは割愛する。

iii) 建物 (表21)

屋敷P内で確認した建物は、建物121 (第276図)、建物122 (第277図) の2棟である。こ



第279図 建物123平面・断面図



第280図 建物124平面・断面図

これら確認出来た建物周辺には、建物にはならない柱穴が存在している。建物からは、瓦器楕、土器師小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかった。

#### iv) 土坑

**環状の溝に囲まれた土坑 (E71)** 屋敷Pの北西側X = -129,429, Y = -38,424付近に存在する。造構の用途は不明であるが、環状の溝のほぼ中央に土坑が存在することから、これらの遺構は一体のものであると判断している。環状の溝 (E68) は東北側が開いており、幅約1.1m、深さ約0.1mを測る。土坑は平面形では長方形に近く、長さ約1.5m、幅約0.9mを測る。土坑の底面は平らに近く、深さ0.55mを測る。

土坑の形状、底面が平らであること、土坑の周間に溝が回ることから土壌墓の可能性がある。

n. 屋敷Q (第278図、図版16-2)

#### i) 概要

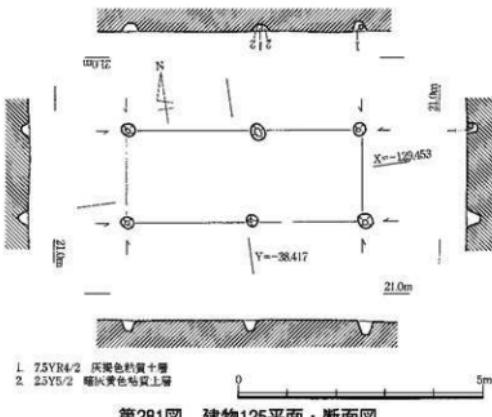
屋敷Qは、E地区の中央X = -129,452, Y = -38,413付近を中心とする。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約24.0m、南北約10.5m、面積約252m<sup>2</sup>を測る。東側は区画溝 (E191) を隔て屋敷M、西端は調査区外であるため不明、北側はE197区画溝とE191区画溝に囲まれ、道状を呈する造構を隔て屋敷P、南側はE191区画溝とE282区画溝に囲まれ道状を呈する造構を隔て屋敷Rが存在する。

屋敷Q内で確認した造構は、建物5棟、建物にならなかった柱穴多数、平行する2本の区画溝によって道状を呈する造構2ヶ所などである。

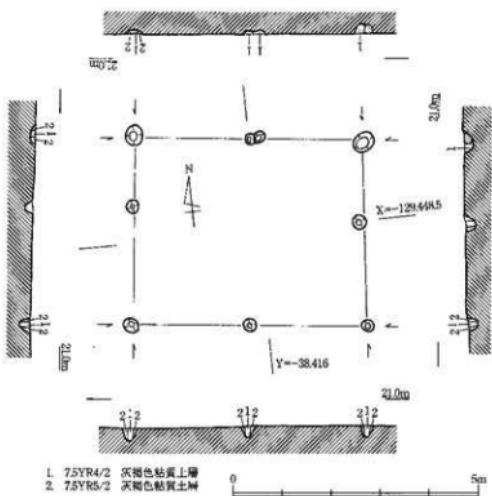
#### ii) 区画する造構

##### 区画溝

E191区画溝 (第278図) 屋敷Q



第281図 建物125平面・断面図



第282図 建物126平面・断面図

では屋敷地を巡る2本の区画溝を検出している。その内で内側を巡る溝である。溝は、北側で幅0.3m前後、東側で幅0.4m前後、南側で幅0.7m前後、深さ0.05mを測る。

E197区画溝（第278図） 屋敷地の北側X = -129,445付近を東西に延びる溝で幅0.3mから1.0m、深さ約0.05mを測る。

E282区画溝（第278図） 屋敷地の南側X = -129,599付近を東西に延びる溝で幅0.3m前後、深さ約0.05mを測る。

これらの区画溝の埠土からは、瓦器碗、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかった。

道状遺構（第278図） 屋敷跡の外側をほぼ平行するように巡る2本の区画溝の間は、北側で幅1.4m前後、南側で幅0.4m前後を測る。平面形では道状を呈していることから、この空間は道であった可能性が高いと考えている。

### iii) 建物（表22）

屋敷Q内で確認した建

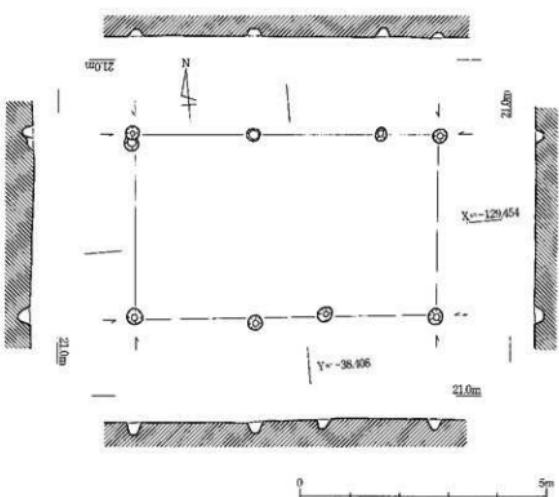
物は、建物123（第279図）、

建物124（第280図）、建物

125（第281図）、建物126（第  
282図）、建物127（第283図）

の5棟である。これらの建  
物は、屋敷地内の広場と推  
定される東北部周辺を除  
き、屋敷地内で東西方向に  
ほぼ等間隔に配置されてい  
る。これら確認出来た建物  
の周辺には、建物にはなら  
ない柱穴が存在している。

また、これらの柱穴から  
は、瓦器碗、土師器小皿な



第283図 建物127平面・断面図

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 形状	柱穴 (m)				柱 高 (m)	方位	備考
	間 (m)	間 (m)	短 ・長	X	Y	最小	最大	深さ		深	浅					
123	2	3.7	2	4.6	1.80~3.65	-129,447	-38,423	円	0.30×0.24	0.45×0.40	0.28	0.06	0.16	N-S-E		
124	2	3.9	3	6.6	2.15~3.75	-129,453	-38,424	円	0.32×0.25	0.43×0.37	0.28	0.18	0.14	N-E-E		
125	1	1.9	2	4.8	1.86~2.60	-129,453	-38,417	円	0.28×0.23	0.38×0.28	0.28	0.15	0.12	N-S-E		
126	2	3.9	2	4.8	1.45~2.40	-129,448	-38,416	円	0.22×0.19	0.47×0.37	0.25	0.06	1.00	N-S-E		
127	1	3.8	3	6.2	1.20~3.82	-129,454	-38,408	円	0.29×0.22	0.33×0.28	0.28	0.10		N-S-E		

表22 屋敷Q建物計測値表

どの遺物が少量出土した。

○ 屋敷R（第284図、図版17-1）

i) 概要

屋敷Rは、E地区の南側X=-129,470、Y=-38,415付近を中心とする。平面形では長方形



第284図 屋敷R平面図

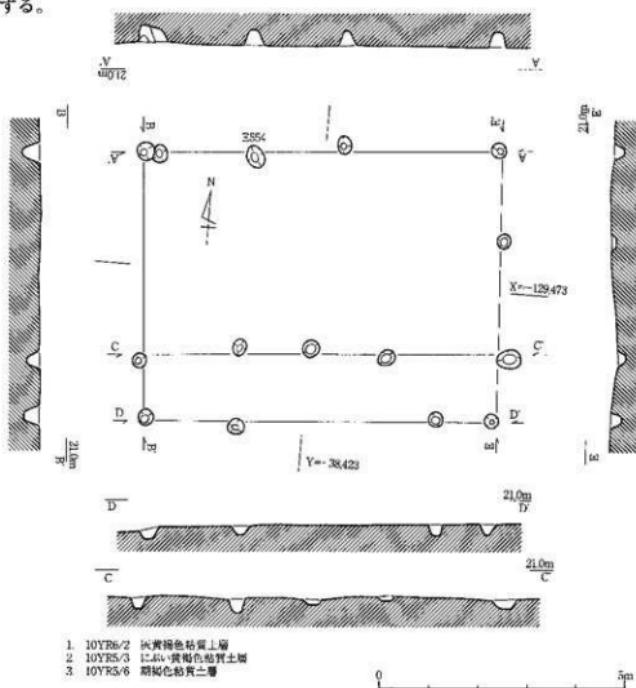
に近い形を呈し、東西約27.5m以上、南北約22.5m、面積約618.8m<sup>2</sup>以上を測る。東側は区画溝を隔て屋敷N、西端は調査区外のため不明、北側は道状遺構を隔て屋敷Q、南側は区画溝(E815)を隔て屋敷Sが存在する。

屋敷R内で確認した遺構は、建物2棟、建物にならなかった柱穴多数、土坑1基、屋敷墓と推定される土壙墓2基、区画溝3本などである。

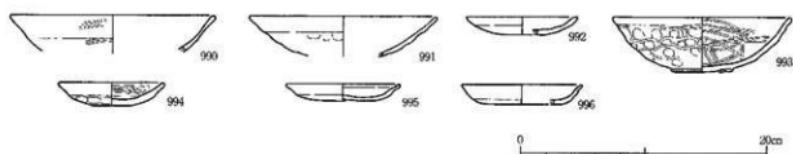
#### ii) 区画する遺構

区画溝 E191・E282区画溝・道状遺構については前述しているのでここでは割愛する。

E815区画溝(第284・294図) 屋敷地の南端X = - 129,480付近を



第285図 建物128平面・断面図



第286図 建物128及び周辺柱穴出土遺物 E554(990-992) E540(933) E552(994) E728(995) E549(996)

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 種 類	柱穴 (m)			柱 高 度 (m)	方位	備考
	間	間	間	間	軸~長	X	Y	柱 形 状	最 小	最大	深さ				
	(m)	(m)	(m)	(m)							(m)	(m)			
128	2	41	3~4	7.5	1.36~4.16	-129,473	-38,423	円	0.31×0.28	0.51×0.39	0.40	0.10	0.20	N-5°-E	底 7.10m
129	1	27	3~4	10.3	1.36~4.84	-129,476	-38,413	円	0.25×0.22	0.40×0.30	0.34	0.12	0.18	N-2°-E	底 10.30m

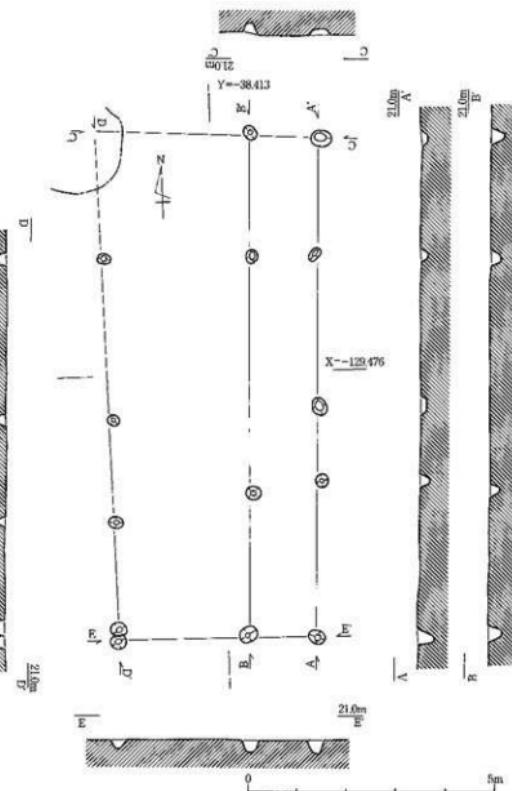
表23 屋敷R建物計測値表

東西に延びる溝である。溝は大半が欠失し、中央付近の一部のみ検出したため、方向が不明であるが、屋敷Nと屋敷Rを区画するD1601溝の方向から推定すると屋敷Nとの境目、X = -129,587, Y = -38,404付近から北西に延び、X = -129,480, Y = -38,413付近で東西方向に変わるとと思われる。幅約0.4m、深さ約0.05mを測る。

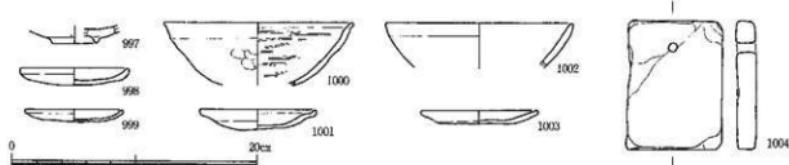
E815区画溝からは、瓦器柄、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかった。

### iii) 建物（表23）

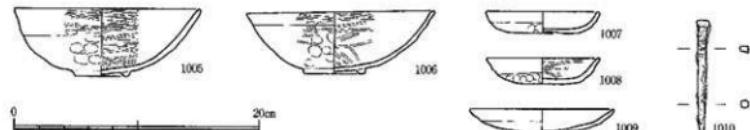
屋敷R内で確認した建物は、建物128（第285図）、建物129（第287図）の2棟である。これら確認出来た建物の周辺には、建物にはならない柱穴が存在している。建物128の



第287図 建物129平面・断面図



第288図 屋敷R土坑出土遺物 E698(997~999) E808(1000~1002) E742(1003) E706(1004)



第289図 E471土坑出土遺物

柱穴E540、周辺の柱穴E552、E554、E549（第286図、図版36-2）、建物129の周辺柱穴E742（第288図、図版36-2）から瓦器碗、瓦器小皿、土師器小皿などが出土している。

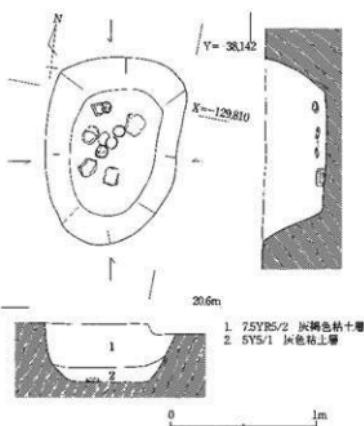
#### iv) 土坑

**E471土坑（第284図）** 屋敷地の北側X = -129,466、Y = -38,406付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8mを測る。内部から瓦器碗、土師器小皿、鉄釘（第289図）などが出土している。

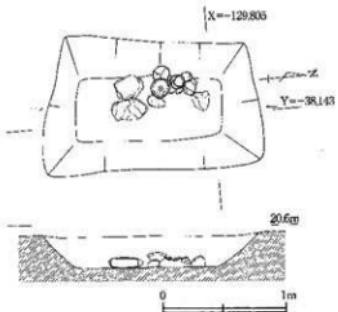
#### v) 土壙墓

**E460土壙墓（第292図、図版16-3）** 屋敷地の北東側X = -129,465、Y = -38,403付近を中心検出した。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約1.23m、短径約0.9m、土壙底面は平らで深さ約0.4mを測る。土壙底には、長さ0.1m前後の川原石を4個配置し柏台としている。また、土壙底中央部付近から土師器小皿（5個体）が出土している（第293図、図版36-5）。

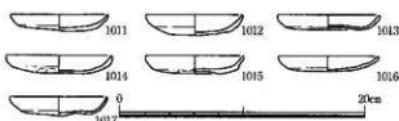
**E398土壙墓（第290図、図版17-2）** 屋敷地の北東側X = -129,463、Y = -38,402付近を中心検出した。平面形では長方形に近い形を



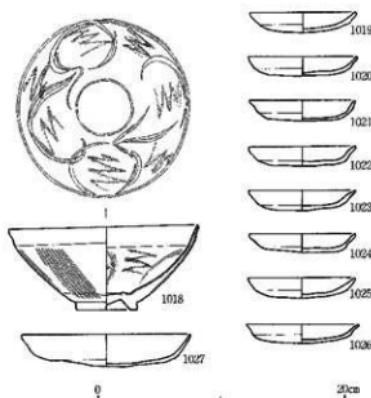
第292図 E460土壙墓平面・断面図



第290図 E398土壙墓平面・断面図



第293図 E460土壙墓出土遺物



第291図 E398土壙墓出土遺物

呈し、長辺約1.3m、短辺約0.7m、深さ約0.2mを測る。土壌底には、長さ0.2m前後の川原石を3個配置し、棺台としている。また、土壌底中央部付近から青磁碗（1個体）、土師器小皿（8個体）、土師器皿（1個体）が出土している（第291図、図版36-3）。

#### p. 屋敷S（第294図）

##### i) 概要

屋敷Sは、X=-129,480、Y=-38,414付近を中心とする。平面形は、屋敷地の大半が南側の調査区外にあり、東西25.5m以上、南北5.0m以上、面積127.5m<sup>2</sup>以上を測る。

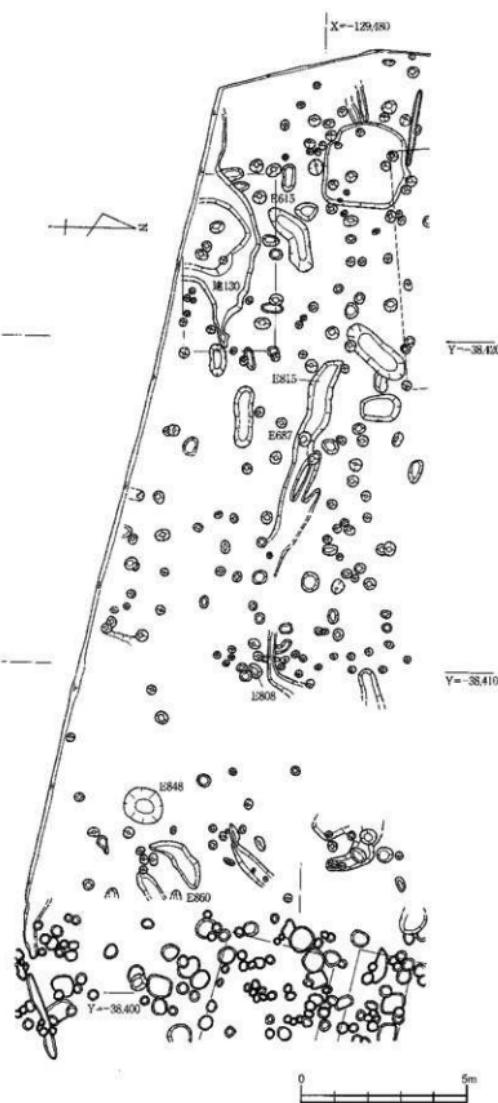
屋敷地の東側は区画する遺構は検出しなかったが、屋敷Nの西端、屋敷Rの東端を南北に延びる区画溝（E1601）の延長線付近と推測される。北側は区画溝（E815）を隔て屋敷Rが存在する。南端及び西端は調査区外のため不明である。屋敷R内で確認した遺構は、建物1棟、建物にならなかった柱穴多数、井戸1基、区画溝1本などである。

##### ii) 区画する遺構

区画溝 E815区画溝については屋敷Rにおいて前述しているのでここでは割愛する。

##### iii) 建物（表24）

屋敷S内で確認した建物は、建物130（第295図）1棟のみで、屋



第294図 屋敷S平面図

敷地の北西側で検出した。建物の北西側の柱穴は、南側の調査区外にあるため不明である。建物130の周辺柱穴E615から土師器小皿などの遺物（第297図、図版36-2）が出土している。

また、確認出来た建物130の周辺には、建物にはならない柱穴が多数存在し、これらからも瓦器椀、白磁碗（第297-1028～1030図、図版36-2）などの遺物が出土している。

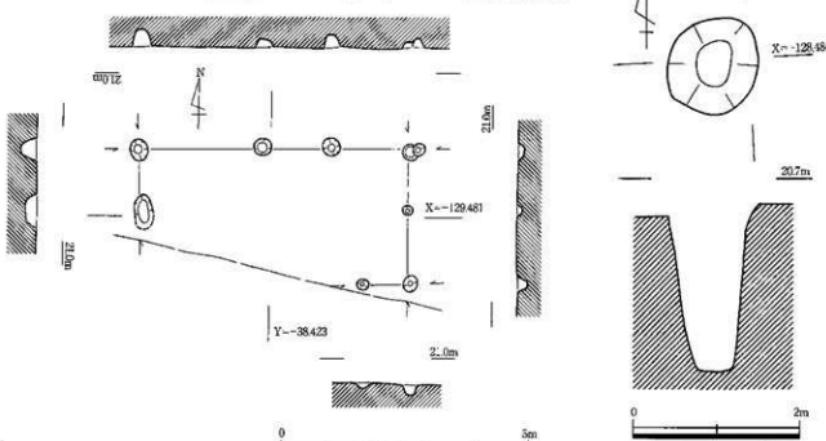
#### iv) 井戸

**D848井戸**（第296図） 屋敷地の東北側  $X = -128,485$ 、 $Y = -38,406$  付近を中心とする井戸である。平面形では円形に近い形を呈し、径1.2 m前後、深さ約2.0 mを測る。井戸内部から瓦器椀、瓦器小皿（第298図、図版36-4）などが出土している。

#### q. 屋敷T（第299図）

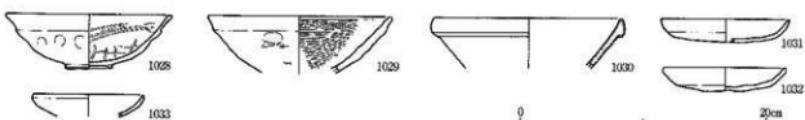
##### i) 概要

屋敷Tは、D地区の北西側  $X = -129,455$ 、 $Y = -38,370$ 付近を



第295図 建物130平面・断面図

第296図 E848井戸  
平面・断面図



第297図 屋敷S柱穴出土遺物 E860(1028) E687(1029) E599(1030) E615(1031~1033)

番号	梁間 (m)	桁行 (m)	柱間(m)	位置		柱穴 (m)				柱 径 (m)	柱 高 度 (m)	方位	備考				
				縦…長	X	Y	最小	最大	深さ (深 浅)								
130	2	2.7	3	5.6	1.98~2.60	-129.481	-38.423	円 形 状	0.22×0.20	0.71×0.39	0.36 0.12	N-1°-E					

表24 屋敷S建物計測値表

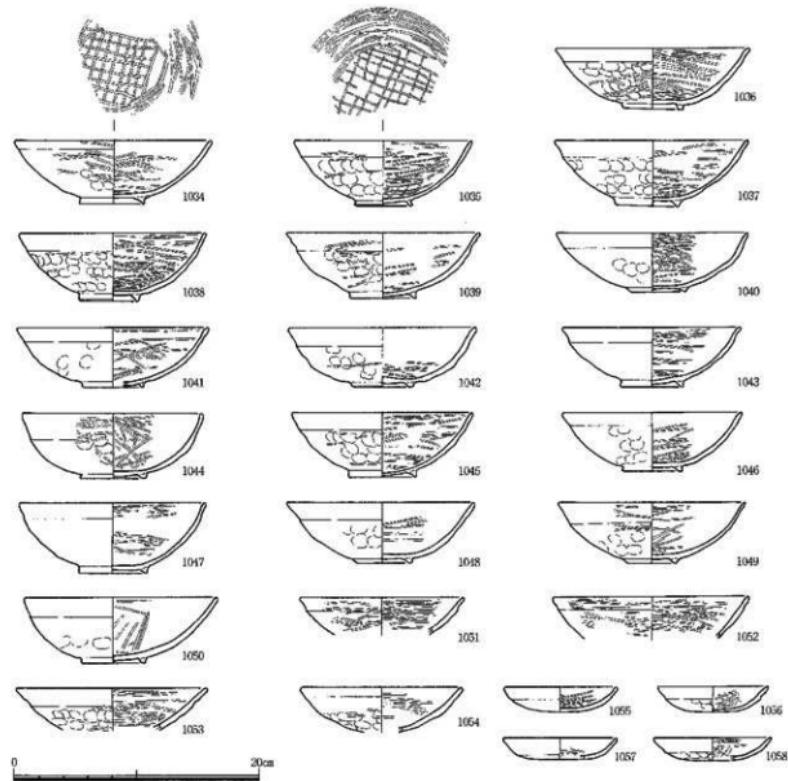
中心とする。平面形では長方形に近い形を呈し、東西約15.0m、南北約18.5m、面積約277.5m<sup>2</sup>を測る。東側は区画溝（B897）を隔て屋敷B、西側は区画溝（D2671）を隔て屋敷Mが存在する。北側を区画する遺構は地山面および近世の搅乱により一部のみの検出であったが、X = -129,446付近に存在する東西方向の溝と推定される。その溝により北側は中世の遺構が存在しない空白域、南側は区画溝（D2671）を隔て屋敷Kが存在する。

屋敷T周辺で確認した遺構は、建物1棟、建物にならなかった柱穴多数、区画溝4本などである。

#### ii) 区画する遺構

##### 区画溝

B897区画溝（第299図）屋敷Tの東側付近では、地山面が削平を受け、北東側の一部を除き検出できなかったが、屋敷地の東南端X = -129,466、Y = -38,360付近において検出長は短いが、

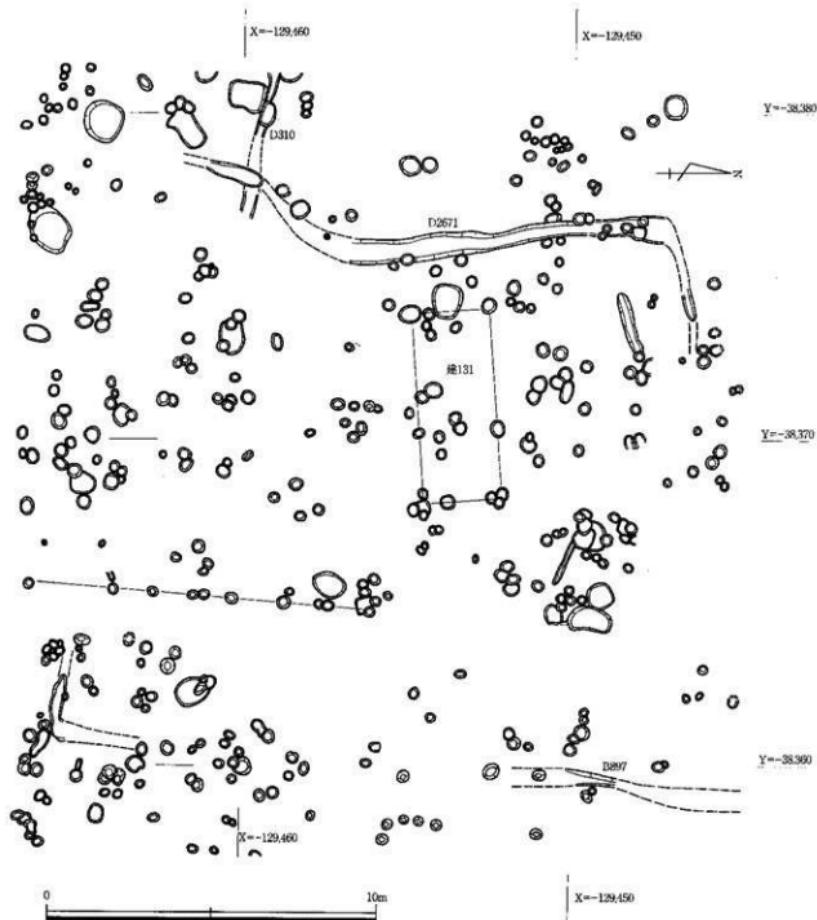


第298図 E848井戸出土遺物

西側に屈曲する溝を確認している。この溝は、区画溝の検出状況から屋敷Mと屋敷N・Oを分けるD1559区画溝に続くものと推定される。検出長約2.5m、幅約0.4m、深さ約0.05mを測る。

D2671区画溝（第299図） 屋敷地の北西側で検出長は短いが、東西方向に延びる溝を確認した。北西端の屈曲部付近が近世の擾乱土坑により欠失しているが、位置関係からX=-129,446、Y=-38,376付近で屈曲し、屋敷地を囲むものと推定される。検出長約4.5m、幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。

区画溝からは、瓦器碗、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはな



第299図 屋敷T平面図

かった。

### iii) 建物 (表25)

屋敷T内で確認した建物は、建物131（第300図）1棟のみで、西側B中央付近で検出した。検出した柱穴埋土からは、瓦器梶、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかった。

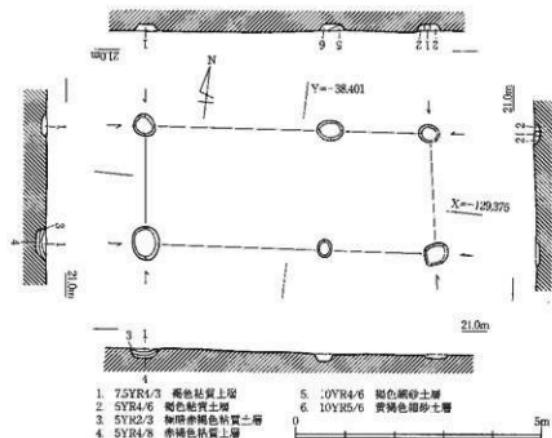
#### r. 屋敷H・I

##### i) 概要

屋敷H・IはC地区に存在する。区画する遺構は、調査区を南北に延びる溝2本を確認したのみで、東西方向の区画する遺構は検出しなかった。しかし、溝に囲まれた内部には、数は多くはないものの柱穴、土坑、埋納穴などの遺構を確認している。このことから東西方向の区画する遺構は検出されなかつたが、屋敷跡が存在していたものと推察される。ここでは、屋敷E・C・Fの東側ラインと区画溝（C235）間に屋敷H、区画溝（C235）と区画溝（C426）の間に屋敷Iとした。南北方向は区画する遺構を検出しなかつたため不明であるが、屋敷Hは、東西約16m、屋敷Iは、東西約18mを測る。

##### ii) 区画する遺構

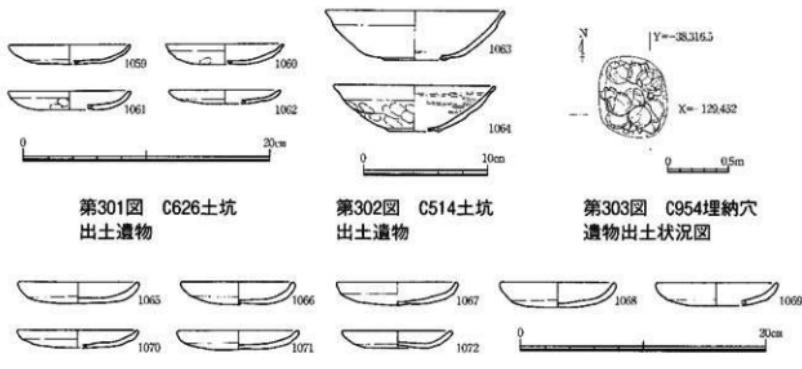
C235区画溝 C地区の西側Y=-38,310付近をほぼ南北に延びる溝である。幅0.7mから0.8



第300図 建物131平面・断面図

番号	梁間		桁行		柱間(m)		位置		柱 形状	柱穴 (m)		深さ 深 浅	柱径 (m)	方位	備考
	間 (m)	間 (m)	規長	X	Y					最小	最大				
131	1	2.4	2	5.9	1.95~3.78	-129.453	-38.372	円	0.38×0.29	0.68×0.56	0.20	0.08	0.10	N-7°-E	

表25 屋敷T建物計測値表



m、深さ約0.07mを測る。

C426区画溝 C地区の中央Y=-38,289付近をほぼ南北に延びる溝である。幅0.6mから0.8m、深さ約0.1mを測る。

区画溝からは、瓦器椀、土師器小皿などの遺物が少量出土したが、小片で図化できるものはなかった。

### iii) 埋納穴

C954埋納穴（第303図） 屋敷Hの南東側X=-129,452、Y=-38,317付近を中心とする埋納穴である。平面形では楕円形に近い形を呈し、長径約0.7m、短径約0.55m、深さ約0.05mを測る。穴内部には、土師器小皿（第304図）が底部に敷き詰められた状況で出土している。

### iv) 土坑

**C514土坑** 屋敷H・Iの南西側にありX=-129,473、Y=-38,310付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、底部は平らに近い。径約0.5m、深さ約0.3mを測る。土坑内部から瓦器椀（第302図）などが出土している。

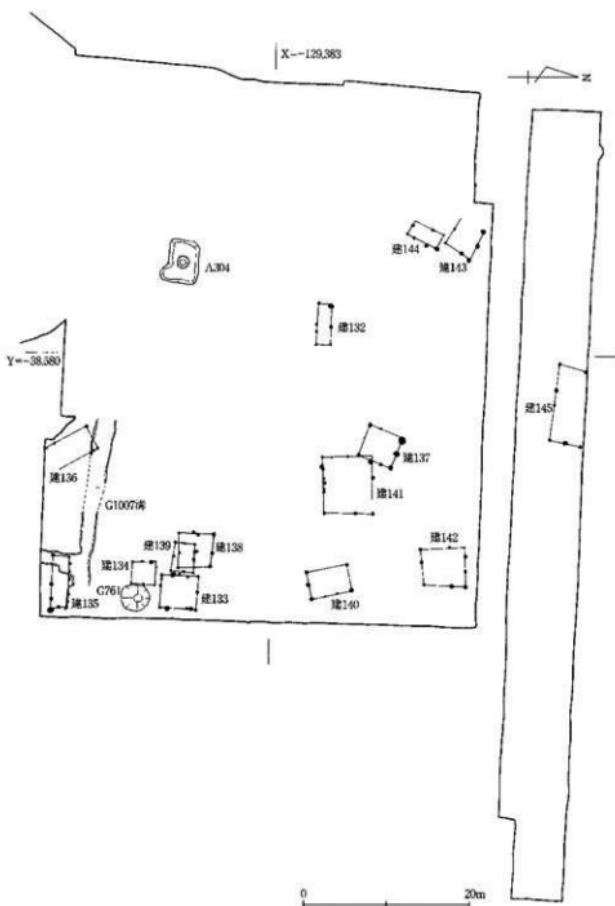
**C626土坑** 屋敷H・Iの南西側にありX=-129,456、Y=-38,319付近を中心とする土坑である。平面形では円形に近い形を呈し、底部は平らに近い。径約0.5m、深さ約0.2mを測る。土坑内部から土師器小皿（第301図）などが出土している。

(奥)

### 3. A・G・I 地区の調査

#### a. 概要 (第305図、図版18-2・3)

A・G・I 地区は飛鳥時代から平安時代前期までの掘立柱建物は柱跡がまとまり、容易に復元できた。しかし、平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、調査区全体で検出されたものの、3カ所(2間)以上が平行して並ぶ柱跡が少なく、G 地区の東部で10棟、西部で2棟の掘立柱建物を復元したのみであった。また、I 地区は中世の遺構が少なく、建物跡を1棟復元したのみであった。



第305図 A・G・I 地区中世遺構配置図

### b. 建物

建物132（第306図） G地区の中央西側で復元した東西に長軸を持つ桁行2間、梁間1間の建物で、約4.8m×約1.7mを測る。柱穴は西北隅が古代のものと重なっていたが、他は楕円形で、径0.3mから0.5mである。主軸はN-3°-Sを示す。

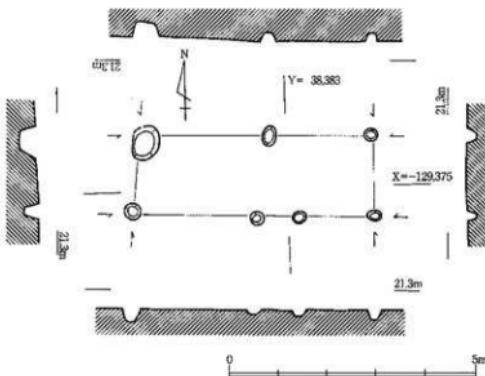
建物133（第307図） 柱穴が重複しているが、南北に長軸を持つ桁行3間、梁間2間で約4.3m×約4.1m（南は約3.9m）の建物になると考えられる。桁側の柱間寸法は梁側が2.00m、南北筋は、1.30mから1.70mを測る。北側柱筋は柱穴が多数重なっており、建設替え時のものと考えられる。

建物134（第308図） 桁筋の柱穴位置は対応しないが南北に長軸を持つ桁行2間、梁間1間の建物で、規模は約2.9m×約2.8mを測る。柱穴は径0.2mから0.4mの歪な円形を呈する。主軸はほぼ座標北を示す。

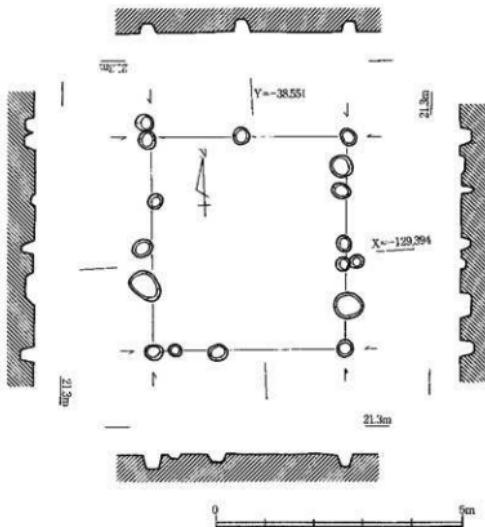
建物135（第309図） G地区南東隅で復元した桁行4間、梁間は1ないし2間の東西に長い建物で、規模は約6.2m×約2.0mを測る。桁筋の柱は対応しないが、柱間寸法は1.10mから1.80mを測る。

建物136（第310図） G地区南端で復元した桁行3間以上、梁間1間の建物で、5.4m以上×3.0mを測る。主軸はN-58°-Wを示し、他の建物と比較して西に振った軸を持つ。

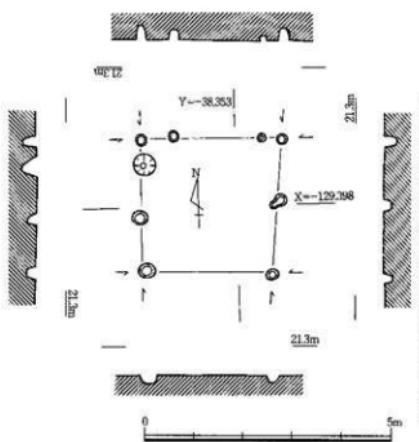
建物137（第311図） 桁行3間、



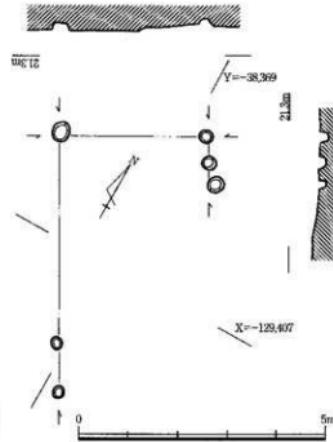
第306図 建物132平面・断面図



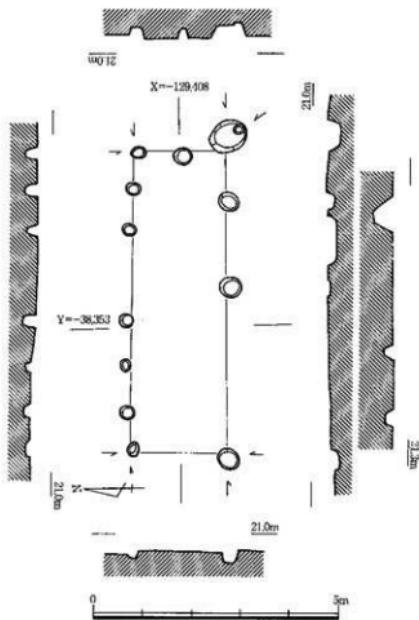
第307図 建物133平面・断面図



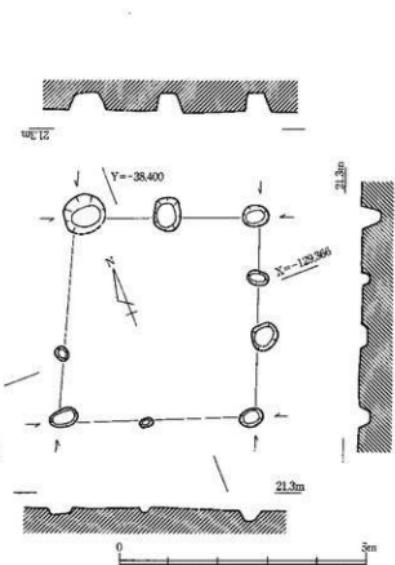
第308図 建物134平面・断面図



第310図 建物136平面・断面図



第309図 建物135平面・断面図



第311図 建物137平面・断面図

梁間2間の建物で約4.1m×約3.8mを測る。柱穴は直角四形で径0.4mから0.8m、柱間寸法は、桁側が1.30mから1.50m、梁側は1.90mを測る。主軸はN-25°-Eを示す。

**建物138（第312図）** G地区東南部で復元した北が小さく歪んだ2間四方の建物で、約4.3m×約4.1mを測る。東西筋の中央柱を結んだ主軸の方位はほぼ座標北を示す。

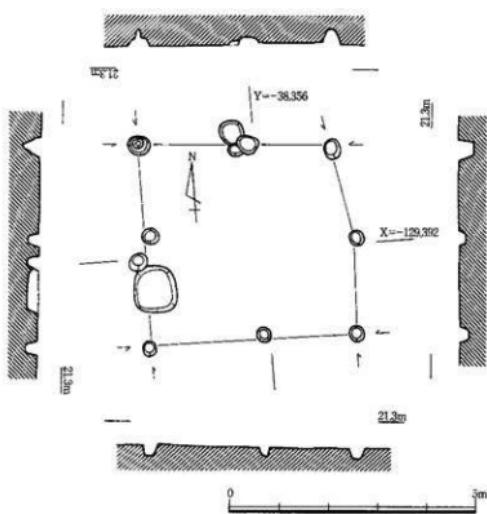
**建物139（第313図）** 建物138と重複して復元した東西に長い2間四方の建物で、東西約3.5m、南北は約2.8mと約2.5mを測る。

**建物140（第314図）** G地区東端部で復元した南北に長軸を持つ3間×2間の建物で、規模は約4.8m×約3.2mを測る。柱穴は、円形で径0.3mから0.6mを測る。柱間寸法は1.50mから1.70mの範囲内におさまる。主軸はN-7°-Wを示す。

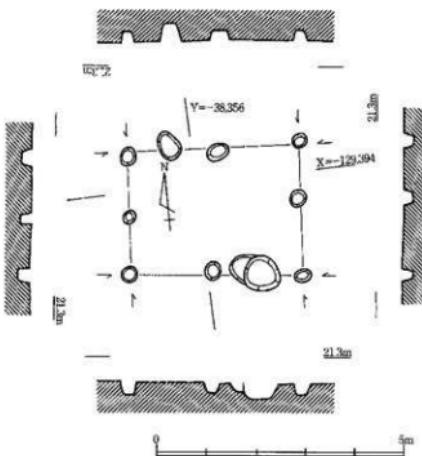
**建物141（第316図）** 柱間隔が不揃いであるが、東西に長い4間×3間の建物を復元した。規模は東西約6.8m、南北約5.7mを測る。長軸はほぼ座標北を示す。

**建物142（第317図）** 桁行、梁間ともに中間柱を欠き、柱間隔も不揃いであるが、3間四方と考えられる建物で、規模は約5.2m×約4.9mを測る。主軸はN-4°-Wを示す。

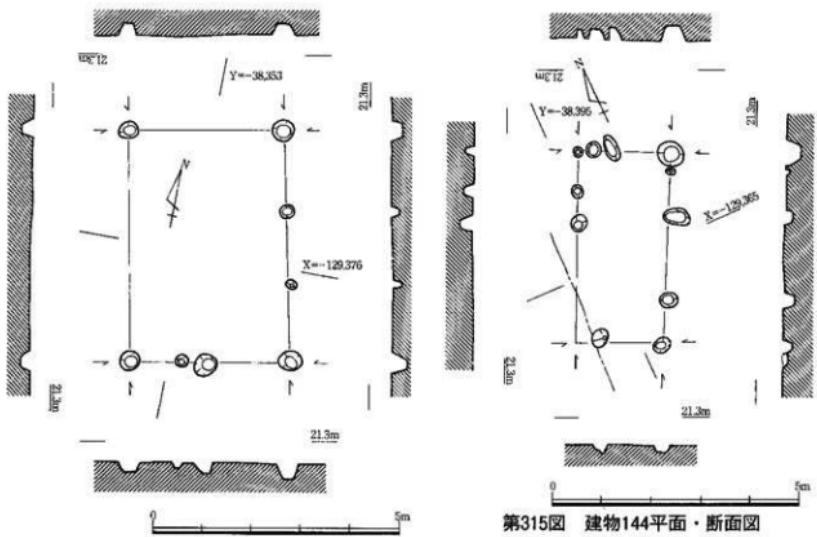
**建物143（第318図）** 北東



第312図 建物138平面・断面図

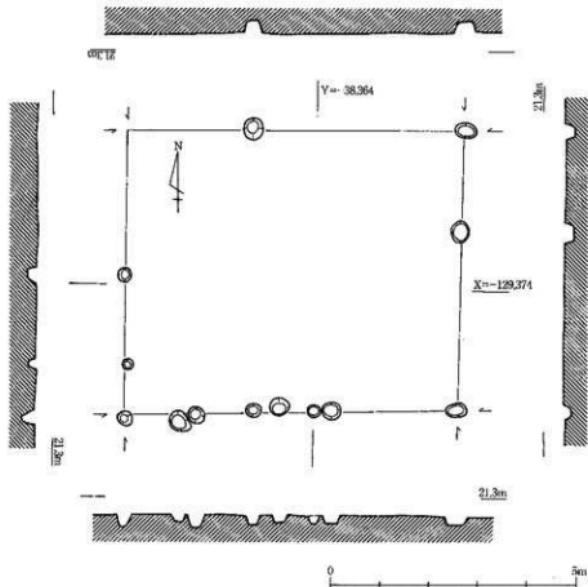


第313図 建物139平面・断面図

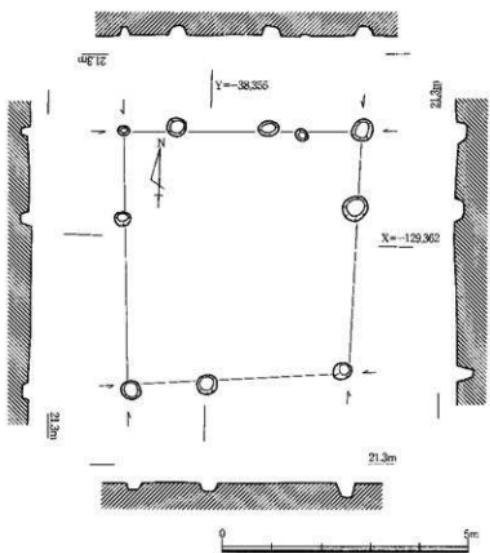


第314図 建物140平面・断面図

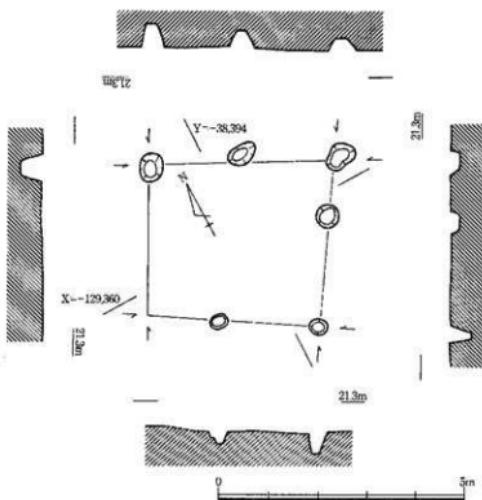
第315図 建物144平面・断面図



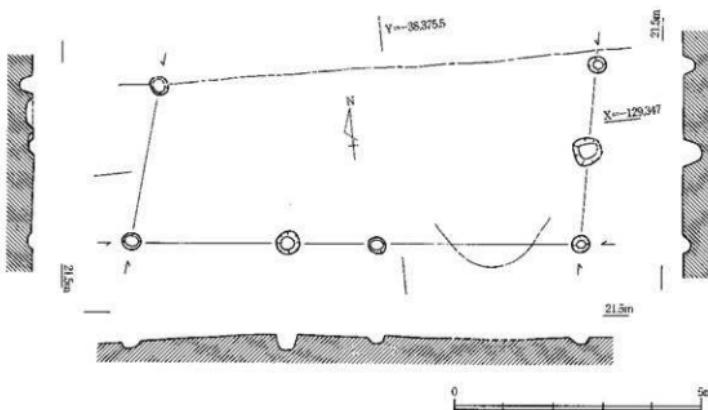
第316図 建物141平面・断面図



第317図 建物142平面・断面図



第318図 建物143平面・断面図



第319図 建物145平面・断面図

番号	層数	梁間			桁行			柱間(m)			位置			総面積 (m <sup>2</sup> )	柱穴 (m)			柱底 (m)	方位	備考			
		間	間	間	行	間	間	間	X	Y	最小		最大		深さ								
											深	浅	深	浅	深	浅							
132	G	1	1.7	2~3	4.8	0.90~2.50	-129.375	-38.383	円	0.30×0.25	0.35×0.75	0.25	0.10	円	0.25	0.10	N-3°-E						
133	G	2	3.9	3	4.4	0.90~2.20	-129.394	-38.551	円	0.25×0.25	0.50×0.70	0.30	0.10	円	0.25	0.10	N-1°-E						
134	G	2	2.8	1	2.9	1.10~2.90	-129.308	-38.553	円	0.15×0.15	0.30×0.35	0.35	0.15	円	0.15	0.15	N						
135	G	1	2.0	3~6	6.2	0.80~3.40	-129.408	-38.353	円	0.25×0.30	0.65×0.75	0.35	0.15	円	0.20	0.15	N						
136	G	1	3.0	21以	5.3	0.50~4.40	-129.407	-38.369	円	0.25×0.30	0.35×0.45	0.20	0.15	円	0.20	0.15	N-30°-W						
137	G	2	3.8	2	4.1	1.20~2.90	-129.366	-38.400	円	0.20×0.30	0.80×0.85	0.40	0.10	円	0.25	0.10	N-58°-E						
138	G	2	4.1	2	4.2	0.50~2.30	-129.392	-38.356	円	0.30×0.35	0.90×0.95	0.40	0.15	円	0.30	0.15	N						
139	G	2	2.6	1	2.5	1.00~1.60	-129.394	-38.356	円	0.30×0.30	0.75×0.80	0.45	0.25	円	0.30	0.25	N-6°-E						
140	G	2	3.2	3	4.8	0.50~4.80	-129.376	-38.353	円	0.20×0.25	0.45×0.50	0.35	0.15	円	0.25	0.15	N-7°-W						
141	G	2	5.7	2~3	6.8	0.50~3.70	-129.374	-38.364	円	0.25×0.25	0.40×0.45	0.30	0.15	円	0.30	0.15	N						
142	G	2~3	4.5	2	5.0	0.70~3.50	-129.362	-38.355	円	0.20×0.25	0.55×0.60	0.35	0.10	円	0.25	0.10	N-4°-W						
143	G	2	3.2	2	3.6	1.20~2.30	-129.360	-38.394	円	0.30×0.40	0.50×0.60	0.55	0.30	円	0.35	0.30	N-37°-E						
144	G	1	1.8	3	3.9	0.70~1.80	-129.365	-38.395	円	0.15×0.20	0.50×0.50	0.40	0.05	円	0.20	0.05	N-23°-E						
145	I	2	3.7	3	9.1	1.80~4.10	-129.347	-38.375	円	0.35×0.35	0.55×0.60	0.35	0.08	円	0.30	0.08	N-10°-E						

表26 G・I 地区中世建物計測値表

部にある南隅の柱を検出できなかったが、2間四方の建物で、規模は約3.6m×約3.4mを測る。主軸はN-37°-Eを示す。

建物144（第315図）G地区北西部で検出した梁間1間か2間、桁行3間の建物で、規模は約1.8m×約3.9mを測る。主軸はN-23°-Eを示す。

建物145（第319図）I地区西部で復元した。柱間隔は不揃いであるが東西3間ないし4間、南北2間以上の建物で、北側は調査区外に延びている。建物の規模は東西約9.1m、南北約3.7m

以上を測る。東西の軸は

N-10°-E を示す。

c. その他の遺構

A340土坑 (第320図)

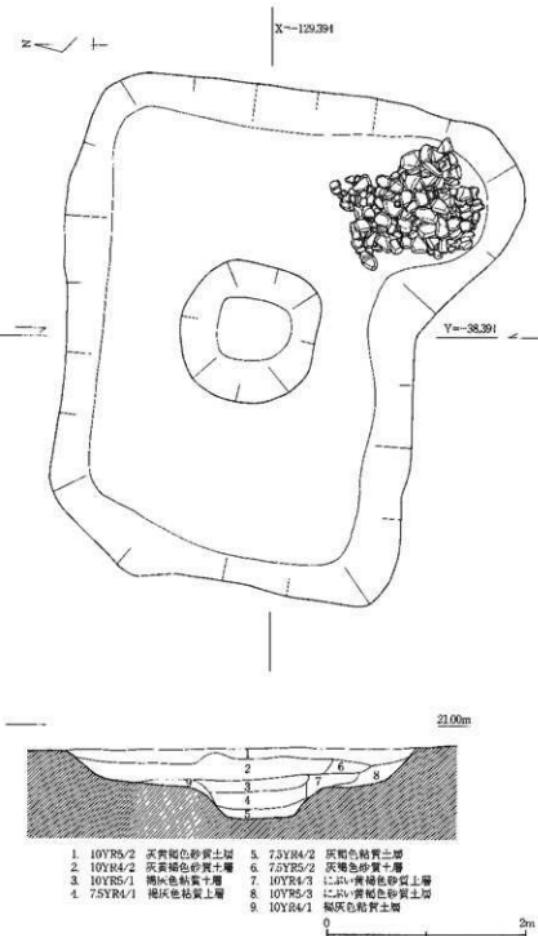
A地区の南東部で検出した南東部に石敷きを伴う方形の土坑である。土坑の規模は、東西約5.2m、南北約3.5mを測る。土坑は皿状に角度をもつて掘られ、深さは約0.3mを測る。遺構の中央には長径約1.2mの丸みをもった五角形に約0.3mの深さに掘り込まれていた。また、南東コーナーは東西約2.0m、南北約1.0m程度半円形に広げられ、拳人の川原石や礫が2段から3段に積み重ねられていた。土坑の埋土は主に灰黄褐色粘質土や褐灰色粘質土である。土坑内に粘質土が堆積していることから水溜遺構と考えられる。

土坑から出土した遺物

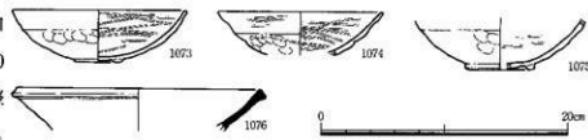
(第321図) 1073から1075

は瓦器碗である。体部外  
面は指オサエが残り、口  
縁部外面は2.0cmから3.0  
cmの範囲でヨコナデ調整  
によって仕上げている。

1074は外面に細いミガキ



第320図 A340土坑平面・断面図



第321図 A340土坑出土遺物

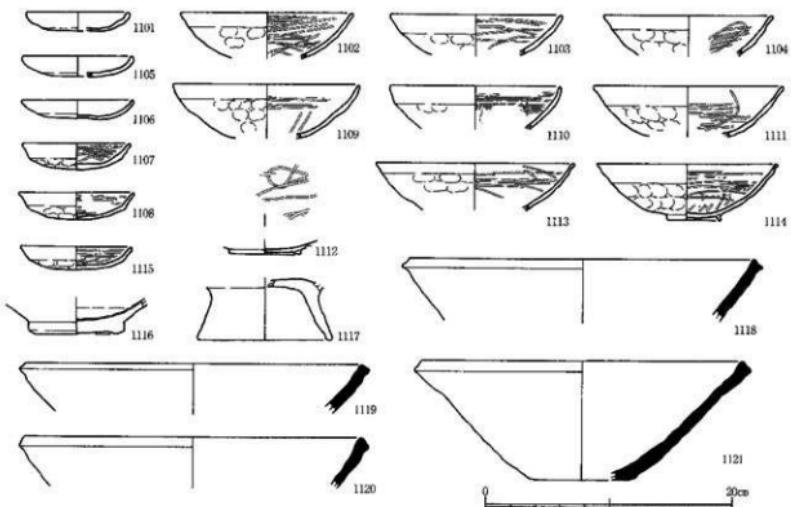
が残る。

内面は圓線状のミガキをやや密に巡らせる。1073・1075は断面が歪な台形の高台を付ける。1076は東播系の鉢で、斜めに聞く口縁の端部を上方に擣んで三角形状の断面をつくる。

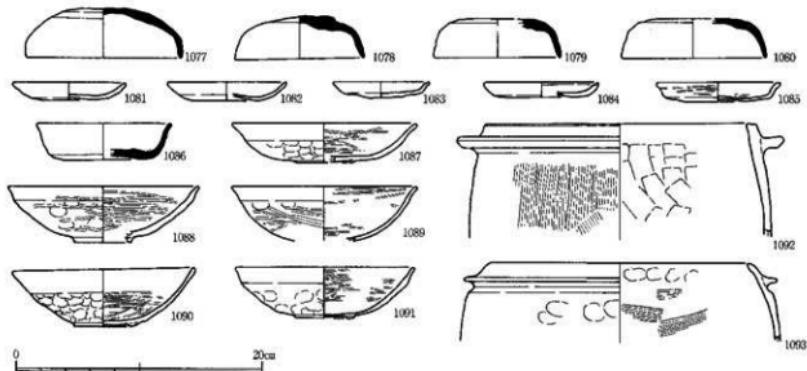
G761井戸(第322図) G地区南東部で検出した円形の土坑で、長径約2.0m、深さ約1.0mを測る。井戸状の土坑であるが、掘削断面は擂鉢形で浅く、埋土に厚い粘土が観察されないので、湛水状態ではなかったと考えられる。埋積土は主に褐灰色土である。埋土から瓦器や東播系の鉢、土師器小皿が出土している。

瓦器椀は外面にミガキを施さなくなるが、見込みは壁面に沿って丁寧なミガキが残り、底面には平行の暗文を施すものが多い。1101から1106は土師器小皿。1104から1113は瓦器椀である。瓦器椀は外面が指オサエとヨコナデで仕上げる。口縁端部は円く仕上げる。内面は細い原体でやや粗な圓線状のミガキを施す。1112、1113は見込みに暗文をもち、高台は椀の底が僅かに浮く程度の小さな逆台形である。1107、1108、1115は瓦器小皿で、浅く内彎する底部から擣まんで立ち上がる口縁部を造るもの。内面は壁面に沿ってミガキ調整する。東播系の鉢 1118、1121は口縁端部をナデ調整し、上下に僅かに拡張させる。1116は白磁碗の底部で、底を薄く削って高台を造る。1117は台付皿の脚である。

G1007溝 G地区南端で検出した浅い溝である。幅3.0mから4.0m、深さは0.1mから0.15mを測り、全体に薄く土を削平したような溝である。埋土は褐灰色土であった。埋土から古墳時代の須恵器や白磁、瓦器が出土している。



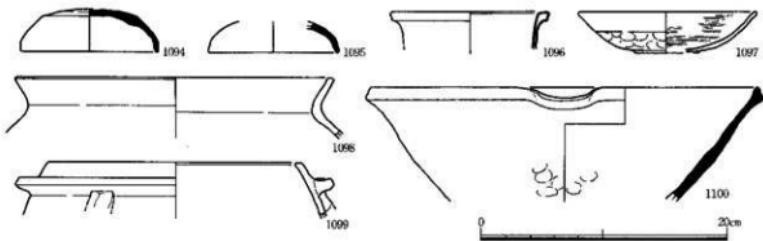
第322図 G761井戸出土遺物



第323図 G地区遺構出土遺物

G400(1077) G789(1078) G614(1079) G360(1080) G928(1081・1082) G1059(1083) G550(1087)

G794(1082) G1010(1084～1086) G800(1088) G983(1089) G766(1093) G873(1090) G991(1091)

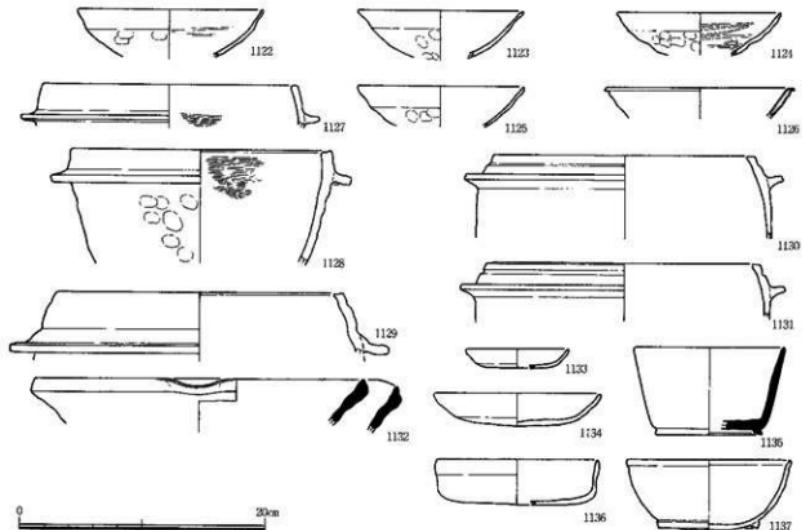


第324図 G1007溝出土遺物

**G1007溝出土遺物（第324図）** 1094、1095は須恵器の蓋で、1094は天井部近くまで回転ナデ調整する。6世紀後葉のもの。1096は白磁壺の口縁部で端部を外に肥厚させ「コ」の字形の面をつくる。1097は瓦器楕で、外面は体部中央近くまでヨコナデする。内面は細い間線状のヘラミガキを巡らせる。1098は上師器壺の口縁部、1099は三足釜の口縁部で、斜め上に短くのびる鉤に内傾する口縁部を付ける。1100は東播系の片口鉢である。

**その他の遺構出土遺物（第323図）** 1077から1080、1086は古墳時代から飛鳥時代の須恵器で、この時期の集落に伴うもの。1081から1084は土師器小皿で中世のもの。1085は瓦器皿である。1087から1091は瓦器楕。1089は外面にやや密にヘラミガキする。1092は平安時代前期の摂津系の上釜。1093は瓦質の土釜である。

**I2001井戸 I地区東部で検出した直徑約3.0mを測る素掘り井戸で、断面は擂鉢形を呈し、深さ約1.2mを測る。埋土は拳から小児の頭程度までの疊を含む褐灰色土や黄灰褐色土である。湧**



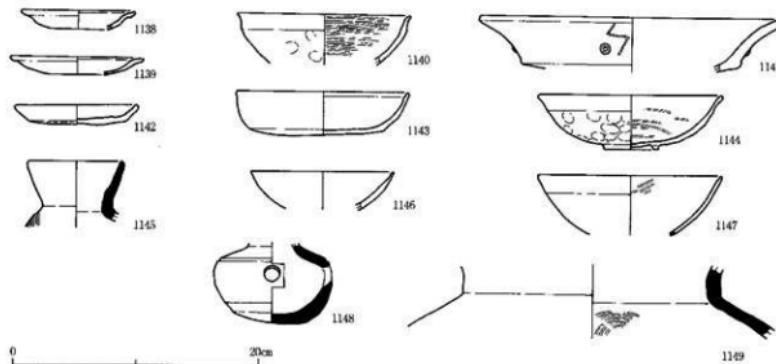
第325図 I地区遺構出土遺物

水層に達しない浅い井戸で、調査時に底まで掘削しても水は滲み出す程度であった。

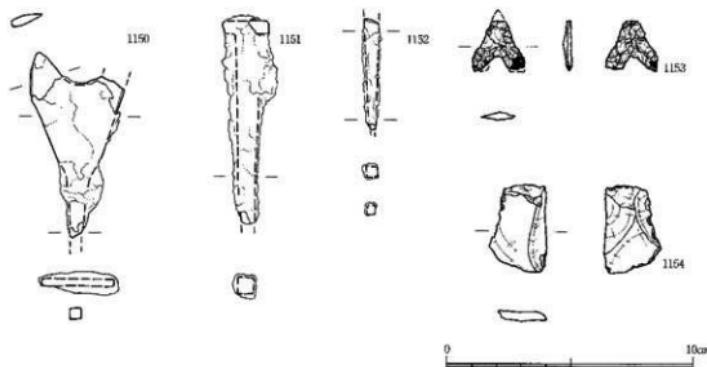
**I2001井戸出土遺物（第325図）** 1122から1125は瓦器碗。1122、1124は外面のヘラミガキは見られず、内面に幅の細い圓線状のミガキが残る。1123、1125は浅く直線的に開く椀、口縁部のヨコナデ幅が広い。1126は白磁碗の小片で、口縁は僅かに折り曲げて細く丸める。1128から1131は土釜。1128、1130から1131は瓦質釜で、1130の口縁は内縫気味に立ち上がり、1129、1130、1131は口縁部に段を造る。1129は土師質の土釜で、やや下がり気味の鋤に、短く内縫気味に立ち上がる口縁を付ける。外面に微かな指オサエが残り、内面は細かいハケ目で調整する。1132は東播系の片口鉢の口縁部で端部はやや丸みを持つ。

**柱穴出土遺物（第325図）** 1133、1134は土師器の小皿。1136は土師器の杯で、口縁外部を二段に分けてヨコナデする。1135は須恵器坏Bで、平安時代前期のもの。1137は土師器碗で、高台は低く杯身が僅かに突出する。平安時代前期のもの。

**I地区包含層出土遺物（第326・327図）** 1141は弥生時代後期の壺の口縁部。外反して開く二重口縁で、口縁端部は垂直のあまい面をつくる。外面に二重の円形浮文を貼る。1138、1139、1142は土師器皿。1138、1139は「て」の字状の皿で、平安時代中期頃のもの。I地区中部の建物群付近から出土。1145は須恵器壺の口縁部。1148は壺で、古墳時代後期のもの。1143は土師器の杯で平安時代中期のものか。1140、1144、1146、1147は瓦器碗。1140は深みのある椀で、外面は



第326図 I地区包含層出土遺物



第327図 I地区鉄器及び石製品

指オサエとナデであるが、内面は圓線状ヘラミガキを密に施す。1146は浅い楕で、燐しが脱色され、乳灰色を呈する。1144は小さな台形断面の高台を付ける。1147は器壁が摩耗しているが、内面に圓線状のミガキが微かに残る。1149は須恵器甕の頸胴部で、内面に青海波が残る。

1150は鉄鎌で、雁股鎌の基部である。1151、1152は釘の破片で、鋲が進んでいる。1153は凹基式の石鎌で、縄文時代のもの。1154は剥片である。  
(阿部)

#### 4. J 地区の調査

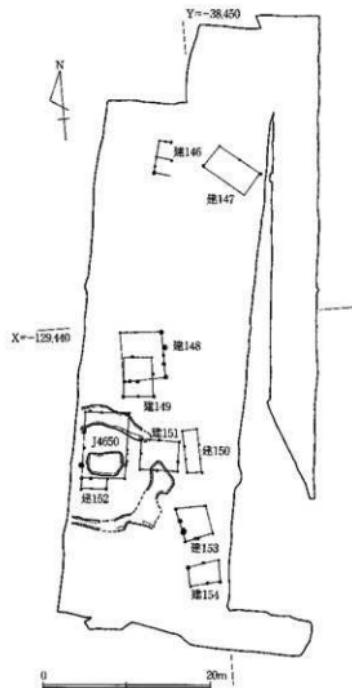
##### a. 概要

この地区は攪乱が各所にあり、遺構の遺存状態は府営住宅地内のなかではあまり良くなかった。遺構の分布を見ると、南に弥生時代の円形周溝墓や土器棺墓があり、北に古代の建物跡がまとまっている。弥生時代の墓に重なって中世の遺構が観察されるので、奈良時代頃には円形周溝墓の盛土が残っていた可能性が高い。中世の柱穴はほぼ全域で検出しているが、方形に並ぶ建物を復元することは困難で、南西部で9棟の掘立柱建物跡を復元した。このほかの遺構としては敷石土坑、環状土坑等を検出した（第328図、図版21-1）。

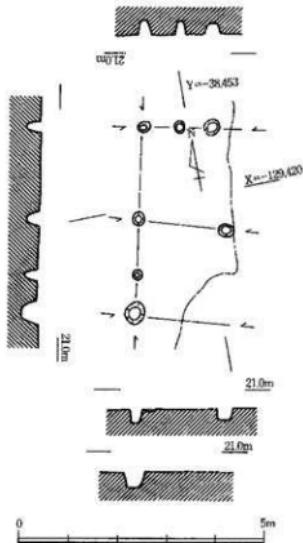
##### b. 建物

**建物146**（第329図） 調査区北西部で復元した建物跡である。桁行2間以上、梁間は東側が攪乱されているため不明であるが、中央にも柱間寸法は異なるが柱跡があり総柱建物を復元した。柱間寸法は梁間が約1.5m、桁行が約2.0m前後を測る。主軸はN-18°-Eを示す。

**建物147**（第330図） 座標から45°近く振る長軸をもつ梁間1間、桁行2間、約3.0m×約5.9



第328図 J地区中世遺構配置図



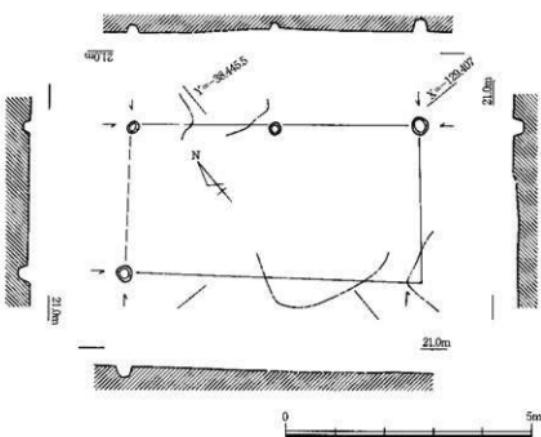
第329図 建物146平面・断面図

mの建物を復元した。柱間寸法は、梁間が約3.0m、桁行が約2.8mを測り、間隔が広い建物である。主軸は、N-40°-Wを示す。

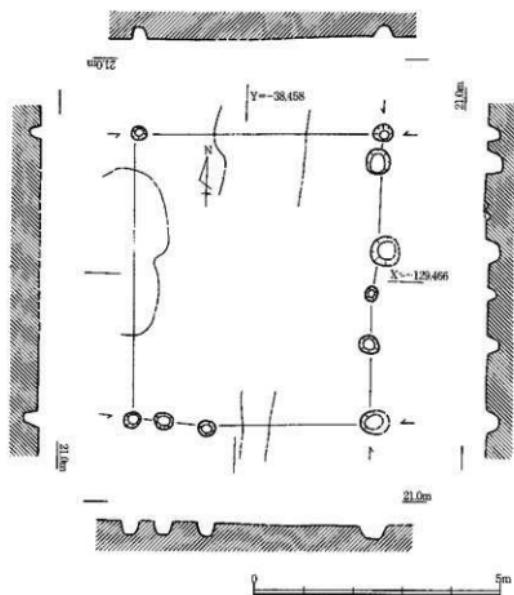
**建物148（第331図）J地区**のほぼ中央で復元した建物跡である。攪乱により各通りの柱穴遺存状態に差があるが、梁間3間、桁行3間で約5.0m×約6.0mの建物になると考えられる。東桁通りは柱穴が重複するが柱間寸法は1.5mから2.5mを測る。長軸はN-3°-Wをしめす。

**建物149（第332図）**建物148の南西部に重なる建物で、梁間2間、桁行2間で、約3.5m×約4.7mの規模を持つ。北西隅は攪乱により柱穴を確認できなかった。柱間寸法は梁間が約1.5m、2.0m、桁側が約2.0m、約2.7mを測る。長軸はほぼ座標北を示す。柱穴は円形や楕円形で0.2mから0.3mを測る。柱穴の深さは0.1m前後であったが、完掘しなかった可能性が高い。

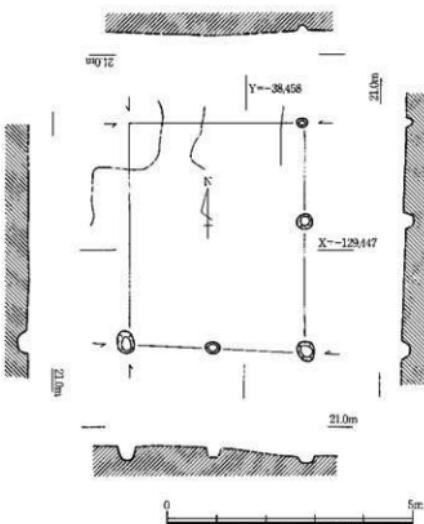
**建物150（第333図）環状土坑の東側で復元した建物跡**で、梁間1間、桁行3間、約1.7m×約5.2mの規模を持つ。桁側の柱間寸法は約1.9m、約1.6m、約1.7mを測り、



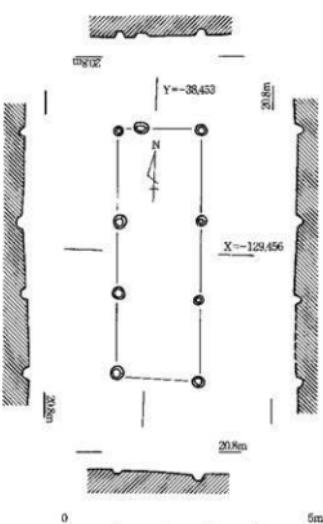
第330図 建物147平面・断面図



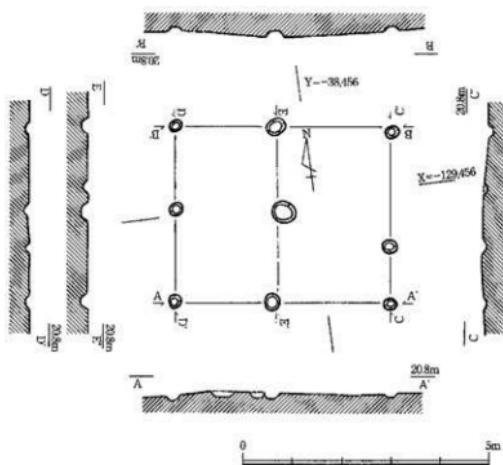
第331図 建物148平面・断面図



第332図 建物149平面・断面図



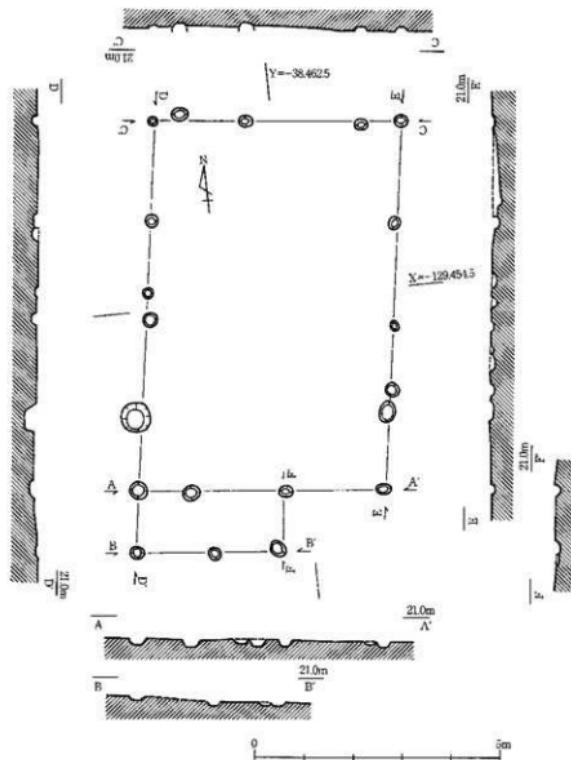
第333図 建物150平面・断面図



第334図 建物151平面・断面図

北側がやや広げて柱が設置されている。主軸はN-2°-Wを示す。

建物151（第334図）環状土坑の陸橋部付近で検出した。柱列は通らないが2間四方の総柱建物跡で、東西約4.4m、南北約3.6mを測る。柱間寸法は梁間が約1.8m、桁側が約2.0m、約2.4mを測る。短軸はN-8°-Eを示す。



第335図 建物152平面・断面図

番号	地区	梁間		桁行		柱間(m)	位置		柱穴 (m)			柱 径 寸 法 (m)	柱 高 (m)	方位	備考
		間 (m)	間 (m)	前~後	X		X	Y	柱 形 状	最小	最大	深さ	浅		
146	J	2.9上	1.2以上	2	3.9	0.7~2.0	-129.420	-38.453	円	0.20×0.20	0.40×0.45	0.35	0.25	N-18°-E	
147	J	1	3.0	1~2	5.8	2.9~3.0	-129.407	-38.445	円	0.26×0.24	0.34×0.30	0.28	0.14	N-40°-E	
148	J	2	4.3	3	5.9	1.1~2.9	-129.466	-38.458	円	0.28×0.30	0.58×0.60	0.28	0.23	N-3°-W	
149	J	2	3.5	2	4.7	1.5~3.3	-129.447	-38.458	円	0.18×0.22	0.33×0.45	0.30	0.10	N	
150	J	1	1.7	3	5.2	1.5~1.8	-129.456	-38.453	円	0.20×0.20	0.25×0.30	0.15	0.10	N-2°-W	
151	J	2	3.6	2	4.4	1.2~2.3	-129.456	-38.456	○	0.23×0.23	0.45×0.46	0.15	0.08	N-8°-E	
152	J	3	5.0	4	7.5	0.8~2.3	-129.454	-38.462	円	0.15×0.20	0.60×0.60	0.25	0.10	N-9°-E	
153	J	2	3.3	2以上	4.0以上	1.5~3.4	-129.465	-38.453	円	0.20×0.25	0.40×0.50	0.25	0.15	N-9°-W	
154	J	2	3.5	1	2.2	1.5~2.6	-129.471	-38.452	円	0.20×0.25	0.45×0.50	0.15	0.10	N-8°-W	

表27 J地区中世建物計測値表

**建物152（第335図）** 環状土坑内で復元した南北に長軸を持つ、梁間3間、桁行4間の母屋の南側に1間×2間の副屋を持つ建物である。規模は母屋が約5.0m×約7.5m、副屋が約1.3m×約3.0mを測る。柱間寸法は梁側は揃わないが、桁側は約2.0m、約2.0m、約1.8m、約1.7mでほぼ対応する。主軸はN-9°-Eを示す。環状土坑の埋土上面で確認した建物跡である。

**建物153（第337図）** 桁側の柱間隔が対応せず、平面形が台形となる建物跡である。2間×2間の規模で、梁間の北通りが約3.5m、南通りが約3.4m、桁行の西通りが約4.0m、東通りが約3.4mを測る。中間柱は桁の西通りが約1.5m、約2.5m、南梁が約1.5m、約1.7mを測る。柱穴は0.2mから0.3m程度の小柱穴が多い。

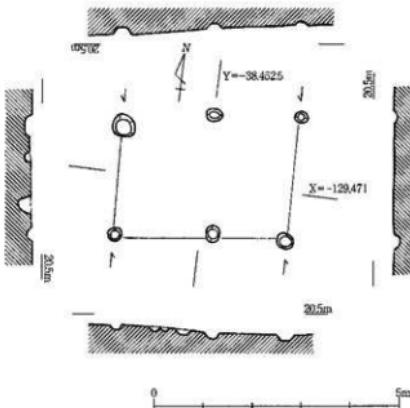
**建物154（第336図）** 4号円形周溝墓近くで復元した、東西に長軸を持つ梁間1間、桁行2間の建物である。規模は約2.2m×約3.5mを測る。長軸はN-8°-Eを示す。

4号周溝墓周辺で中世の柱穴を多数検出した。周溝墓中央にある上器棺を壊して掘削された柱穴もあるが、3カ所以上が直線で並ぶ柱穴が少なく、無理な復元を行わなかったので、J地区では9棟しか復元できなかった。

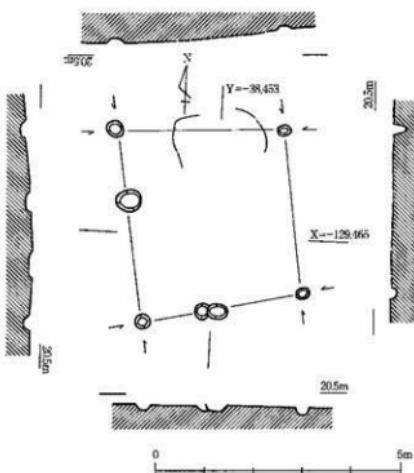
#### c. その他の遺構

**J4295溝（第340図）** 調査区の南東部で検出した、円形に溝が回る遺構である。弥生時代の円形周溝墓の可能性もあるが、溝の埋土が主に中世包含層の褐色灰土であり、溝内に径0.2m前後までの礫を含み、弥生土器が出土しなかったことから、中世の遺構として取り上げた。

遺構は北東部に陸橋をもち、溝の幅は0.15mから0.4m、深さ0.05mから0.25mを測る。溝は搅乱をうけ



第336図 建物154平面・断面図



第337図 建物153平面・断面図

ているが南東方向に4号周溝墓の手前まで長さ約5.0m、幅約3.0m、深さ約0.2mの範囲で広がり、角礫が敷かれていた。また、南側にも幅約0.3m、深さ約0.1mの溝が延びている。

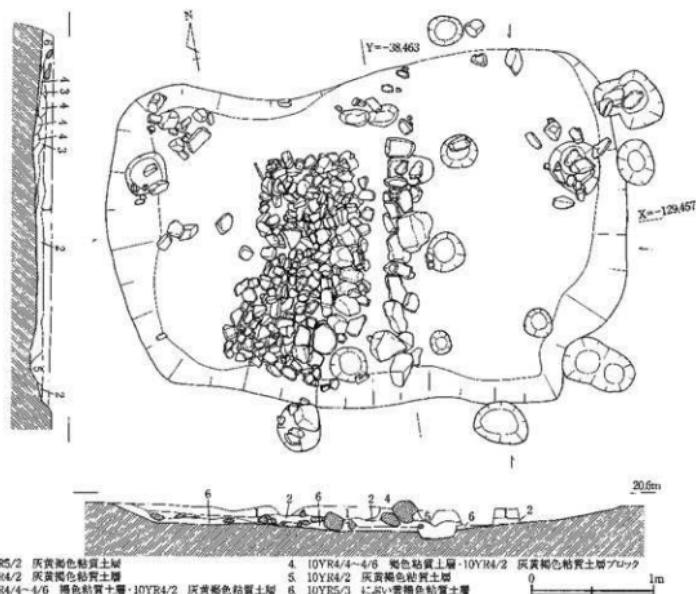
埋土は上層が褐色から灰黄褐色粘質土、下層は地山の黄褐色土が流れ込み、汚れた土であった。主に上層から瓦器や土師器が出土している。

中央付近で石敷土坑（J4650）を検出した。

**J4650土坑（第338・339図）** 環状遺構の中央で検出した石敷土坑である。東西約2.1m、南北約1.45mの正な方形に約0.2m掘削され、径0.2m程度までの角礫を中央部の幅約0.7mの範囲に2段から3段高さが積み重ねた遺構である。



第338図 J4650土坑及びJ4295溝平面図



第339図 J4650土坑平面・断面図

石敷きの中から方形の鉄器が出土している。K地区でも同じように長径0.3m程度までの川原石や角礫を2段から3段に高さが揃う程度まで積み上げた遺構を検出したが、石敷内に火を受けた痕や炭、焼土などは含まれなかった。埋土や石の間から鎌倉時代頃の瓦器や土師器が出土している（第346-1173～1176図）。

**J4478土坑**（第443図）J地区の中央で検出した井戸と考えられる歪な方形を呈する土坑で、南北約2.3m、東西約2.0m、深さ1.0m以上を測る。

1.0mまでは人頭大までの角礫や川原石が検出面まで詰まり、縫の隙間を灰色泥土が充填していた。

**J4448柱穴**（第341図）X = -

129,449、Y = -38,459付近で検出

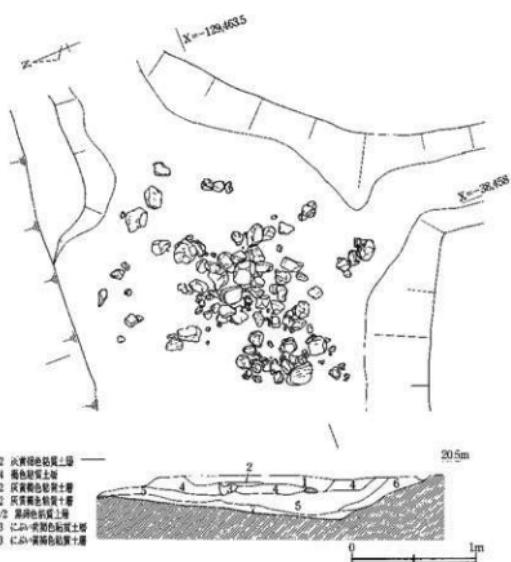
した小柱穴である。攪乱により上部が約0.1m削平されていたが、検出面で直径約0.48m、深さ約0.2m（地山面からは0.3m）を測る円形のピットである。底面から約0.1m浮いたところで角礫の上に瓦器椀が据えられていた。また、検出面では土師器甕の破片や角礫が詰め込まれたような状態で出土した。土器や角礫は掘方に接していないので、柱を抜いた後に埋置したと考えられる。

**J4869柱穴**（第342図）X = -129,455、Y = -38,459付近で検出した径約0.6m、深さ約0.35mを測る歪な円形のピットである。埋土は褐灰色土で、上層から土釜の破片と角礫が出土した。柱の抜き取り後に埋置したものであろう。

**J4239土坑**（第343図）長径約1.1m、短径約0.72m、深さ約0.3mを測る楕円形の土坑で、掘方は擂鉢状である。底面から少し浮いた位置で瓦器椀の上に約0.25m×約0.15m×約0.15mの角礫を据えた状態で出土した。

**J4055土坑**（第344図）直徑約1.0mを測るやや歪んだ円形の土坑で、深さは約0.6mを測る。土坑の底面近くで瓦器椀の上に縫を截せた状態で出土した。ピット内に土器を納め、その上に石を置く例はこの遺跡では数多く見られた。建物の柱を抜き取った後土器や石を納め、地主神に対する鎮めとしたのであろう。

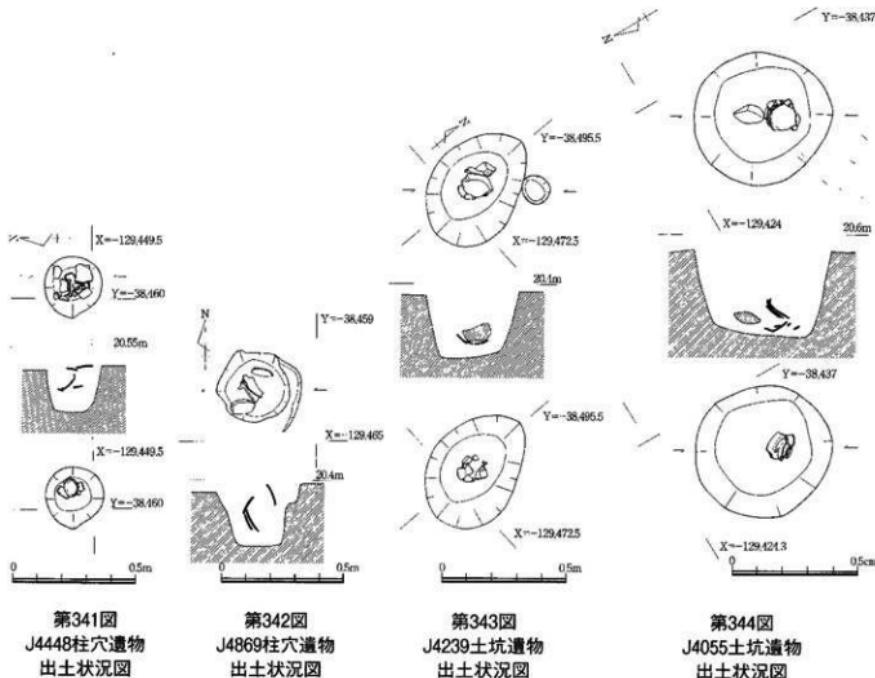
#### d. J地区出土遺物

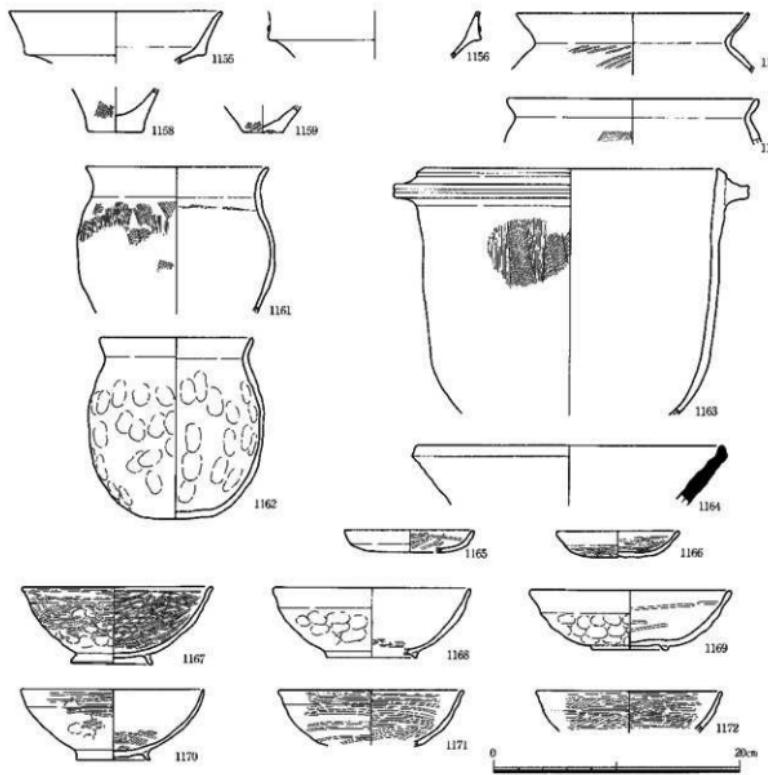


第340図 J4295満東南部平面・断面図

1155、1156は弥生時代後期の壺口縁部。二重口縁のもので、水平近くまで外反する頸部から外彎して開く口縁部をつくる。1156は口縁部外面に円形浮文を付ける。1157は壺の口頸部。「く」字形に外反して口縁端部は僅かに面をつくる。体部は細いタタキ目が残る。1158、1159は、底部で弥生時代後期のもの。1160から1162は壺。1161、1162は丸底から僅かに脹らむ体部をもち、口縁部は外彎して丸くおさめる。1161はハケメ、1162は指オサエが外面に残る。平安時代のものか。1163は土釜で、厚みをもって短く水平に延びる鉢から僅かに立ち上がる口縁部をつくる。口縁端部は外傾する面をつくる。器面が荒れているが、細かいハケが観察できる。平安時代前期の北摂に多いタイプのもの。1164は東播形の鉢。口縁端部を上に摘まんで拡張させる。1165、1166は瓦器皿。内面は細い原体で密にミガキ調整する。1166は底部外面も細かいミガキ調整をする。1167から1172は瓦器碗。1167、1170から1172は外面にもミガキを施すもの。1167、1171、1172は底部近くまでミガキ調整する。内面は比較的密な圓線状と渦巻状のミガキで整える。H・I・K地区に比べて古いタイプのものが多い（第345図—1155～1172）。

J4650土坑出土遺物（第346～1173～1177図） 1173は土師器小皿。1174から1177は瓦器碗である。器壁は摩耗の進んでいるものが多いが、1175は体部外面を指オサエとヨコナデ、内面を粗い圓





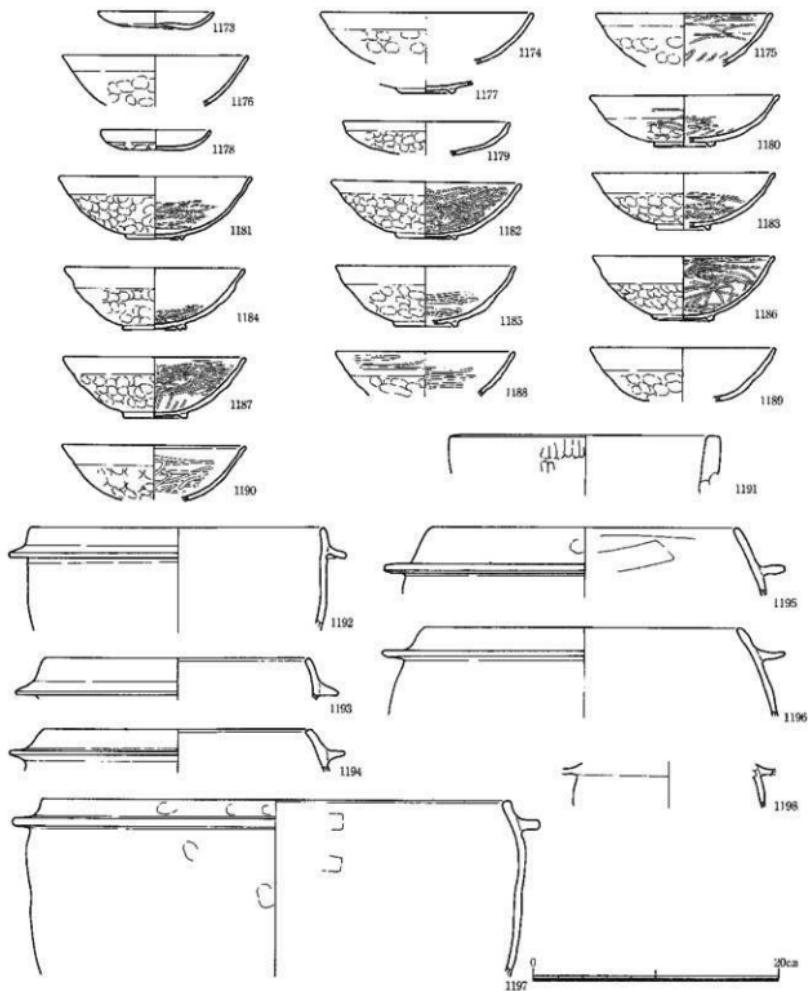
第345図 J地区遺構出土遺物 1

J4289・J4295結合部(1155-1157) J4433(1158-1159) J4357(1160) J4055(1161-1162) J4869(1163)  
J4170(1164) J4224(1165-1170-1172) J4773(1166) J4239(1167) J4169(1168) J4648(1169)

線状と渦巻状のミガキで調整する。

J4210井戸 (第346-1178~1198図) J 地区の南西隅で検出した長径約2.4m、短径約2.0mを測る楕円形の井戸で、擂鉢状に掘削され、深さは1.0m以上を測る。

1178は土師器の小皿。1179は瓦器小皿である。1180から1190は瓦器碗である。外面のミガキは省略されるが、内面を密な圓線状ミガキで調整するものが多い。1180、1188は口縁部外面にも細い原体のヘラミガキを施す。他の瓦器碗は外面が指オサエ成形、口縁部はヨコナデ、内面は1191、1195、1196のように細い原体でやや密に圓線状のミガキで調整するものが多い。1186は圓線の上から螺旋状のミガキを施す。1186、1187は見込みに平行線の暗文を描く。高台は断面が小さな逆台形のものと、三角形を呈するものがある。1191は製塙土器の口縁部である。



第346図 J地区造構出土遺物2 J4650(1173-1177) J4210(1178-1198)

1192から1198は土釜。体部が直立氣味のもの1192、1197と半球形のものがある。鉢は水平に開くものとやや垂れ氣味のもの1192、1193がある。  
(阿部)

## 5. H・K地区の調査

### a. 概要 (第347図、図版19・20-1)

H・K地区では主に調査区中央から西北側で多数の柱穴や土坑、井戸、小溝を検出した。調査区の南部に東西方向の溝（HS溝、K500溝）がある。K地区では、幅2.0mから3.0m、深さ1.0m



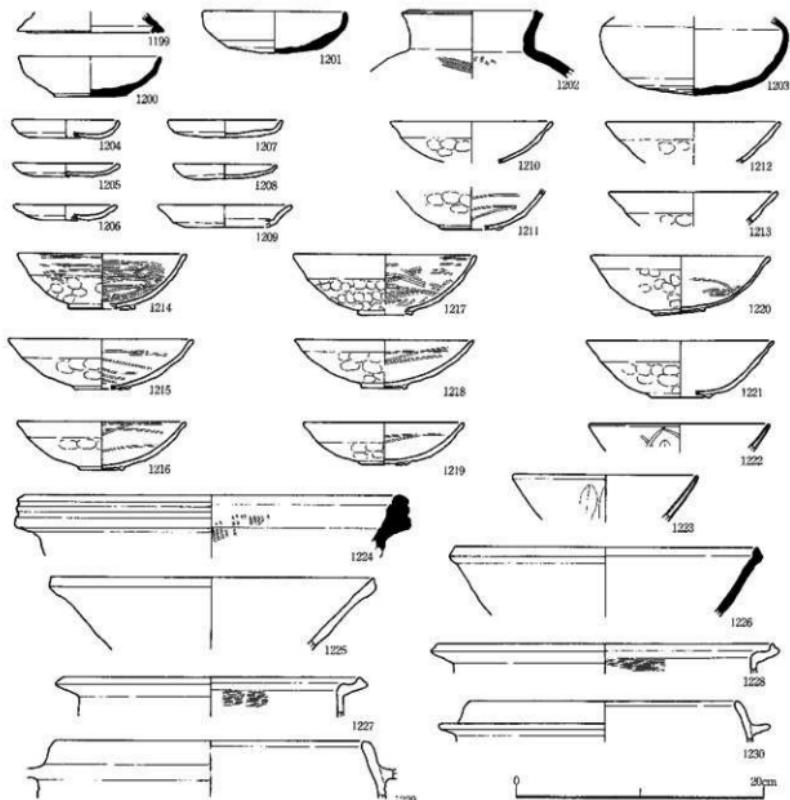
第347図 H・K地区中世遺構配置図

程度で断面「U」字形を呈し、南側は疊層が部分的に露出し、遺構が極端に少なくなるので、集落東部では住居域を画する溝であろう。しかし、H地区では幅が約6.5mに広がる。南側は遺構が途切れ、池が検出されている。また、K地区東側は、中世後期以降の耕地開発時に削平され、ほとんどの遺構が消滅していた。K地区的北側では3棟の建物を復元したが、大規模な削平や攪乱は認められなかったので、居住域からは外れていたのであろう。

b. 包含層の遺物（第348・349・350図、図版37-2）

H・K地区では包含層から多数の遺物が出土している。ほとんどが瓦器椀や、土釜、上師器皿である。古墳時代や奈良時代、平安時代の集落もあったので、この時期の遺物も出土している。

1199は須恵器の蓋。1200、1201は壺身である。1202は開き気味に立ち上がる短頸壺の口頸縁部。1203は壺の胴底部である。

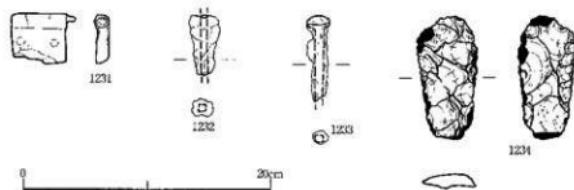


第348図 K地区包含層出土遺物

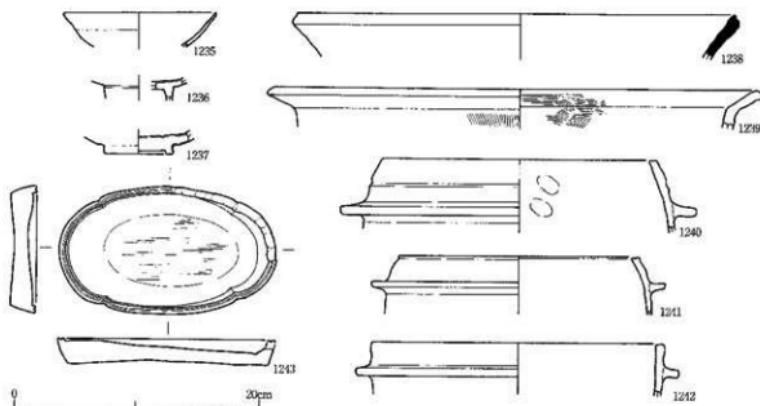
1204から1209は中世の土師器小皿。1209は短く外反して立ち上がる口縁部をつくる。1210から1221は瓦器椀。器面が摩滅し調整を観察できないものが多い。1214は口縁部外面にもミガキ調整が残り、小さな高台を付ける。1217は外面のヨコナデが広く、ミガキは省略されるが、内面を密な圓線状にミガキ調整する。1215、1216、1218から1220は内面に粗な圓線状のミガキで調整し、歪んだ三角形状の高台を貼り付ける。1212、1213は体部が直線的に開く。内面は摩耗してミガキを観察できない。1222、1223は蓮弁文の青磁碗。1224は備前焼の鉢。中世末以降のものか。1225は土師質の鉢。1226は東播系の鉢。1227、1228は壙の口縁部で、受け口状に端部を擴んで拡張させる。1229、1230は羽釜の破片である（第348図）。

1231は鉄で、鍛の部材か。1232、1233は鉄釘の破片、1234は石鎌か。基部と先端を欠く（第349図）。1235は瓦器椀。1236、1237は白磁の高台。1238は東播系の鉢。1239は土師質壙の口縁部で、体部外面に縱方向のハケメが残る。1240から1242は羽釜の口縁から鐸の破片で、1240は口縁外面に段をつくる。1243は硯石で、楕円形を呈し、陸から海へなだらかに傾斜する（第350図）。

#### c. 建物跡（第347図）



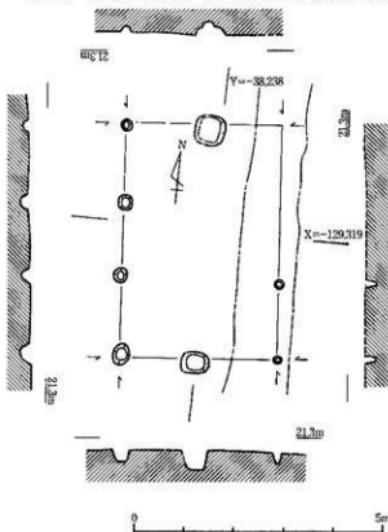
第349図 H地区包含層出土遺物1



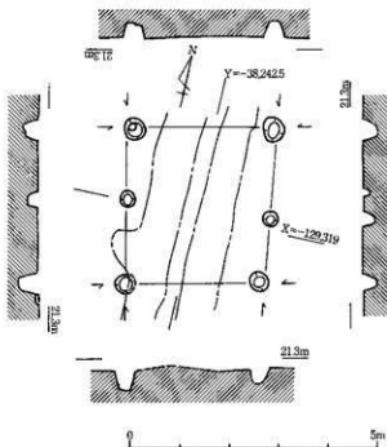
第350図 H地区包含層出土遺物2

H・K地区の居住域は、南端がH5溝（K500溝）、北端がI地区手前の道路まである。また、K地区では東部地区が水田開発時に地山が削られ中世の遺構が削平されていたが、調査区を南北に分ける農業用水路を北端として、2000ヶ所以上の柱穴を検出した。柱穴数が多く、出土した瓦器碗を指標としても、平安時代末から鎌倉時代中期（13世紀中頃）までのものが混在し、セット関係の把握が困難であった。桁行と梁間は直角にならないものが多い。

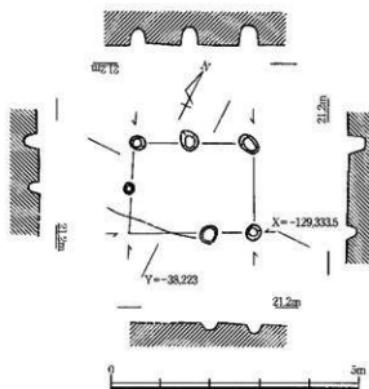
また、桁行、梁間ともに対応する位置に柱穴が無いものも多い。しかし、「一遍型絵」に描か



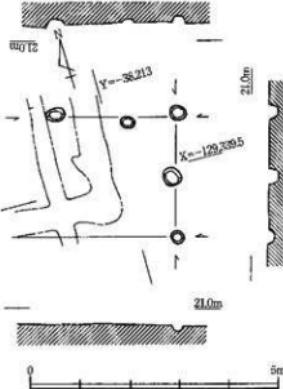
第351図 建物155平面・断面図



第352図 建物156平面・断面図



第353図 建物157平面・断面図



第354図 建物158平面・断面図

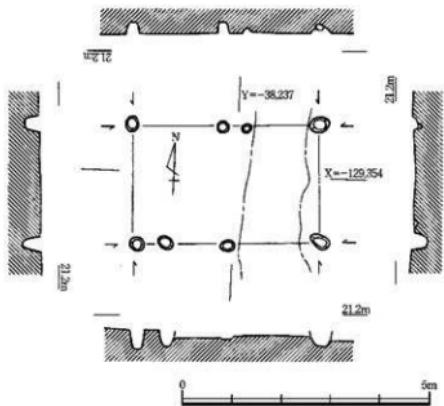
れた市庭や街の風景では、庶民の家は柱列が通らないと思われる建物がみられる。また、中世の庶民の住居では壁に網代を使用するものや、板を並べた程度のものが多く、垂みが大きくて住居として可能と判断し、56棟の建物を復元した。

**建物155（第351図）** K地区の北部、古代建物群付近のX = -129,319、Y = -38,238ラインを中心に復元した建物跡である。東北隅の柱は住宅建設時の側溝と重なり検出できなかったが、桁行3間、梁間2間の南北建物で、規模は約4.8m × 約3.2mを測る。柱間寸法は1.5mから1.7mを測る。梁側の中間柱が大きいが、桁側の柱穴掘削時に埋土と地山の区別がつきにくく、柱痕のみを掘削したためであろう。長軸はN - 4° - Wを示す。

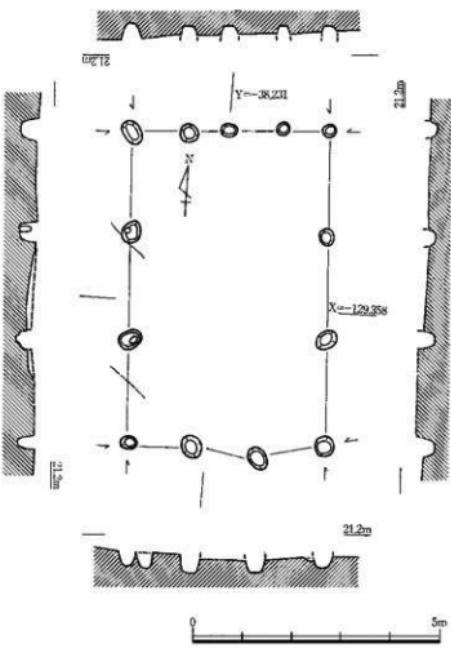
**建物156（第352図）** K地区の北部、建物155の南東で復元した、桁行2間、梁間1間の南北建物で、規模は約3.3m × 約2.9mを測る。桁行中間柱の位置は対応しないが、柱間隔は1.5mから2.0mを測る。主軸はN - 11° - Wを示し、建物155より西に振る。

**建物157（第353図）** K地区の水路北側で復元した建物跡で、南西隅の柱を検出できなかったが、桁行2間、梁間1間の建物で規模は約2.55m × 約1.8mを測る。柱間寸法は0.9mから1.8m前後である。主軸はN - 23° - Wを示す。

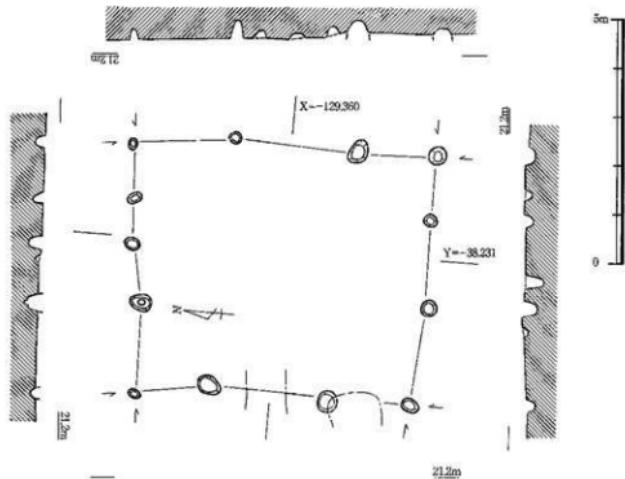
**建物158（第354図）** 地山が削平さ



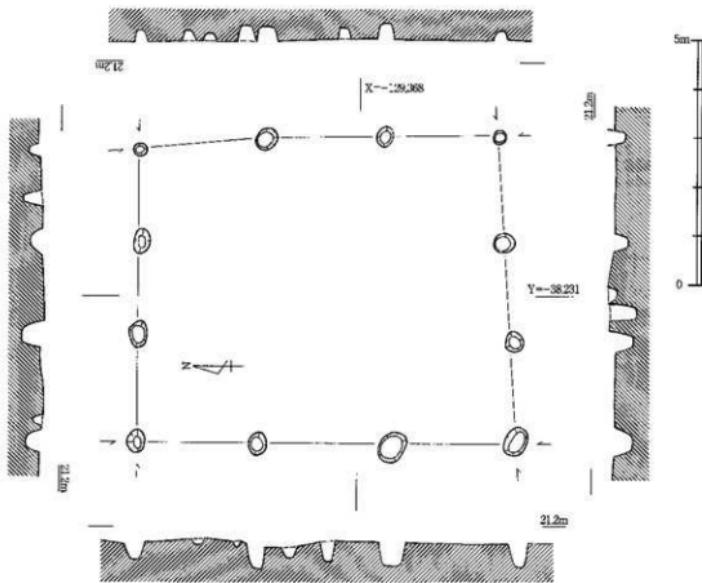
第355図 建物159平面・断面図



第356図 建物160平面・断面図



第357図 建物161平面・断面図



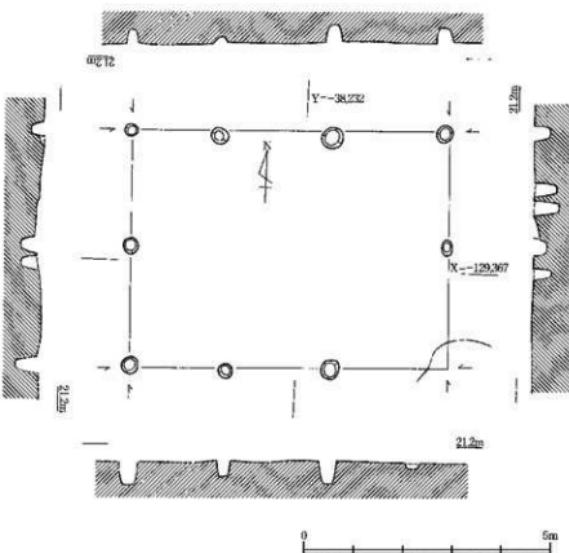
第358図 建物162平面・断面図

れているK地区東部にある建物である。建物跡はL字形の柱列を復元した。桁行2間、梁間1間以上の建物で、規模は2.5m以上×約2.5mを測る。柱間寸法は狭く1.0mから1.5mである。主軸はN-16°-Eを示す。

**建物159（第355図）** K地区の水路の南側約15m付近で検出した東西建物である。桁側に柱穴が重なっているが、桁行2間、梁間1間の規模である。規模は約3.8m×約2.4mを測る。主軸はN-3°-Wを示す。

**建物160（第356図）** K地区の南部中央は屋敷地を区画する南北方向の小溝があり、区画内に建物が重複して復元される。柱穴からは瓦器の小片が出土するが、先にも記したように、平安時代末から鎌倉時代のものが混在し、前後関係を遺物からは判断できない。建物160は桁行3間、梁間は柱穴が重なり、直線に並ばないが3間か4間の建物で、規模は約6.5m×約4.2mを測る。柱間隔は0.85mから2.2mを測り、主軸はN-5°-Wを示す。

**建物161（第357図）** 建物160と重なって復元した。前後関係は不明である。桁行、梁間ともに歪んだ建物であるが、桁行3間×梁間3間の建物である。桁行は西が約5.5m、東が約6.1m、梁間は南北とも約5.0mを測る。柱間寸法は0.95mから2.5mを測り、区々である。長軸はN-5°-Wを



第359図 建物163平面・断面図

番号	地区	梁間		桁行		柱間(m)		位置		縦柱	柱穴(m)				柱高 m or 方	方位	備考
		間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	間 (m)	X	Y		形状	最小	最大	深さ 深 浅 (m)			
155	K	2	3.2	3	4.8	1.54~1.68	-129.319	-38.238		円	0.14×0.20	0.64×0.64	0.40	0.12		N-4°-W	
156	K	1	3.1	2	3.3	1.50~3.10	-129.325	-38.242		円	0.30×0.30	0.42×0.50	0.42	0.20		N-11°-W	
157	K	1	1.8	2	2.5	0.90~1.80	-129.332	-38.223		円	0.20×0.24	0.34×0.48	0.40	0.16		N-23°-W	
158	K	2	2.5	2	2.5	1.00~1.46	-129.338	-38.213		円	0.28×0.28	0.36×0.40	0.20	0.10		N-16°-E	
159	K	1	2.4	3	3.8	0.90~2.40	-129.354	-38.237		円	0.22×0.18	0.34×0.44	0.38	0.06		N-3°-W	
160	K	4	4.2	3	6.5	0.84~2.36	-129.358	-38.231		円	0.28×0.30	0.34×0.62	0.38	0.14		N-5°-W	
161	K	3~4	5.1	3	6.1	0.96~2.50	-129.360	-38.231		円	0.20×0.30	0.40×0.54	0.30	0.20		N-5°-W	
162	K	3	6.4	3	7.7	1.96~2.80	-129.368	-38.231		円	0.30×0.30	0.50×0.70	0.60	0.24		N	

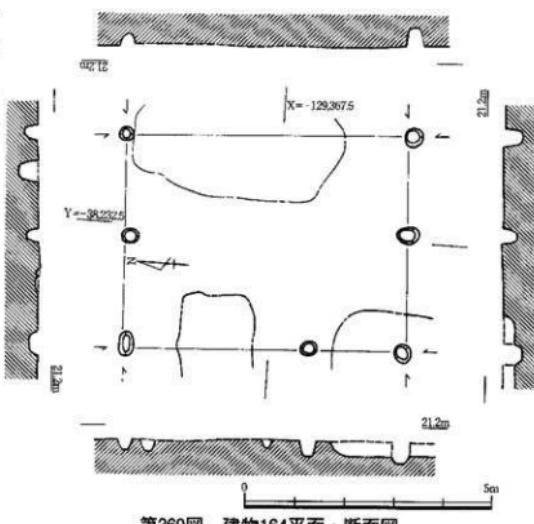
表28 H・K地区中世建物計測値表1

示し、建物160と同じ方位である。

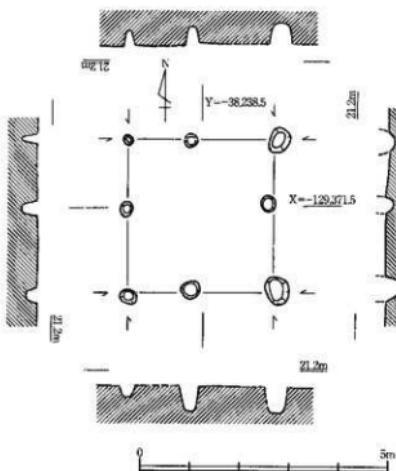
**建物162（第358図）** 建物161に南接する位置で復元した。桁行の柱間隔が不揃いで、東桁が短い台形を呈する建物で、桁行3間、梁間も柱間隔が狭いが3間と考えられる。建物規模は西側桁が約7.7m、東側桁が約7.4mである。梁間は北が約6.2m、南は約6.5mを測る。柱間寸法は桁間が2.5m前後、梁間は約2.0mを測る。主軸はほぼ座標北を示す。

**建物163（第359図）** 建物162内で西に重複して復元した建物跡である。南東隅を攪乱で検出できなかったが、桁行3間×梁間2間の建物で、約5.5m×約4.9mを測る。柱間寸法は2.0mから2.4mを測る。主軸はほぼ座標北を示す。

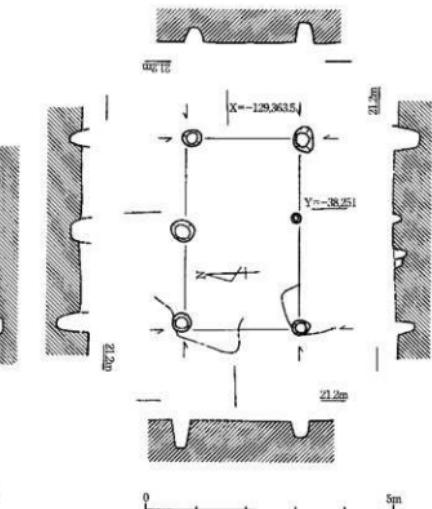
**建物164（第360図）** 建物162



第360図 建物164平面・断面図



第361図 建物165平面・断面図



第362図 建物166平面・断面図

の南西部、建物163と重複する建物である。攪乱で一部柱を欠くが、南北に長軸を持つ3間×2間の建物で、桁行約5.7m、梁間約4.4mを測る。梁間の柱間寸法は約2.0m、約2.4mを測る。

#### 建物165（第361図） 建物164

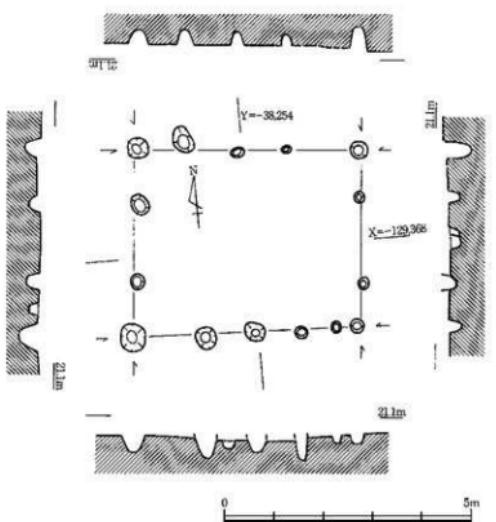
の南西約3.0m付近で復元したほぼ正方形の2間四方の建物で、規模は約3.1m×約3.0mを測る。柱間は桁側が約1.5m、約1.6m、梁側は約1.3m、約1.7mを測る。

建物166（第362図） K地区の西部、K441土坑の北側で復元した建物である。南の桁柱を欠くが、東西に東軸を持つ2間×1間の建物で、桁行約3.9m、梁間約2.3mを測る。柱間寸法は2.0m、1.9mを測る。長軸はほぼ東西を示す。

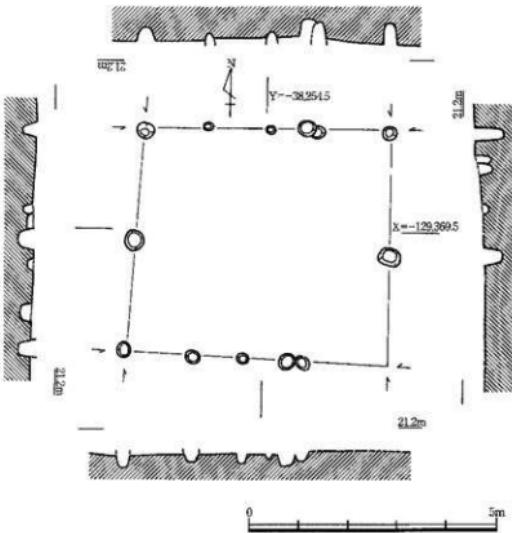
建物167（第363図） 建物166の南西約2.0mのH・K地区に跨って復元した建物跡である。桁行上に小柱穴が並ぶが、桁行3間、梁間3間の建物になると見える。規模は桁行約4.6m、梁間は西が4.0m、東は約3.5mを測る。桁側柱間寸法は対応しないが、1.2mから2.0mである。主軸はN-3°-Eを示す。

建物168（第364図） 桁側の柱列に余分な柱穴が並ぶが、3間×2間の建物と考えられる。桁行5.4m、梁間4.5mになると見えられる。桁側の柱間寸法は1.4m、2.0m、2.1mを測る。主軸はほぼ座標北を示す。

建物169（第365図） 建物168の南部に重なる建物跡である。柱間



第363図 建物167平面・断面図



第364図 建物168平面・断面図

隔が不揃いで、梁側は通らないが、桁行4間、梁間3間の東西建物を復元した。規模は桁行約5.3m、梁間約3.8mを測る。柱間寸法は1.0mから1.8mの間で区々である。主軸方向は、N-10°-Wを示し、他の東西建物に比べ大きく北に振っている。

**建物170** (第366図) H地区の南部、X=-129,384、Y=-38,274付近にある建物である。桁側の柱間隔が不揃いであるが、3間×2間で復元した。桁側は2間で約3.0m、梁側は約2.0mを測る。梁側の柱は扉の軸木痕と考えられる。主軸はほぼ座標北を示す。

**建物171** (第367図) 建物170の東側に接する位置で復元した桁行2間、梁間1間の建物である。東に傾いた建物で復元したが、規模は桁側が約3.6m、梁間は北が約2.8m、南が約3.0mを測る。桁側の柱間隔は西が約1.0m、約1.5m、東が約0.8m、約1.9mと不揃いである。梁側はほぼ中央に柱穴がある。主軸は建物が東に歪んでいることもあり、N-10°-Eを示す。

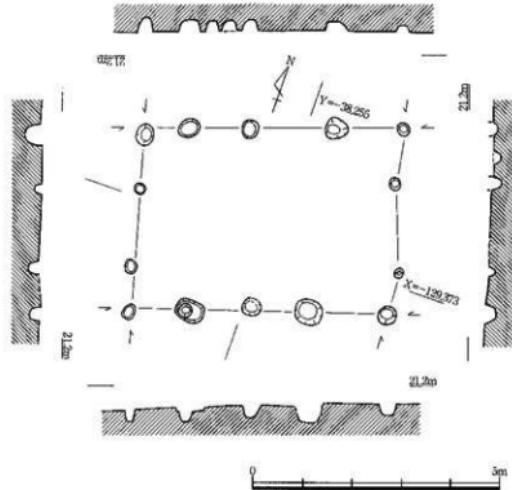
**建物172** (第368図) 建物171の北東で復元した建物である。柱間隔が狭く歪であるが、2間四方の建物で、桁行約2.5m、梁間約2.0mを測る。主軸はN-12°-Eを示す。

**建物173** (第369図) 建物172の北東約10m付近で復元した建物である。桁行、梁間とも2間の建物で、約3.0m×約2.6mを測る。主軸方向はN-5°-Eを示す。この建物の南側で扉を復元している。

**建物174** (第370図) 建物172の北側で復元した建物である。桁行が3間から4間、梁間1間の東西に長い建物である。規模は桁行約4.4m、梁間は約2.0mと約2.2mを測る。主軸はN-5°-Eを示す。

**建物175** (第372図) 建物173の南側にある建物跡で、図に示さなかったがK432敷石土坑の覆屋と考えられる。桁側の柱が対応しないが2間×2間の建物で、規模は約4.0m×約3.5mを測る。柱間寸法は南桁が1.9m、2.1m、梁間が1.4m、2.1mを測る。主軸方向はN-2°-Wを示す。

**建物176** (第371図) 建物175の東側で復元した。歪んだ2間×1間の建物である。規模は桁行約3.1m、梁間は約1.6m、約1.3mを測る。桁の柱間寸法は1.9m、1.2mを測る。主軸はN-6°-Wを示す。

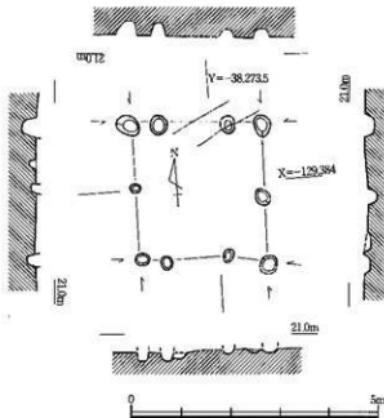


第365図 建物169平面・断面図

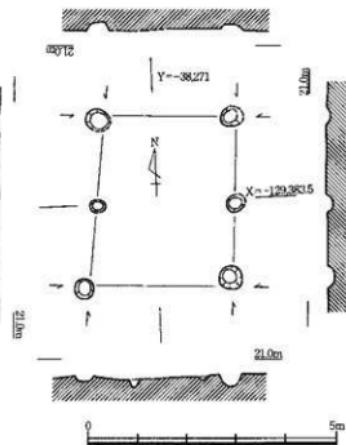
**建物177（第374図）** 建物169の南側で復元した東西に長い2間四方の建物である。規模は桁行約3.9m、梁間約2.6mを測る。柱間寸法は桁側が1.8m、2.1m、梁間が1.5m、1.1mを測る。主軸方向はN-5°-Eを示す。

**建物178（第373図）** 建物177の南側に重なって復元した桁行2間、梁間1間の建物である。規模は桁行2.9m、梁間1.4mを測る。柱穴は歪な楕円形で、桁側の柱間寸法は1.5mを測る。主軸はほぼ座標北を示す。東側の建物180との間に塀を復元した柱列がある。

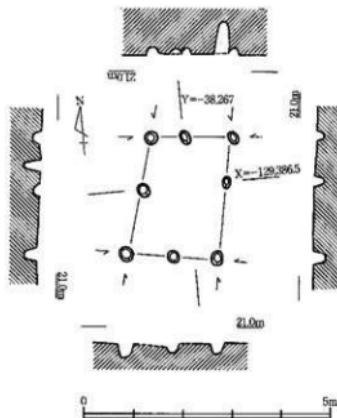
**建物179（第375図）** 建物176の東側で復元した。南側が攪乱で不明であるが桁行3間、梁間1



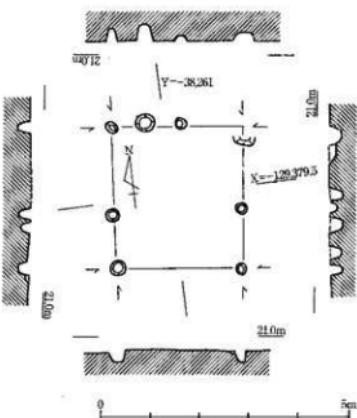
第366図 建物170平面・断面図



第367図 建物171平面・断面図



第368図 建物172平面・断面図

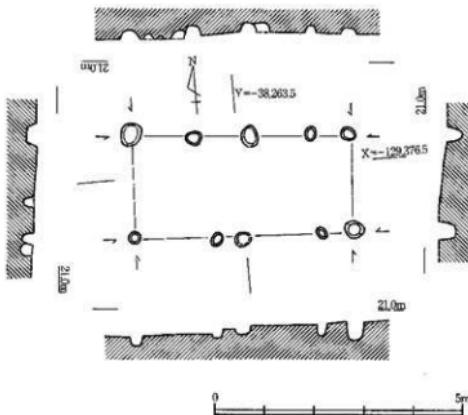


第369図 建物173平面・断面図

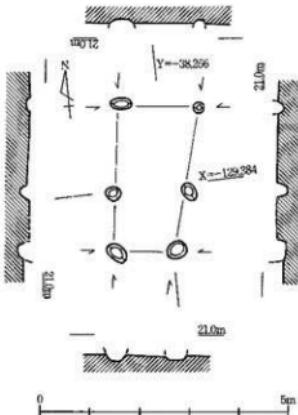
間以上の東西建物である。北側柱列は間隔が不揃いであるが0.7m、1.7m、1.0mを測る。

**建物180（第376図）** 建物178の東側、図には小さなかったが、K435敷石土坑の覆屋と考えられる建物である。桁側の柱間隔が広いが、2間×2間の建物と考えられる。規模は桁行が約5.2m、梁間は約3.8mを測る。桁側の柱間隔は約3.9m、約1.3mを測り、西側が広く造られている。主軸方向はほぼ北を示す。西側に柵がある。

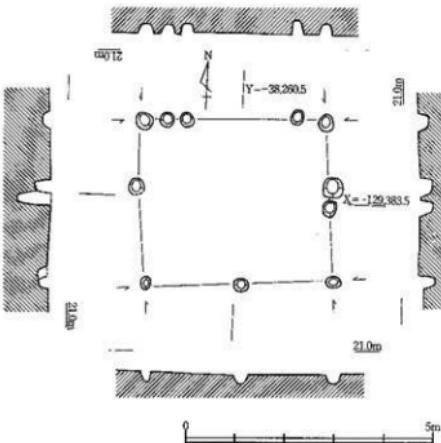
**建物181（第377図）** 建物180の北側で復元した東西棟の建物で、桁行、梁間共に多くの柱底が並ぶが、桁行2間、梁間1間と考えられる。規模は約3.4m×約1.9mを測る。桁行の柱間寸法は



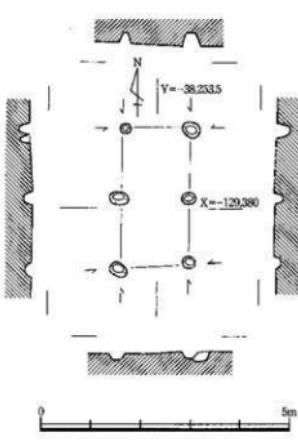
第370図 建物174平面・断面図



第371図 建物176平面・断面図



第372図 建物175平面・断面図

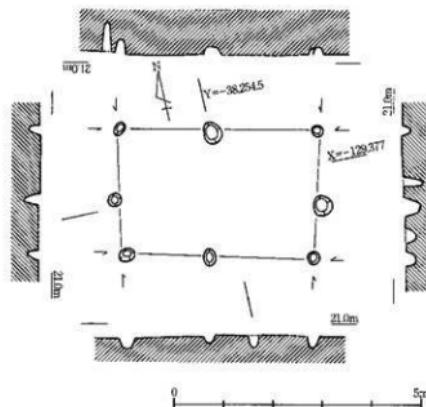


第373図 建物178平面・断面図

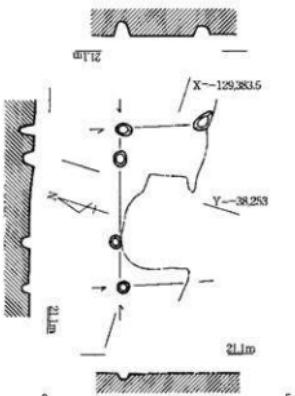
1.7mを測る。主軸方向は座標北を示す。

**建物182（第378図）** 建物181の北約8.0mで復元した建物である。桁行2間、梁間1間の方形を呈する南北建物で、規模は約2.3m×約1.8mを測る。桁側は寸づまりであるが、柱間寸法は1.3m、1.0mを測る。主軸はほぼ座標北を示す。

**建物183（第381図）** 建物181の北側で復元した北辺が短い平面台形の建物である。桁行、梁間共に2間の南北建物で、規模は桁行約2.7m、梁間は北が約2.0m、南が約2.2mを測る。柱間寸法は1.0mから1.5mを測り、桁行、梁間とも中央に柱穴がある。主軸はほぼ座標北を示す。



第374図 建物177平面・断面図



第375図 建物179平面・断面図

番号	地区	梁間		桁行	柱間(m)	位置		柱穴 形状 寸 方	柱穴(m)			柱 幅 (m)	方位	備考	
		間 (m)	間 (m)	柱 間 長	X	Y			最小	最大	深さ 深 浅				
163	K	2	4.9	3	6.5	2.00~2.40	-129.367	-38.232	円	0.20×0.30	0.44×0.48	0.50	0.10	N	
164	K	2	4.4	1~2	5.7	2.00~5.70	-129.367	-38.232	円	0.30×0.30	0.30×0.50	0.40	0.16	N	
165	K	2	3.0	2	3.1	1.30~1.80	-129.371	-38.238	円	0.20×0.20	0.50×0.60	0.56	0.24	N	
166	K	1	2.3	2	3.9	1.60~2.30	-129.363	-38.251	円	0.20×0.20	0.44×0.48	0.68	0.20	N-5°-E	
167	K	3	3.8	4~5	4.6	0.40~1.80	-129.368	-38.254	円	0.14×0.20	0.50×0.60	0.58	0.20	N-3°-E	
168	K	3	5.0	1~2	5.3	0.78~2.60	-129.369	-38.254	円	0.20×0.20	0.34×0.50	0.60	0.14	N	
169	K	3	3.7	4	5.3	0.90~1.86	-129.373	-38.255	円	0.20×0.20	0.50×0.56	0.40	0.10	N-10°-W	
170	K	3	2.6	2	2.9	0.54~1.50	-129.384	-38.273	円	0.20×0.20	0.40×0.50	0.30	0.10	N	
171	K	1	2.9	2	3.5	1.70~2.90	-129.383	-38.271	円	0.26×0.32	0.48×0.50	0.28	0.10	N-10°-E	
172	K	2	1.8	2	2.5	0.70~1.60	-129.386	-38.267	円	0.18×0.26	0.30×0.30	0.70	0.12	N-12°-E	
173	K	1~2	2.7	2	2.9	1.70~2.70	-129.379	-38.261	円	0.20×0.24	0.40×0.40	0.32	0.14	N-5°-E	
174	K	1	1.6	4	4.5	0.50~1.60	-129.376	-38.263	円	0.20×0.30	0.40×0.50	0.40	0.14	N-5°-E	
175	K	2	3.4	2	3.9	0.50~2.00	-129.383	-38.260	円	0.20×0.30	0.40×0.40	0.70	0.18	N-2°-W	
176	K	1	1.6	2	3.0	1.20~1.80	-129.384	-38.256	円	0.20×0.20	0.40×0.40	0.20	0.10	N-6°-E	
177	K	2	2.6	2	3.9	1.10~2.10	-129.377	-38.254	円	0.22×0.24	0.36×0.50	0.60	0.20	N-5°-E	
178	K	1	1.4	2	2.9	1.30~1.50	-129.380	-38.253	円	0.20×0.20	0.34×0.40	0.30	0.10	N	
179	K	1	1.8	3	3.2	0.60~1.70	-129.383	-38.253	円	0.24×0.26	0.30×0.50	0.40	0.10	N-21°-W	
180	K	2	3.8	1~2	5.2	0.90~3.80	-129.382	-38.246	円	0.20×0.20	0.40×0.50	0.60	0.10	N	

表29 H・K地区中世建物計測値表2

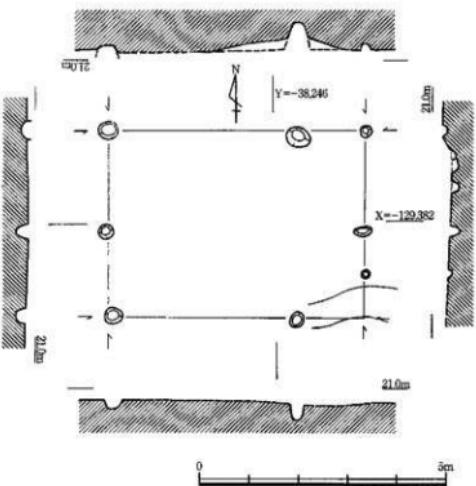
**建物184** (第379図) K432石敷土坑の下層で検出した柱穴を使用して復元した3間×2間の東西建物で、桁行約3.2m、梁間約2.0mを測る。梁側の中柱は北寄りにあり、柱間寸法は約0.7m、約1.3mを測る。主軸はN-5°-Wを示す。

**建物185** (第380図) K435石敷土坑の東側にある。歪んだ方形建物で、柱列が揃わないが、桁行3間、梁間2間の東西建物として復元した。規模は桁側が約3.2m、約2.9m、梁間は約3.5m、約3.1mを測る。梁側の柱間寸法は1.6m、桁側は0.9mから1.2mを測る。

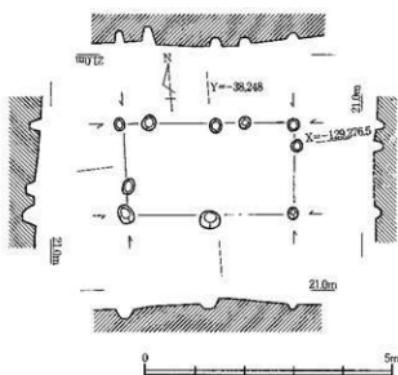
**建物186** (第382図) 建物185の東に重なる2間四方の東西建物で、桁行約4.8m、梁間約3.8mを測る。柱間寸法は桁側が2.3m、2.5m、梁側は1.9mを測る。主軸はN-5°-Eを示す。

**建物187** (第383図) 建物186の北東部に重なる桁行3間か4間、梁間3間の東西建物で、規模は約6.2m×5.9mを測る。柱間寸法は1.2mから2.2mの間にあり、区々である。主軸はN-5°-Eを示す。

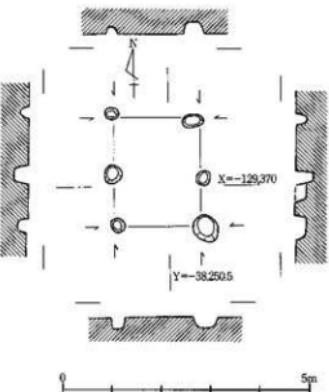
**建物188** (第384図) 建物186、187と重なる建物である。攪乱により南梁列を確認できなかったが、東西3間、南北3間以上の柱間隔の狭い建物を復元した。北側柱列は約3.3mを測り、柱間寸法は1.0mから1.2



第376図 建物180平面・断面図



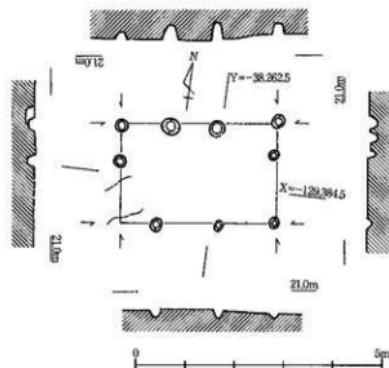
第377図 建物181平面・断面図



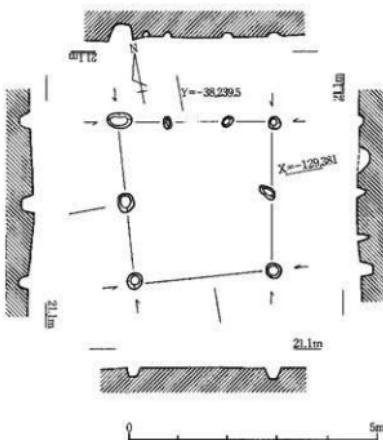
第378図 建物182平面・断面図

mを測る。

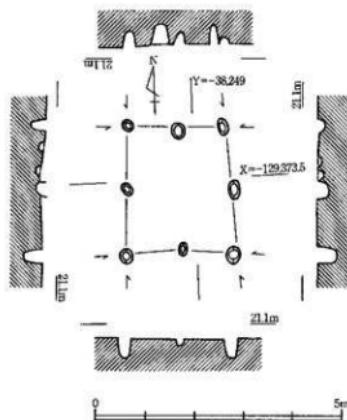
**建物189** (第385図) H地区の西端拡張部で復元した建物である。この拡張部では多数の柱穴を検出し、柱痕が残るものもあったが、柱穴が多すぎて、調査中も建物を復元できず、調査終了後に図面上で復元した。建物は桁行4間、梁間3間で、規模は約8.2m×約5.2mを測る。柱穴は径0.3mから0.5mの丸い円形で、柱間寸法は1.5mから2.5mを測り、区々である。主軸はN—



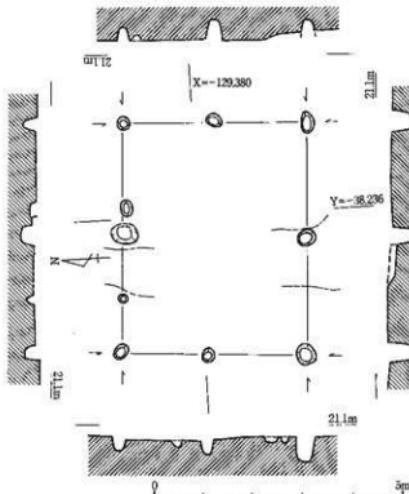
第379図 建物184平面・断面図



第380図 建物185平面・断面図



第381図 建物183平面・断面図



第382図 建物186平面・断面図

7°-Eを示す。

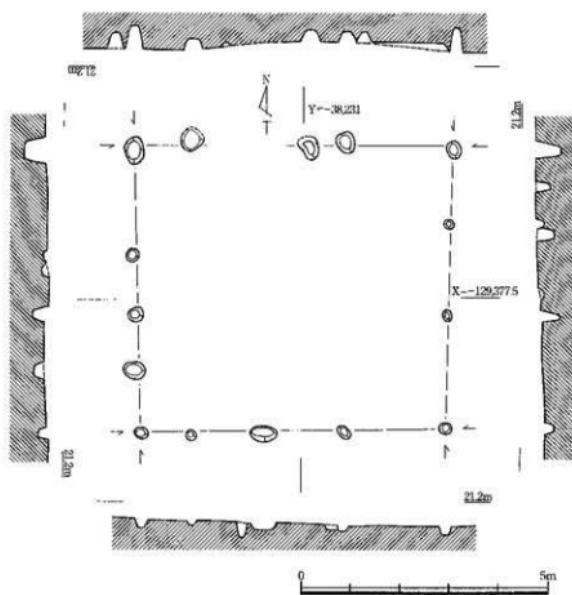
建物190（第386図）H地区西端拡張部、建物189とほぼ同位置で復元した桁行2間、梁間1間の南北建物で、規模は桁行が約3.8m、梁間は、南側が約4.0m、北は約3.5mを測る。柱穴は円形から隅丸の方形で、径0.7m前後を測る。長軸はN-4°-Wを示す。

建物191（第387図）

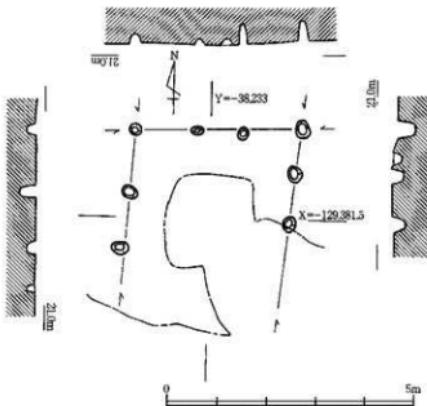
拡張部にあり、南側は調査区外にある。建物は3間×2間以上で、規模は約4.4m×2.6m以上を測る。柱間寸法は1.1mから1.6mを測る。南北軸はN-7°-Eを示す。

建物192（第388図）建物189の北側に接して復元した。桁側に柱穴が並ぶが、桁行3間から4間、梁間2間の建物で規模は約5.7m×約4.5mを測る。桁側の柱が不揃いであるが、柱間寸法は1.3mから2.0mの間に収まる。主軸方向は座標北を示す。

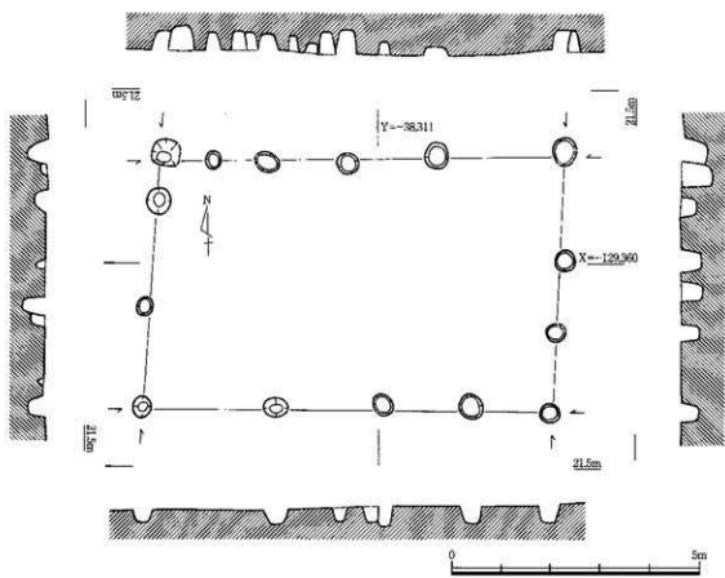
建物193（第389図）建物191の東側で復元した。柱間隔が不揃いであるが、桁行3間から4間、梁間3間の東西建物で、規模は約6.0m×約4.3mを測る。主軸方向はN-8°-Wを示し、建物191と同軸であり、並んで建っていると考えられる。



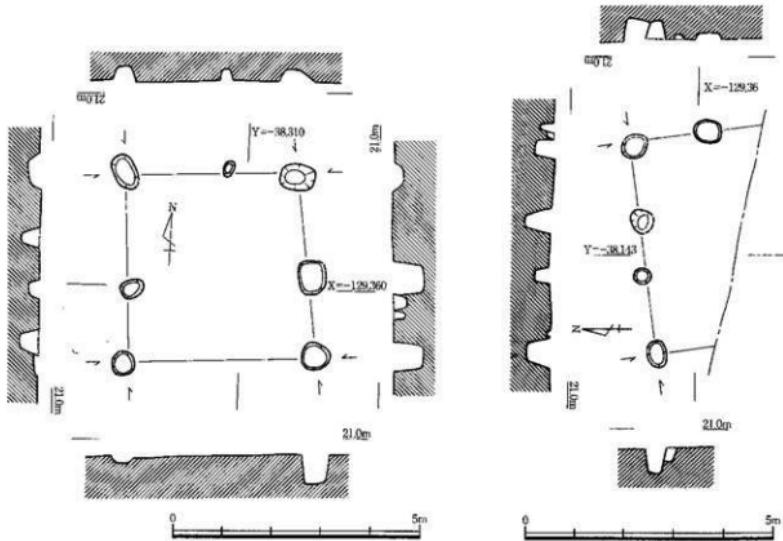
第383図 建物187平面・断面図



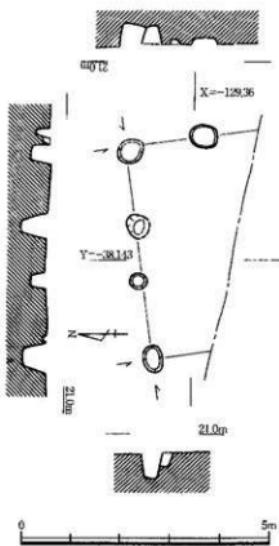
第384図 建物188平面・断面図



第385図 建物189平面・断面図



第386図 建物190平面・断面図



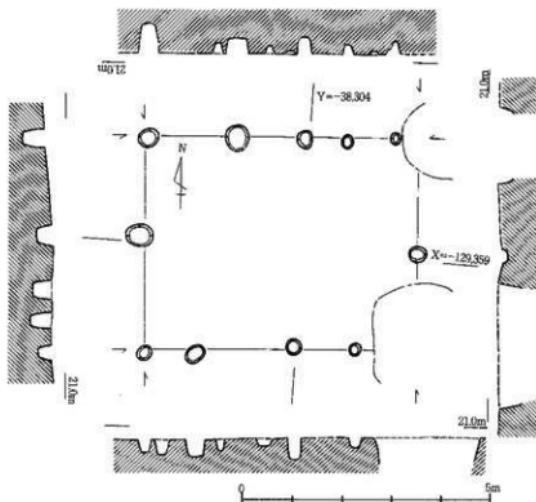
第387図 建物191平面・断面図

**建物194（第390図） H地  
区拡張部の東側で復元した大  
型の建物である。東側に焼土  
坑や攪乱があり、柱列を復元  
することができなかつたが、  
南北3間、東西3間以上の建  
物で、規模は約8.8m×4.5m  
以上を測る。西側の柱間寸法  
は広く、2.5mから3.0mを測  
る。主軸はN-4°-Wを示  
す。**

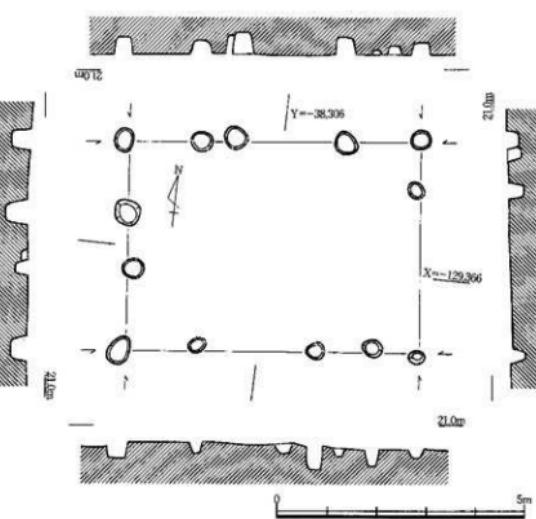
**建物195（第391図） 建物  
194の西側で復元した。柱間  
隔が狭いが、東西3間以上、  
南北3間の東西建物と考えら  
れ、規模は南北約2.8m×約  
2.3m以上を測る。東西軸は  
ほぼ東西を示す。**

**建物196（第392図） 建物  
194の南側、建物群の南端部  
で復元した。桁行2間、梁間  
2間の中間柱は小さい。規模は約3.5m×  
約2.2mを測る。桁側の柱間  
寸法は1.7m、1.8mを測る。  
主軸はほぼ東西を示す。**

**建物197（第393図） H地  
区北東部で復元した。南西隅  
の柱穴を欠くが2間×2間の  
総柱建物で、規模は南北約2.8  
m、東西約2.5mを測る。柱  
穴は重な楕円形や隅丸方形を  
呈し、この遺跡の中世建物と  
しては大きな掘方で、径0.7**



第388図 建物192平面・断面図

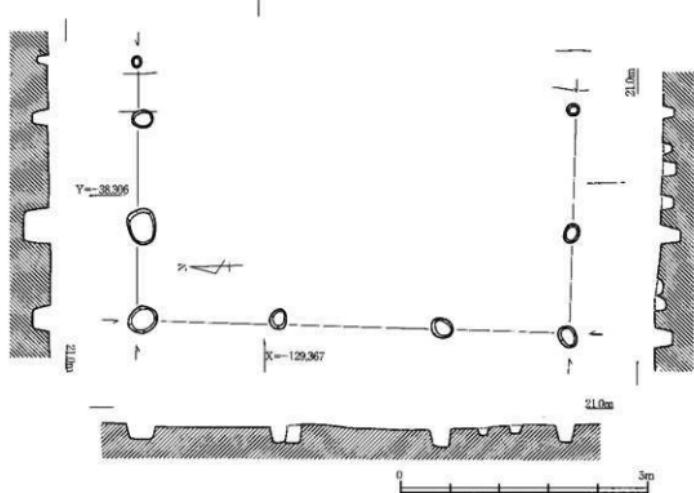


第389図 建物193平面・断面図

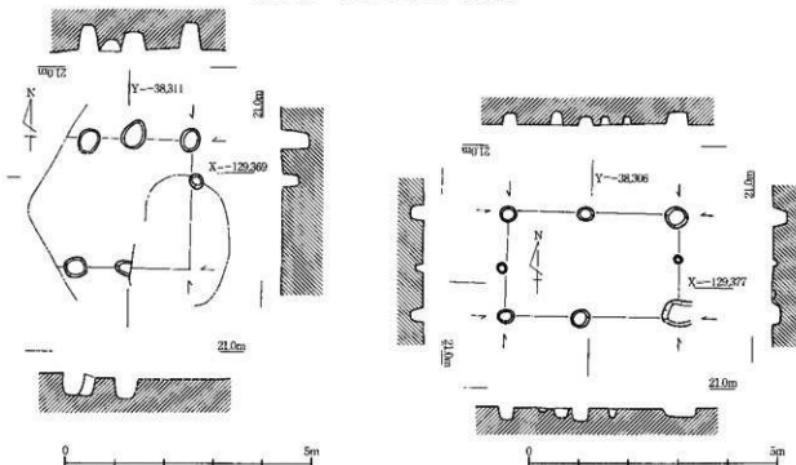
mから1.2mを測る。主軸はN-10°-Wを示す。

建物198（第394図） 桁行4間、梁間3間の東西建物で、規模は約8.4m×4.0mを測る。桁側の柱間寸法は東から2.0m、2.4m、2.0m、2.0mを測る。しかし、梁間は柱間寸法が狭く1.0mから1.8mの間にあり、東西で梁の間隔が対応しない。主軸はほぼN-4°-Wを示す。

建物199（第395図） 建物198とほぼ重なる位置で検出した南東隅に副尾を持つ桁行4間、梁間



第390図 建物194平面・断面図



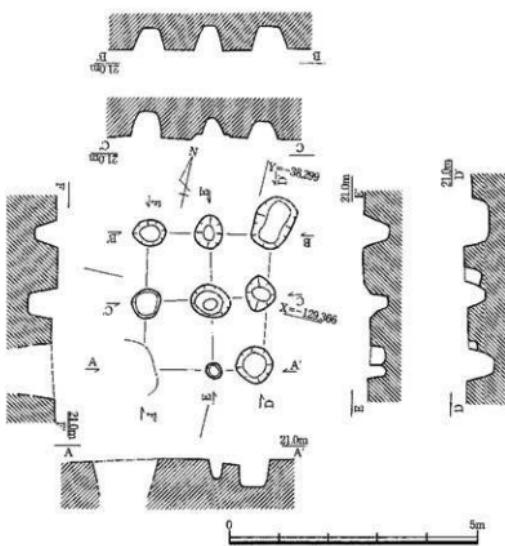
第391図 建物195平面・断面図

第392図 建物196平面・断面図

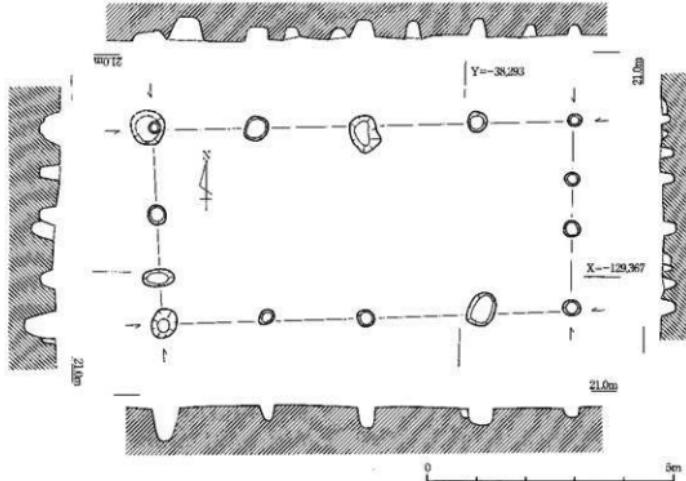
3間の東西建物である。母屋の規模は南桁が約8.9m、北側がやや狭く、約8.3mを測る。梁間は約5.9mを測る。副屋は1間四方で、南北は約2.9m、東西は母屋側の柱間隔が約2.0m、副屋は約1.8mを測る。副屋の西に半間、約1.2mの縁側廊下か庇を付ける。主軸はほぼ座標北を示す。

**建物200（第396図）** H地区中央付近にある桁行4間、梁間2間の東西建物で、規模は約7.6m×約4.1mを測る。柱間寸法は桁行が1.7mから2.0m、梁側は西側が約2.3m、約1.8m、東側は約2.1m、約2.0mを測る。主軸はN-2°-Wを示す。

**建物201（第397図）** 平面図には示していないが、H1000井戸と



第393図 建物197平面・断面図



第394図 建物198平面・断面図

重なる位置にあり、井戸の覆屋と考えられる1間四方の建物である。南西隅の柱は検出できなかった。規模は約3.9m×約2.5mを測る。主軸方向はN-2°-Wを示す。

**建物202** (第398図) H地区の中央北部にある。南西に副屋を持つ2間四方の建物で、母屋の規模は南北約4.2m、東西約4.3mを測り、ほぼ正方形である。柱間隔は副屋がある南側が約2.0m、約2.2mを測る。副屋は1間四方で約1.8m×約2.0mを測る。主軸は座標北を示す。

**建物203** (第399図) 柱が揃わず、北桁に柱穴が重なるが、桁行3間、梁間は2間か3間になる東西建物で、規模は約5.0m×約3.6mを測る。南桁の柱間寸法は1.8mで等間隔である。主軸はほぼ東西を示す。

**建物204** (第400図) H地区の中央付近で復元した2間四方の東西建物で、桁行は北側が約4.2m、南側は約3.8m、梁間は約3.5mを測る。桁行の中柱は西に寄っており、北桁の柱間寸法は1.5m、2.7mを測る。主軸はほぼ南北を示す。

**建物205** (第401図) H地区の中央部で復元した南北建物で、桁行3間、梁間の柱位置は対応しないが2間である。規模は約7.4m×約4.0mを測る。柱間寸法は東桁行が約2.8m、約2.2m、西約2.4m、西桁行が約1.3m、約1.7m、約2.3m、約2.1mを測る。西桁側は間隔が広い北東に副柱を建てたと考えられる。主軸はN-2°-Wを示す。

**建物206** (第402図) H地区東北部、X=-129.361、Y=-38.289付近で復元した2間四方の南北に長い総柱建物で、規模は約4.7m×約3.7mを測る。柱間寸法は、西桁が2.3m、2.44m、東桁が2.2m、2.2mを測る。主軸はN-3°-Wを示す。

**建物207** (第403図) H地区東部で復元した3間×2間の総柱南北建物で、規模は約6.2m×約3.7mを測る。桁行の柱間寸法は約2.1m、約2.3m、約1.9mを測り、南北はほぼ対応する。東柱

番号	地区	縦間		桁行	柱間(m)	位置		柱 性 質	柱穴 (m)				柱 軸 (m)	方位	備考	
		間 (m)	間 (m)			X	Y		形 状 方 向	最 小	最 大	深 さ 深 浅				
181	K	2	1.9	2~4	3.4	0.40~1.70	-129.276	-38.248	円	0.20×0.20	0.40×0.40	0.40	0.10	N		
182	K	1	1.8	2	2.3	1.10~1.80	-129.370	-38.250	円	0.24×0.30	0.50×0.60	0.38	0.16	N		
183	K	2	2.1	2	2.6	1.04~1.40	-129.373	-38.249	円	0.20×0.40	0.30×0.40	0.40	0.10	N		
184	K	2	2.0	3	3.2	0.70~1.40	-129.384	-38.262	円	0.20×0.24	0.32×0.40	0.40	0.10	N-5°-W		
185	K	2	3.0	3	3.1	0.90~2.90	-129.381	-38.239	円	0.18×0.30	0.30×0.50	0.30	0.10	N-5°-E		
186	K	2	3.8	2~4	4.8	0.50~2.40	-129.380	-38.236	円	0.20×0.20	0.42×0.54	0.52	0.12	N-5°-E		
187	K	4	6.2	3~4	6.2	1.02~2.30	-129.377	-38.231	円	0.20×0.20	0.50×0.50	0.50	0.10	N		
188	K	3	3.3	2	4.0	0.96~1.30	-129.381	-38.233	円	0.20×0.28	0.30×0.40	0.48	0.12	N-5°-E		
189	K	3	5.2	4~5	8.2	0.90~2.70	-129.360	-38.311	円	0.32×0.40	0.60×0.58	0.70	0.24	N-7°-E		
190	K	1~2	3.8	2	3.9	1.50~3.80	-129.360	-38.310	方	0.20×0.40	0.60×0.70	0.60	0.10	N-4°-W		
191	K		3	4.4	1.10~1.56	-129.36	-38.143	円	0.32×0.32	0.50×0.54	0.50	0.12	N-7°-W			
192	K	2	4.4	3~4	5.5	0.74~2.00	-129.359	-38.301	円	0.22×0.24	0.48×0.60	0.68	0.20	N		
193	K	2~3	4.3	4	6.0	0.70~3.40	-129.366	-38.306	円	0.30×0.36	0.50×0.60	0.48	0.20	N-5°-W		
194	K	2~3	3	8.8	1.20~3.38	-129.367	-38.306	円	0.20×0.22	0.58×0.60	0.50	0.22	N-4°-W			
195	K	1~2	1	2.6	0.86~1.20	-129.369	-38.311	方	0.30×0.30	0.50×0.60	0.50	0.30	N			
196	K	2	2.2	2	3.50	0.90~1.80	-129.377	-38.306	円	0.14×0.14	0.46×0.42	0.20	0.08	N		
197	K	2	2.5	2	2.8	0.90~1.50	-129.366	-38.299	○	方	0.40×0.40	0.80×1.10	0.58	0.30	0.5	N-10°-W
198	K	3	4.0	4	8.4	1.00~2.40	-129.367	-38.293	円	0.30×0.30	0.70×0.70	0.68	0.20	0.2	N-4°-W	

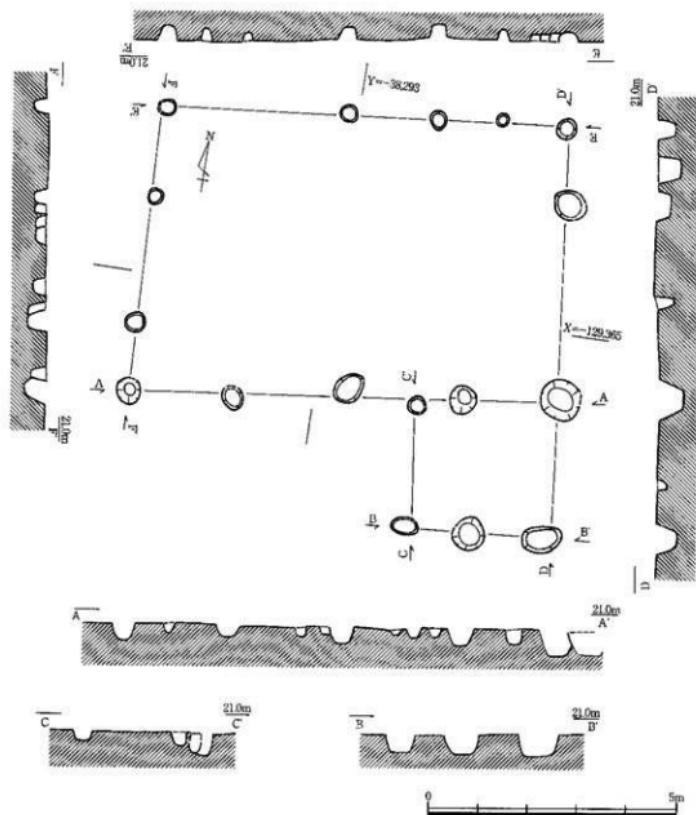
表30 H・K地区中世建物計測値表3

は桁柱と平行しないが柱間距離はほぼ対応する。主軸はほぼ北を示す。

建物208(第404図) 北東端の柱位置が少しずれるが、東西に長い3間四方の建物で、約6.8m × 約4.7mを測る。桁側の柱間寸法は西が広く、約2.6m、約2.0m、約2.0mを測る。主軸はほぼ座標北を示す。

建物209(第405図) H地区東北隅の桁行4間、梁間2間の東西建物で、約8.3m × 約4.1mを測る。建物の中央に東柱があり、床に建てる柱と考えられる。主軸はほぼ東西を示す。

建物210(第406図) H地区北東隅にある2間 × 2間以上の総柱建物で、北側は調査区外にある。規模は約2.5m × 2.0m以上を測る。中世建物としては柱穴の掘方は大きく径0.5mから0.8mを測る。主軸方向はN-19°-Wを示す。



第395図 建物199平面・断面図

#### d. 檻列

数本の柱は並ぶが、直行して柱列を復元できなかったものを檻列として取り上げた。

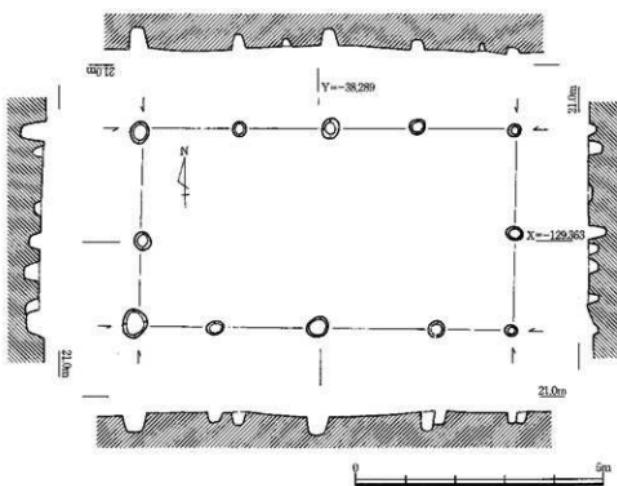
檻列14（第407図）は、K地区建物群の東側にある。

檻列15は、K地区

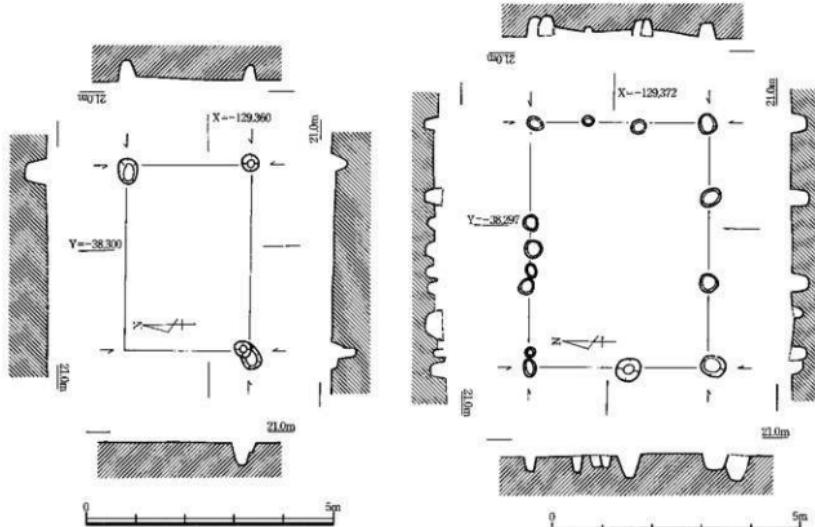
北西部にある。建物  
の南柱穴列の可能性  
がある。

檻列16（第408図）  
は、K441土坑の東側  
で復元した。5間、  
約6.0mに渡って柱  
列が並ぶ。

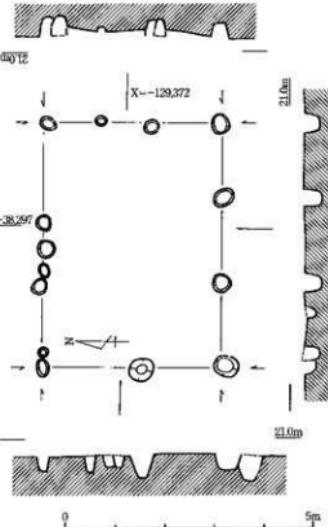
檻列17（第409図）  
は、X = -129,370.5、  
Y = -38,232付近に  
ある5間、約9.0m  
の檻列で、ほぼ東西  
に並ぶ。



第396図 建物200平面・断面図



第397図 建物201平面・断面図



第398図 建物203平面・断面図

柵列18（第412図）は、一部が溝の中にかかり、溝より新しいと考えられる。

柵列20（第411図）は、南に副屋をもつ建物202の西側にあり、建物に平行する。径0.7m前後の柱穴が2ヶ所並ぶ。

柵列21（第413図）は、間隔が揃わないが4間で約6.2mを測る。軸はN-72°-Eを示す。

柵列22（第414図）は、南端の建物196の北側にある。

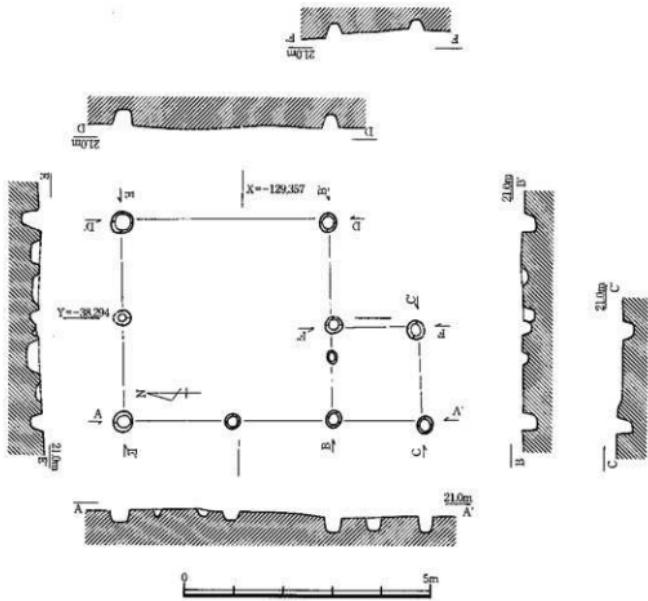
e. 柱穴および柱穴内出土遺物

i) 概要

H・K地区では3000カ所以上のピット、小土坑を検出している。検出数が多かったため平面・断面図を作成した遺構は少なく、規模と土色をメモした程度の物がほとんどである。遺構番号は検出順に付与したので位置による縦まりはない。特に大きな番号は各所に飛んでいる。主な遺構位置は付図5で確認されたい。

ii) H地区の柱穴と柱穴出土遺物（第415・416図）

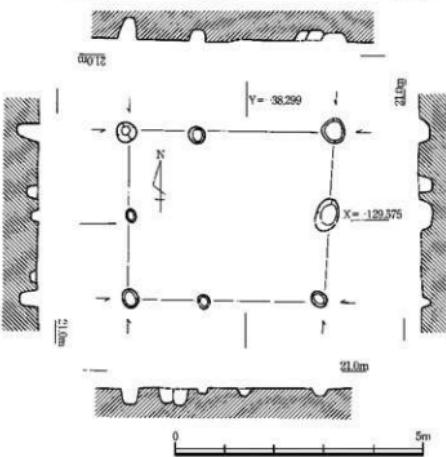
1244から1256はH地区東北隅のH985柱穴出土。1244、1245、1247は土師器の小皿。1246、1248から1254は瓦器楕である。内外面とも摩耗しているが、体部外面は指オサエ、内面は細い原体のミガキで粗い圓線状である。高台は形骸化し細い粘土ひもを貼りつけたものが多い。1255は土師質の鉢、1256は土師質の壺で、口縁を緩く外反させる。1263は白磁の破片。1264、1265はH1052



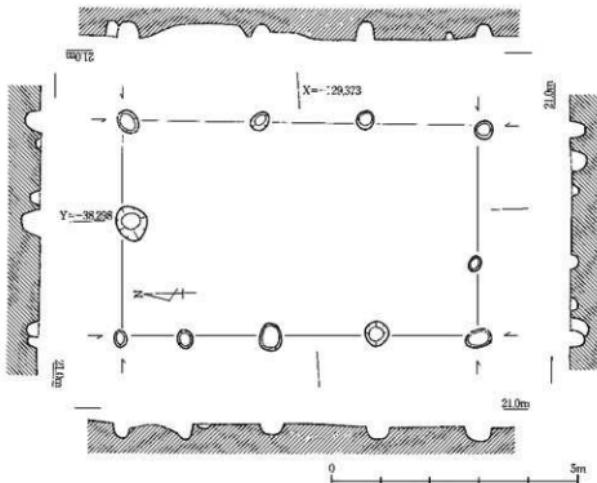
第399図 建物202平面・断面図

柱穴から出土。1264は瓦器椀、1265は東播系の鉢である。1257、1258は瓦器皿、1259は須恵器甕の底部、1260は瓦器椀で、内面は口縁部近くまで圈線ミガキが残る。1261は白磁碗、1262は連弁をつける青磁碗の口縁部である。X = -129.365, Y = -38.270付近のH1163柱穴から出土した。1267は瓦器小皿。1268から1272は土師器の小皿。底面の丸いものが多い。1273から1276は瓦器椀。1274は外面を指オサエの後に細いミガキを施す。1276は間線状のミガキの上に螺旋状のミガキを施す。1278、1279は白磁碗。

1278は口縁端部を丸くおさめ、1279は薄い体部に玉縁の口縁を付ける。底部から高台は無軸である。1280は石堀の口縁部破片である。1281は瓦器皿。見込みに平行線の暗文を描く。口径10cm、器高1.8cm。1282から1285は土師器小皿。底面は丸く、すわりが悪い。1286は瓦器小皿で、内面は口縁端部までミガキが残る。1287、1290、1291は瓦器椀。1287、1290は内彎して立ち上がる体部をもつ。外面に粗いミガキを施す。内面は間線状のミガキに渦巻き状のミガキを施す。1287は口径13.8cm、器高



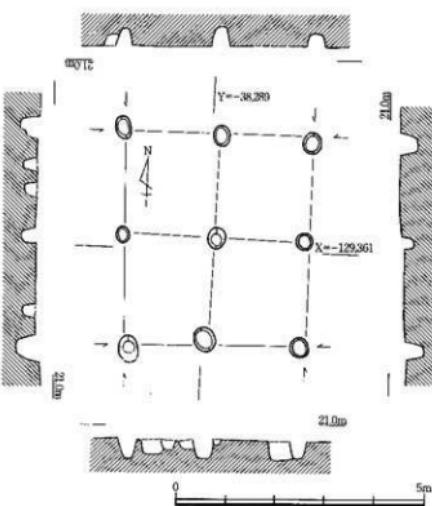
第400図 建物204平面・断面図



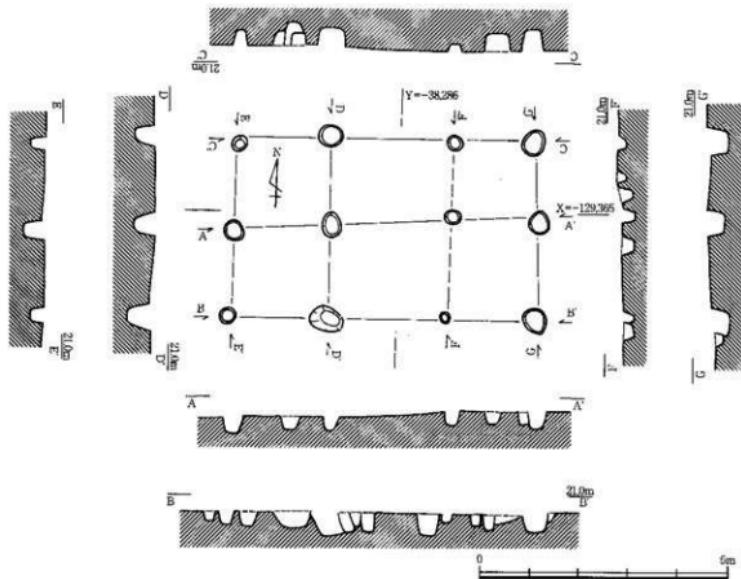
第401図 建物205平面・断面図

4.5cm。1291は開いて立ち上がる口縁部をもつ。外面は口縁から3分の1程度ヨコナデ調整する。内面の調整は観察できない。1288、1289、1292、1293は白磁碗。1289、1293は玉縁状の口縁をつくるのもので、1289は口縁端部を細く丸める。玉縁口縁は軸が垂れる。1291は瓦器椀。口縁部が直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。1294は瓦質壺の口縁部。水平まで外反して開く口縁端部から上下に拡張する面をつくる。外面は頸部まで細いタキ目調整である。1295、1296は東播系の鉢で、口縁端部を上に摘んで拡張させる。1295は体部に指オサエが観察される。

H1834柱穴（第418図）調査区北部



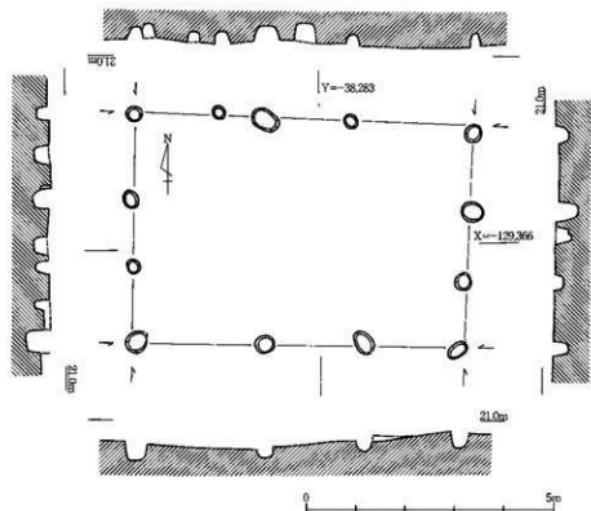
第402図 建物206平面・断面図



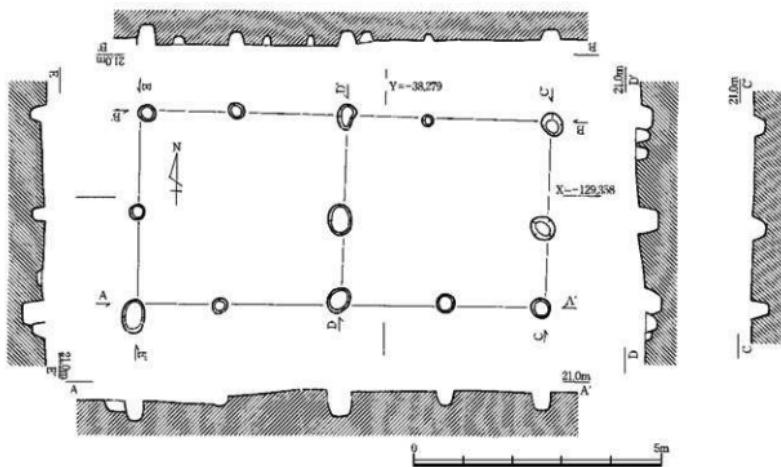
第403図 建物207平面・断面図

のX=-129,370、Y=-38,265付近にある直径約0.3mの小柱穴である。切り合っている長径約0.7mのH1042土坑出土遺物と区別できなかった。

1297から1301は大型の甕。1297、1298は須恵質の甕。1297は外反して開く口縁端部に面をつくる。1298は短く外反する口縁端部を僅かに上に擱んで拡張させる。1299は瓦質の甕。1300は土師



第404図 建物208平面・断面図



第405図 建物209平面・断面図

質の甕で、外反する口縁の端部を上に拡張させる。外面はタタキ目、内面は指オサエと粘土の繊ぎ目が残る。

### iii) K 地区の柱穴と柱穴出土遺物

調査ではピットの南側を残し、北側半分を掘削し土層断面を観察した。ピットの掘削を優先したため、遺物の出土状態を図化したピットは少ない。

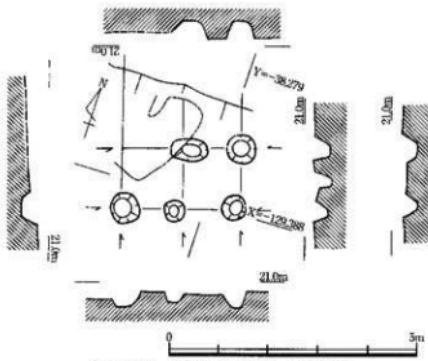
K391柱穴出土遺物 (第419図) 長径0.3mを測る歪な円形のピットで、深さ0.2mを測る。内部に瓦器碗が割れた状態で埋納されていた。地鎮の祭りに伴うものか。

K305柱穴 (第420図) K441土坑の東側、X = -129,367.5、Y = -38,248.5付近で検出した歪な橢円形の柱穴で、長径約0.4m、短径約0.3mを測る。深さは約0.45mで底面に柱押さえに使用された拳大の石が埋められていた。また拔柱後に瓦器碗片 (図版38-8) を埋め、地面に僅かに露出するように拳大の石を埋置していた。目印としたのであろう。

K地区柱穴出土遺物 1 (第421図) 柱穴から出土する土器のほとんどは瓦器や土師器の小破片である。瓦器は外面のミガキが省略され、見込も平行の暗文を施す程度のものが多い。

1302から1317、1321から1340は瓦器碗。1302、1303は内面が摩耗している。

1303は内面のミガキが粗い。1306は圓錐状のミガキが残る。1305、1321、1322は粘土ひもを巻き付けた程度の高台が付く。1308は直線的に開く体部をつくるもの。内面のミガキは観察できない。1316、1322、1324は底部で、碗より僅かに突き出す高台の内面にミガキが残る。1326は脱色し、灰白色の胎土が露出している。1328は口縁部外



第406図 建物210平面・断面図

番号	地区	梁間		柱行	柱間 (m)	位置		柱 柱 間	柱穴 (m)				柱 底 (m)	方位	備考	
		間 (m)	間 (m)			X	Y		形状 門柱 方	最小	最大	深さ 前 後				
199	K	4-5	8.3	3	8.5	1.00-4.00	-129,365	-38,293	円	0.22×0.22	0.80×0.86	0.42	0.26		N	
200	K	2	4.1	4	7.6	1.60-2.10	-129,363	-38,289	円	0.25×0.28	0.50×0.60	0.50	0.10		N-2°-W	
201	K	1	2.6	1	3.8	2.60-3.80	-129,360	-38,300	円	0.40×0.40	0.60×0.52	0.50	0.30		N-2°-W	
202	K	2	4.1	3	6.0	0.70-4.20	-129,357	-38,294	円	0.20×0.40	0.45×0.48	0.40	0.18		N	
203	K	2-3	3.6	3	5.0	0.50-2.00	-129,372	-38,297	円	0.20×0.20	0.46×0.50	0.50	0.20		N	
204	K	2	3.5	2	4.0	1.50-2.80	-129,375	-38,299	円	0.20×0.30	0.45×0.70	0.44	0.12		N	
205	K	2	4.3	3-4	7.4	1.50-2.70	-129,373	-38,298	円	0.22×0.32	0.64×0.72	0.36	0.16		N-2°-W	
206	K	2	3.7	2	4.3	1.96-2.40	-129,361	-38,288	○	円	0.30×0.34	0.40×0.58	0.48	0.20		N-3°-W
207	K	2	3.7	3	6.2	1.56-2.40	-129,365	-38,286	○	円	0.20×0.24	0.54×0.70	0.50	0.20		N
208	K	3	4.7	3-4	6.8	1.00-2.68	-129,366	-38,283	円	0.28×0.26	0.40×0.60	0.60	0.20		N	
209	K	2	3.9	4	8.3	1.70-2.50	-129,358	-38,279	○	円	0.22×0.22	0.48×0.70	0.60	0.14		N
210	K	1	1.3	1-2	2.6	1.10-1.20	-129,388	-38,279	方	0.40×0.40	0.60×0.68	0.30	0.20		N-19°-W	

表31 H・K地区中世建物計測値表4

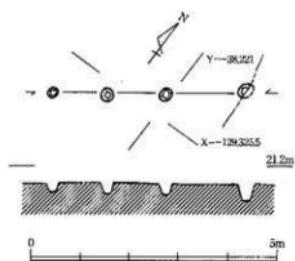
面に細いミガキを施すもの。内面はやや密な圓線ミガキに渦巻状のミガキを重ねる。1329は体部が直線的に開くもので、口径12.8cm。1331は内側気味に開く体部に断面が小さな台形の高台を付ける。内面の調整は不明。1335は内面が摩耗している。1330、1332は内面にミガキが残る。1336から1338の体部外面は規則的な指押さえが観察される。内面は粗い圓線状のミガキ調整である。1338は圓線の上に渦巻状のミガキを巡らせる。1339は断面三角形の小さな高台を貼りつける。1318は土師器の小皿。1319は底部が丸みを持つ土師器小皿で、口径12.8cm、器高2.0cm。1320は丸みを持った底部から内側して立ち上がる口縁をつくる瓦質の鉢で、口縁端部は内傾する面をもつ。口径22.5cm、器高8.8cm。K418柱穴から出土した(図版38-3)。

#### K 地区柱穴出土遺物2(第422図) 1341から1349

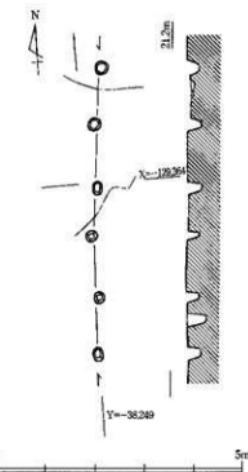
はK441土坑の北約1.0mで検出したK333柱穴から出土。

1341、1342、1345は瓦器皿で、底部外面に指オサエが残り、内面は細い原体のミガキ調整。

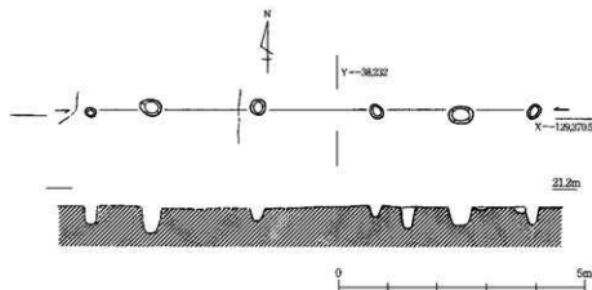
1342は見込みに平行線の暗文を付ける。1345は口縁を強くヨコナデする。1343、1344は土師器の小皿である。



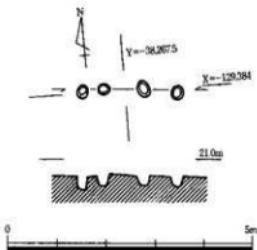
第407図 櫛列14平面・断面図



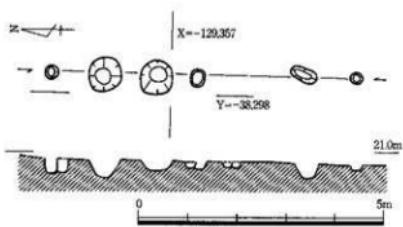
第408図 櫛列16平面・断面図



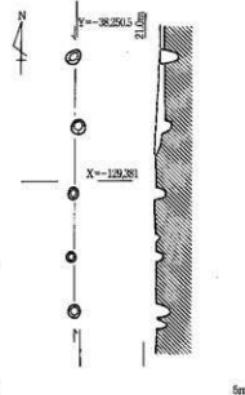
第409図 櫛列17平面・断面図



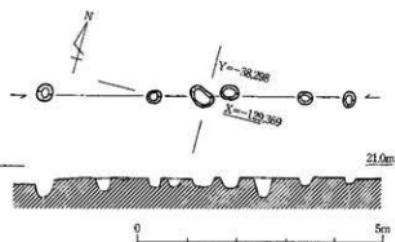
第410図 構列19平面・断面図



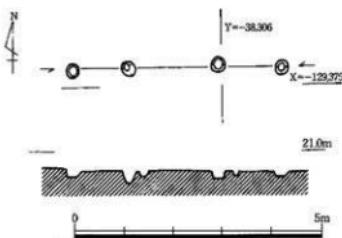
第411図 構列20平面・断面図



第412図 構列18平面・断面図



第413図 構列21平面・断面図

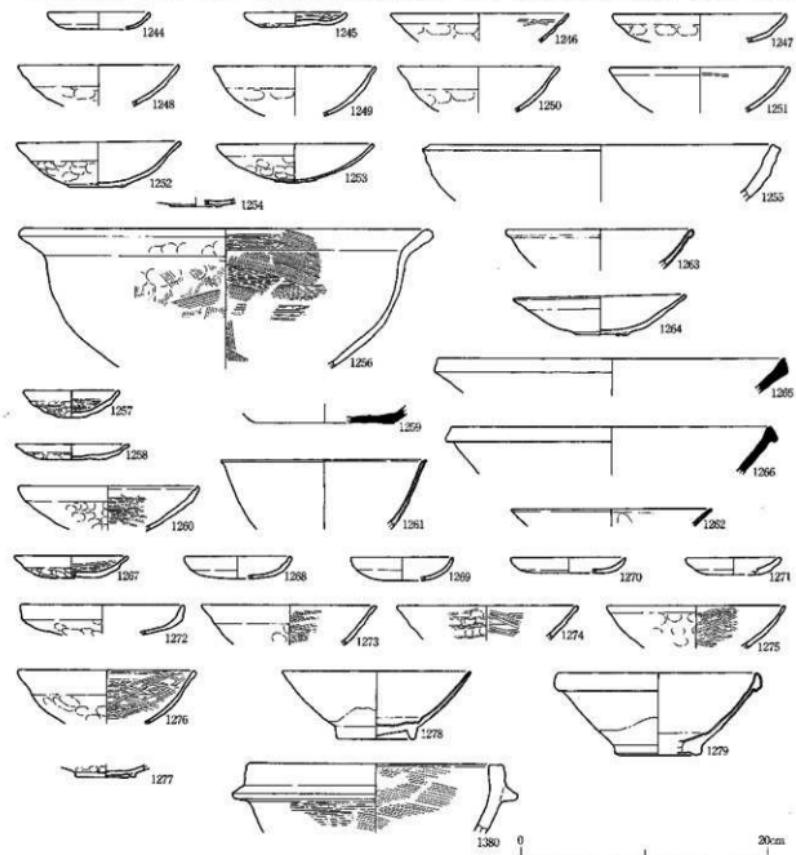


第414図 構列22平面・断面図

番号	地区	柵行	柱間(m)	位置		柱穴 (m)			柱高(m)	方位	備考	
				間(m)	延長	X	Y	形状 円 or 方	最小	最大	深さ 深 浅	
14	K	3	3.9	1.1~1.6	-129.325	-38.221		円	0.20×0.28	0.26×0.34	0.34 0.18	N-53°-E
15	K	3	4.1	1.0~1.5	-129.318	-38.256	方	0.21×0.20	0.42×0.50	0.10 0.06	N-85°-E	
16	K	5	5.9	1.0~1.3	-129.364	-38.249	円	0.20×0.24	0.24×0.30	0.28 0.20	N-5°-E	
17	K	5	9.0	1.2~2.5	-129.370	-38.232	方	0.16×0.22	0.35×0.50	0.22 0.50	N-90°-E	
18	K	4	5.2	1.1~1.4	-129.381	-38.250	円	0.18×0.20	0.28×0.34	0.14 0.50	N	
19	K	3	1.9	0.4~0.8	-129.384	-38.267	円	0.24×0.24	0.22×0.34	0.20 0.24	N-83°-W	
20	K	5	6.2	0.8~2.2	-129.357	-38.298	方	0.22×0.24	0.64×0.72	0.10 0.36	N-2°-E	
21	K	5	6.2	0.6~2.2	-129.369	-38.298	円	0.24×0.28	0.36×0.54	0.10 0.34	N-72°-E	
22	K	3	4.3	1.1~1.9	-129.375	-38.306	円	0.24×0.30	0.28×0.30	0.08 0.24	N-89°-E	

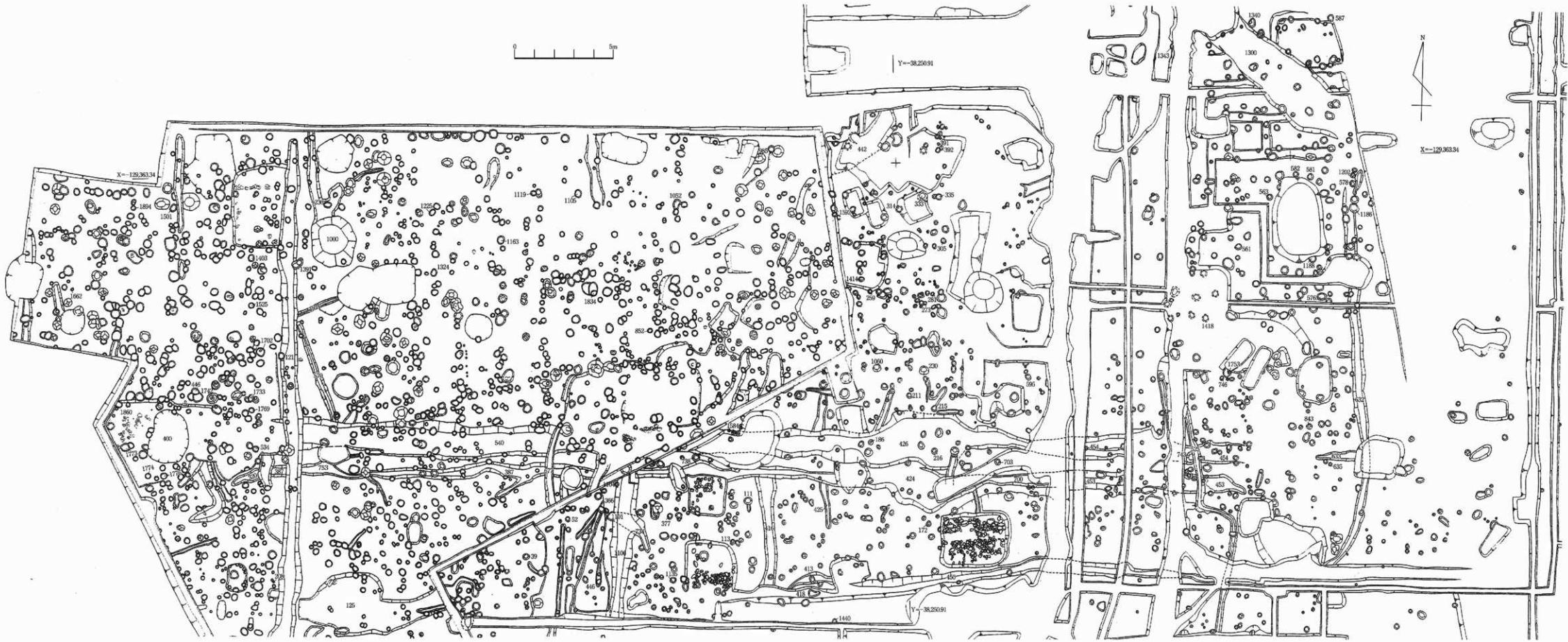
表32 H・K地区中世柵列計測値表

1346から1349は瓦器椀。体部は直線的に立ち上がるものが多い。内面は細い原体で粗い圓錐状のミガキで仕上げる。体部外面は指オサエ。口縁部は1.0cmから2.0cmの範囲でヨコナデ調整。高台は粘土ひもを貼り付け断面逆台形につくる。1354は土壙で、真っ直ぐ立ち上がる体部に「く」字形に外反する口縁の端部はあまい面をつくる。内面は口縁端部まで横方向のハケメで調整する。1350、1355から1385、1390から1394は土器器皿。底部の平坦面は小さく、丸みをもって短かく立ち上がる口縁部をつくる。底部はナデ調整のものと、指オサエで成形する1355、1357、1370、1375、1377がある。口縁部を強くヨコナデする1370、1375、1382、1384は、口縁部が外縁気味になる。1371、1373、1391から1394は口径12cm前後の中皿。口縁部は小皿同様、内彌する1371



第415図 H地区柱穴出土遺物 1

H985(1244～1256) H1163(1257～1262) H446(1263) H1052(1264・1265) H1773(1266) H1403(1267～1280)



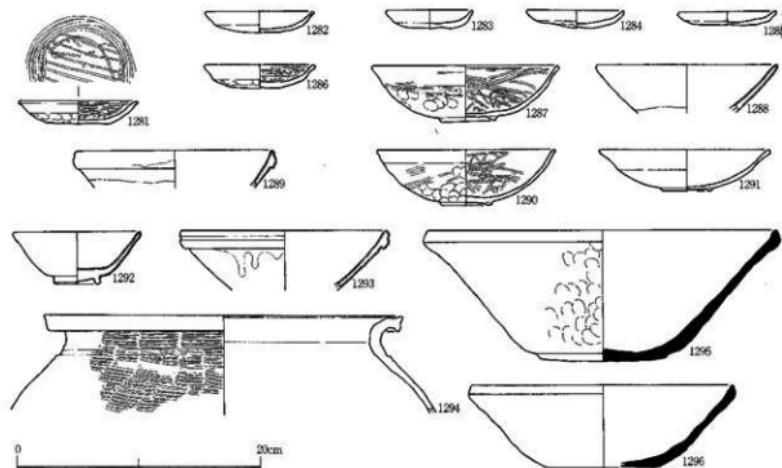
第416図 H·K地区柱穴群平面図

と強いヨコナデで外縁気味になる1391、1392がある。1391から1394はK370井戸の東側、X = -129, 370、Y = -37, 238付近のK1578柱穴から出土した。1386から1388は瓦器楕で、1386、1387は細い粘土ひもを貼り付けたもの。内面は摩耗していて、調整不明。1388は粗い圓線状のミガキで調整する。1389は三足の土釜で、断面二等辺三角形状に短く開く鋤に、内縁して立ち上がる口縁部を付ける。K1300番台は調査区中央の東西水路の南側で検出した遺構である。

K703 柱穴（第423図） 石敷遺構K435の北約3mにあるピットで、攪乱により上部は削平されていた。検出時は楕円形を呈し、長径約0.3m、短径約0.24m、深さは約0.08m程であった。攪乱されなかった場所との比較から、深さは0.4m以上を測る。ピットの底に接して、土釜の小片や、角礫が基礎と柱固定のため埋置されていた。

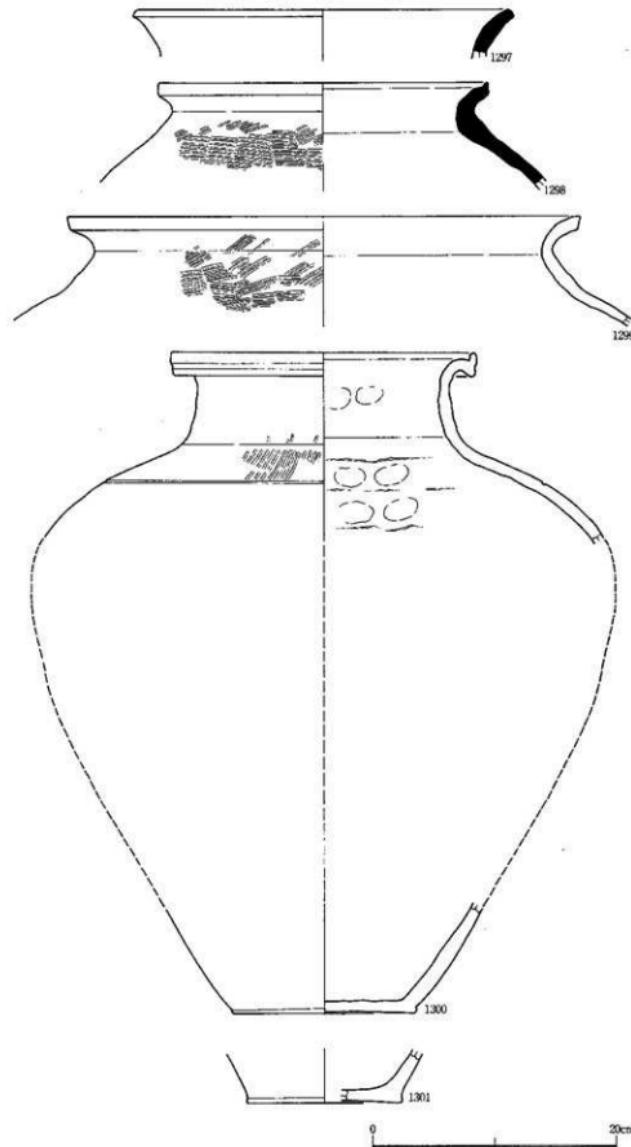
K1440 柱穴（第424図） 調査区の中央西部、住宅の東西道路、備溝そばで検出した柱穴である。上部と南は攪乱されているが、現況で南北約0.3m、東西約0.4mを測る。底面から少し浮いた状態で、角礫と土器師や須恵器の土器片が投棄されていた。

K地区柱穴出土遺物3（第425図） 1395から1401、1403から1405、1407、1412、1413、1415から1417は瓦器楕。器壁が摩耗し、調整を観察できないものがあるが、体部は僅かに内縁して開き、外面は指オサエ、と口縁部はヨコナデ、内面は細い原体で粗く圓線状のヘラミガキを施すものが多い。1399は内外面とも摩耗しているが、小さい三角形の高台と、内縁気味に立ち上がる体部を



第417図 H地区柱穴出土遺物2

H1525(1261) H852(1262) H1225(1263) H1324(1264) H1769(1265) H1774(1266) H1702(1267) H1501(1268)  
H1733(1269) H1776(1290) H1391(1291) H1151(1292) H1742(1293) H206(1294) H105(1295) H1119(1296)



第418図 H1834柱穴出土遺物

つくる。口径12.5cm、器高4.4cm。1413は体部外面にも粗いヘラミガキを施し、内面はやや密な圓線状のヘラミガキを施す。口径15.2cm。1402は土師器皿で、復元口径12.6cm。1406は白磁の高台で、高台部分は無釉。1408は土師質の鉢、1409、1410は東播系の鉢。1410は口縁端部を上に摘まみ上げ、凹線状のあまい段をつくる。1411は土師器で、器壁が荒れている。奈良時代頃の瓶が混入したもの。1414は瓦質の小皿、底面に指オサエが残る。1418、1419は白磁で、1419は口縁端部を外に摘まんで丸める。1420から1424は東播系の鉢。口縁端部は外面に垂直の面をつくるときに上に摘まむもの（1420）と、そのまま断面三角形状に面をつくるもの（1423）がある。1424は片口である。1425は土釜で、僅かに内傾する体部に水平に開く鉤を付ける。口縁端部は丸みをもつて仕上げている。

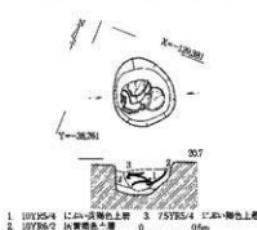
K1584柱穴出土遺物（第426図） K382 土坑の北約3mにあるK1584柱穴から砾石が出土している。1427は6面を使用する。1428は方形に面取されたもので現存長は8.0cm×4.0cm、厚さは2.0cmを測る。石種は未鑑定である。

#### d. 土坑

K384土坑（第429・432図、図版20-2） K地区西部で検出した配石土坑である。南側は攪乱されているが、西が僅かに大きくなる隅丸方形で、東西約2.6m、南北は現存で約2.5m、深さは約0.2m前後を測る。配石は主に南東部にあり、拳大程度までの原石や段丘礫を東西約1.8m、南北は約0.6mの三角形状に1段から3段重ねて据える。また西端では北にも礫を配しており、「L」字形に近い配石である。土坑内のピットは配石より古い構造である。配石は全体を掘り下げた後、時間が経過して置かれたのか地山からは少し浮いた状態であった。

#### K382土坑（第430・432図、図版20-2）

K384土坑の北側で検出した配石土坑である。平面は方形で南北約2.1m、東西約1.9m、地山からの深さは約0.2mを測る。配石は西北部に偏り、土坑384と比べると礫石は小さいものが多く、1段だ



第419図 K391柱穴遺物  
出土状況図

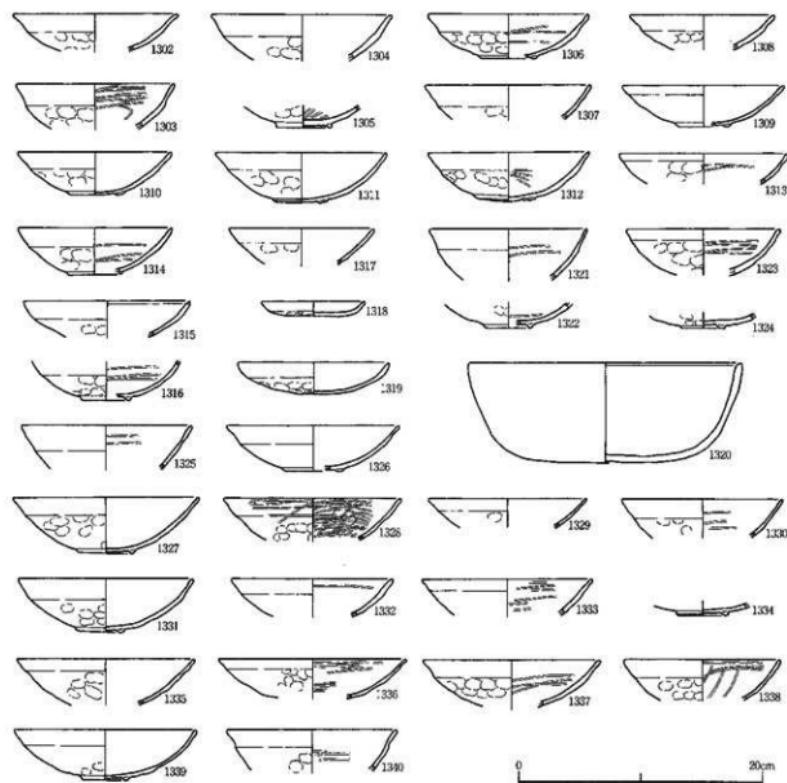


第420図 K305柱穴遺物出土状況図

けであった。廃棄時に石を抜いたと考えられる。

K1627土坑（第431・432図、図版39-1） X=-129,386、Y=-38,254付近で検出した2段掘りの楕円形土坑である。長径約1.65m、短径約1.05mを測る。深さは1段目まで約0.4m、2段目は約0.48mを測り、全体に鋭角的に掘削されている。底部に接して瓦器碗と拳大の川原石が置かれていた。埋土は上層がにぶい黄橙色土、中下層は灰黄褐色から灰褐色土で、上層は地山の黄橙色土と灰褐色土が混ざったような層であった。形状から土壤墓の可能性がある。

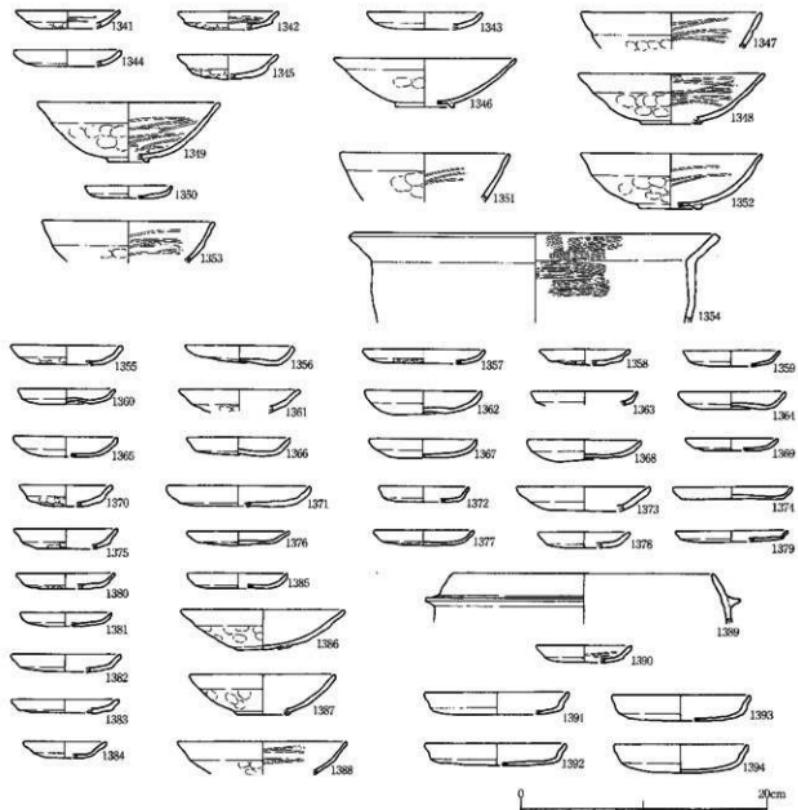
K地区土坑出土遺物1（第430図） 1429、1430は小皿、1431から1433、1435、1436、1441、



第421図 K地区柱穴出土遺物1

K111(1302) K281(1303) K86(1304・1305) K217(1306) K172(1307) K293(1308) K314(1309)  
K305(1310～1312) K39(1313) K392(1314～1316) K425(1317) K418(1318～1320) K335(1321～1323)  
K446(1324) K561(1325) K563(1326) K576(1327) K578(1328) K595(1329・1330) K581(1331) K613(1332)  
K602(1333) K608(1334) K606(1335) K746(1336) K726(1337) K113(1338) K981(1339) K1135(1340)

1442、1445、1448から1450、1453は瓦器椀で、1433は内面に粗い渦巻状のミガキを施す。他は内面に粗い圓線状ミガキである。1434は東播系の鉢で口縁部を僅かに上に拡張し、垂直の面をつくる。口径26.5cm。1438は土師質の土釜で、短い鉢に内傾気味に僅かに立ち上がる口縁部をつくる。1439は受け口状の土釜で、口縁端部を擴まんで拡張させ、外傾する面をつくる。1443、1444は土師器小皿で、1443は口径8.0cm、器高1.2cm。1451は瓦質の上釜で短い鉢に屈曲して内傾する口縁部をつくる。1454は白磁碗で、口縁端部を丸くおさめる。



第422図 K地区柱穴出土遺物2

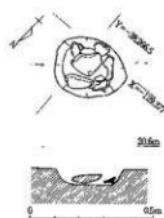
K333(1341～1349) K738(1350・1353) K582(1351・1352) K743(1354) K63(1355) K84(1356) K143(1357)  
 K186(1358) K259(1359) K314(1360) K172(1361) K377(1362～1368) K615(1369) K622(1370) K1414(1371)  
 K908(1372) K1107(1373) K1202(1374) K1188(1375) K1592(1376～1378) K587(1379) K566(1380)  
 K563(1381・1385・1386) K230(1382・1383・1387) K314(1384・1388) K587(1389) K1273(1390) K1578(1391～1394)

**H400土坑** (第431図) H地区西部のX = - 129,872, Y = - 38,284で検出した配石土坑である。全体が攪乱されたように多量の礫石と焼土、炭化材などが旧耕土下まで盛り上がって混在しているため、当初は現代の廃棄穴と判断していた。そのため南西部の礫石は少し除去してしまった。土坑の形状は「L」字形を呈し、南北4.2m以上、東西約3.8m、深さ約0.2mを測る。石敷は土坑中央部の約2.0m × 約2.3mの範囲と、西側の約1.2m × 約2.1mの2ヶ所では小児の頭大程度までの礫石が2から3段積み重ねられている。石に混ざって、第433図に示す瓦質の三足釜、鉢、白磁碗などが出土している。

**H400土坑出土遺物** (第433図、図版37-5) 1471は甕の口縁部。1472、1474、1475は東播系の鉢で、1474は口縁部を擴張させる。1475は土師器で小型壺の口縁部か。1478、1479は白磁碗の底部である。1476は瓦質の三足釜で足が体部とともに残り、全体を復元した。短く水平近くに開く鉤から内傾して立ち上がる口縁部を造る。体部には指オサエが残る。1477は瓦器楕で、口径14.0cm、器高3.8cmを測る。

**K435土坑** (第432図) 遺構が密集するK地区西部で検出した遺構である。東西に長い方形を呈し、約3.2m × 約2.7m、深さ約0.25mを測る。西辺はほぼ座標北を示す。土坑内は北西から北側に小児の頭大までの大振りな礫石を配し、内側は径20cm程度までの3段程度、ほぼ地山面まで積み上げていた。石の配置から最初に北側から掘形に沿って東西の辺の中央付近まで大型石を置き、その後内部に5.0cmから20cm程度までのやや小さな石を北側を中心に全体の4分の3程度まで敷き詰めていた。北側には石を取り除いたような痕もあり、隙間無く敷かれていたと考えられる。

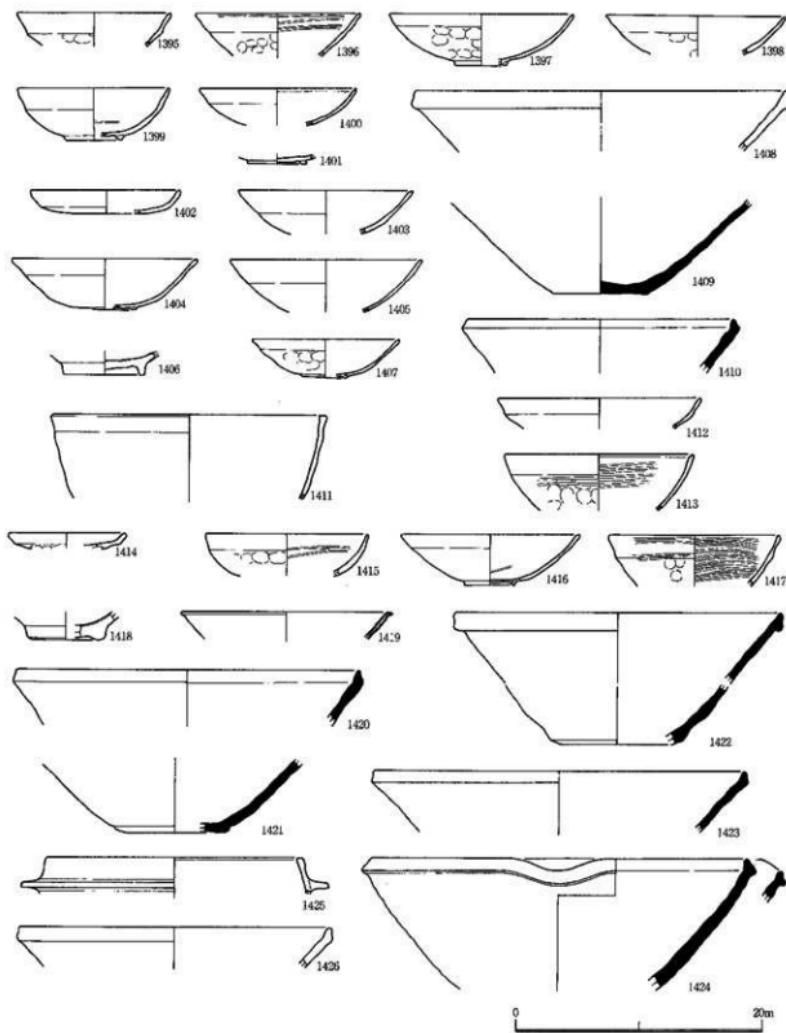
**K435土坑出土遺物** (第434図、図版39-3) 1480から1488は土師器小皿で、平らな底部から短く開いて立ち上がる口縁部をヨコナデしてつくる。1483は口縁部を強くヨコナデし外面が僅かに屈曲する。口径11.5cm、器高2.0cm。1486は口径13.0cm。1489から1513は瓦器楕。高台は形骸化し、断面が小さな三角形や細い粘土紐を貼りつけた程度の物が多い。体部外面は指オサエが残り、口縁部を1.5cmから2.5cm程度の幅でヨコナデする。1497、1499は体部外面に数条の細いミガキが観察される。内面は摩耗が進み、調整痕が不鮮明になったものが多いが、観察できる物は隙間の



第423図 K703柱穴遺物出土状況図



第424図 K1440柱穴遺物出土状況図



第425図 K地区柱穴出土遺物3

K101(1397) K1377(1398) K1361(1399) K1585(1400) K1440(1401~1405) K1343(1406) K1753(1407・1408)  
 K1060(1409・1410) K1400(1411) K144(1412) K1212(1413) K1758(1414) K1592(1415・1416) K1340(1416)  
 K589(1417) K216(1419) K52(1420) K1104(1421) K589(1422) K186(1423) K1186(1424) K215(1425) K1418(1426)

多い圓錐状にミガキで調整したものの多い。1489は見込みに梢円状の暗文がみられる。口径13.5cm、器高3.5cm。1519は甕の口縁部。1515は土釜で、内側する口縁部端部を丸くおさめ、肩口に短く開く鉗を付ける。形態から三足である。1516から1520は鉢。1440、1446、1447は東播系の物。口縁端部は僅かに外傾する面をつくる物と、上に摘んで上下に拡張させ、面をつくる物がある。1519は口縁端部を強く摘んで沈線を巡らせる。

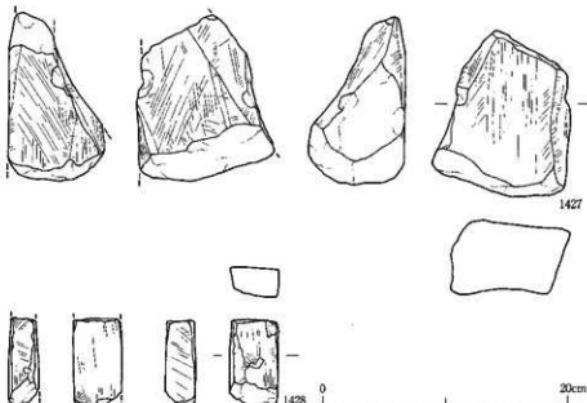
H340土坑 調査区の中央、「く」の字形に東に曲がった北側の東X=-129,382、Y=-38,275.5付近で検出した歪な梢円形の土坑で、長径約1.2m、短径約0.8m、深さは約0.2mを測る。埋土は主に褐灰色土であった。

H340土坑出土遺物（第433図、図版37-3） 1455は瓦器小皿で口縁部は強くヨコナデする。1456から1458は土師皿、1457は指オサエが残る。口径14.5cm、器高2.8cm。1459から1462、1468は瓦器椀。外面は指オサエが残り、内面のミガキの間隔は粗い。1462は外面の3分の1以上をヨコナデする。内面のミガキは圓錐状でやや粗い。高台は低く小さな三角形断面のものである。

H2107土坑出土遺物（第433図、図版38-6） H2107土坑はH地区の東部にある。1465から1467は土師器小皿。1469は白磁碗で、口縁端部を下に拡張させて面をつくる。高台から体部中程までは無釉である。

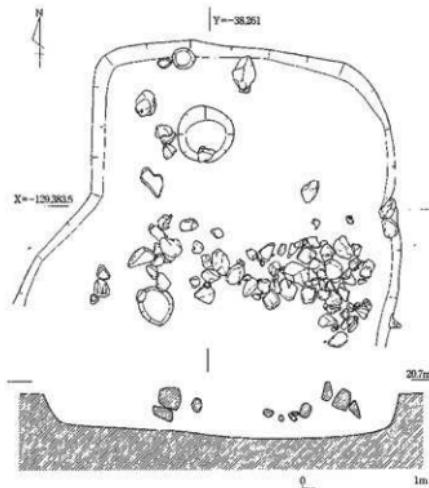
K441土坑（第435図） K地区の西部中央、X=-129,714、Y=-38,250付近で検出した梢円形の土坑である。長径約1.9m、短径約1.25m、深さ約0.85mを測る。東側の掘方はややなだらかであるが、他の3方向は鋭角に掘削されている。土坑内は拳大程度の角礫と多数の瓦器と鉢や甕の破片が投棄されていた。西端は検出面近くまで積み重なり、東に傾斜して堆積していた。東側は上の礫が疎らであり掘削時に除去したが、東端では掘削面から0.45m位の高さまで土器や礫が堆積していた。西から土器混じりの礫を投棄したと考えられる。また遺構底面には薄く褐灰色土が堆積していたので、掘削後しばらくしてから礫や上器が投入されたと考えられる。

K441土坑出土遺物（第436・437・439図、図版37-9） 1521から1528、1531、1532は土師器皿で、平らな底部から短く開いて立ち上がる口縁部を作り、底部に指オサエの残るものが多い。1521から1528は小皿で、1521は

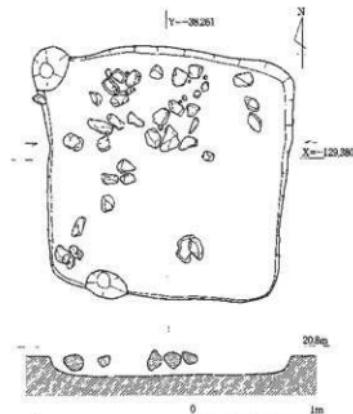


第426図 K1584柱穴出土遺物

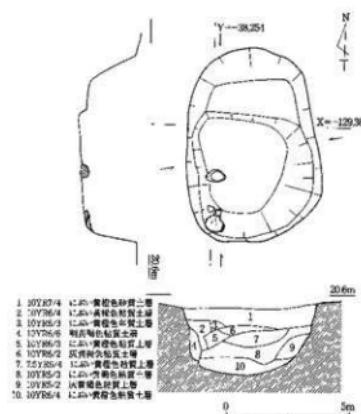
8.2cm。1531、1532は中皿で、1532は口径12.4cm。1529、1530は瓦器小皿で、1530は内面に細いミガキを数条施す。1533から1578、1592から1598は瓦器椀。高台は形骸化し、断面が小さな三角形状のものと、細い粘土紐を貼り付けた程度のものがある。1545、1546、1557、1558は底部が高台より低い。体部外面は指オサエで成形し、口縁から2.0cmから3.0cmの範囲をヨコナデしあげる。外面にミガキ調整のものは見られない。内面は粗く、隙間の多い圓線状や渦巻状のミガキを口縁近くまで施す。1540、1561は平行線状、1548、1554、1562は見込みに渦巻状の暗文を施す。1548は口径13.4cm、器高4.2cm、1576は口径13.8cm、器高3.4cm。1593は口径14cm、器高2.8cmで、浅い椀であるが、形骸化した高台が付く。1579から1581、1583は東播系の鉢。1579、1583は斜めに開く体部から口縁部は垂直の面をもつ。1581は口縁部を擒んで拡張し、外面は回線状に強いナデで仕上げる。1582、1586から1589は甕。1582は短く立ち上がる頸部から大きく外反する口縁の端部を上に拡張する。1586、1588は口縁端部を上下に拡張して面を造る。1587は土師器の甕で外反する口縁端部をわずかに上に拡



第427図 K384土坑平面・断面図



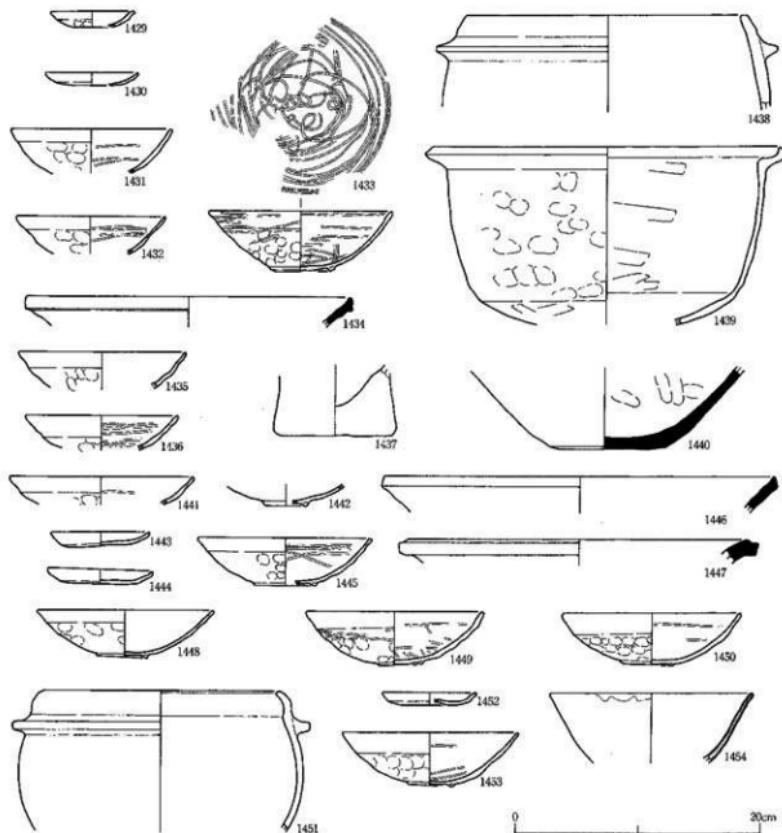
第428図 K382土坑平面・断面図



第429図 K1627土坑平面・断面図

張して小さな面を造る。1591の口縁は大きく外反し、端部は内傾して上下に拡張する。口径37.0 cm。1584、1585は土釜、水平に開く鉢から内巻して立ち上がる口縁部を造る。1584は口縁端部を丸く仕上げ、1585は内傾する面を作る。1590は三足釜で口縁部に短い鉢が付く。1600から1602は青磁で、連弁文や鋸連弁文の碗である。

**K504土坑（第438図）** K地区の中央で検出した「L」字形の浅い石敷土坑である。大きさは長辺で東西約1.7m、南北約1.9m、深さ約0.1mを測る。石敷は土坑の東北部に約0.5m×約1.3mの長方形形状に拳大程度の角礫や川原石を配している。土坑の埋土は褐灰色土である。



第430図 K地区土坑出土遺物 1

K382(1429~1432・1434) K369(1433) K751(1435・1436) K1660(1437) K502(1438) K570(1439) K625(1440)  
K1461(1441・1442・1446) K384(1443・1445) K501(1447) K1627(1448~1451) K1691(1452・1454) K1626(1453)

### K504土坑出土遺物 (第439図)

1616は白磁の合子で、体部外  
面は幅0.8cm程度に細かく面取  
りする。口径5.0cm、器高2.0cm。  
1618は土壙の口縁部で内面は細  
かいハケメ調整。1621は須恵器  
の底部である。

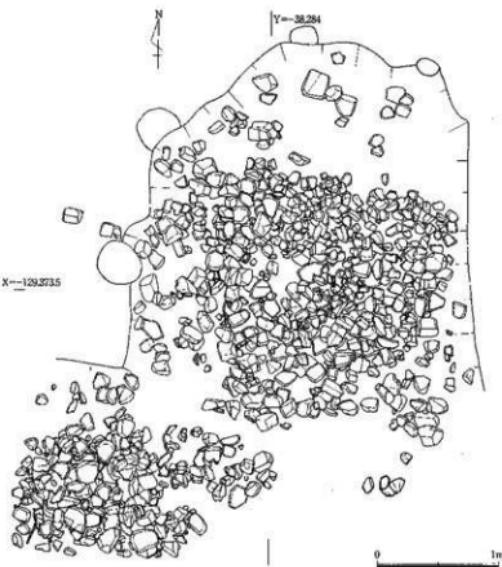
### K1469土坑 (第440図) H地

区に近い西北部で検出した楕円 X-129.2735

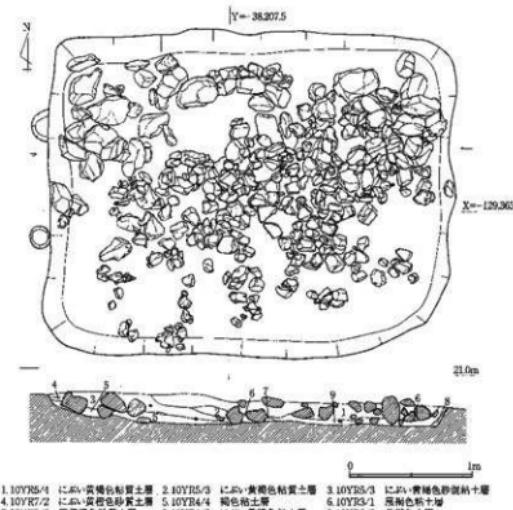
形に近い形状の土坑で、長径約  
2.0m、短径約1.15m、深さ0.3  
mを測る。土坑内には川原石や  
角礫が投棄されていたが、石敷  
き造構ほど密な状態ではなく、  
土坑西側から南側肩口に多く、  
東北側は少ない。

### K1469土坑出土遺物 (第442

図、図版39-1) 1624、1625  
は土師器小皿。1626から1639は  
瓦器椀である。高台は低く小さ  
な逆台形を呈するものが多い。  
口縁端部は丸く收める物と僅か  
に外反させて丸く收める1634か  
ら1636がある。体部外面は指才  
サエやヨコナデの上に幅2mm程  
度の細いミガキを粗く施す。内  
面は圓線状のミガキを施すが、  
1626、1632のようにやや密な物  
と1630、1633のように粗く隙間  
の多いものがある。1627は口径  
14.2cm、器高5.0cm。この造構  
は瓦器の特徴から他の造構より  
古く12世紀後半頃のもの。



第431図 K400土坑平面図

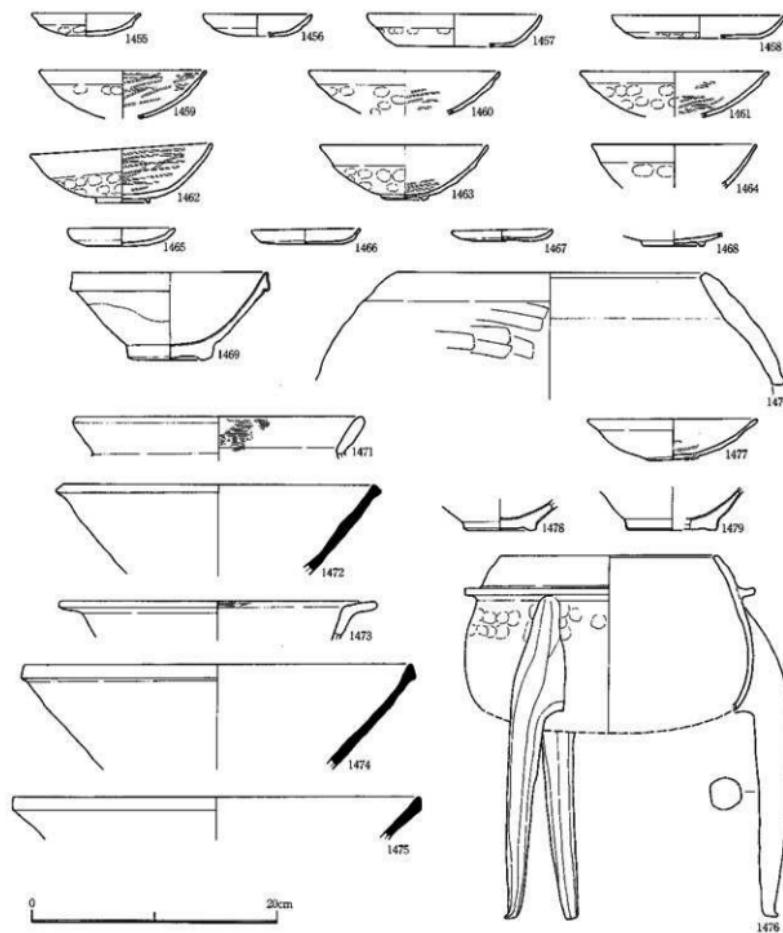


### K1672土坑 (第444図) 楕円

第432図 K435土坑平面・断面図

形の土坑にピットが重なった遺構である。土坑は東西0.8m以上、南北約0.6m、深さ約0.2mの  
楕円形で、後に径約0.4mの円形ピットと、約0.4m×約0.6mの楕円形ピットが掘削されている。  
土坑内から瓦器碗片が出土している。

K1400土坑出土遺物（第445図）調査区東端近くのX=-129,353、Y=-38,214付近で検出した  
約1.1m×約0.75m、深さ約0.2mを測る方形の土坑である。1640、1641は瓦器碗。体部外面は  
指オサエ、口縁部はヨコナデ、内面は間隔の粗い幅細のヘラミガキである。1642から1644は白磁

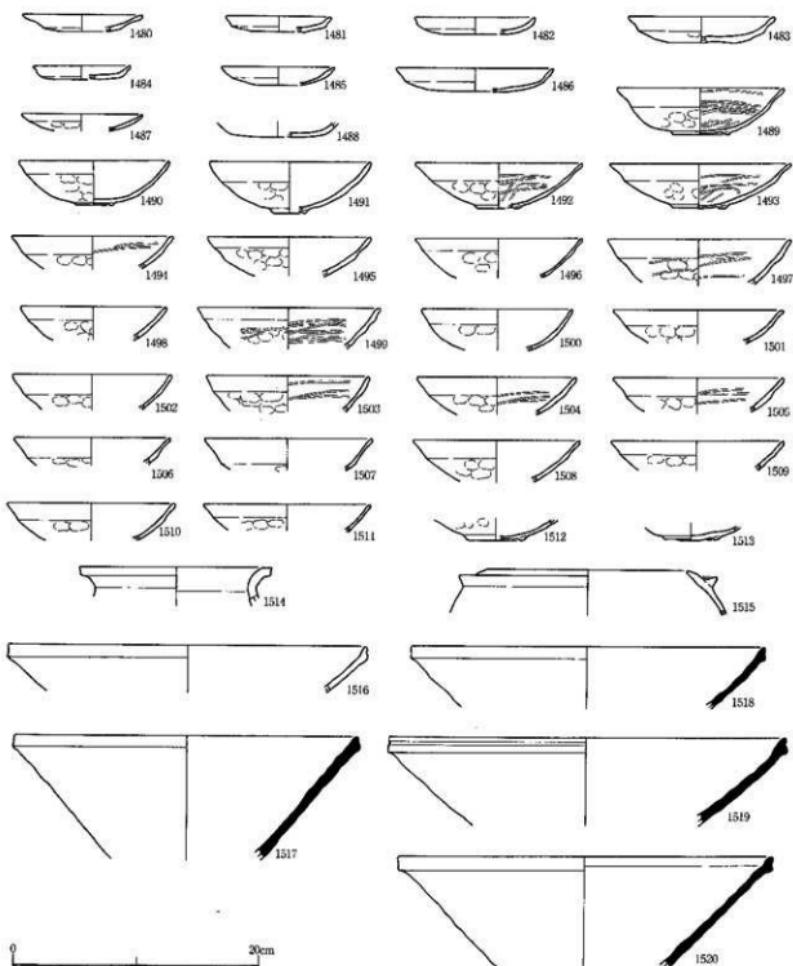


第433図 H地区土坑出土遺物

H340(1455~1462・1468) H2107(1465~1467・1469) H105(1470) H400(1471~1479)

碗。1642は口縁端部を折り曲げて、1644は外面を肥厚させて玉縁をつくる。1645は土師器甕の口縁部。1646、1647は東播系の片口鉢で、1647は口径36.5cmを測る。

K1632・K1626土坑出土遺物（第446図、図版39－4） 1648は瓦器皿で、内面を細いヘラミガキで仕上げる。1649から1652は土師器皿で、底部は指オサエ、口縁部はヨコナデでしあげる。1651は口径8.8cm。1653から1657、1659は瓦器椀。内彎して立ち上がる体部に小さな三角形状の高台



第434図 K435土坑出土遺物

を付ける。体部外面は指オサエ、口縁部は幅広くヨコナデする。内面は細い原体で粗く圓線状のヘラミガキを施す。1658は甕の口縁部、1668は須恵器で壺の底部。

#### e. 井戸

**K621井戸** (第447図) 東西水路の南約10m、X = -129,351、Y = -38,244付近で検出した直径約1.2mを測る歪な円形を呈する素掘り井戸である。円筒状にほぼ垂直に掘られ、深さは1.0m以上を測る。埋土は黄橙色粘土や褐灰色粘土で埋土中に拳大の礫を多く含んでいる。土砂が自然に流入堆積して廃棄されたと考えられる。

**K621井戸出土遺物** (第448図) 1661から1665は瓦器楌で、高台は粘土紐を貼り付けた程度に形骸化している。体部内面は細い原体で粗く圓線状にヘラミガキするものと、ミガキが観察できない物がある。1667は甕の口縁部である。

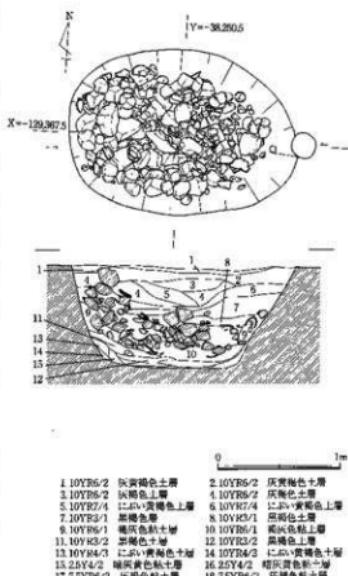
**K1332井戸** (第448図) K地区中央の東西水路の南側、X = -129,353、Y = -38,234付近で検出した素掘り井戸で、南に広い歪な円形を呈し、直径は約2.1mを測る。主に褐灰色土が堆積していたが、断面が崩壊し土層図を作成することはできなかった。1666は肩部に把手が付く壺の破片である。

**K370井戸** (第447図) K地区中央、K441土坑の南東で検出した素掘り井戸である。歪な円形を呈し、直径2mを測る。危険なため1m以上は掘削しなかったが、断面形は擂鉢から円筒状でほぼ垂直に掘られている。埋土は黄色粘土や黄橙色粘土、褐色粘土等で、検出面まで埋積が進んだ後、浅く再掘削された可能性がある。瓦器楌や土師器皿、須恵器鉢などが出土している。

**K370井戸出土遺物** (第449図) 1668から1675は土師器皿、1676から1681は土師器の中皿である。

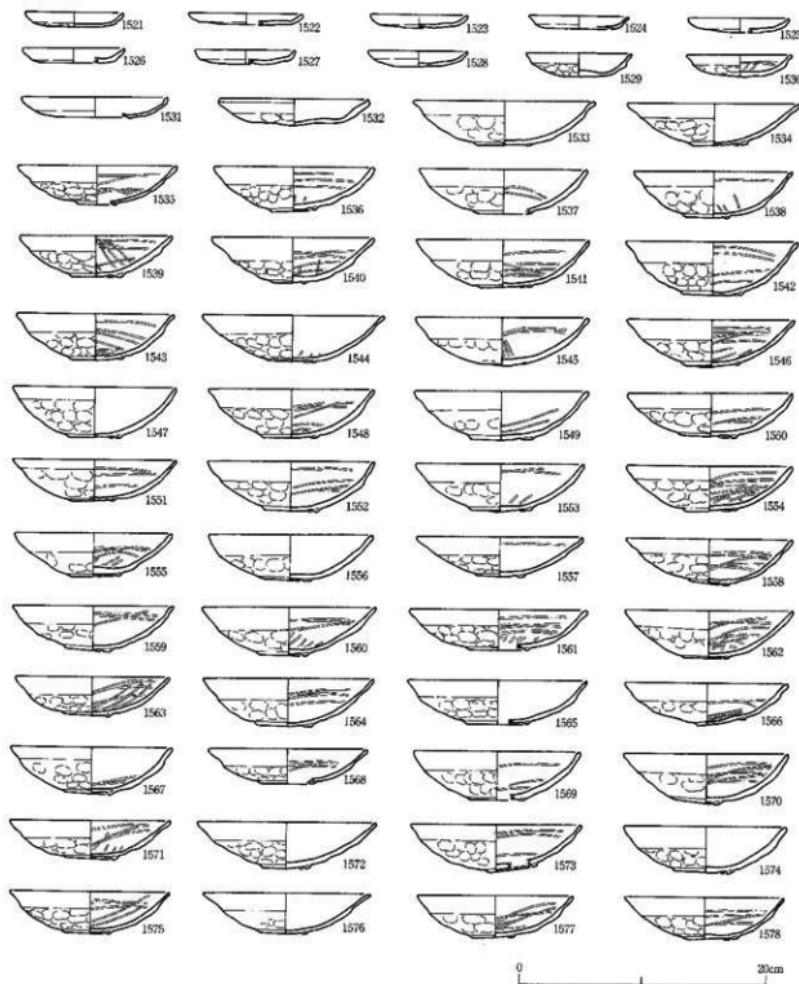
口縁は内彎して立ち上がるものが多いため、1677は器壁が薄く、斜めに短く開いて立ち上がる。1680から1702は瓦器楌。体部外面は指オサエ、口縁部は1.0cmから3.0cm程度ヨコナデで仕上げる。内面は圓線状のミガキのち底部から放射状や渦巻き状ミガキを施す物と、粗い圓線状ミガキのみのものがある。高台は小さく歪な三角形か、細い粘土紐を貼った程度の形骸化したものが多い。1686は口径13.5cm、器高4.7cm、1763から1706は東播系の鉢、1703、1706は口縁部を僅かに外反させたのち上に摘まんで拡張させ、強くナデで仕上げる。1707は瓦質で、鋤の形状から三足釜で、短く広がる鋤から内彎して立ち上がる口縁部をつける。

**H1000井戸** (第447図) H地区の北部、柱穴が集中する



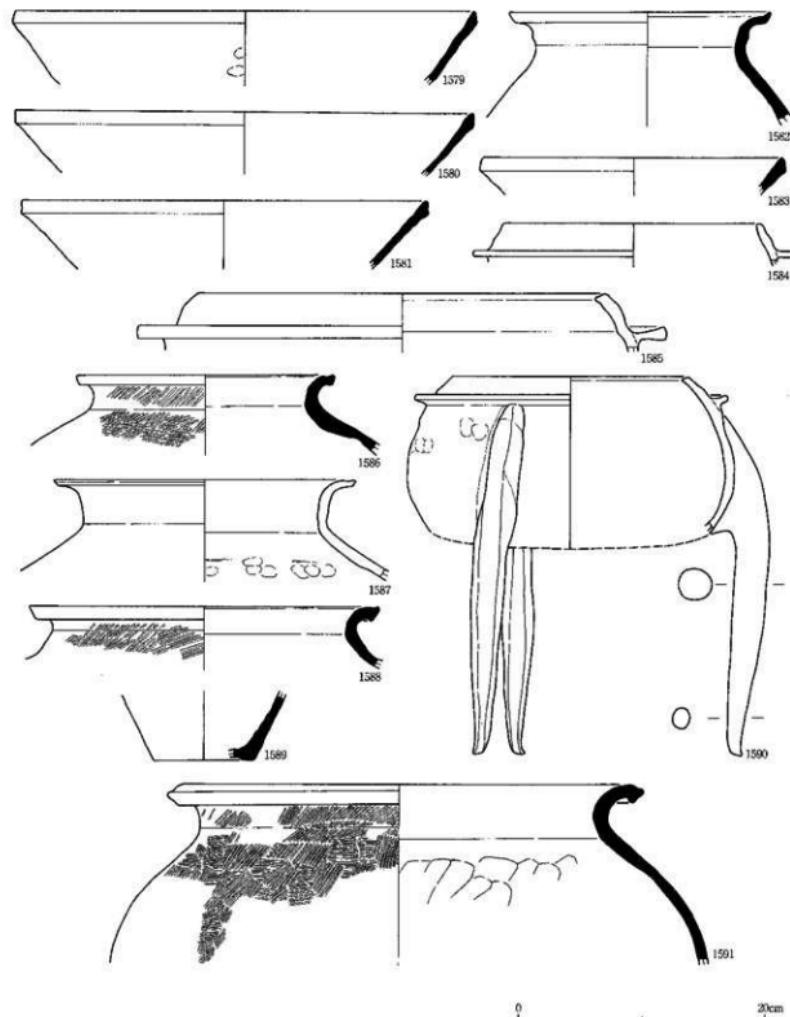
第435図 K441土坑平面・断面図

X = -129,365、Y = -38,278付近で検出した井戸で、平面形は長径約1.5m、短径約1.3mを測る南北に長い垂な楕円形を呈する。掘方は段を造って深くなつており、深さ約0.7mまで掘削した。検出面から約0.5m付近までは川原石や角礫、須恵器壺や土器を投入して埋められており、泥土や砂が礫の隙間に流れ込んだような状況であった。建物が密集する区域内にあり、廃棄後の危険を考えて川原石や角礫で埋めたのであろう。



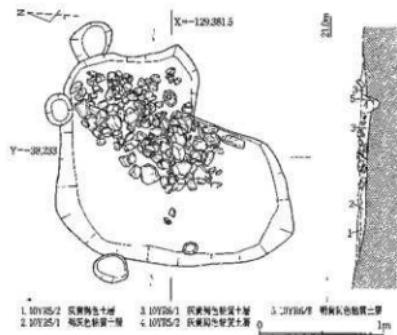
第436図 K441土坑出土遺物 1

H1000井戸出土遺物（第450～452図、図版37～7） 1708から1718は土師器皿。小皿は口縁部が僅かに立ち上がるだけの浅いものが多い。1714から1718は中皿で、口縁部はヨコナデで仕上げるが、外反気味に立ち上がるものと内彎気味に立ち上がるものがある。1719から1725は瓦器椀。全体に摩耗が進み、器壁の調整観察が困難な物が多いが、体部は直線的に立ち上がり、外面に指

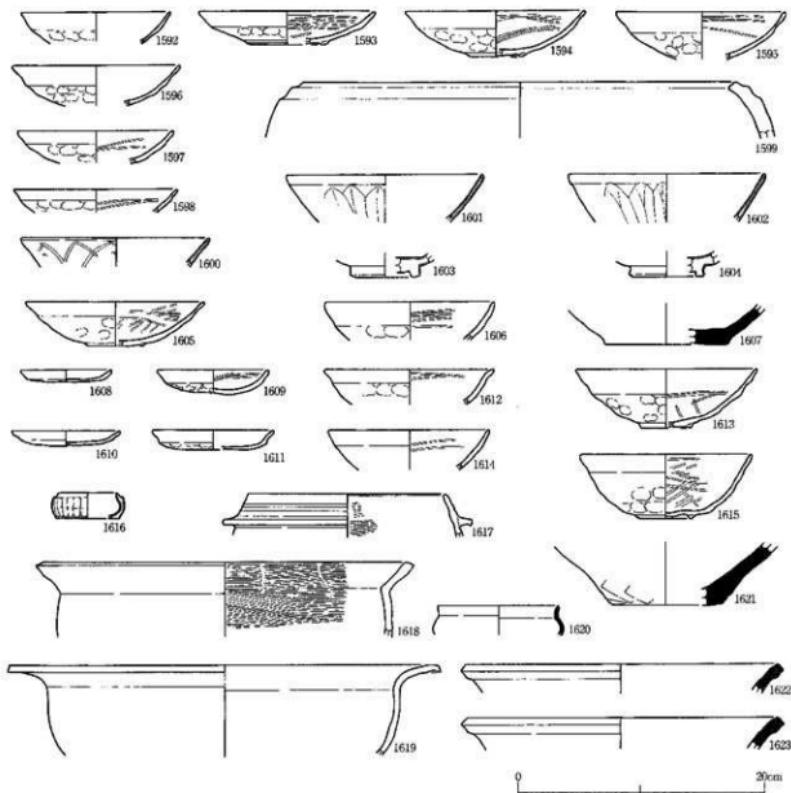


第437図 K441土坑出土遺物2

オサエの残るものが多い、1719は体部の2分の1近くまでヨコナデ調整する。内面は細い原体で粗い圓線や渦巻き状にミガキ調整するものが多い。1726は白磁碗の口縁部、1727は白磁の高台で外面は無釉である。1733は須恵器壺の体部片で、耳がつく。1728から1732は土鍋で、1728から1732は球形の体部から、口縁部を「く」字形に外反させ、器壁を体部より肥厚させ、口縁端部を丸めて仕上げる。内面は横ハケ、外面は上下方向のハケで調整する。1734から1737は直



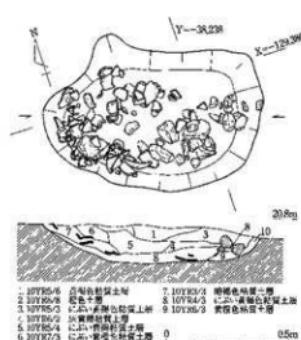
第438図 K504土坑平面・断面図



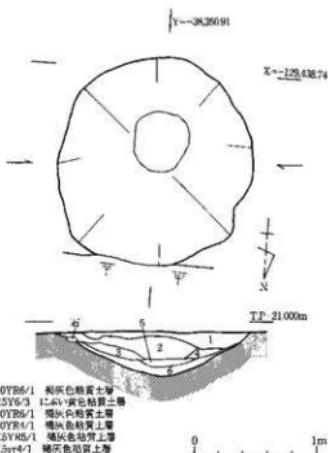
第439図 K地区土坑出土遺物2

K441(1601~1613) K15(1614~1616) K260(1617) K453(1618・1621・1622) K1513(1619・1620)  
K786(1623) K1168(1624) K504(1625・1627・1630) K1154(1626) K1569(1628・1629・1631)

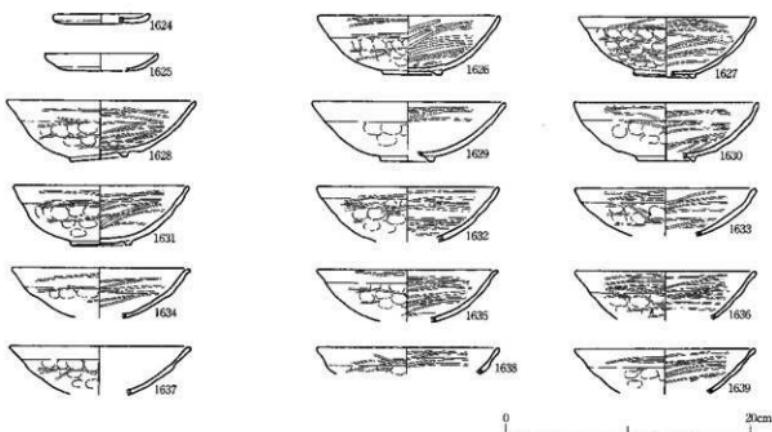
立する体部に受け口状の口縁部を有する土錐である。1735は体部内面に横ハケが残る。1738から1750は土釜である。水平に短く開く鋤から直立する口縁をもつ1741、1746、1749、1750は端部が水平な面をつくる。1740、1742、1745は口縁部にあまい段をつくる。1751から1766は鉢である。口縁端部は、僅かに擴んで拡張させるものが多いが、断面が玉環状になる1762や三角形状に



第440図 K1469土坑平面・断面図



第441図 G761土坑平面・断面図

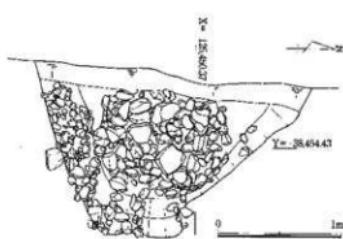


第442図 K1469土坑出土遺物

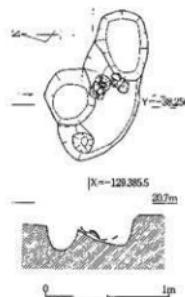
つくる1758、1765、僅かに外反して上に拡張させ、断面を三角形状に拡張させる1752、1756、1758、1766、口縁端部に外傾する面をつくる1755、1764がある。

#### f. 溝(付図5)

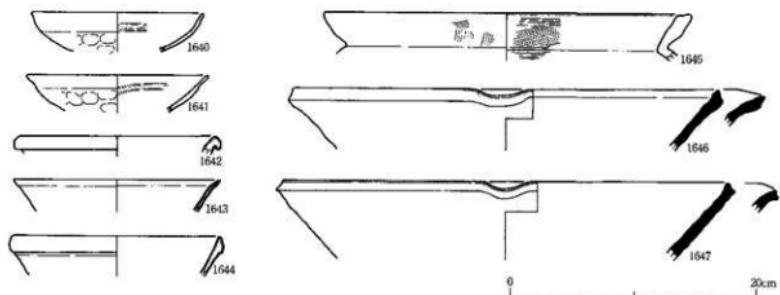
**概要** H・I・K調査区では大小多数の溝を検出した。古代の溝としてはK地区北部で検出したK1650溝がある。古墳時代後期のもので、K1700掘立柱建物と同時期のものであろう。また、



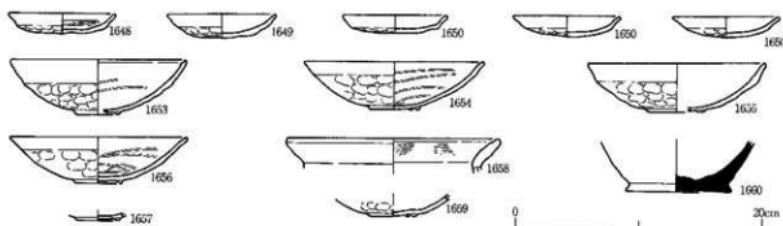
第443図 J4478土坑平面図



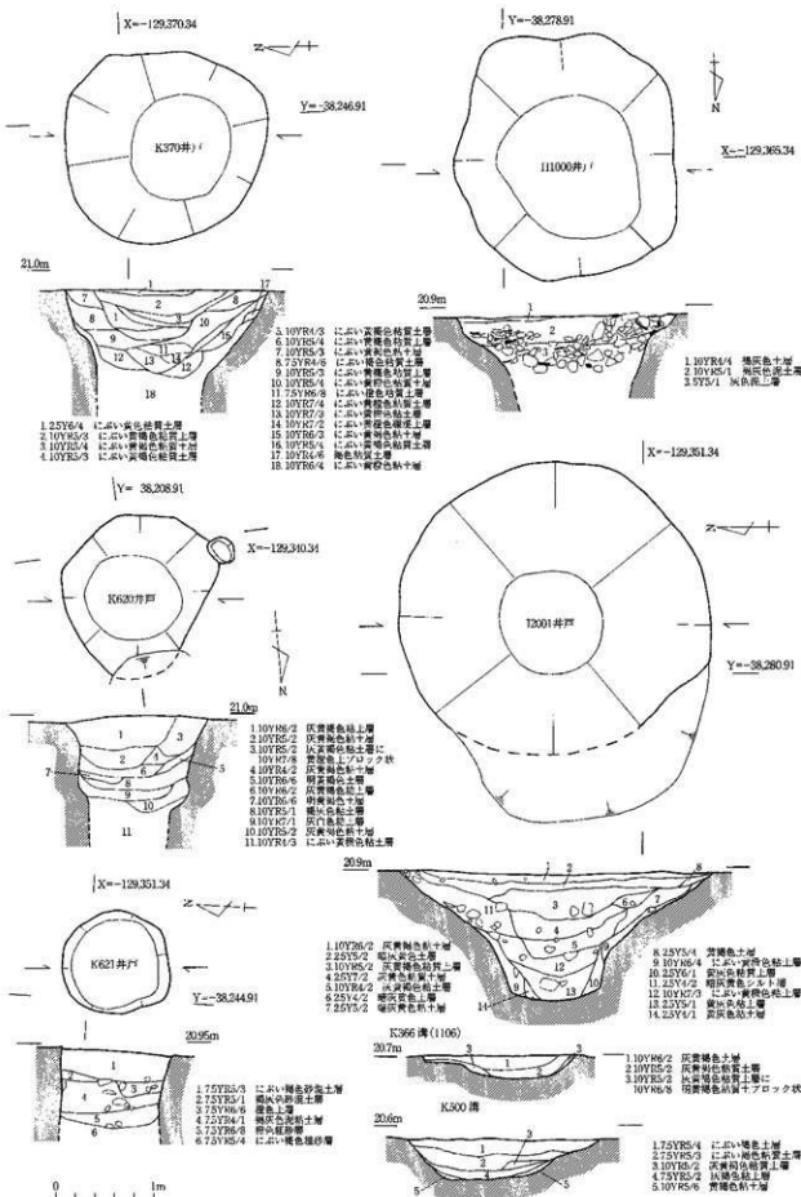
第444図 K1672土坑平面・断面図



第445図 K1400土坑出土遺物



第446図 K地区土坑出土遺物3 K1632(1648~1656・1658・1660) K1626(1657・1659)



第447図 H・I・K地区構造平面・断面図

K地区北部で検出したK1669溝、K1673溝は北西方向に幅約2.7mで平行している。検出長は約20mであったが、道の側溝と考えられる。中世のH5（K500）溝は集落居住域の南を限る溝である。集落内の屋敷地を区画する溝としてはH121溝、K424溝、K426溝が考えられる。K511、K525、K632溝も幅0.3m前後で、雨落ち溝程度の規模であるが、小規模な家地を区画する溝であろう。

H5溝（第453図） H地区南部で検出した大溝で、K調査区のK500溝に繋がる。H地区では幅が5.5mから10.0mに池状に広がる。深さは0.3mから0.5mを測る。

1767、1772は瓦器椀で、高台は形骸化した段階の物。全体に摩耗が進み、調整は不明。  
1768、1770は白磁碗、1770は玉縁のもの。

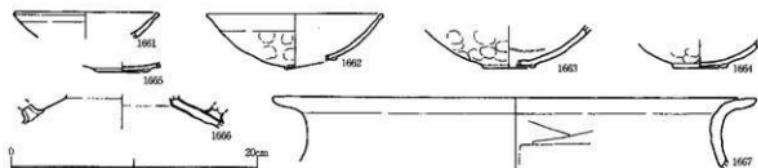
H125溝（第453図） H地区が「く」の字に曲がる南側で検出した、最大幅3.0m、深さ約0.1mを測る浅い溝で、H121溝に繋がるが、K地区では検出できなかった。長さ約8mの浅い溝である。埋土は主に褐色灰色土であった。

1771、1773、1778は瓦器椀で、1774は内面に圓線状のヘラミガキする。1780、1781は須恵器の鉢で、内面は不規則なナデで調整する。1782は土師質の鉢。

H121溝（第416・453図） H地区の西部を南北に流れる幅約1.0m、深さ約0.3m前後を測る溝である。南はH5溝に流入する。北のI地区では検出されなかったので、H地区北の道路内で途切れ。集落の屋敷地を区画する性格の溝と考えられる。主に褐色灰色土が堆積して平坦化した後に柱穴がつくられるが、遺物に時期差は認められない。

1779、1783、1784は瓦器椀。高台は形骸化し、体部は僅かに内彎して立ち上がるものと直線的に浅く立ち上がるものがある。外面は指オサエ、口縁部は2.0cmから3.0cmの範囲をヨコナデする。内面は粗い圓線状のミガキでしあげる。1782、1786は土師質の鉢で、1786は口縁端部を僅かに上に拡張させて仕上げる。1785、1786は土鍋で口縁を水平近くまで折り曲げて肥厚させる。内外面ともハケメで器壁を整える。1788、1789は土釜で、1788は直に立ち上がる口縁部のもの、1789は体部を内彎させて半球形につくる。

K454溝（第416・第454図） 調査区中央を東西に走る溝で、西はK424溝・K426溝に繋がる。検出場所が道路部分にあたり、しばらく道路を残していたため、別番号を付した。溝は約1.2m、深さ約0.15mを測り、断面はU字形を示す。K424溝とK426溝はY=-37,990付近で重なっているが断面では前後関係を確認できなかった。



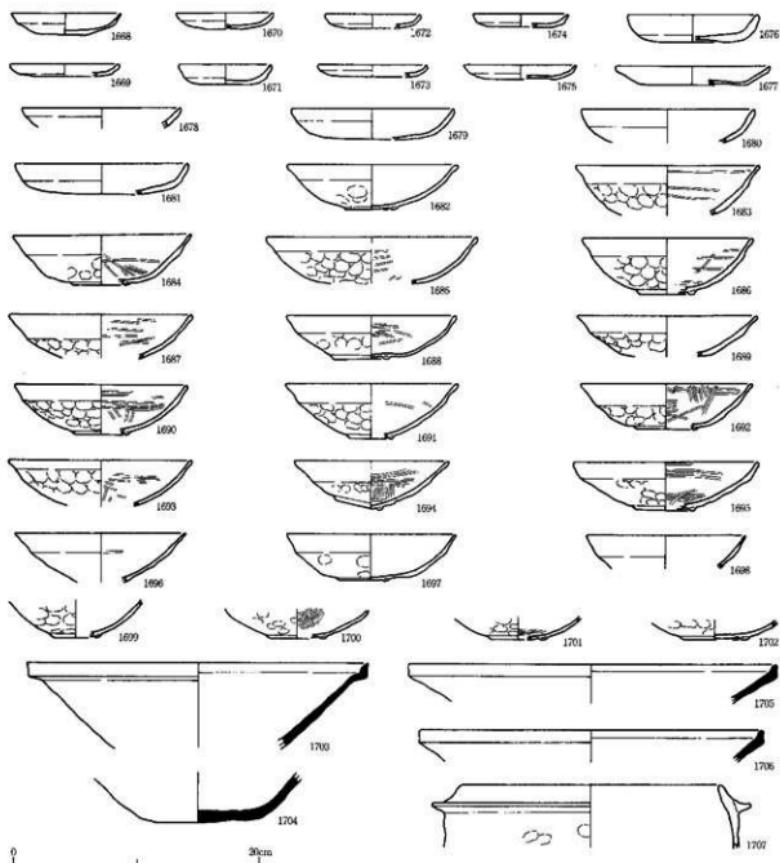
第448図 K621・K1332井戸出土遺物

1790は土師器小皿、1791は瓦器椀、1792は東播系の鉢で、鎌倉時代中期のもの。

K500溝（第416・454図）K地区南部で検出した幅2.0mから3.5m、深さ0.3mから0.5mを測る東西溝で、調査区西部で2つに分かれ、H地区(H5溝)では幅が5m以上に広がる。K地区東部ではこの溝の南側に遺構が無いことから集落の南限を画する施設である。

1793から1796は瓦器椀で、器高が低く、高台も形骸化した時期のもの。器壁が摩耗している。1799は鍋の口縁部。1797、1798は須恵器甕の底部、1800は白磁の高台である。

H366溝（第416・454図）K地区西端近く、K1106溝の西側肩部に浅く掘削された溝で、深さは約0.05mを測る。



第449図 K370井戸出土遺物

1801は土師器小皿、1802から1806、1808、1809は瓦器椀である。高台は正な半円形で、椀底部が僅かに浮く程度である。体部外面は指オサエ、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は疎らな圓線状ミガキがみられる。1807は白磁の小碗で、体部は丸みをもち、口縁端部は僅かに外反する。

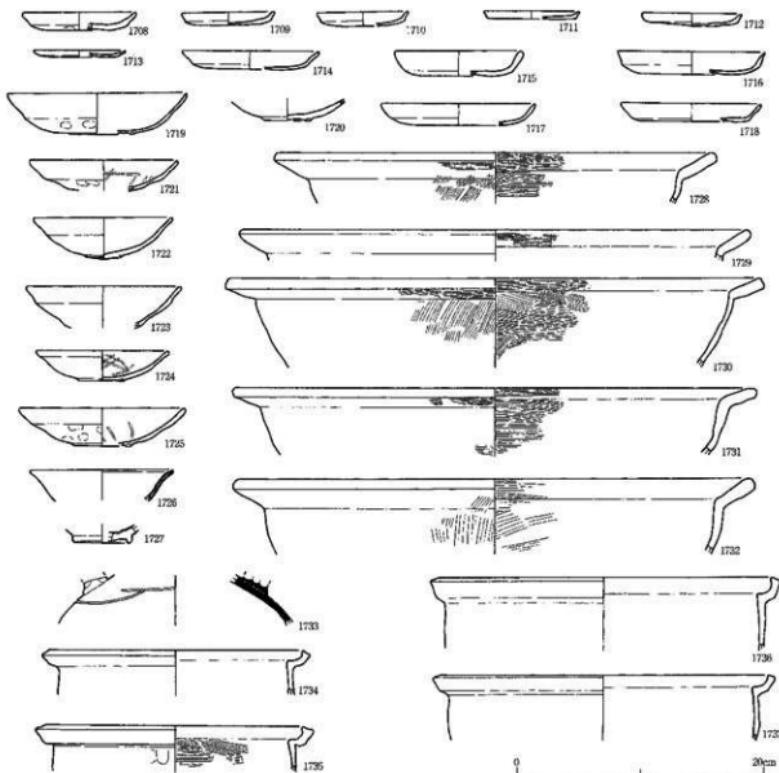
K1106溝（第416・454図）K地区西端近くで検出した南北溝で幅は0.7mから1.0m、深さ約0.2mを測る。

1818は白磁長頸壺の口頸部。口縁端部を折り曲げて仕上げる。

K425溝（第416・454図）Y=-38.255付近にあるK424溝から南に掘られた溝で、幅約0.2m、長さ約2.5m、深さ約0.05mの小溝である。1814の瓦器が出土した。

K365溝（第416・454図）Y=-38.269付近で検出した幅2.5mから4.0m、深さ約0.05mの浅い南北溝で、H地区では確認できなかった。

1811は土師器小皿、1815は瓦器椀で、外面にやや密なミガキを施す12世紀中頃のもの。1816は

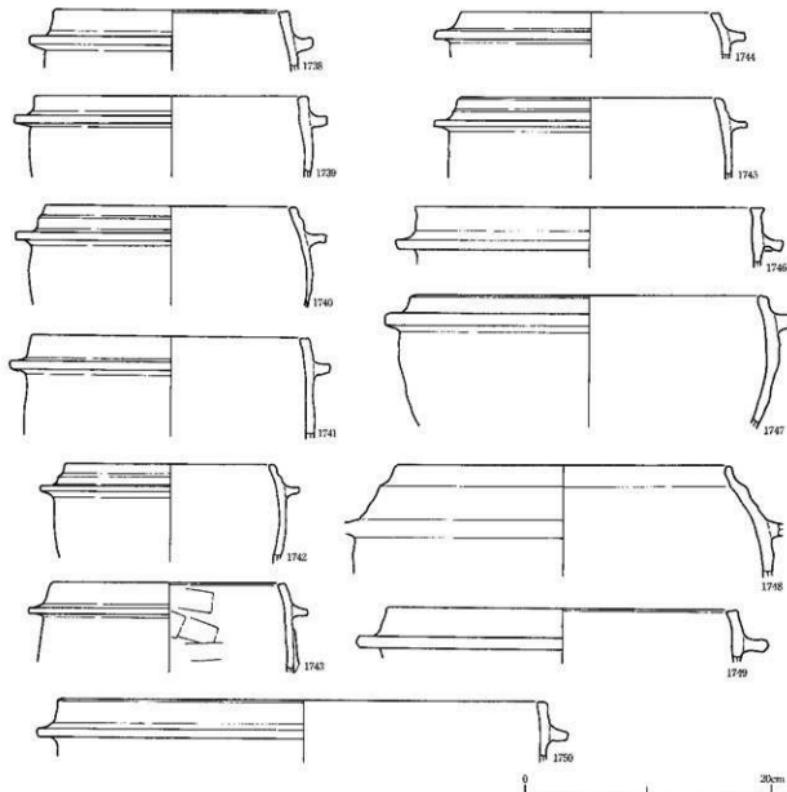


第450図 H1000井戸出土遺物1

土師器土堀である。

K426溝（第416・456図、図版39-3） K426溝はK調査区西部の遺構が群在するX=-129,377付近で検出した東西溝である。東部は擾乱で寸断されていたので、K454の番号を付した。H地区のH540溝に対応する。幅は肩が崩れたのか一定しないが、1.0mから2.7m、深さ0.2mから0.4m前後を測る。1812、1813は土師器小皿。1812は分厚い底部の皿で、口径10.0cm、器高2.8cm。

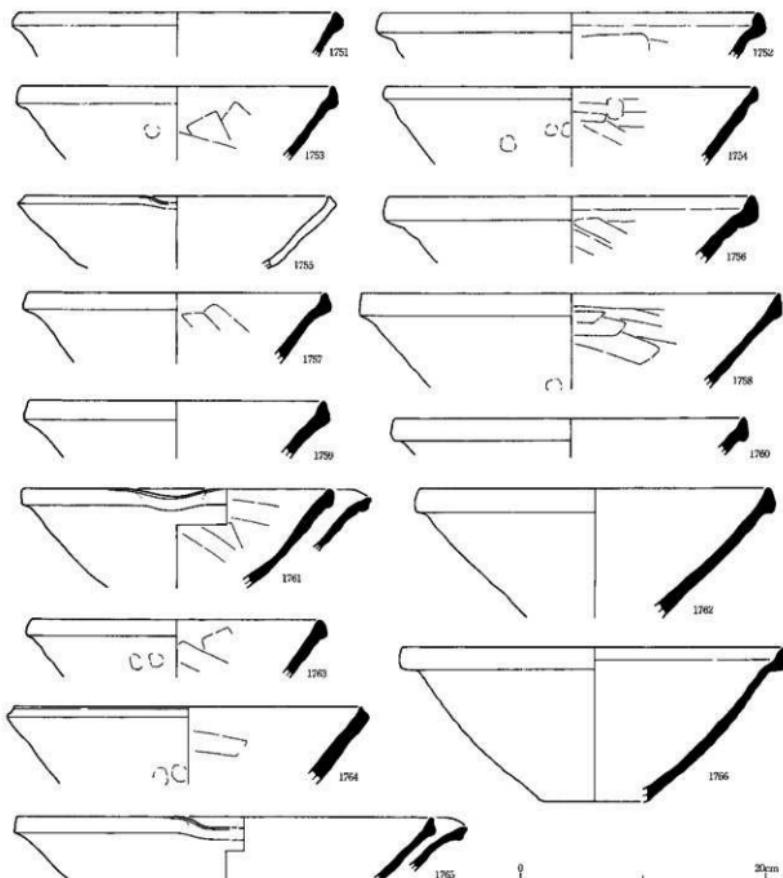
K424溝（第416図・455図） K426溝の南側にほぼ並行して掘削された溝で、K426溝より古いと考えられる。東のK454溝、H387溝に対応する。幅は中央で南肩が崩れ大きく広がっているが、本来は1.0mから1.5m、深さは0.2m程度であったと考えられる。Y=-38,249.5付近の南肩部で瓦器碗と瓦器皿が重なって出土した。後述のK511溝と同じような出土状況であり、地鎮等に関わ



第451図 H1000井戸出土遺物2

る祭祀が行われたのであろう。

K424溝出土遺物（第456図、図版39-2） 1819から1821は瓦器皿、内面に幅1mm程度の細い原体で密にヘラミガキする。1822から1841は瓦器椀、1824、1825、1828、1839は外面の体部や口縁部に指オサエやヨコナデのち疎なヘラミガキを施すもの。内面は見込みに平行線の暗文を付ける1828、1839と渦巻き状にヘラミガキする1826、1838がある。内面は疎な圓線状のミガキを口縁端部まで巡らせる。高台は断面が小さな台形や三角形状を呈する。1832から1838、1840、1841は外面のミガキが無くなる。高台は断面が重んだ三角形を呈し、器高も低い。内面は疎な圓線状ミ



第452図 H1000井戸出土遺物3

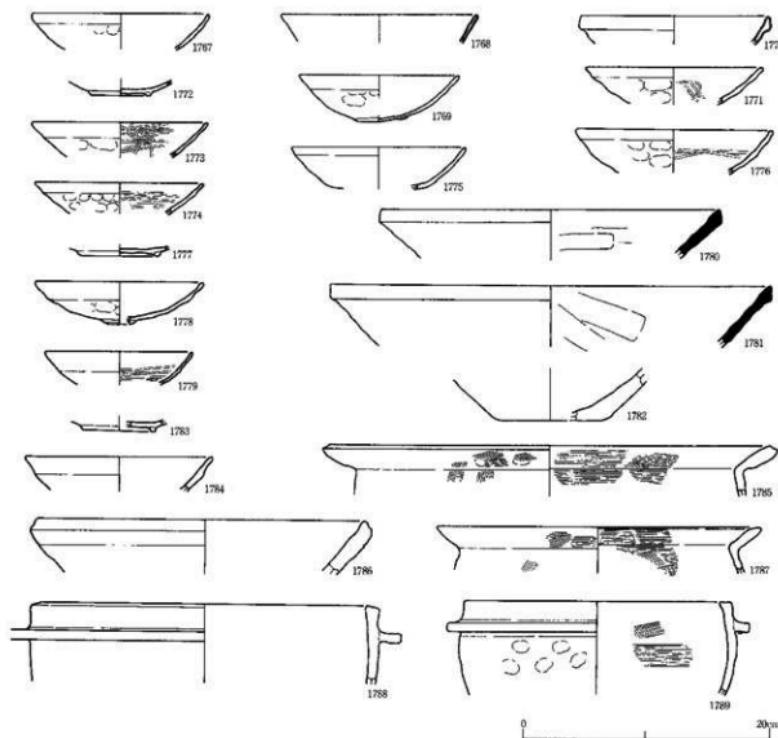
ガキを口縁部まで回す。

K700溝（第416・458図）Y=-38,246付近で検出したK424溝の一部で、周囲が攪乱されていたため、番号を付した。幅約0.5m、深さ0.1m前後を測る。1842の杯は奈良時代のものが混入したものであろう。

K416溝（第416・458図）K384集石土坑の東約3.0mにある南北溝で、北はK424溝に繋がる。幅は0.6mから1.0m、深さ0.1m前後を測る。住宅建設時に地山が削平されたX=-129,386より南では検出できなかった。1843は瓦器で、全体に摩耗が進んでいる。

K483溝（第416・458図）K426溝からY=-38,246付近で北に掘られた溝で、幅約0.2m、深さ約0.1m、長さは約3.0mであった。1844の瓦器窓が出土した。

K364溝（第416・458図）K地区西端、X=-129,384、Y=-38,272付近で検出した方形に曲



第453図 H地区溝出土遺物

H5(1767-1770-1772) H125(1771-1773-1778-1780-1781) H121(1779-1782-1787)

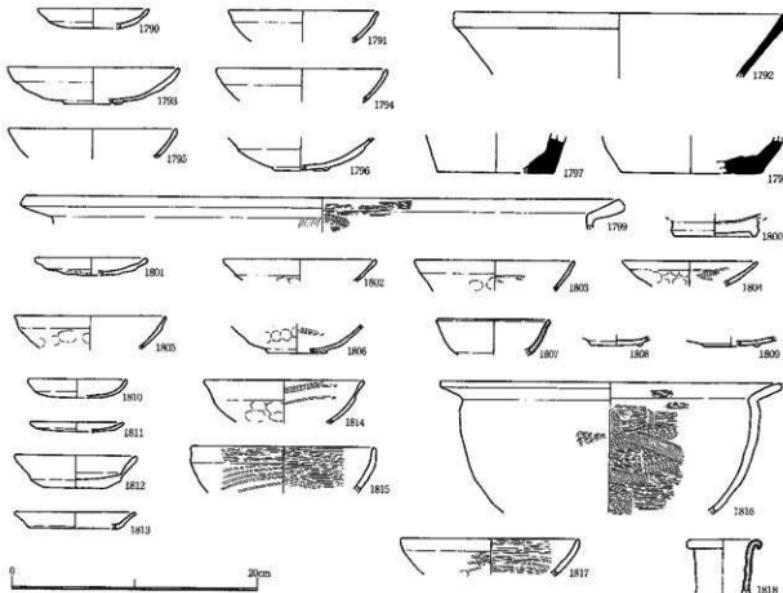
がる小溝で、幅0.3m、深さ0.1m前後を測る。1845の瓦器碗が出土している。

K511・K525溝（第416・458図） K地区中央のX=-129,390、Y=-38,235付近から北に延びる幅0.3mから0.5m、深さ約0.1mの小溝である。東側のK632溝と繋がり、X=-129,380付近で西に枠形に広がり、南北約20m、幅約8mの規模の区画をつくる。建物の周囲に掘られた雨落ち溝に近い溝で、1・2棟の建物で形成される小規模な屋敷の区画溝であろう。

K511・K525溝出土遺物（第458図、図版39-5） K511溝北東のコーナー部から小皿や瓦器碗が重ねられた状態で出土した。1846から1849は土師器小皿。1850から1860は瓦器碗である。高台は小さな台形か三角形である。見込みには平行線の暗文、体部内面は細い圓線状のミガキを粗く巡らせる。何らかの祭祀の後一括して据え置かれたものであろう。

K1300溝（第416・459図） K地区中央の東西水路の南側で検出した幅約2.5m、深さ約0.3mの北西から南東に掘られた約20mの短い溝である。古墳時代後期と中世の土器が出土している。

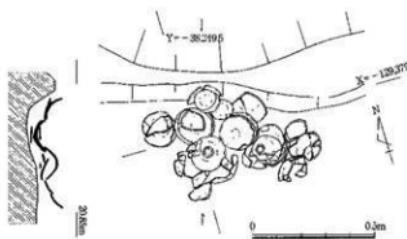
K1650溝（第416・459図）は調査区北東部で検出した溝で、幅1.0mから2.2m、深さ0.3mから0.5mを測る。東西水路より南側では確認できない。1872の須恵器杯蓋、1874の須恵器杯身など7世紀前葉の遺物が出土している。



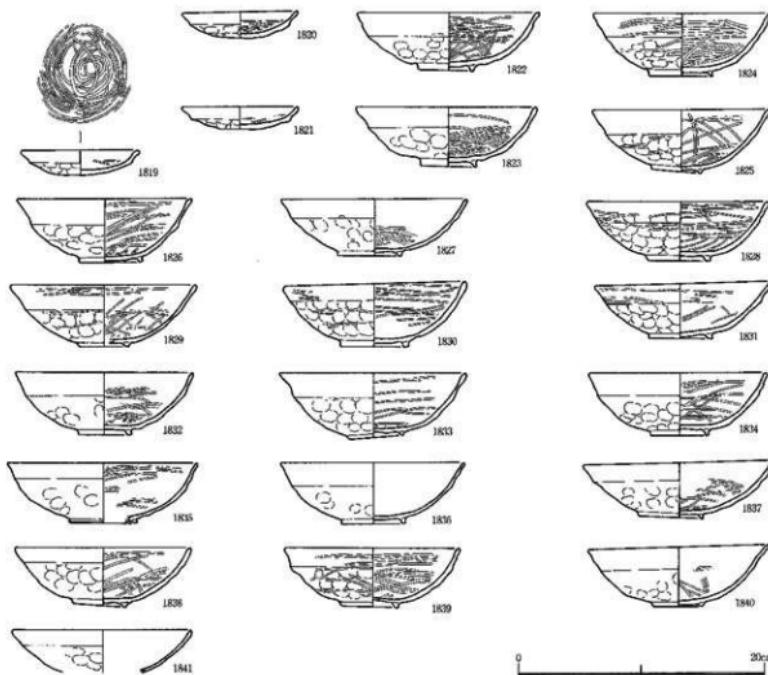
第454図 K地区溝出土遺物

K454(1790-1792) K500(1793-1800) K366(1801-1809) K365(1810-1811-1815-1816)

K425(1814) K426(1812-1813-1817) K1106(1818)



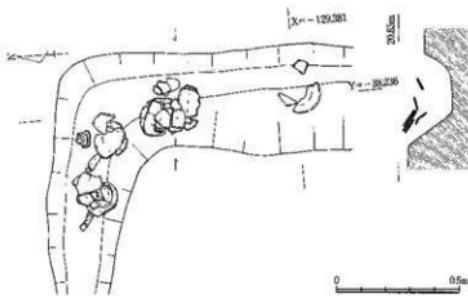
第455図 K424溝遺物出土状況図



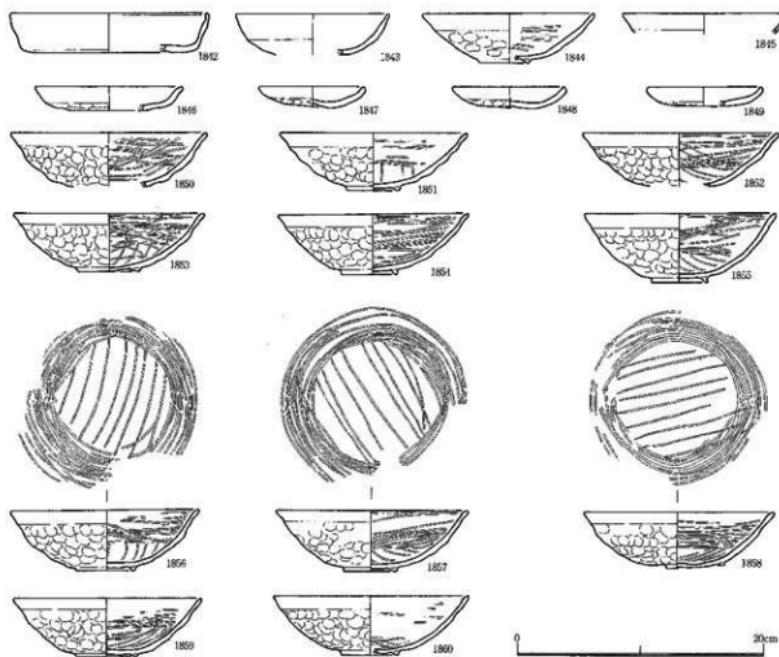
第456図 K424溝出土遺物

K1666溝（第416・459図）K地区北東部で検出した住居12の東部に重なる北北西から南南東に掘られた小溝である。この地域の条里地割には一致しないが耕作溝であろう。12世紀末頃の瓦器碗1863が出土した。

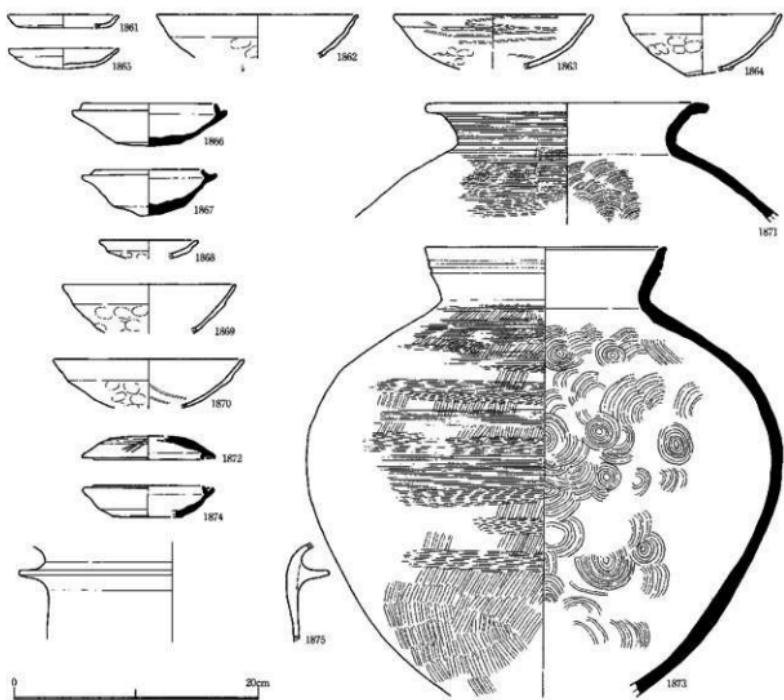
K1079溝（第416・459図）K地区西端、Y = -38,268付近で検出した幅0.2mから0.4m、深さ0.05mから0.1mの南北溝である。1864は瓦器碗で、13世紀前半から中頃のものである。（阿部）



第457図 K511溝遺物出土状況図



第458図 K地区溝出土遺物2  
K700(1842) K416(1843) K483(1844) K364(1845) K511・K522(1846～1860)



第459図 K地区溝出土遺物3

K1201(1861) K1666(1862) K1021(1863) K1079(1864) K1214(1865) K1300(1866～1871・1873) K1650(1872・1874-1875)

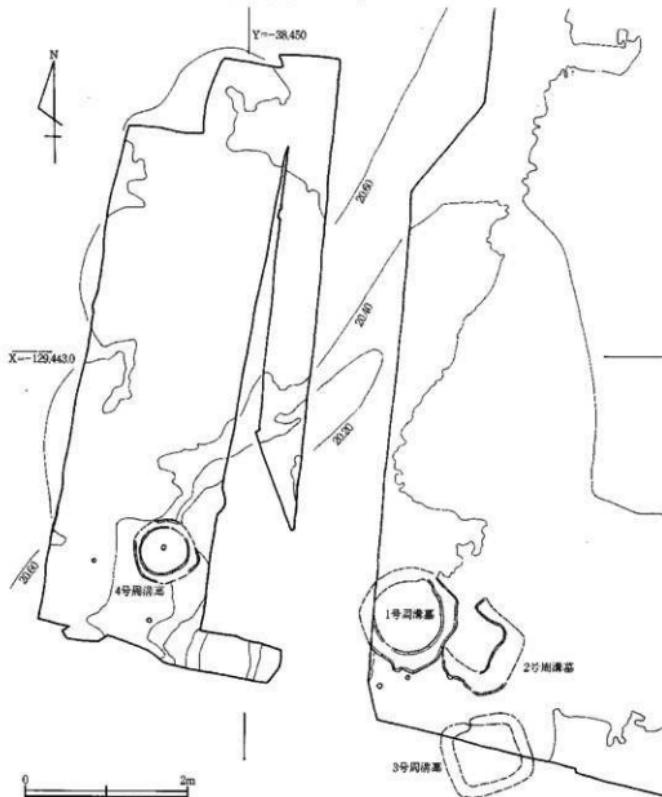
## 第5節 弥生時代後期の遺構と遺物

### 1. 概要（付図6）

この遺跡で遺構が確認されるのは弥生時代後期からで、調査区の南部、西国三三ヶ寺二二番札所の總持寺が立地する低位段丘面や安威川が形成する沖積地を見下ろす台地縁辺部で周溝墓と竪穴住居を検出している。調査地の北西約400mの東太田1丁目（国道171号線の北側）でマンション建設に先立って実施された調査では、弥生時代後期の土器が多量に出土したが、同時期の遺構は確認されていない。

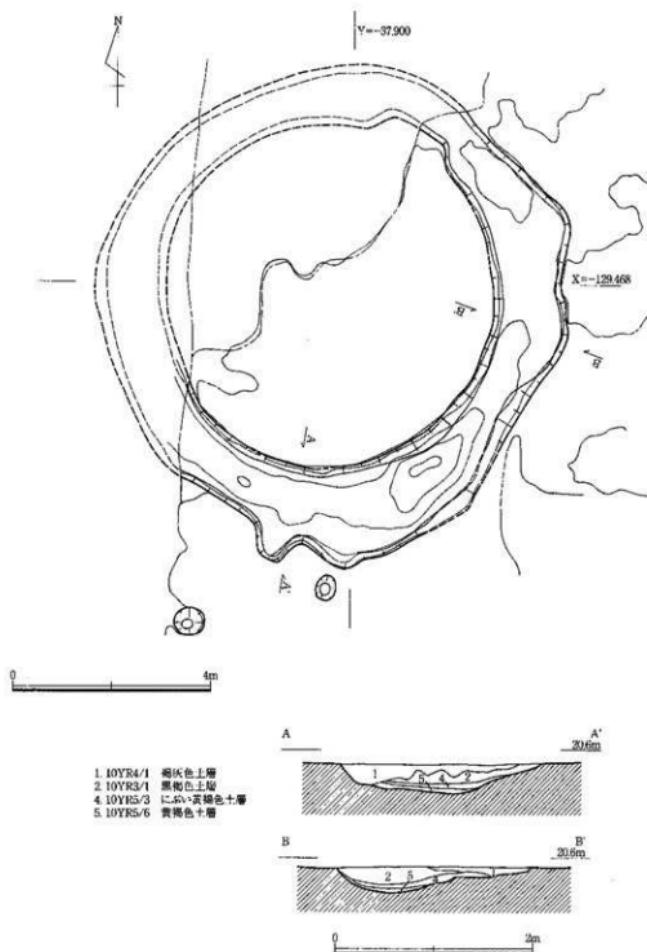
検出した周溝墓は4基で、方形と円形が各2基である。また、周溝内や周溝墓近辺で土器棺墓を5基検出した。このほか、周溝墓の東北で3棟の方形の竪穴住居跡を検出している。（阿部）

### 2. 周溝墓、土器棺墓（第460図、図版22-1）



第460図 周溝墓配置図

1号周溝墓（第461図、図版22-2） E地区南西側、南に下がる浅い浸食谷の東肩部に立地している。平面形は円形を呈し、北側に突出部を持つ。周溝の外側ラインは内側とは一致せず、隅丸方形を呈する。周溝墓北東側の約3分の1は奈良時代頃の土取りにより削平をうけている。また、南西隅は調査区外に延びているが、2つのコーナー、突出部の2分の1が残っているので、方形に掘られた周溝の中に造られた突出部を持つ円形周溝墓が復元できる。



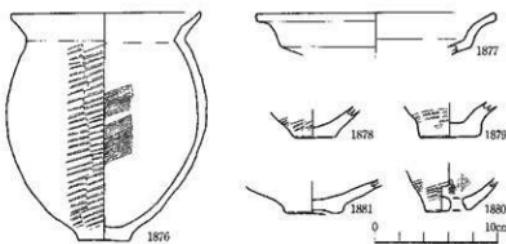
第461図 1号周溝墓平面・断面図

墳丘部の復元径は約9.0m、突出部の長さは約0.8m、周溝の幅は1.5mから2.5mを測る。墳丘部は削平されていて、盛土、主体部等は検出できなかった。

周溝の深さは検出面から0.2mから0.5mを測り、南コーナー部が最も深い。周溝の埋土は4層に分かれ、最上層の灰褐色土層と第2層の黒褐色土層には多量の弥生土器が含まれる。第4層にはぶい黄褐色土層、第5層の黄褐色土層は殆ど遺物を含まない。周溝墓築造後あまり経過しない時期に墳丘が崩れた堆積と考えられる。

出土遺物は第2層の黒褐色土層から多量の弥生土器が細かく割れた状態で検出される。その殆どが甕の破片で、若干の壺の破片を含む。周溝南東側のこの層位から、倒置した状態の甕が検出されている。(山上)

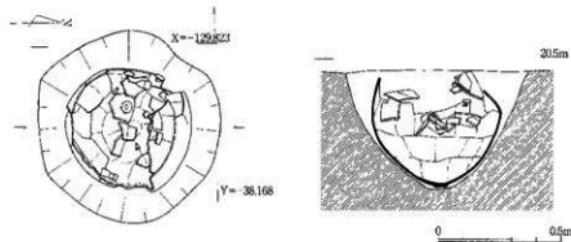
**1号周溝墓出土遺物**  
(第462図) 甕(1876)は、「く」の字形に外反する口縁部から僅かに膨らむ



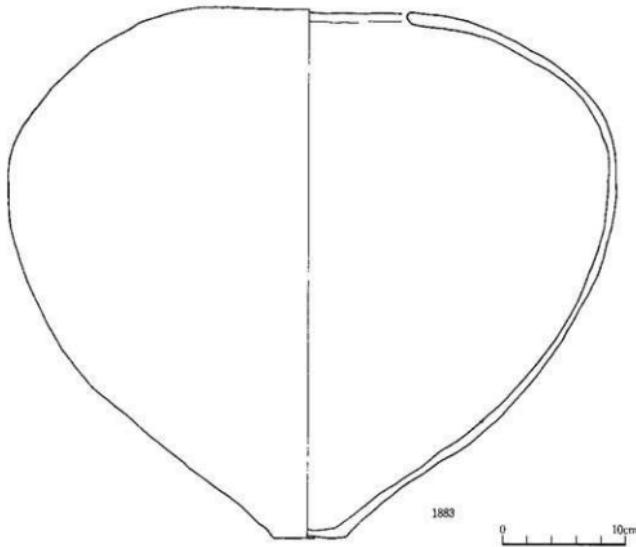
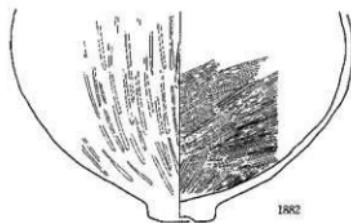
第462図 1号周溝墓出土遺物



第463図 2号周溝墓平面・断面図



第464図 土器棺墓1平面・断面図



第465図 土器棺墓1土器実測図

体部をもつ。最大径は胴部中程にある。体部はタタキメ、内面はハケメで調整する。壺（1877）は大きく外反する二重口縁端部を僅かに拡張させて垂直の面をつくる。小破片である。

底部（1878～1881） 1878から1880は壺の底部、1881は壺が鉢の底部である。（阿部）

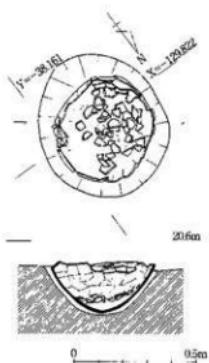
2号周溝墓（第463図、図版22-2） 1号周溝墓の東側で検出された。遺構の平面形は方形を呈するが、西側は周溝を欠き、完周しない。1号周溝墓との重複関係はないが、1号周溝墓の東周溝を共有するものと考えられる。途切れた部分は幅約2.5mで陸橋部と考えられる。周溝の外側南東コーナーは、角を持たずに切り落とした形状を呈する。

墳丘部の規模は北西・南東軸で約6.0m、北東・南西軸で約6.5m、周溝の幅1.0mから3.0mを測る。墳丘部は削平されていて盛上、主体部等は検出できなかった。周溝の深さは検出地盤から0.1mから0.4mを測り、東南コーナー部が最も深い。周溝の埋土は3層に分かれ、最上層の黒褐色土層は多量の弥生土器を包含する。下層のにぶい黄褐色土層、にぶい黄褐色土層、黄褐色土層には遺物が含まれず、早い時期の墳丘崩壊土と考えられる。

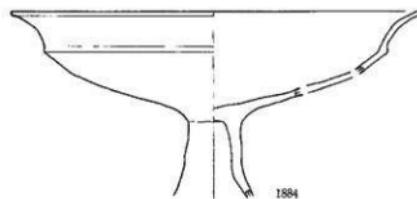
周溝の第1層の黒褐色土層から多量の弥生土器の壺、壺が細かく割れた状態で出土した。

土器棺墓1（第464図、図版22-3・4）

1号周溝墓の南側周溝の約3.5m南で検出した。棺に壺2個を用いた土器棺墓である。墓壙の平面形はほぼ円形で、断面形は深さ約0.5mを測る深い



第466図 土器棺墓2  
平面・断面図



第467図 土器棺墓2土器実測図

鉢状を呈する。検出面の高さは20.45mを測る。棺は2個の壺を打ち欠いて棺身と蓋とする。土坑は土器に合わせた大きさに掘削され、棺身の壺は正立で埋置されていた。胸部は土圧のひび割れが見られる。

体上部は棺内にやや倒れていたが、現位置に近い状態を保っていた。口頭部を打ち欠いたもので、約17.0cm×約21.0cmの楕円形の口が開く。蓋は棺身開口部を覆っていたと思われるが、上圧で押しつぶされ、棺内に落ち込んでいた。壺の胸底部を斜めに欠き割ったものを用い、径は約23.0cmで、棺身の開口部より僅かに小さいため斜めに割って蓋とし、塞ぎきれない部分は長い体部片で補填する。上器棺の掘方には暗黄灰色粘質土、棺内は灰色粘土が堆積していた。

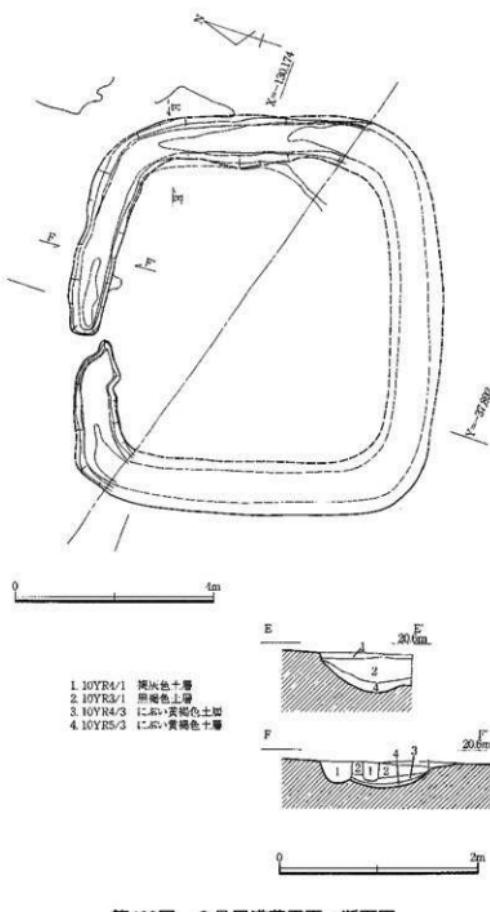
(山下)

#### 壺棺 (第465図、図版25-1・2)

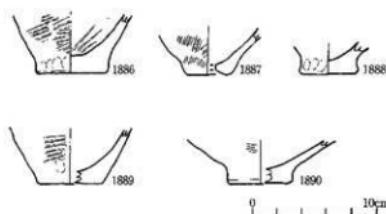
1882は小さく突出した底部から球形に膨らむ体部を持つもの。外表面をヘラミガキ、内面をハケメで調整する。1884は小さな底部から大きく膨らむ体部をつくる。(阿部)

#### 土器棺墓2 (第466図、図版22-5・6) 1号周溝墓の周溝南

東隅に接するように検出された。棺身に壺、蓋に高杯使用する土器棺である。墓壙は土器に合わせた約0.5m×約0.6mを測る楕円形



第468図 3号周溝墓平面・断面図



第469図 3号周溝墓出土遺物

で、断面は浅い播鉢状を呈する。棺身は大型の壺で、開口部を南に傾け、倒置した状態で埋置されていた。地山が削平されていたため、上部の約2分の1が削平を受け、墓壇に接した下半部は現位置にあり、土圧で潰された体部の一部が棺身内から検出された。蓋は高杯の杯部を使用し、倒立状態で開口部を覆っていたと見られ、棺身の開口部が地山に接した一部に高杯の口縁破片が現位置で検出された。

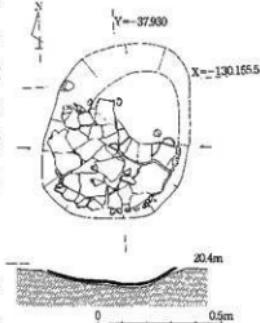
埋土は、棺底内灰色粘質土、掘方は暗黄灰色粘質土であった。

壺（第467図、図版25-3）1886は小さく突出する底部から球形に脹らむ体部をつくる。口頭部は欠失する。底部に中からの穿孔がある。

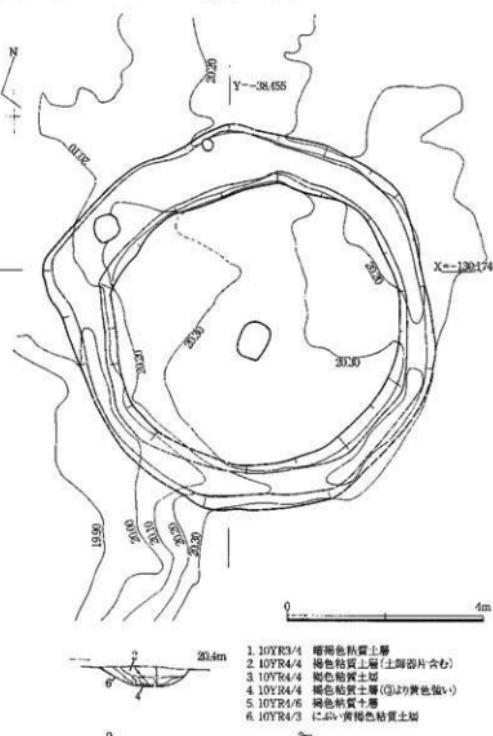
高杯（第467図）1885は内輪気味に開いて立ち上がる杯部から大きく外反する。口縁の端部は面をつくる。脚部は欠失する。

3号周溝墓（第468図、図版22-1）E地区の南端、2号周溝墓の南側で検出された方形の周溝墓で、南半分は調査区外にある。北側周溝には幅約0.5mの陸橋部がある。墳丘規模は一辺約9.0mで、周溝幅は1.0mから1.5mを測り、1、2号周溝墓に比べて幅は狭い。墳丘部は削平されていて、主体部、盛土は検出できなかった。周溝の深さは検出面から約0.3mを測り、底は比較的平坦である。埋土は4層で、上層の灰褐色土、暗灰褐色土に多量の弥生上器を包含し、下層の暗黄灰褐色土、暗黄灰色土は遺物をほとんど含まない。（山上）

1887から1890は壺の底部破



第470図 4号周溝墓  
主体部1平面・断面図



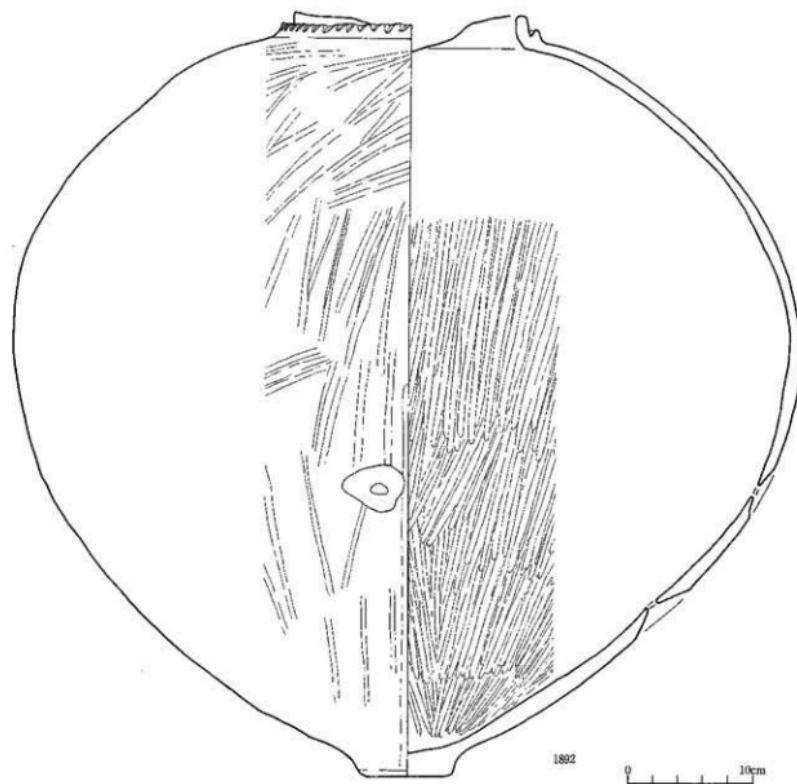
第471図 4号周溝墓平面・断面図

片で、外面はタタキメ、内面はナデ調整である。1887は内面にヘラ痕が残る。1891は壺の底部破片である。  
(阿部)

4号周溝墓（第471図、図版23-1）J地区の南端付近で検出した円形の周溝墓である。南に下がる深い谷の西肩を占地して築かれており約5.0m東の1号周溝墓は谷の東肩に立地している。奈良時代や鎌倉時代には墳丘が削平され封土は失われている。また、南側は緩斜面に褐灰色土の堆積が進んでから築造されたと考えられ、地山面で検出したため周溝底を浅く確認できただけであった。西北側は中世の配石遺構によって攪乱されている。

墳丘部はほぼ円形で、径は5.5m前後を測る。周溝の深さは遺存状態の良い北側で幅約1.2m、深さ約0.4m、地山面で検出した南側では幅約0.6m、深さ約0.05m程度であった。墳丘部で壺棺（主体部1）、東周溝で壺棺（主体部2）が出土した。

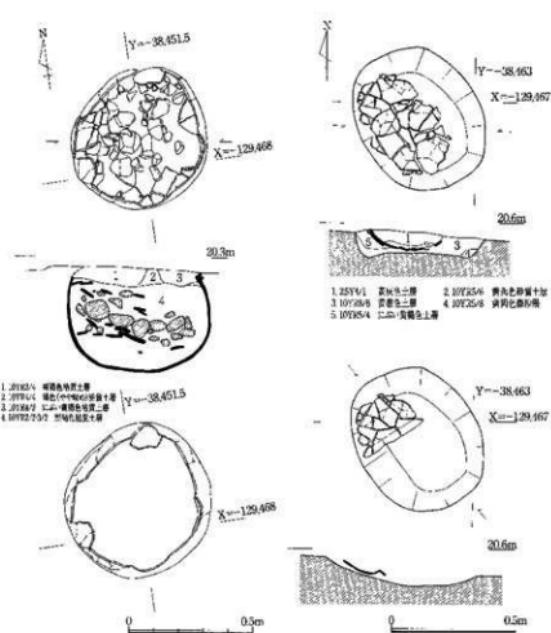
主体部1（第470図、図版23-2、25-5）墳丘部のほぼ中央で検出した壺棺である。棺底



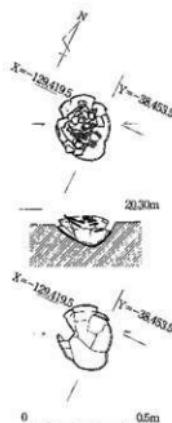
第472図 4号周溝墓主体部2土器実測図

の壺胴部が残るのみであり、上部は削平されていた。検出面での掘形の大きさは約0.75m×約0.65mの椭円形を呈する。大型の壺を横にして埋められたと考えられるが、底部は残っていない。胴部は一辺5.0cmから20.0cm前後の破片になって地山に押しつけられたような状態で残っていた。この土器棺の上で、鉛ガラス製と思われる管玉片が数個分出土しているが、細かく碎けているため正確な個数は不明である。

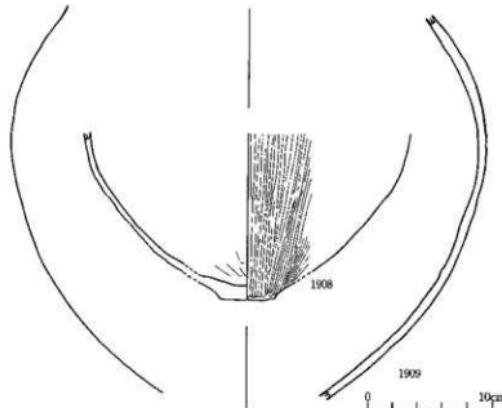
**主体部2**（第473図、図版23-4・5）東側の周溝で検出した。薄茶色を発する河内産の大型壺を棺としたもので、正立して据えられていた。口頸部は



第473図 4号周溝墓主体部2 第474図 土器棺墓3出土状況図  
土器棺出土状況図



第475図 4号周溝墓供献遺物  
出土状況図



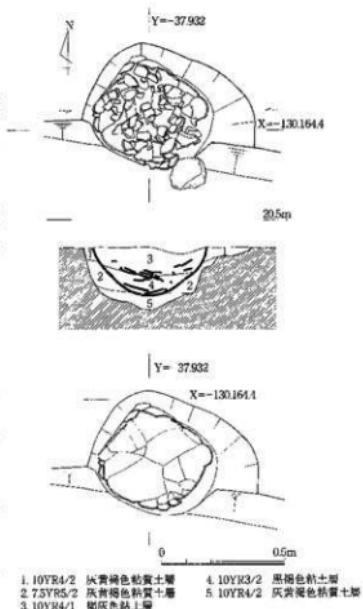
第476図 4号周溝墓供献土器・土器棺墓3土器実測図

れている。棺内は土砂や拳大までの石が腹部上部まで詰まり、その中に頸から肩部破片が割れて落ち込んでいた。蓋に当たる上器は棺内になかったので、削平时に除去されたのであろう。

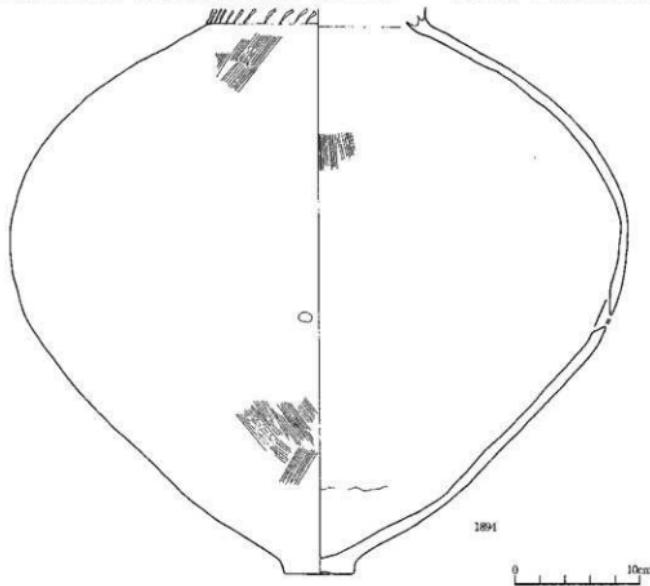
壺（第472図、図版25-4）1892は小さく突出する底部から球形の体部を造る。垂直に立ち上がる頸部下端に凸帯を巡らせ、端部にキザミ目をつける。内外面共に密にヘラミガキで仕上げる。

供献土器（第475・476図）周溝の南東部から出土した。溝に土砂が僅かに堆積した後、小穴を掘り、正立しておかれた壺である。洞底部に破片が詰まっていたが、口頸部は削平されていた。

土器棺墓3（第474図、図版23-3）4号周溝墓の約5.0m西側で検出した。壺と鉢を組み合わせた土器棺である。墓壙は長径約0.6m、短径約0.5mの楕円形で、墓坑底まで約0.1mの深さが残っていた。上部は削平され、棺底のみが残っており、墓壙底までは約0.15mを測る。棺身の壺は



第477図 土器棺墓4出土状況図

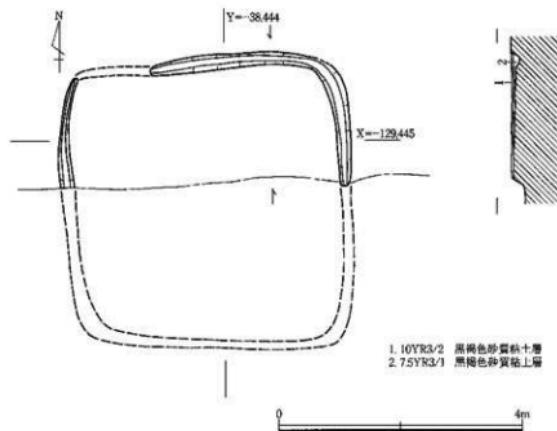


第478図 土器棺墓4土器実測図

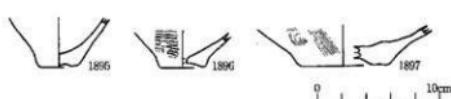
脇部のみが残っていた。蓋は鉢を転用したもので、底部は削平され、地山に密着した口縁と脇部が残っていた。

壺（第476図、図版25-6）1892棺身に使われた壺で、口頸部や底部を欠く。最大胴径は約40cmを測る。

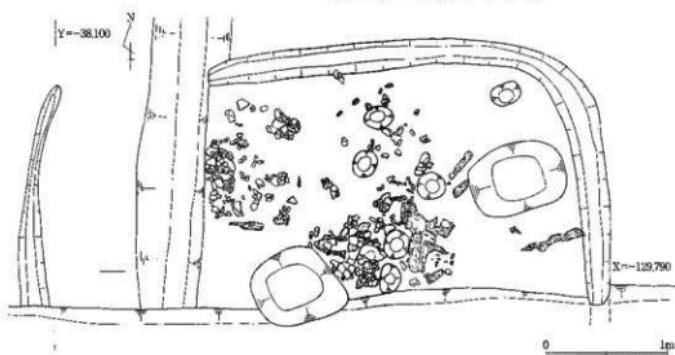
土器棺墓4（J4290土壤）（第474図、図版23-7）周溝墓の南約4.5mの所で検出した。南側は奈良時代以降に破壊されているが、棺の場方は東西0.7m、南北0.5m以上、深さ約0.3mを測る。棺は壺を用いたもので、口縁を南に向け、脇部を横にして据えられていた。口頸部は欠けているが、棺としての使用時に打ち欠いたか、攪乱時に壊されたか判断できない。蓋は確認できなかったが、土器の下か



第479図 住居2平面・断面図



第480図 住居2出土遺物



第481図 住居2遺物出土状況図

ら河原石が出土している。土器を安定させるために置かれていたと思われる。土器底は大きなひびが入る程度であったが、上部は土圧により上部の破片が棺内に落ち込んでいた。底部を穿孔している。

壺（第478-1894図、図版25-7）は、突き出した小さな底部から開いて立ち上がる体部に大きく張りだした上肩部を作る。頸部と体部の境を厚く造り、キザミメを巡らせる。

### 3. 弥生時代後期の竪穴住居

台地の南端部近くに立地する周溝墓の北東側で3基の竪穴住居を検出している。周溝墓と同時期の弥生時代後期後半頃のものである。

#### 住居2（第479～481図、図版24-1・2）

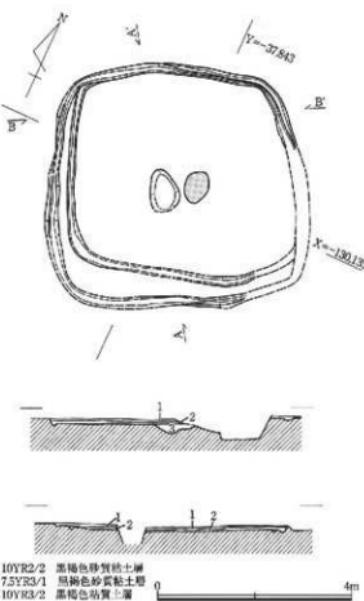
B地区周溝墓の北東、 $X = -129,790$ 、 $Y = -38,100$ 付近で検出した方形の竪穴住居跡である。府営住宅の側溝で搅乱され、壁溝の一部が削られているが、東西は約4.8mを測る。南側は調査区外に延びているが、現況で2.1m、床面までの深さ約0.1mを測る。平面検出時に弥生時代後期の土器が碎けた状態で出土し、住居中央付近に炭化した木片が散乱していた。土器は炭化材の上に乗る物もあり、罹災したときに放置された物と焼失後、廃棄場所として捨てられたものが混在すると考えられる。また、壁に沿って幅0.3mから0.4m、深さ0.05mの壁溝が巡る。壁溝には板材の痕跡は認められない。炭化材や土器の取り上げ後に床面を精査したが、柱穴や炉跡は検出できなかった。

出土遺物（第480図）は、実測に耐える良好な破片が少なく、底部のみを記載した。1895、1896は甕の底部で、1897は底面を焼成前に穿孔する壺である。1897は壺の底部である。

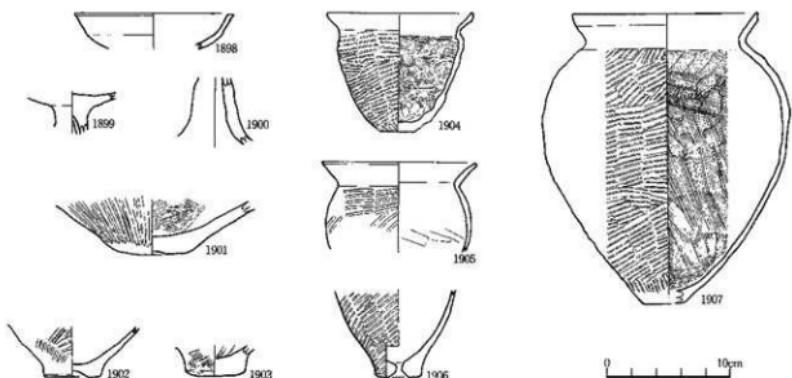
住居1（第483図、図版24-3） B地区の $X = -130,135$ 、 $Y = -37,843$ 付近で検出した方形の



第482図 住居3平面・断面図



第483図 住居1平面・断面図



第484図 弥生時代後期出土遺物

竪穴住居跡である。西側と南側は溝を2条検出した。溝の前後関係から外側に拡張されたと判断している。住居の大きさは南東隅の約4分の1が攪乱されているが、東西約5.0m、南北約4.3m、拡大後の規模は約5.4m×約5.0m、床面までの深さは0.15m前後を測る。壁溝の幅は0.2mから0.25m、深さ0.05m程度である。床面中央で約0.55m×約0.6m、深さ約0.15mを測る歪な楕円形状の炉痕がある。また、炉の西側にも一回り大きい(約0.8m×約0.6m)の三角形状の浅い土坑があり、最初の建物の中心からはずれるが、拡張前の炉痕であろう。柱痕は確認することができなかった。壁で屋根を支えるタイプのものであろう。

住居3(第482図) C地区のX=-129,457.5、Y=-38,316.5付近で検出した歪な方形の住居跡である。北側が一部攪乱されているが、規模は東西約6.2m、南北約7.7m、床面までの深さ約0.2mを測る。柱は4ヶ所で、柱間隔は東西が約3.8m、南北は約3.2m、約3.5mを測る。壁溝は検出できなかった。

#### 4. 弥生時代後期出土遺物(第484図)

甕(1907)は「く」の字形に折り曲げた口縁端部を摘み上げるもの。体部は分割成形する。内面は口縁直下まで細かいハケ目で仕上げる。B2015ピット出土。甕(1904)は手捏ねの歪なもの。底部は丸みを持つ。外面はタタキ目、内面は口縁直下までハケ目で調整する。1901、1902は底部破片。1901は壺で外面はヘラミガキ、内面は蜘蛛の巣状にハケ目が残る。1901は壺で螺旋状にタタキ目を調整するもの。内面はナデ調整である。

1898、1899は高杯。1898は杯部破片で、内縁気味に広がる杯部から外反する口縁部を造り、端部を僅かに外に摘んで仕上げる。1899は脚部で脚上端部を絞り目が観察される。

1906は底面に穿孔する瓶で、体部の脹らみは小さい。外面はタタキ目、内面はナデで調整する。

(阿部)

## 第4章 考察

### 第1節 総持寺遺跡で検出した古代掘立柱建物に関する一考察 富田 卓見

今回の調査では、古代に属する建物遺構を82棟検出した。柱穴内からの遺物が少なかったため、各々の時期を特定することは困難であった。そのため、当調査区内の古代の建物について、一部の建物柱穴内出土遺物及び分布状況により時期を特定することに努めた。建物（第485図）は、建物の主軸方向、柱穴の形状や建物立地の面などから検討した結果、下記のように大きく7種類に分類出来る可能性が高いものと判断した。軸方向は、桁の角度ではなく、真北方向に近い辺の向きを測定している。なおK地区については、紙面の都合上、図面を割愛している。

＜A期＞ 主軸がN-1~3°-Eを測る建物で、建物1・5・9・37・41・44・45・47・57・60・64・66・77・78・79の15棟が該当する。柱穴の形状は方形で、深さの最大が概ね0.4m、全ての建物が古墳を避けるように建てられている。おそらくこの時期には、古墳時代中期の小規模古墳が、造営当時の墳丘の盛土とほぼ変わらない状態のまま残存しており、古墳が有力者の墓、もしくは重要な築造物だという認識や、祖先の墓であるという認識が少なからず残っていたものと考えられる。当調査地の東部から南部にかけては検出されず、総柱建物も検出されていない。

＜B期＞ 主軸がN（真北）を測る建物で、建物32・49・51・56の4棟が該当する。柱穴の形状は方形、深さの最大が概ね0.4m前後。A期同様にほとんどの建物が古墳を避けて建てられている。しかし建物32は一部が古墳の周溝にかかっていることから、周溝がある程度埋まった時期と考えられ、A期とほぼ同時期から若干遅い時期と考えられる。建物はG区内に集中している。

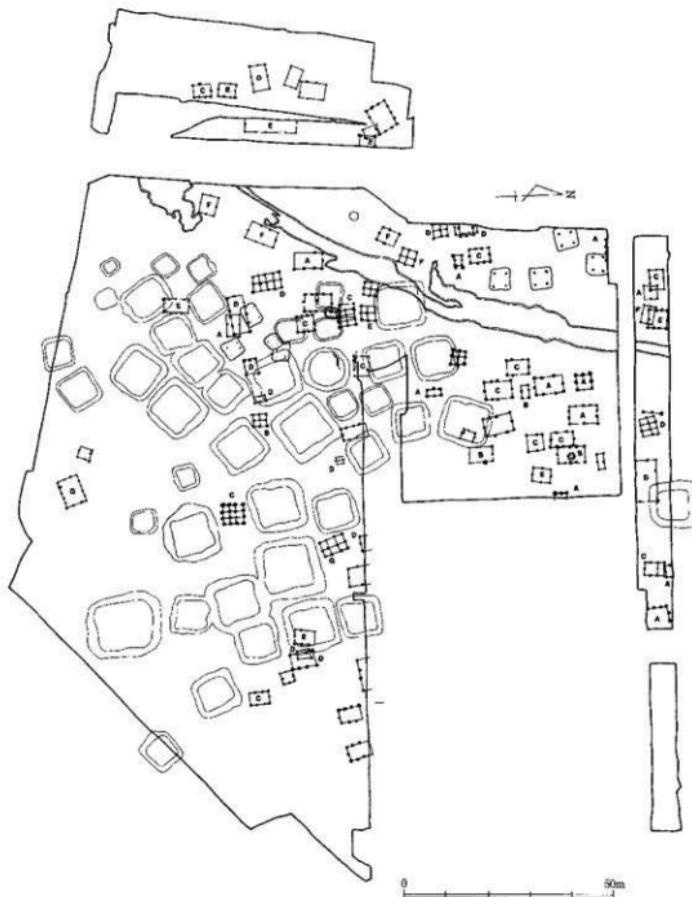
＜C期＞ 主軸がN-1~3°-Wを測る建物で、建物2・13・15・16・22・31・48・50・52・54・59・65・76の13棟が該当する。柱穴の形状は方形で、深さの最大は0.4m前後。その特徴からA・B期と同時期と考えられるが、建物15・16の一部が古墳の墳丘裾までかかっている。墳丘が風雨などで徐々に削られ裾部が平坦に近くなった時期と考えると、B期に続く時期と考えられる。建物は調査区内の各地で展開している。

＜D期＞ 主軸がN-6~8°-Wを測る建物で、建物4・6・18・19・26・27・33・34・36・39・63・67・74の13棟が該当する。建物63を除き柱穴の形状が方形に近く、深さの最大は0.3mから0.6m。いくつかの建物が古墳の周溝から墳丘裾部にかかっており、またC期よりもその数が多いことからC期に続くものと思われる。

＜E期＞ 主軸がN-4~7°-Eを測る建物で、建物10・14・25・38・53・61・70・71・75の9棟がこれに該当する。柱穴の形状が円形に近くなる建物がいくつか見られるようになり、深さの最大も0.2mから0.72mと様々である。円形に近い柱穴をもつ建物25・53・71・75、特に建物53は柱穴の径も小さく、柱の配列も中世的な様相を示す。この建物群では古墳の墳丘中央部まで

建物が及んでいるものもあり、墳丘が削平され周溝が完全に埋まった時期と推測される。また建物 38 からは平安時代の遺物が出土している。

< F 期 > 前述した各期の主軸範囲から大きく東へ外れる N-15~29° - E を測る建物で、建物 7・40・42・43・62 の 5 棟が該当する。それらすべてが溝 1 の肩部周辺に建てられており、建物主軸の傾きは溝 1 に平行している。また建物 43 から奈良時代の遺物が出土しており、柱穴の特徴や柱列の様相が似ている建物 42 も同様のものと推定される。



第485図 古代建物分類図

< G 期 > 前述した各期の軸範囲から大きく西へ外れる N-19~23° - W を測る建物で、建物 21・23・80・82 の 4 棟が該当する。それぞれ柱穴の径が小さく円形に近いことから、平安時代と推測される。

建物の軸・立地・柱穴の特徴などから分類を行ってみた。建物からは、その時期を特定できるような遺物はわずかであった。しかしながら、おおよそ各期の時代を推測すると、A 期が飛鳥時代、B 期・C 期が飛鳥時代後半から奈良時代、D 期が奈良時代前半、F 期の建物 42・43 が奈良時代後半、E 期が平安時代前期、G 期が平安時代前期後半にそれぞれ相当するものと推定される。ただ、B 区地区に存在する建物 23 については、柱穴は方形で古代の平面形状だが、大きさや配列などが平安時代に近い特徴を持つことから、D 期・F 期と E 期の間に位置するものと推定される。ただし、主軸がどちらの時期の主軸方向からも大きく外れているので、ここでは参考程度に留めておく。

その結果、古代の掘立柱建物は奈良時代のものが多く、当調査地北側で実施された総持寺北遺跡<sup>(1)</sup>においても奈良時代の建物が最も多いことから、現 総持寺北側の三島丘一帯は、奈良時代にその最盛期を迎えたと考えられる。また奈良時代後半から平安時代には、溝 1 を中心とした調査地の西部に建物が多く展開するようになる。中世（12世紀後半から13世紀初頭）になると、当調査区の西部に展開していた建物群は、当調査地の南部に集落の中心が移動する。

以上、分類・推考を行ったが、留意点を挙げておく。

当調査地北側で実施された総持寺北遺跡の報告書<sup>(2)</sup>の中でも触れているが、当調査地でも総持寺北遺跡<sup>(3)</sup>と同様に、建物は真北方向に対しこれに沿うか、わずかに振るもの（上記の A・B・C 期）が多く、検出された総建物数の 3 分の 1 を占める。建物主軸だけを条件にして分類しているわけではないが、狭い範囲幅内を恣意的に分類していることを留意して頂きたい。

建物の立地であるが、すべての古墳が一様に同じ自然経過で消失したとは考えにくい。実際、建物 14・15 にかかる古墳からは古墳時代の土坑も見つかっている。これら 2 つの古墳は他の古墳と比べ小規模であることから、自然的に消失する以前の早い時期に人为的に削平・埋められたものと考えられる。

今回の成果と今後行われるであろう周辺の調査成果をあわせて、総持寺周辺における各时期的様子が徐々に判明し、またそれが三島郡一帯の様相を明らかにする一翼となることに期待したい。

なお本稿を作成するにあたり、藤井信之、武藤道子、武藤洋平、西村雅美の協力を得た。記して感謝いたします。

### 《註》

「総持寺遺跡 一住宅都市整備公団仮称茨木・三島丘地区住宅建設事業に伴う発掘調査一 奈良・平安時代、鎌倉時代の集落跡の調査」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第30集 (財)大阪府文化財調査研究センター 1998

## 第2節 「調」刻字土器とその意味

山上 弘

E地区西側を流れる奈良時代の溝1から第73-197図に示す須恵器甕の口縁部が出土した(図版26-7)。溝1は、前述したようにH地区の北西側からA地区、F地区を通りE地区の中央付近で西の調査区外へ延びる溝である。溝は、土層断面観察用の畦からは、前後関係は不明であるが、平面、溝底の形状から何回かの掘り直しが行われたものと推定される。また、溝の時期は、大半が奈良時代と推定されるが、H地区から団化は出来なかったが黒色土器片が出土していることから、平安時代まで続いているものと推察される。

ここで取り上げようとする須恵器には、「…□調□…」と焼成前にヘラで文字が書かれていた。この文字について検討を進みたい。口縁部直下に刻まれた文字は、土器を正置させた方向から90度倒し、上からみて時計回りに並べられていた。字を刻んだ者から見れば、土器の口縁部を左に倒して足に抱え、右手で口縁に文字を書いたものと考えられる。第486図は、文字の詳細を原寸で実測した図である。延長方向約4cmの破片には3文字が確認でき、その内の中央の1文字が「調」と判読でき、その上下2文字については判読できない。「調」の書き順も図のとおり看取できる。太く、深く刻まれた文字は達筆で、須恵器工人が片手間に書いた文字ではないことがわかる。

須恵器に焼成前に刻まれた刻字土器は、1~2文字が記号的に書かれたものが多いが、滋賀県野洲町桜生古墳から出土した短頸壺には「此者酒上首□□」、石川県那谷金毘羅窯出土の平瓶には「与野評…阿波田直沙羅廿」、兵庫県神戸市の太田遺跡出土の硯には「荒田郡中富里荒田直□□」と7世紀代の出土例があり、いずれも線の細い文字で書かれている。文字だけを見れば当遺跡出土例と文字の大きさや筆跡に大きな差がある。

また、この土器の時期であるが、口縁一部の残存のため、全体の特徴が把握できないが、およそ7世紀末から8世紀初頭にあてられる。出土した遺構の時期とは合わず、直接溝に関わる遺物ではない。

次に判読できる「調」は、人名・地名・税制の調などが考えられる。「新撰姓氏録」には、「調速」「調首」「調忌寸」等が挙げられている。また、「延喜式」「倭名類聚抄」では、「備後国御調郡(万葉集では水調郡)」「出雲国意宇郡筑陽郷調原社」「肥前国小城郡壹調郷」「対馬国下縣郡玉調郷」が見られる。上記の調がつく人名、地名と本土器の「調」とその上下の第486図 刻字文字詳細図文字は比べると、残存している上下の文字の一部と一致するものはない。



従って人名や地名が書かれているものとは考えられない。

次に考えられるのが租税の調である。土器に入れられた内容物が調物か、土器そのものが調物の2通りが考えられる。絹や綿のような繊維製品といった正調以外の調雜物には、鉄・鎌・塙や雑多な海産物などがあり、錢や須恵器もそれに含まれる。今回出土した須恵器の刻字は、焼成前に刻まれたもので、土器を焼く以前から納める内容物が決められ、調の内容がそこに示されていると考えるよりは、土器そのものが調と考えるほうが素直である。土器の内容物が調ならば、木筒を付けてその内容を示していたものと考えられ、付札木筒が平城宮等から多数出土している。

須恵器が調雜物として貢納されていたことは延喜式にみえる。須恵器を調として貢納する国が規定されている。摂津国、和泉国、美濃国、播磨国、備前国、讃岐国、近江国、筑前国の8ヶ国である。須恵器が調納されていたことを記した実例が、福岡県大野城市牛頭ハセムシ窯から出土している。調納に関する在銘は10例に及び、妻体部にヘラ状工具で焼成以前に文字を刻んでいる。文字の方向は、1例のみが体部横方向に、他の全てが縱方向に刻まれている。単独の資料で文章全てが残されているものはないが、資料相互で補い全文を復元できる。

〔筑紫前國奈列郡／手東里／大神郡百江／大神郡麻呂／内掠人麻呂／并三人奉調大〇一〇／和銅六年〕

とあり、国名、郡名を記したのち、納税者の人名、調納物の品名、数量を記し、最後に年（月日）を記す、といった体裁である。地名、人名、調納品名、数量、年月日と続く体裁は、平城宮等から出土する木筒にも同様の資料が多数あり、賦役令第二條に規定された公文書の体裁である（中村1989）。總持寺遺跡から出土した例も牛頭ハセムシ窯から出土した文字と同様、調納用につくられた須恵器に記された文字であると考えられる。

さてその場合の、上下に続く文字であるが、内容としては1「…□」、2「調□…」の二つの段落に分けることができよう。1の段落には、調納をした人物名、あるいは人数が書かれていたものと推定でき、両側に大きくはらう文字は、「大」「人」等が推定される。一方調以下に続く2の段落は、調納された品名が記されていたと考えられる。当時の土器に与えられた名称について考えてみたい。

古文献に現われた器名を、出土資料の器形と合わせようとする考証は、先学によって多々著わされてきた。刻字のあるこの須恵器甕の名称として、牛頭ハセムシ窯出土須恵器が「瓶」と記されていたことから瓶が候補に挙げられる。他方、延喜式や正倉院文書等の文献や出土木筒から、貯蔵具であろう土器に、由加、甕、瓶、甕、缶、甕、盆、甕、壠、甕、壠等があり、ユカ、ミカ、サラケ、ホトキ、モタヒ、ツボと訓じていた（小林・原口1958、原口1979）。これらの名称を出土資料とどのように関連させるかは、本論とは関係がないので置くとするが、ここに現われる文字が、本資料の2の段落の判読しない文字に擬することができるかを考える。

調の次の文字は、その冠にあたる部分が推定でき、これと上記の古器名を照合すると、「甕」の文字が当てはまるのではないかと考えられる。「甕」の器形は土師器の甕であるとされ、須恵

器とは区別して用いられていたものとされていた。しかし、愛知県名古屋市尾張元興寺跡出土の須恵器片に「瓮」がヘラ書きされ、必ずしも発が土師器甕を指したものではないと考えられる。従つて今回出土した刻字土器の調に続く文字は、「瓮」であると推定する。

以上のことから全文を考えると、口縁部まわりに文字が全て埋められていたとしても、復元経から考えれば、20 文字を越えることはない。牛頭ハセムシ窯出土資料のように、令の規定に従つた体裁の文ではなく、これを省略文が記されていたと考えられる。

現時点では、この土器が生産された窯を特定することはできないが、上記 8 国のうちの須恵器窯から朝献用に生産された物であることは確かである。この土器が、平城宮に調納される途上で総持寺遺跡にもたらされたのか、一度調納された品が地方官衙に下賜され、総持寺遺跡にまでもたらされたのかは明らかではない。本遺跡が水陸の便にすぐれた位置にあることから、根津国以西の朝献窯からもたらされたのであろう。今後この土器の生産地を明らかにしていきたい。

なお、本稿については、「総持寺遺跡発掘調査概要・II」のまとめ（「調」刻字土器とその意味）を一部改変し再掲載したものである。

#### 《参考文献》

小林行雄・原口正三 1958 「古器名考證」『世界陶磁器全集第 1巻』 河出書房新社

中村 浩 1989 「12 地区出土の在銘片について」『牛頭ハセムシ窯 II』 大野城市教育委員会

原口正三 1979 『日本の原始美術 4 須恵器』 講談社

### 第3節 総持寺遺跡の中世屋敷跡群について

奥 和之・富田 卓見

今回の調査地区の南部、B地区からF地区にかけての東西約136m以上、南北約86m以上の範囲において、区画溝、柵列、道路状造構などによって、東西・南北の向きにほぼ沿う方向で区画された屋敷跡を20区画検出した。検出した遺構は、掘立柱建物49棟、柱穴多数、土坑多数、埋納穴5基、土壙墓7基、井戸7基を数える（第488図、表33）。

この屋敷跡群の時期は、出土遺物より12世紀末から13世紀初頭を中心とするものと推定される。各屋敷跡の面積は、遺構が検出されなかった屋敷H・Iを除き、最も狭いところで屋敷Nの237m<sup>2</sup>、最も広いところで屋敷Mが651m<sup>2</sup>を測る。このことから、屋敷跡の面積について画一性はなかったものと考えられ、その面積の大小が、おそらく各屋敷間の階層の差異ではないかと推定されるが、出土遺物からみると確証は得られない。また、遺構の平面観察の結果、Y=-38,371付近に存在するB897区画溝とその延長線上を中心軸として、各屋敷跡の区画溝を東西に設定したものと推測され、特にB897区画溝の東側地域では、南北に長い長方形に区画割りした様子が窺える。B897区画溝は、当調査地区北側のG地区南東部において、東西に延びるG1007溝とT字型に繋がる。このG1007溝の北側には、主軸方向が区画方向にほぼ沿っている数棟の建物と、井戸が存在することから、この場所にも屋敷跡があったものと推測される。しかし、G1007溝以外に、屋敷を区画する溝等が確認されなかったため、詳細は不明である。屋敷Iの東辺から、K地区的南部に存在するH5溝（K500溝）にかけての範囲には、疊層が広がっており、この範囲には屋敷跡は区画されていなかったものと推定される。

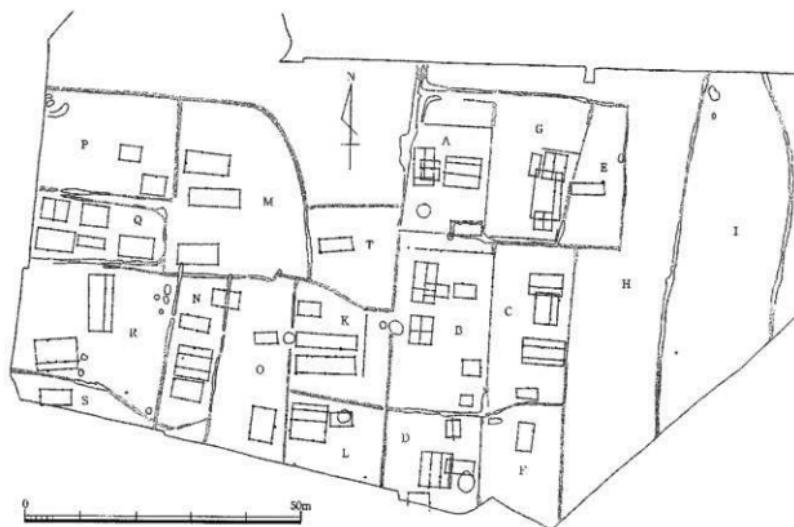
屋敷跡内の建物は、それぞれ1棟から6棟で、屋敷跡の面積と建物の数は比例していない。居住用と推測される主建物の軸は、方位にほぼ沿った向きに建てられている。また、G地区南東部に存在していたと推定される屋敷跡の建物を含む、いくつかの建物跡が、同じ場所に重なっているものも見られることから、しばらくの期間当地に定住し、何度も建直しが行われたものと考えられる。また各屋敷跡では、居住用の主建物と、作業用と思われる小型建物がほぼ揃って建てられていたと推測される。屋敷A・B・Kの敷地内では、屋敷跡区画の方向に沿った柵列を検出した。屋敷敷地内においても、用途の違いによってさらに区画をしていたものと推定される。

各屋敷跡では、上塙墓と推定される遺構や、土器が多く出土した埋納穴と考えられる遺構をいくつかの屋敷跡にて検出した。土塙墓、埋納穴とともに、祖靈崇拜や地鎮を目的としたものであろう<sup>(1)</sup>。どちらも屋敷内の辺端部に作られており、屋敷の住人が定住するにあたって、建物の建て直し等に支障がない場所が選ばれたのであろうと推測される。

井戸は7基検出している。各屋敷あたりに1基ではなく、隣接した屋敷跡との境界付近にあることから、少なくとも2軒以上の共同で使用していたものと推測される。

出土した遺物は、瓦器椀と土師器小皿がその多くを占め、他にも須恵器摺鉢、白磁碗、青磁碗などが出土している。

当遺跡で検出されたような屋敷跡は、大阪府下の他の遺跡においても数例が確認されている。当遺跡周辺の遺跡では、茨木市の玉櫛遺跡<sup>①</sup>、高槻市の官田遺跡<sup>②</sup>、田能北遺跡<sup>③</sup>においても屋敷



第487図 中世屋敷跡平面図

屋敷名	面積	建物(棟)	土坑(基)	埋納穴(基)	土壙墓(基)	井戸(基)
屋敷A	368m <sup>2</sup>	4	1	0	1	1
屋敷B	508m <sup>2</sup>	6	3	3	0	1
屋敷C	420m <sup>2</sup>	4	5	0	0	0
屋敷D	281m <sup>2</sup> 以上	4	3	1	0	1
屋敷E	311m <sup>2</sup>	1	0	0	1	0
屋敷F	315m <sup>2</sup> 以上	1	2	0	1	0
屋敷G	416m <sup>2</sup>	4	0	0	0	0
屋敷K	315m <sup>2</sup>	3	0	0	1?	1
屋敷L	278m <sup>2</sup> 以上	2	4	0	0	1
屋敷M	651m <sup>2</sup>	3	0	0	0	0
屋敷N	237m <sup>2</sup>	4	6	0	0	0
屋敷O	390m <sup>2</sup> 以上	2	2	0	0	1
屋敷P	441m <sup>2</sup> 以上	2	0	0	1?	0
屋敷Q	252m <sup>2</sup> 以上	5	0	0	0	0
屋敷R	619m <sup>2</sup> 以上	2	1	0	2	0
屋敷S	128m <sup>2</sup> 以上	1	0	0	0	1
屋敷T	278m <sup>2</sup> 以上	1	0	0	0	0
屋敷H・I		0	2	1	0	0
計		49	29	5	7?	7

表33 屋敷地別遺構集計表

跡が検出されているが、これらは当遺跡で検出されたような、複数の屋敷跡が集合した状態ではなく、屋敷跡1区画分のみの単体での検出であった。それらの屋敷跡の周囲からは、隣接するような屋敷跡の存在は確認されていない。また、上記の遺跡で検出された屋敷跡は、当遺跡で確認された屋敷跡群よりもやや時代が下り、13世紀中頃のものと推測される。

当遺跡の屋敷跡群と同時代の屋敷跡が検出された遺跡としては、堺市の豊田遺跡<sup>(5)</sup>が挙げられる。しかし豊田遺跡で確認された屋敷跡も、前述の遺跡と同様に、複数ではなく屋敷1区画分のみの単体での検出である。

当遺跡以外で、複数の屋敷跡が集合している状況が検出された遺跡としては、泉佐野市の上町遺跡<sup>(6)</sup>が挙げられる。上町遺跡では、10区画ほどの屋敷跡と、各屋敷跡内において、区画方向にほぼ沿っている建物群を検出したが、これは14世紀代のものと推定される。当遺跡の屋敷跡群は13世紀前後のものと推定され、1世紀近い時期差を考えると、当調査地区で確認された屋敷跡群は、複数の屋敷跡が集合して検出された事例としては、大阪府下でも最も古い時期に相当するではないかと推測される。

この要因としては、以下の可能性が挙げられる。当遺跡では、これらの屋敷跡群に先行する時代で、弥生時代の周溝墓や、古墳時代中期の小型群集墳、飛鳥時代、奈良時代から平安時代後期にかけての建物など、遺構が多く検出されており、集落形成の下地が十分であったこと。また、当調査地区から南へ約300mの場所に総持寺があり、当調査地区的北側を走る西国街道にも近い場所に位置し、人の往来が盛んのことなどが、12世紀後半から13世紀初頭にかけての時期に、このような屋敷跡群を展開することができた要因ではないかと推測される。

以上、当遺跡で検出された中世屋敷跡群について述べてきた。簡単にではあるが、他の遺跡で検出された屋敷跡群の例と比較することによって、当遺跡で検出された屋敷跡群の特徴が浮かんできたと思う。現時点では、同時期の屋敷跡群の検出事例は少なく、詳細に比較することは困難であるが、逆に当遺跡の屋敷跡群が、今後発掘されるであろう屋敷跡群にとっての、良い比較対象になり得るに十分であると思う。屋敷跡群の発掘事例の増加に期待したい。

#### 《註》

- (1) 橋田正徳「屋敷跡試論」『中世土器の基礎研究VI』中世土器研究会 1991
- (2) 「玉櫛遺跡—大阪府宮茨木玉櫛住宅跡て替えに伴う発掘調査報告書—」(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第31集 (附) 大阪府文化財調査研究センター 1998
- (3) 「宮山遺跡」「高槻市史』第6巻 考古編 1973
- (4) 「田能北遺跡」「田能遺跡群発掘調査概要・N一府宮農地還元資源利活用事業「塩山地区」の調査」大阪府教育委員会 2003
- (5) 「豊田遺跡」「泉北丘陵内遺跡発掘調査概要一池山寺遺跡、須恵器窯跡、豊山遺跡一」大阪府教育委員会 1982
- (6) 「上町遺跡II—泉佐野市駅東地区第1種市街地内開発事業に伴う発掘調査報告書」(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第84号 財團法人 大阪府埋蔵文化財協会 1994

## 第5章　まとめ

### 1. 概要

大阪府営住宅建て替えに伴う総持寺遺跡における発掘調査は、調査期間計約6年、調査総面積約23,500m<sup>2</sup>におよんだ。調査の結果、弥生時代後期では周溝墓4基、甕棺墓4基、住居跡3棟など。古墳時代中期では小規模墳43基など。古墳時代後期では住居跡1棟、土坑2基など。古代では掘立柱建物82棟、住居跡9棟、柱穴・土坑多数、井戸2基。中世では屋敷跡20区画、掘立柱建物128棟、柵列21本、柱穴・土坑多数、敷石遺構6基、土壙墓8基、井戸16基、埋納穴9基、苑池1基など、時期幅の広い、非常に多くの遺構・遺物を検出した。出土遺物から弥生時代後期から中世まで、人の営みが絶え間なく続いていることが確認できたと言えよう。遺構の密度も、K地区北側とB地区南側では比較的少ないものの、全体的には過密であったと言える。

なお、古墳時代中期の遺構の詳細については、先に刊行された『総持寺遺跡—古墳時代中期の小規模古墳群の調査』（大阪府埋蔵文化財報告 2004-2 大阪府教育委員会 2005）を参考されたい。

今回報告した中でも、特に古代と中世では良い成果が得られた。古代では、建物が古墳を避けて造られた様子が明らかとなり、時代が下るにつれ、古墳の墳丘部分にも建物が造られるようになった経過を、大まかではあるが追うことができたと思う。中世では、20区画もの屋敷跡が方位に沿って整然と区画され、それぞれの区画内において繰り返し建物が造られ、定住化した様子が明らかとなり、当時の集落の形態を解明する一端となり得るのではないかと思う。

以下、それぞれの時代ごとに調査の成果を記述する。

### 2. 弥生時代後期

調査で最も古い遺構は、弥生時代後期のもので、竪穴住居跡3棟と4基の周溝墓と5基の土器棺墓を検出した。

弥生時代中期の畿内では、群集する周溝墓や居住区の分布から、いくつかの世帯からなる大規模な集落が各所で形成されたと考えられる。しかし、弥生時代後期になると大規模集落が解体し、数棟で構成される小規模な集落が主体となることから、周溝墓の検出例も少なくなる。調査地近辺で弥生時代中期の集落は知られておらず、古墳を造営した古墳時代中期の集落も未確認である。おそらくは南の低位段丘面や安威川の氾濫原に集落が展開していたであろう。この富田台地縁辺部には弥生時代後期中葉以降に居住を開始した。検出した住居3棟のうち2棟は近接するが、1棟は南東に離れており、2家族と考えるのが自然であろう。

弥生時代後期の4基の周溝墓や土器棺は調査地南西部で検出した。周溝墓の南東側は、西国二二番札所總持寺が立地する段丘面へ緩い下りとなり、南西から西側は約20mで約5mの段丘崖を介して安威川の氾濫原が広がっている。2家族の墓地とも考えられるが、4号墓で検出した土器棺からはガラス玉が出土しており、小家族が築造した墓としては厚葬されている。南の低位段

丘面からは墳丘を確認できる場所に築造されており、現在住宅地帯となっている総持寺周辺に墓地を経営する母体となる様な集落があったと考えたい。

次に、周溝墓の平面形をみると、1号墓は西側半分が奈良時代頃に削平されているが、遺存部分から、墳丘部は直径約9mの円形で、北側に約0.8mの突出部を持ち、幅1.5mから2.5mの周溝の外側は隅丸方形の平面形が復元される。2号墓は1号墓と溝を共有し方形、3号墓は南半分が調査区外になっているが、北側に陸橋部を持つ方形プランが想定されている。1号墓の西側で検出した4号墓は直径約8mの円形で、方形と円形が混在している。

弥生時代から古墳時代初頭頃の周溝墓は方形が主流であるが、円形も少なからず報告されている。古いものは瀬戸内沿岸の岡山県や香川県にあり、岡山市の百間川沢田遺跡、香川県の佐古川・窪田遺跡、龍川五条遺跡<sup>(3)</sup>で前期に遡るもののが報告されており、特に佐古・窪田遺跡では直径4mから10mまでの円形周溝墓が9基出土している。中期には佐古川・窪田遺跡では前期から継続して造営され、2基検出された堂免遺跡（岡山県）では、埋葬主体が單葬であることが確認されている。その分布は瀬戸内と瀬戸内の東西に広がり、愛媛県松山市の姫原遺跡や豊予海峡を渡った、鹿児島県志布志市の京ノ峰遺跡で20基が検出されている。北部九州で土器棺墓が盛行する時期に大隅半島で円形周溝墓が纏まって築造されているのは、弥生時代の人と文化的移動と伝播を探る上で注意される。

一方、瀬戸内東部では播磨、西摂地域に多く、川島遺跡<sup>(6)</sup>（太子町）、八幡遺跡<sup>(7)</sup>（姫路市）、河合中カケ田遺跡<sup>(8)</sup>（小野市）や玉津田中遺跡、新方遺跡<sup>(9)</sup>（神戸市）、口酒井遺跡<sup>(10)</sup>（伊丹市）、淡路島の下加茂遺跡（洲本市）、日本海に近い米里遺跡（八鹿町）等で検出され、玉津田中遺跡、谷川・蹄場遺跡では方形周溝墓と混在して検出されている。なかでも新宮宮内遺跡（たつの市）では直径約20m（約314m<sup>2</sup>）の大型円形周溝墓が検出されており、この時期のものとしては大阪市の加美遺跡で検出された約26m×約15m（約390m<sup>2</sup>）の方形周溝墓に近い規模を持つ。主体部は不明であるが、集落首長家族の墓であろう。

後期から古墳時代初頭になると大阪府下でも円形周溝墓が検出されるようになる。近辺では当遺跡から約2km西の郡遺跡や豊中市の服部遺跡で報告されている。淀川、河内潟を隔てた北河内の四条畷市の雁屋遺跡では後期の長径約30m、短径約15mの楕円形周溝墓が検出され、丹後系の土器が出土している。中河内の八尾市では郡川遺跡<sup>(11)</sup>では2基、成法寺遺跡<sup>(12)</sup>で1基、弥生時代後期から古墳時代初め頃の円形周溝墓が検出されている。

大阪市南東部に所在する長原遺跡では弥生時代末から古墳時代初めの方形周溝墓と混在して直径7mから12mの円形周溝墓が3基検出され、供獻土器には山陰系の土器が含まれていた。

和泉市の府中遺跡<sup>(13)</sup>では、全体の2分の1程度であるが、後期前半から中葉の円形周溝墓2基が溝を共有して検出されている。また、岸和田市の下池田遺跡<sup>(14)</sup>で4基が検出されている。

摂津地域では、神戸市の深江北遺跡では弥生時代後期末から古墳時代にかけて築造された円形周溝墓が11基検出されている。また、尼崎市松ヶ内遺跡、古宮遺跡、伊丹市の口酒井遺跡などで

検出されているが、赤穂市の有年原・田中遺跡では總持寺1号墓と同様の突出部を造る直径約22mの円形周溝墓が報告されている。

四国では松山市の文京遺跡や釜の口遺跡、姫原遺跡、香川県の林・坊城遺跡、空港跡地遺跡、徳島県の名東遺跡（徳島市）や昼間遺跡（東みよし町）などでも弥生時代後期の円形周溝墓が検出されている。

このように円形周溝墓は、畿内で方形周溝墓が造営されるのとほぼ同時期に瀬戸内の備讃地域で築造されるようになり、中期には東西に広がって、伊予、九州や播磨や西摂地域で方形周溝墓と共に築造される。後期から古墳時代初頭には河内や和泉地域でも和泉でも受け入れられ、方形周溝墓と混在して築造されるが、播磨、西摂地域で多く造営される傾向は築造当初から変わらないようである。

今回、円形周溝墓と方形周溝墓は混在して築造されていた。4号墓を除いて埋葬主体は不明であり、副葬、供獻された土器が少なく、円形と方形のものに違いがあるのか、不明である。しかし、雁屋遺跡や長原遺跡では山陰や北部日本海側の土器の供獻されていることから、埋葬主体の出自や地位を顯すため、墓の形状を変えたのであろうか。検討課題である。

1号周溝墓から3号周溝墓では封土が削平され埋葬主体を検出することはできなかったが、4号周溝墓では、墳丘のほぼ中央で上器棺を検出した。土器棺は棺上部が削平されていたが、残存状況から大型壺を傾けて埋置していたと考えられ、土圧で1片20cm角程度までの破片に碎けて押し潰されたような状態であったが土器の上からガラス製の管玉が出土した。小児を納める土器棺を墳墓の中心に埋葬する例はほとんど無い。また、土器棺に副葬品が伴う例も少ない。土器棺の副葬品を集成した角南聰一郎によると、近畿、中国、四国で装身具を副葬する例は12ヶ所が知られる。<sup>(19)</sup>

古い物のは愛媛県の持田3丁目遺跡で、前期の土器棺から管玉が出土し、鳥取県の長瀬高浜遺跡では弥生前期末から中期初めの土器棺から碧玉製の管玉が42個出土した。中期では、愛媛県松山市の祝谷6丁目遺跡で中期末頃の壺棺に貝輪が副葬されていた。

このほかは後期で、奈良県の唐古・鍵遺跡で弥生時代後期末の土器棺からガラス小玉や碧玉製管玉、兵庫県芦屋市の会下山遺跡でも棺外であるがガラス小玉が出土している。また、岡山県の百間川原尾島遺跡でガラス玉10個、浦崎天神山遺跡で玉4個、便木山遺跡で管玉1個、香川県大井遺跡、愛媛県松山市の福音小学校内遺跡、持田3丁目遺跡、山口県奥ヶ原遺跡があげられている。

揖河泉地域では方形周溝墓封土部や周溝内への土器供獻は、普遍的に行われているが、階層分化の指標とされる埋葬主体への副葬、特に装身具の副葬例は後期でもほとんどない。4号周溝墓では東側周溝に土器棺があり、周溝墓の西と南側では土器棺墓が出土しており、円形周溝墓の中埋葬主体となっている土器棺との間に階層差の存在を認めてよいであろう。おそらく弥生時代中期まではガラス玉のように入手が困難なものは、集落の首長権と共に伝世されるものであったのが、小児を収める土器棺に副葬し、周溝墓の中心埋葬とするのは、集落の首長権が確立して

稀少品を私有化するような体制が成立したことを傍証するものであろう。

### 3. 古墳時代

古墳時代前期の遺構は確認されていないが、古墳時代中期に調査地西部は墓域となり、1基の円墳と42基の方墳が築造される。しかし、この時期の集落は確認されていない。遺構が確認されるのは古墳の築造が終わる6世紀に入ってからで、A4438土器窯、D2649土坑、C454土坑、C469溝から土器が良好な状態で出土した。6世紀前半から後半のものと推定される。

### 4. 古代

H地区とK地区南側を除く、当調査地区のほぼ全域において、竪穴住居9棟、掘立柱建物82棟、柱穴・土坑多数、井戸2基など、多くの遺構・遺物を検出した。

竪穴住居跡については、A地区で4棟、D地区で4棟、K地区で1棟の計9棟を検出した。A地区の4棟は溝1の西側に存在する。住居跡内からの遺物が少量であるため時期の決め手を欠くが、住居6内から出土した遺物から7世紀前後と推定される。また、D地区的4棟は、住居10・11が古墳を避けるように建てられているのに対し、住居8・9は古墳の周溝部分や埴丘裾部にかかっていることから、住居10・11はA地区で検出されたものとほぼ同時期、住居8・9は、それよりも少し時期が下った、古墳埴丘の自然的削平や周溝の埋没、或いは人的な手段によって消失した時期のものと推定される。

また、住居の配置からA地区の竪穴住居4と5、6と7、D地区の10と11の2棟が隣接して築かれていることから、2基が単位集団を構成していたと考えられる。建物8、9は10、11よりも新しく、切り合っているので、建て替えであろう。K地区で検出した1棟（建物12）も飛鳥時代の竪穴住居で、畿内では竪穴住居が無くなる時期のものである。建物12の東側に掘削されたK1650溝もこの時期の遺構である。

掘立柱建物については、古代に属する建物が82棟検出された。B・C・D・E・F地区の中央部からG地区南側にかけては、前時代に造られた中規模古墳群が広がっているが、古代前半と推定される建物は、その古墳を避けるように建てられていることがわかった。また時間の経過と共に、古墳埴丘の自然的削平や周溝の埋没、或いは人的な手段によって古墳の姿が薄れしていくようになると、建物が古墳の周溝や埴丘を崩して建てられるようになる。これは、時間の経過・古墳の消失とともに、当時の人の古墳に対する意識も徐々に消失されたものと考えたい。また、飛鳥時代から平安時代後期にかけての建物が検出されたことによって、消長はあるが古代の長期にわたって当地に定住していたことが明らかとなった。

柱穴から出土した遺物が少なく、建物の時期を比定することはできないが、考察でも述べられているように、主軸の方位から7期に分けた。また、建物が古墳を避けて建てるか、埴丘を削平した後に建てるかで前後関係を判断する目安とした。埴丘が削平されるのは奈良時代頃である。A期は古墳を避けて建てられるので、竪穴住居と併存した可能性がある。

また、I地区41号古墳の東側では包含層内に平安時代前期の遺物が多い。建物65、67はC期

に分類され、13棟ある。奈良時代頃に比定されているが、この方位に主軸を置く建物の一部に平安時代前期下るものもあることになる。

溝1については、奈良時代には数回掘り直しがされるなど、この頃から本格的な使用があったと思われる。また、埋土中に平安時代前期の遺物も含まれていることから、その使用は平安時代前期までと考えられ、当地区に展開する古代建物群と共に使用・廃棄がなされたものと推定される。

### 5. 中世

中世では、屋敷跡20区画、掘立柱建物128棟、柵列21本、柱穴・土坑多数、敷石造構6基、土壙墓8基、井戸16基、埋納穴9基、苑池1基など、調査地区全体にわたって広く検出した。遺構の分布は、時期は若干異なるが、B・C・D・E・F地区の屋敷跡群と、H・K地区の建物群とに大きく分けて2ヶ所に存在する。

B・C・D・E・F地区では、溝や柵、道路遺構などによって区画された屋敷跡を20区画検出した。屋敷跡内の建物は、計49棟を数える。屋敷跡は、ほぼ東西南北の方向に沿って区画されているが、調査区外にかかるものを除いて、屋敷跡の面積は最小のもの（屋敷N：約237m<sup>2</sup>）と最大のもの（屋敷M：約651m<sup>2</sup>）には大きな差が見られる。

いくつかの屋敷跡では、祖靈信仰と考えられる屋敷墓や、土器を丁寧に埋納した埋納穴が見られる。それらが存在する屋敷A・B・D・E・Rの区画内では、隣接する区画との境界付近に位置しており、長期定住を前提として、その邪魔にならない区画内端部に造られたものと推定される。井戸は各屋敷内に1つではなく、屋敷の境界付近に造られているものが多いことから、数戸で共有していたものと考えられる。屋敷跡内の建物は、数回にわたってほぼ同じ場所に建てなおした様子が窺えることから、集落単位ではなく、裕福層による家族単位での長期定住化を目的とした集落展開が始まったものといえよう。時期としては、出土遺物より12世紀末から13世紀初頭にかけての時期が相当するものと推定される。

H・K地区では、B・C・D・E・F地区の屋敷跡群の時期とほぼ同時期から少し下る時期で、瓦器梶指標で平安時代末期から鎌倉時代中頃（13世紀中頃<sup>(20)</sup>）にあたる遺構・遺物を、調査地区的南西側を中心に多く検出した。検出された柱穴は2000箇所にものぼり、計56棟の建物を復元した。建物群は、H・K地区の南部を流れるH5溝（K500溝）を境に、北側に集中して展開しており、この溝が居住区を区画する溝であったものと推測される。K地区北側において3棟の建物を検出しているが、これらの周囲からは他に建物が確認されず、居住区の中心からは外れていたものと考えられる。なお、溝の南側については、H5溝の南では建物跡が確認できなかったが、K地区では大半が調査範囲外であり、一部は後に溜池が築造されたため不明である。また、K地区東側は、中世後半以降に大規模な削平を受けており、遺構はほとんど消失していた。

H区北側からK地区西側において検出された建物群は、ほぼ同時期のB・C・D・E・F地区の建物とは大きく様相が変わり、梁・桁が直角にならない、歪んだ建物が多く見られる。立地に

ついても、建物が密集していることから、窮屈な印象を受ける。遺構の検出状況や遺物による年代より、B・C・D・E・F地区からH・K地区へ、集落の中心が徐々に移動したものと考えられるが<sup>(21)</sup>、H・K地区では屋敷の区画は、幅0.3m前後の溝（K511溝、K525溝、K632溝）で囲まれた幅約8mの小規模な区画溝を1箇所検出したもの以外に見られない。集落の移動に伴い、集落の性格が変わった、もしくは屋敷跡群の消滅した前後に、別の集団がH・K地区で本格的に集落を形成したものと推測される。本書「第4節 H・K地区的調査」の項でも触れているが、「一遍聖絵」に描かれた庶民の家は、柱列が通らない建物が見られる。しっかりとした方形の建物を有し、裕福層であった屋敷跡群の住人たちがH・K地区へ徐々に移動したと考えるよりも、別の庶民集団がH・K地区に新たに居を構えたという方が妥当ではないだろうか。そう考えるならば、H地区とG地区の間に民地があり調査できなかったため、この場所に区画を持った屋敷跡と庶民層の1棟からなる庶民層の居住区を分ける施設が存在することも考えられるが、H5溝（K500溝）も裕福層居住区画と庶民層居住区画を分ける境界溝であった可能性も考えられる。屋敷跡を区画する溝の幅がおよそ1m未溝であるのに対し、H5溝（K500溝）の溝幅が2m近いことを考えると、溝の南北で明確に区分けをしていた意思を感じる。

（奥・阿部）

#### ＜註＞

- (1) 平井勝ほか『百間川沢山遺跡3』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県文化財保護協会 1993
- (2) 佐藤竜馬ほか『佐古川・窪田遺跡』『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』 香川県埋蔵文化財研究会 1998
- (3) 宮崎哲治『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第23冊 蔭川・五条遺跡I』 香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 1996
- (4) 相原浩二『姫原遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報 VII』 松山市教育委員会・財團法人松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター 1995
- (5) 近藤義郎『弥生墳丘墓』『吉備の考古学的研究（上）』 山陽新聞社 1992
- (6) 横木誠一『川島・立岡遺跡』 太子町教育委員会 1971
- (7) 吉田昇ほか『播磨八幡遺跡』 八幡遺跡調査会 1974
- (8) 岸本直文『河合中カケ山遺跡』『小野市史』第4巻史料編I 小野市 1997
- (9) 甲斐昭光編『玉津田中遺跡』第5分冊 兵庫県埋蔵文化財調査報告第135-5冊 兵庫県教育委員会 1996
- (10) 丸山潔『新方遺跡』『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』 第11回埋蔵文化財研究会資料 1982
- (11) 浅岡俊夫『口酒井遺跡』 伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会 2000
- (12) 松下勝ほか『但馬・米里遺跡』八鹿町文化財調査報告Ⅲ 八鹿町教育委員会 1979
- (13) 渡野俊一『都遺跡』『平成11年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2000
- (14) 服部聰志『服部遺跡第4次（HTR-4）』『豊中市埋蔵文化財年報』4 豊中市教育委員会 1996

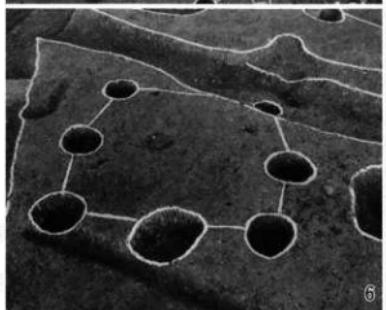
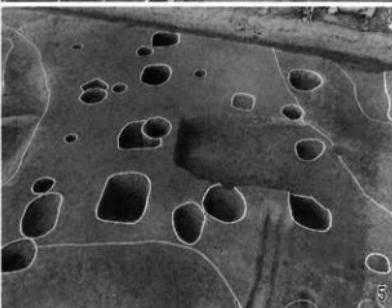
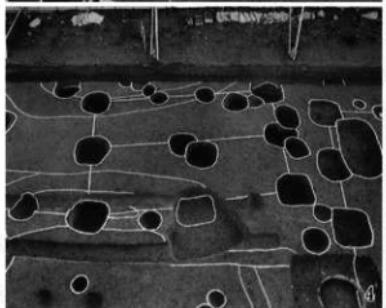
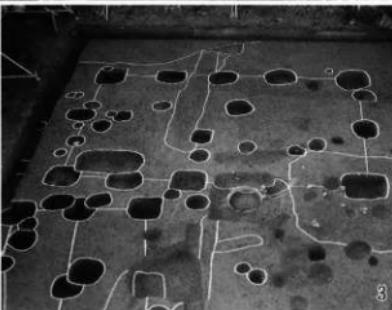
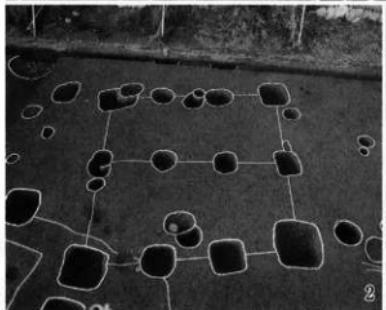
- 05 坪出真一「郡川遺跡（第3次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告92』（財）八尾市文化財調査研究会  
2006
- 06 「長原遺跡（N G O 3 - 6 次）発掘調査現地説明会資料」 大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会 2004
- 07 高島徹ほか『府中遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1985
- 08 中村浩ほか『下池田遺跡—第2次発掘調査報告—』 大谷女子大学資料館 1987
- その他、志布志市の京の峰遺跡等はホームページで公表されている各遺跡の情報資料より引用した。
- 09 南聰一郎「上器棺の副葬品—西日本の状況—」『文化財学報』 第17号 奈良大学文学部文化財学科 2002
- 10 瓦器編年より、13世紀半ばから後半に相当。
- 21 集落の中心が前時代のB・C・D・E・F地区から、北東のH・Kに移動。それに伴い、区画の消失。

# 図版



調査地区周辺空中写真

図版1 古代  
B・C・D・E・F地区

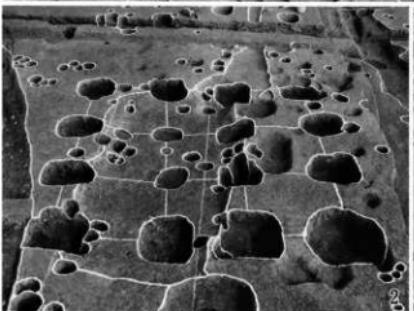


図版2 古代  
B・C・D・E・F地区

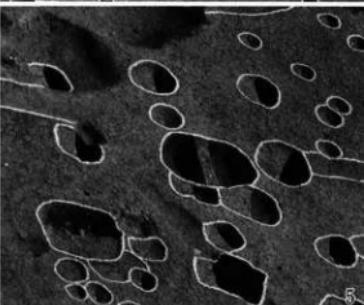
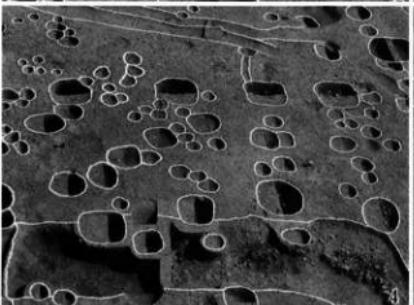
1. C地区全景  
(西より)



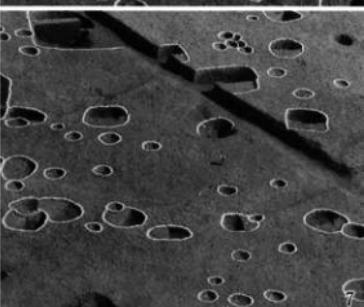
2. 建物22  
(西より)  
3. 建物23  
(北より)



4. 建物26・27  
(西より)  
5. 建物28  
(西より)

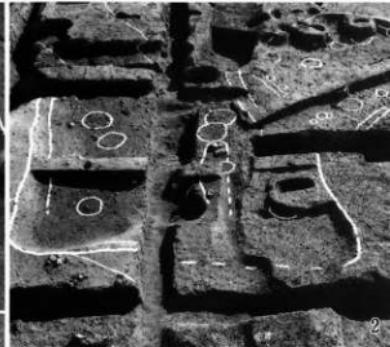
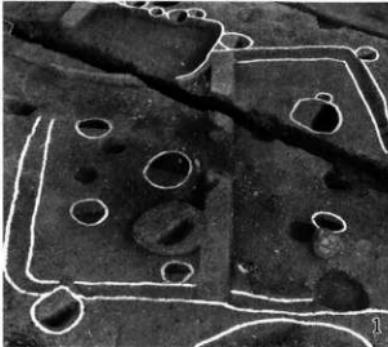


6. 建物30  
(西より)  
7. 建物31  
(北より)

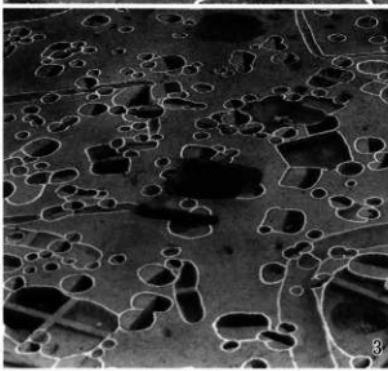


図版3 古代  
B・C・D・E・F地区

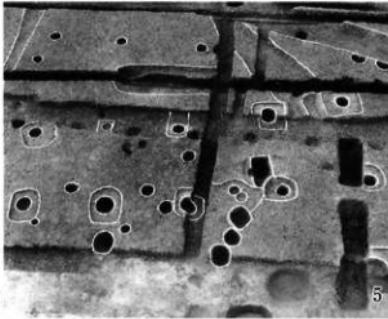
1. 住居10  
(東より)  
2. 住居8・9  
(北より)



3. 建物36・37周  
辺 (西より)  
4. 建物38  
(西より)



5. 建物39  
(東より)  
6. 建物41  
(東より)



7. 建物42  
(東より)  
8. 建物11  
(南より)

